

PHANTASY STAR ONLINE
2 :A. P. 742

Begew Garand

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

A. P. 242。アークスは自ら等の存亡を、宇宙の存亡を懸けた総動員作戦を行。最大目標であるダークファルス及び深淵なる闇に対し今までに残された記録の中で例の存在しない、最も熾烈である戦闘を展開した。そして、作戦によりその目標を消滅させることが出来た。

この戦いによって払われた犠牲の数は決して少なくは無かったが：：それでも生き残った人々は終わりのない恐怖とまで言われたダークファルス、深淵なる闇との戦いに

ようやく終わりを告げることが出来たと歓喜し、顔を上げ再び歩み始めた。

—それから数年後。

あの戦いから数年が経過し、かつてはダーカー殲滅の為の尖兵であったアークスは今となって需要もさることながらその組織性の危うさや任務中、任務外での目に余る行動の数々が表面化しやすくなり次第に問題視されることが増え、既にその頃にはあの時のようなかつての栄光を持つアークスはとうに消え失せていた。

その為にあークスは今まで戦闘を担っていた管轄と一般員を含めた乗員の日常生活を維持する為のライフラインの管轄を分離化し、今では過去の大規模作戦での残党狩りを行うのみとなった本来のアークスは更に縮小の一途を辿り、結果として内部にも問題行為の目立つ一部の戦闘管轄のアークスに対する簡易的な治安維持組織も設立されることとなった。

—そして、500年後。

年々と形式を変えながら存在していた治安維持組織は戦闘管轄のアークス一部にのみに対する事象だけでなく一般員に対する治安維持も行うとして治安維持組織の名称を改めM・Sとし、組織内部の再編成も実行。こうして遂にアークスの組織としての安定もなされたかに見えた。

―が、それはまだ新たな事象の始まりに過ぎなかった…

目次

E-12	「連絡」	143
E-11	「移送」	131
E-10	「苦悶」	118
E-09	「搜索」	106
E-08	「改革」	92
E-07	「完了」	79
E-06	「急行」	65
E-05	「おにいちゃん」	53
E-04	「たいせつなもの」	40
E-03	「新しい場所」	27
E-02	「配属」	14
E-01	「目覚め」	1

E-25	「虚夢」	291
E-24	「機器」	280
E-23	「対処」	270
E-22	「現場」	260
E-21	「違和」	250
E-20	「転属」	238
E-19	「処遇」	227
E-18	「事故」	216
E-17	「帰投」	205
E-16	「自我」	193
E-15	「逃走」	180
E-14	「換装」	167
E-13	「遭遇」	155

E	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E
3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2
8	7	6	5	4	3	2	1	0	9	8	7	6
〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔
接	返	連	捕	射	配	実	訓	発	発	旧	戦	退
続	答	絡	捉	出	置	地	練	現	艦	型	闘	避
〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕
428	417	408	398	387	377	367	355	343	331	321	312	301

E	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E
5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3
1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	9
〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔	〔
F	函	終	観	軽	鉄	経	変	清	甲	第	句	休
4	面	業	察	警	帽	過	動	掃	板	二	点	息
〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕	〕
548	539	531	522	514	505	497	490	481	471	460	450	440

E 6 0	E 5 9	E 5 8	E 5 7	E 5 6	E 5 5	E 5 4	E 5 3	E 5 2
〔不測〕	〔作戰〕	〔合流〕	〔扞拭〕	〔報告〕	〔機動〕	〔仕掛〕	〔座席〕	〔発見〕
617	612	605	598	591	582	573	566	557

E—01 「目覚め」

全てが始まるよりも以前、そこには何も無かった。いや、そこであるというように指し示すものなど無かった。

—だが、ある時に変異が突如として発生した。

存在という概念が存在し得ない虚無にただ、ただ純粹に白いモノ。いや、空間といふべきものの概念が与えられた。

そして、その空間には黒き点が落とされ、それは瞬く間に広がっていき空間を染め上げた。

黒という色を与えられた空間は自らに星というものを創り出し、それは後に星々となつた。

—そう、これが始まりの始まり。宇宙そらというものが生まれた日。

故に、宇宙は全ての存在の故郷でもある。

知能という万物を得た生命がこの宇宙へ至つた時、全てにおいて満たされたと感じるだろう。

—だが、同時にそれは恐怖を感じるはずだ。

悲しさ：：： 虚しさ：：： それがどのような形であるのか、知り得ない、知ることはない。だから、この場所、この時において、ひと時に目を閉じてみて欲しい。

宇宙を想像すれば、貴方の願う限り漂うことになるだろう。

— 貴方は何を見ることができたのか、知ることができたのか。それを知り得ることは、できない。

それは変異とも取れる可能性、「未来」というもののように：：：：

男の人？が自分の身の丈もあるだろう剣を持ちながら何かに向かって叫んでいる。いや、訴えかけている：：：？

その男の人？の隣には杖のような武器を持った女の人、辛そうな顔をしている。

次の瞬間、男の人？は覚悟を決めたのか歯を食いしばって構えを取るとその何かに向かって切りかかっていった。

その時、隣に居た女の人はさつきよりもっと辛そうな表情に変わっていて、気が付いた時にはとても眩しい光が辺りを包み込んでしまつて……

「…………… あつ！ 予定の時間、過ぎてるじゃないか！ さつきまで一度は起きていたはずなのに。」

僕は慌てて時計と時刻表を照らし合わせて無駄にも再確認をした。

「駄目だ…… 急いでいくよりも弁明する言葉を考えて行く方が賢明そうだよ……」

そう考えると急かしていた手をゆっくりにして、一般用の服を着用してから簡易携行食のストローを口に咥えたまま部屋の自動ドアを開けた。

『識別カードを挿入してください…………… 認証中です。』

「急いでもしよがないんだけど無駄に焦るよね…… 相変わらず認証に手間取るなあ。」

コンベア式の移動機器にカードを通しながらちよつとだけ毎回思う。

『…………… 認証完了、ロックを解除します。場所を指定してください。』

「本当ならテレポートサービスが使えれば良いんだけどな…………… 一般員には無理か。」

叶うことのないことを想像しながらシートに座ると装置は普段通り動き始めた。

「…… それにしても最近変な夢ばかりだ。」

体を揺られながらも今朝のことを、僕は思い返していた。

「男の人…… 男のような人が、僕から見てもかっこいい人だったなあ。アークスの人が着ているスーツだったからアークスの人なんだろうな。でも、どうして見たこともない人が夢になんか出てきたんだ……？」

昔、夢というのは自分が経験したことしか見ないということを知ったことがあるのでそう思ったけど、あくまでもそれは科学的に考えた場合だから一概にも言えないのかもしれない。

「それに、あの女の人も見たことがない人だった。忘れていただけなのかもしれないけど、あの人が着ていた服はアークスの着ている物とはどこか違ったし普通じゃない雰囲気だったしな……」

確かにあの女の人はアークスでも、一般員でもなさそうだった。武器を持っていてあの男の人と居たつてことはあの人もアークス？…… 余計に分からなくなってきた。

「…… まあ、夢のことを気にしたつてあの人たちと会えるわけでも話せるわけでもないしな。第一に話す内容も無いのにどうするんだ。」

『一般区画、ワークセンターに到着しました。お気をつけて。』

考え事をしていて景色が見えていなかったからか気が付いた時には目的地に着いていた。

「ここには初めて来たなあ…… まあ、普通何度も来るところじゃないから当然か。」
周りには僕と同じような人や職員の人々が特に慌てるまでもなく普通に歩いていった。

「…… 周りの雰囲気の流れされそうだけど遅刻している身だったね。早く行かないと。」

そのことを思い出した僕は足早に入り口のゲートに向かった。

「全く、事前に時刻の方はそちらに連絡しておきましたよね？遅れてくるだなんて考えてもみませんでしたよ……」

「…… 本当にすみませんでした。」

結論を言うとかかなり怒られた。

自室を出る前に弁明を考えるとはいったけれどもいざというときには出てこないものだなあ……

「…… まあ今回は後が詰まっていますませんでしたから時間調整だけで済みましたが次回からは、次は無いですよ？」

「返す言葉も無いです……」

「はあ、取りあえずこの後は直ぐに適正検査がありますから検査衣に着替えて指定の場所まで行ってください。わかりましたか？」

「分かりました。」

そう、今日は適性検査があるんだ。個室ロッカーで着替えながら再度頭の中で繰り返す。

少し前に指定教育レベルを完了した僕は3日前ほどに適性確認テストを受けて、更に細かい検査を行うためにここに来たんだ。

「……？何だかこの服、検査に使う服と言うよりはアークスの人が着るみたいな服だな。」

服を着ている最中にそのようなことに気が付いた。

確かにこの服には一部は省略されているもののサポーターが取り付けられていて、他にも何かを接続する為のソケットの跡のようなものも残っていた。

「気のせいだと良いんだけど。それとも過剰なくらいのコストの削減なのかなあ……」

最近ではそういったところには予算が回らないとも噂が立ってるしあり得ることだろう。そう思いながらも着替えを終えて指定されている部屋へと向かった。

「すみません、検査室はここで合ってますか？」

部屋のドアを開けて、目についた白衣の男の人に声をかけてみた。

「？確かに合っているが連絡が来ていたのは君だったか。」

「はい、そうだと思います。あの人が間違っただけですけど……」

確認の為に取りあえず身元が分かるように識別カードを渡した。基本的にこれに情報は記載されるからこれを見れば多分だけど分かるはずかな。

「……確かにそうだな、表記通りだ。では、早速検査に取りかかる。そのロックを外すから中に入って待機してくれ。」

「分かりました。」

「おい、4番のロックを外すから準備しておいてくれ。後の作業もつかえているんだ。」

少し奥にある操作盤に居た白衣の人が反応して準備をしていた。

「ああ、そうだった。次の指示はその服に着いている通信機で行うから聞き漏らさないように良く聞いておいてくれよ。」

「そんなものが着いてたんですか？」

「そうだ。まだ電源が入っていないだろうから首、ここの辺りだな。押してみてください。」

言われた僕はその人が差しした首の位置を探した。するとスイッチ？のようなものが引っ掛かったので試しにそれを押すとノイズのようなものが一瞬走った。恐らくこれだね。

「でも、検査をするのにこんなものが要るんですか？」

その時、前から気になり始めていたことをその人に思い切って聞いてみた。

「なんだ？聞いていなかったのか。この検査は君の身体能力を調べる検査だ、適性確認テストの返答を確認していれば分かるはずだぞ。」

「テストの返答…… あ、確認してない！」

「…… まあ今確認したところで変わることも無いしな、後からでも確認すると良い。」
普通の適性検査だと思っていたけど、やっぱりおかしいわけだ。じゃあ、このテストは何だっけ言うんだ……？

「ちよつと待つてください！この検査の目的だけでも教えてくださいよ！」

「何と言われてもな、君がアークスに適するかどうかの検査だよ。まあ、頑張ってください。」

それを聞いた瞬間頭の中が一瞬だけ真っ白になった。

『…… よし、機動力の検査はここまでで大丈夫だ。次の検査に移るからしつかり聞いて』

ておいてくれよ。』

あれから僕は混乱しながらも指示通りに検査を受けていったんだ。

走らされたり、障害物を飛び越えたり、吹き飛ばされたりもした。まあ、吹き飛ばされるのは攻撃を受けた時に体を受けられるかどうかの検査なんだけどね……いきなり一般員にさせるものじゃないでしょうよ。

「はあ、機動力の検査の次ですか。分かりました。」

そんなこともあつて基礎的？な検査はここままで終わりで次の検査になるらしい。

『じゃあ、次に行くぞ。今、武器をそっちに出すから手に持つてくれ。』

そう言われると部屋の壁にあつた小さな扉が開いた。

「……銃、ですか？」

先程言われたようにその武器、銃を手にとつてみたんだ。想像より、かなり重くて驚いたけどね。

『そうだ。その銃はアークスで用いられている汎用型のライフル銃だ。まあ検査用に調整してあるから経験がなくとも扱えるはずさ、構えてみてくれ。』

「合つてるか分からないですけど、これで良いですかね。」

何処かで見たように見真似でストックを肩に当てて、それから照準をする場所の直線上に目が来るようにして構えた。

『ああ、構え方はそれで大丈夫だ。少し旧式なのが不安だが……じゃあ指示を出すぞ。』

どうやら構えだけは出来たのかな、そう思つて安心していると少し離れた場所に的が出てきたんだ。

『今日の前に標的を出した。位置はその場所から良いから撃つて当ててみてくれ。遠慮は要らないから思い切りな、分かったか？』

「わ、分かりました。」

そう言われた僕は標的に向かつて銃を構えた。

『弾はもう入っているから安全装置を外して、コッキングレバーを引いてくれ。まだ弾は装填されていないからな。安全装置は握っている部分の直ぐ上にあるぞ。』

言われた通りにして安全装置？を外すと軽い音が鳴つて、レバーを引くと金属の音が響いた。レバーはかなり重かつたかな。間違えて指を挟み込んでしまえば怪我しそうだ。

そうして、取りあえず弾を込めることができた僕は試しにその引き金を引いてみた。「つーしまつたー！」

引き金を引くと乾いた音が部屋に響いた、それと同時に考えていなかった衝撃がいきなり来て銃の照準を思い切りずらしてしまつたんだ。おまけにその反動で顔にストツ

クが当たって少し擦ってしまった、痛い。

その1秒もしない時間が流れた後、すぐさま部屋の壁を弾が跳ねる音が聞こえた。

『……まあ、最初は誰でもそんな感じだ。今ので大体その武器の勝手は分かっただろう？その状態でもう一度撃つてみてくれ。』

「は、はあ。」

少し動転していたけれど、それでは当然テストにならなくなってしまうから気を取り直してもう一度僕は構え直した。

「集中して、集中だ。そう、集中……」

そうして僕はもう一度引き金を注意して引いた。

『なるほどなあ……』

再び銃の乾いた音が部屋に響き渡って、その弾は飛んで行った。的には……

「……：：～
と、ということだな。まあ、お疲れ様。検査はこれでおしまいだ。今日のところは自分の部屋に戻って休んでくれ。結果は後日転送しておくから見忘れないように。」

「はあ、分かりました……」

「検査服はロッカーに入れておいてくれれば大丈夫だ、それではな。」

取りあえずのところは検査は終わった、のかな？検査を終えて話を聞き終わった僕は

ロツカールームに向かいながら考えていた。

結果を言うと失敗続きだった。

最初の銃を扱うまでの検査までは僕なりに普通に出来たと勝手に自負はしているけれど、その後は散々だったな……

まず剣の扱い、大剣？という武器は振り回すことはおろか持つのが困難で他の刃が付いている武器は持つことはできても散々な扱いで終わった。

「大体あれで戦うつたつて凄く近く、目の前にまで敵が居るのに武器なんてまともに振れそうにないなあ……」

ちよつと悔しくて言い訳みたいなのを言ってしまう。

「……それに敵、エネミーと言っても生き物に刃物を振るなんて出来ない話だな。全く、どうして僕に適性があるなんて診断したんだろうな。」

いよいよ着替え終わった僕はため息をついて、ここには無い適性検査の機械に文句を呟きながらロツカーを後にした。

「そういえば彼、何て言う名前の子？」

「？なんだ、別に知ってもどうでも良いことだろうよ。」

白衣の男はそう返した。

「何だかあの子、最近にしては珍しく素直な子だなあ……なんて思ったからよ。純粹に気になったの。」

助手の女は言う。

「？良くわからないことを言うのが君は好きなんだな……まあ、言っても減るものではないしな。えっと、彼の名前は——ノアだ。」

E-02 「配属」

検査を一通り終わらせた僕はワークセンターから出て、行きにも使ったコンベアのスレーションに向かっていった。

来た時には多かつた人通りも減っていたかな。

「人工太陽が低くなってきた。…そんなに長い時間検査していたんだ。」

ふと艦内の天板を見ると作り物の空に映し出されている太陽が沈みかけていた。

「それにしても太陽がないと生活循環が回らない生き物って、人って不思議だな……」

そうして、時々浮かぶ訳の分からない感慨に耽っていると何やら言い争っている声が聞こえてきたんだ。

「……？騒がしいな、何をやってるんだろ。」

気になってしまった僕はその場所少し見てみたんだ。するとそこにはここに来た時にはない光景があった。

「全く、角のついた人の成り損ないが……デューマンが表を出歩くなよ！気分が悪くなるぜ！」

「そうだ、そうだ！化け物は出てけよ、ここは害獣禁止なんだ……分かるかあ!!」
「やめて…… ああつ！」

その瞬間、頬を打つ破裂音にも似た音が周囲に響いた。
叩かれた女の人はそのまま倒れこんでしまつて……

「何もしてないのに、どうして…… 貴方には何も

「うるせえ！居ること自体が迷惑なんだよ……！」

その男はそう言うのと今度は女の人の頭に足を乗せようとして…… そこで見ていた僕はとうとう我慢できなくなつてつい口から言葉が漏れてしまつたんだ。

「や、やめろよ！その女の人の言う通りその人はお前に何もしてないだろ！」

「なんだ……？お前、ヒューマン 人だつてのにこいつの肩を持つのか？」
デューマン

だけど、いざ言い出してはみたものの、やっぱり怖くて…… 言わなきゃ良かったかな。そう思つてしまつて余計に焦る。

「そうじゃなくて、そうじゃなくて……」

そうした焦りから考えが段々とまとまらなくなつてきて、口から同じ言葉しか出なくなつてしまつた。

「…… はあ、何だかしけちまつた、帰るぞ。」

すると男はさつきとは変わつて呆れたように僕にそう言つた。

「そうだな……おい、その一般員。」

「へ？」

なし崩し的にどうにかなったかな…… そう勝手に思っていると二人組の片割れが去りに際に話しかけてきた。

「一般員が、ガキのくせに二度と逆らうんじゃねえぞ…… このアークス様には、なつ！」

「うぐつ……」

話しかけられてから数秒も経たないうちにその男は僕に間合いを詰めてきて、考えてもみなかった出来事に僕が驚く間にその拳を僕の腹に容赦なくめり込ませてきた。

内臓と肋骨が圧迫されて、遅れて激痛が腹部に走る。

「がっ……」

あまりの痛さから口の中の体液とともにむせてしまった。

「これに懲りれたら二度と口出ししないことだ、じゃあな。」

殴ってきた男が何か言っていたけど、苦しくて苦しくて何を言っているのかまともに聞き取れない。

そうしてあまりの痛さに声が出なくて、意識も次第に薄くなってきた……

……

嗚呼…… 暗い……

何も、何もここにはない……

ここは何処……？ 船のみんなは……？

寒い…… ずっと…… ずっと。

からだはずっとふわふわして…… 頭がおかしくなりそう……

星が輝いて…… たくさん…… たくさん……

「……？」

あれからどれぐらい経つたんだろう。

気が付いた時、目の前に自分の部屋の天井が見えて…… そこでようやく僕は自室のベッドに横になっていることを理解した。

「あの後自分で帰った…… にはしては記憶がないし痛くて動けないだろうしな。」

思い出せる限り昨日のあの後のことを思い出そうとしてみる。

「やっぱり思い出せない……つて、何だろうこれ？家を出る前にこんなものなかつたぞ？」

少し上体を起こしてみて、ベッドの横に置いていたサイドテーブルが目に入るとそこには手紙が置いてあった。

「紙の手紙……珍しいな。でも、誰からだろう。」

当然ながら気になった僕はその手紙の封を切つて中身を取り出して確認してみた。

すると、中には丁寧な字で短い文章が書いてあるメモ用紙が入っていたんだ。

『今回は助けてくれてありがとう。でも、次からはしないで。貴方が、貴方自身が危険な目にあつてしまふだろうから。しばらく起きられそうにないだろうからこの手紙を残します。 エリシアより』

「あの女の人の……ということはあるの人がここまで運んでくれたのか。」

多分、殴られたときにでも服が乱れてポケットから識別カードを落としたんだな。それで、それを手掛かりにわざわざ送り届けてくれたのかな。あれを見れば大体のことは分かるし……

「……はあ、情けないなあ。結局は助けようとした人に助けられちゃうし。」

もう一度あの時のことを思い出してみると、検査の時と同じ色のため息が出てしまつ

た。

「これでもアークスとしての適性があるって診断されたはずんだけどな。やっぱり機械が故障でもしてたんじゃないか……？」

そう思つてしばらくの間薄暗い部屋に目を泳がせていると、不意に通知音が鳴った。

「今度はなんだ……もしかして検査対象が人違いだったとか、そんな訳ないよね。」

手違いで検査してしまった、その様な通知を期待してメールボックスを確認してみるとやっぱりそんな通知は一切なく、代わりに昨日の検査結果の通知が来ていた。仕事が早いなあ。

「昨日の検査結果か……絶対通らないだろうな。」

昨日の検査の風景が脳裏に過ぎった。

「まあ、通つてもあんなどころには行きたくないけど。」

そうして電子メールを開封して見てみると、僕の全く想像していないことがそこには書かれていた。

『適性確認テスト及び適性検査の結果の元、貴方の配属は第184番艦「フェルノー」のM・S、Bの第2部隊になりました。指定の場所に添付された時刻表の時刻に向かつてください。連絡事項は以上です、お疲れさまでした。』

「はあ、アークスの所屬じゃやっぱり無いよな、そうだよな。それで、僕の本当の配属

はM・Sと……M・S!？」

また頭の中が真っ白になりそうだった。

「……何度見返しても書いてあるね。」

僕はさっきの電子メールを無駄にも何度も再読み込みしたりしてみても変わらないかな……なんて無駄なことをしていた。

けれど無慈悲に事実が変わらずにそこにはM・S所属と記載されているだけだった。「アークスは嫌だったから所属になることが無くなったのは嬉しい……のかもしれないけど、この場合だと何も変わらないじゃないか……」

気持ちを落ち着かせるために冷蔵庫から出したばかりの精製水を口に含んでは転がして飲んで、それをまた繰り返しながら僕は悩んでいた。

「……」

僕が所属になったM・Sというのは厳密に言えばアークスの組織内にある最近できたばかりの役職、ということにはなるんだけどその前身になる組織はもつと以前からあったみたいなんだ。

まあ、もつとも僕が問題にしているのはそういう部分じゃなくてその仕事内容だね……

M・Sは基本的に配属される、または所属している艦の中での治安維持を目的とした役職なんだ。だけど、非常時にはアークスの鎮圧を行わなければならなくて……言うならある意味普通にアークスになるよりも身の危険度が高いってことかな。

「エネミーと戦うのはもつとも無理だけど暴れているアークスを押さえつけて確保、なんでもつと無理に決まってるよ……昨日は早速怪我させられたばかりだし。」

もつとこう、農業区画でのんびりと栽培とか艦内清掃管理で掃除するだけとか、そういう危なくない仕事良かったなあ……

「……言い訳を並べてもしようがないか。第一にこの艦から逃げるにしても周りは宇宙空間だし、惑星に降りようものなら現生物とダーカーの残党に……仕方ないか。」

この場所から逃げられたのならどんなに良いだろう、なんて色々と考えてはみたけれどもどれも結末は絶望的な物だった。

こうして半ば諦めるように覚悟を決めた僕は飲んでいた精製水を思い切り飲み干して、それからこの艦にあるM・Sの支部に向かう準備を仕方なくし始めた。

……コンベアの駆動音が低い金属の音をトンネル内に立て響かせながら失速していく。

そうして完全に停止するといつも録音音声で鳴った。

『特別区画、M・S支部Aブロックに到着しました。お気をつけて。』

「…… 着いちやったなあ。」

あれから支度をして普段通りコンベアに乗ってきたけど、まだ少し緊張する……

「一般区画と違って結構閉鎖的なんだな…… はあ、息が詰まってきた。」

緊張しながらも気晴らしに辺りを見回していると施設のゲートが見えた。

「あそこか…… 確かカードを警備員の人に提示すれば良いんだっけ。メールは何度も見たはずなのに忘れかけてるなあ。」

送られてきたメールの内容を思い出しつつ、僕は入り口のゲートに向かうとそこには人影があった。

「…… 今日、新しく配属になる奴が来ると連絡が来ているが君か？」

「は、はい。今日から配属です。」

ゲートでそう言われた僕は背を正して、それから識別カードを取り出して警備員の人に手渡した。

「分かった、確認させてもらうからそこで少し待っていてくれ。」

「分かりました……」

カードを渡されるとその男の人は少し面倒な素振りを見せながらも慣れた手つきで背後にある機材に僕のカードを通し、椅子に深く腰掛けてから確認をし始めた。入力を

する音が微かに聞こえる。

「それにしても、君みたいに若いのがここに来るのは久しぶりだな。」

「そうなんですか？」

「ああ、基本的にここは何かしらアークスとしての素質はあるが訳アリな奴らが回される場所だからな。途中から来る奴、俺と同じくらいの歳のが大半なんだがお前さんは最初からここに来るとはな……ある意味で才能だな、自信持ちなよ。」

「はあ、それって自信を持つて良いことなんですかね……？」

「はははは！ 全く、真に受けるなよ……でも、それでもして気を持たせないと直ぐに駄目になるからな。それだけは覚えておけ、な？」

「はあ……」

そう言いながら男の人は確認が終わったのか僕にカードを返した。

「今日ので君のデータは登録しておいたからこれからはカードを通せば基本的に大抵のM・Sの施設を利用できる。」

例にとゲートに付いているカードのスロットを指で指しながらそう説明してくれた。

「それと、ここに入るとロビーに君の対応で待機しているハイキャストが居るだろうからそいつから後の詳しい説明は受けてくれ……それじゃ、俺は持ち場に戻るよ。」

「わ、わかりました……」

そう言い残すと男の人はすぐさま歩いて近くにある詰め所へ入ってしまった。

「……いくら旧型艦だからと言ってもここは重要な役職の支部のはずなのに、こんな警備で良いもののかな。」

素人からでも分かるほどの雑な警備にふとそう思った。

「いや、違うな、多分違う。まだ所属もしていないのに勝手な想像は駄目だ……早く中に入ろう。」

緊張から一転して心配になって来たけれど、考えすぎないようにして僕は施設の中へ入っていった。

「……では、基本的な説明は以上になります。以降不明な部分などがあれば転送しました電子マニュアルを使用して対応を行ってください。」

女性型のハイキャストさんの声がロビーに響く。

「はあ、大体把握しました。不測の事態にはマニュアルでの対応で良いんですね？」

「はい、その通りです。けれどそれを参照しても分からない場合には本部に連絡を繋いでください、こちらで適切な処置の考案を行いますから。」

「分かりました。」

支部に到着した僕は早速簡易的な座学を受けることになって、それで説明をしばらく

の間受けていたんだ。

説明は警備の人が言っていたように中で待機していた指導教育用のハイキャストさんがしてくれているんだけど、この型のハイキャストさん以外の人影というかあまり人気を感じなくて、それが不思議な感じであまりと不気味だった。施設の照明は明るくて内装も綺麗なはずなのに廃墟みたいに感じる。

「では、支部での手続きは以上で終了となるので配属となる区画の駐在所に向かってください。基本的な備品はこちらのケースに入っているのでお持ちくださいね。」

「……じゃあ、今から向かうことにしますね。」

「はい、それでは。」

そう言い残すとそのハイキャストさんは機械的に早々と甲高い足音を残しながら立ち去ってしまった。はっと気が付くとロビーには僕だけしかいなくなっていた。

「ほ、本当に現行で稼働している組織なのかな……何だかまた心配になって来た。」

さっきの入り口でのこともあって、僕の中での不安はピークに達し始めてきていた。それこそ本当に気絶しそうなくらいに。

「……まあ、忙しくて居ないだけなのかもしれないしそういう場所なのかもしれないし今日は何かの日なのかもしれないし、そうだ、そうだそうだそうだ、僕の考えすぎだな。はははははは。」

そうして何とか平常心を無理矢理にでも保ち続けながら僕はさつき通ったゲートを抜けて支部を後にした。

E—03 「新しい場所」

「区画の場所は地図通りならこの辺りにあるはずだな……」
先程の区画とは違って生活の音が響く場所に戻ってきた。

「……ちよつとは落ち着けたかな。」

あれから施設で備品の受け取りと手続きを済ませた後、新規に送られてきたメールに添付されていた地図を見ながら僕は配属になる駐在所に向かっていた。

「この建物か？」

目的地？の建物は特に変わり映えしない小さいビルで、その一階部分にはM・Sのマークが入った扉があつてここだと分かることができた。

「……」

だけど、建物にはさつきと同じで人氣がなくて、酷いことに整備も行き届いていないようだった。ガラス越しに見える部屋の床が擦り傷と埃にまみれている。

「電気も消えかかつてるし、他にここに配属になっている人がもしかして居なくて僕だけで仕事……そ、そんなことないよね。」

最悪のケースを想像しながらも僕は建物のドアを抜けて中に入った。

「……すみません！あの、今日ここに配属になった者ですが、どなたか居ませんか！」
薄暗い建物に入った僕は早速確認のために他に配属になっている人が居るだろうと思つて今居る部屋に響くぐらいの声で取りあえず呼んでみたんだ。

「まさか本当に誰も居ないとかじゃないでしょう……？」

けれど、僕の声には反応するものは無くて精々反応しているのは部屋の反響ぐらいだった。廃墟のような状態の室内に自分の声がただ響く。

「き、きつと何かの仕事の最中で他の人は出払つてるんだらうな、そうさそうだ……つて、あそこの部屋だけ扉が開いてる？」

呼びかけが無意味だと分かつて、どうしたら良いか考えていると視界にふと扉の開いている部屋の入り口が見えた。他の部屋は物置だつたりしてしばらく出入りが無かつたように見えるけどこの部屋は普段から人の出入りが多いように見える。

「電気も、この部屋だけ付いたままだ。こつちの中はどうなってるんだらう。」

気になった僕は現状、出来ることがないのでその目に入った部屋に入つてみることにした。

「ヤつきまでとは違つてこの部屋は眩しいくらいだ……机も置いてあるしここが普段使う部屋なのかな。」

そうして部屋に入ると先程の廊下のような場所とは違って、電気がはつきりと付いていて数人が事務作業を出来るような空間があったんだ。机にはそれぞれにコンソールが備え付けられていて余っているスペースには私物が置かれていた。

「?この机だけ何も置いてないな。他の机と違って埃も被っていないし...」

だけど僕の気が付いたその机だけは他の机とは違って私物も埃も無く、要約すると生活感が無かったんだ。まるでつい最近整頓したばかりみたいにな。

「でもコンソールだけは何処からか持ってきたみたいだな、軽く見積もっても結構使いいこんである物だし。まあ、新品を今すぐ用意しろ!なんて言える立場じゃないから仕方ないか...」

そう思ってコンソールを近くで見ながら自分なりにどの位の程度の物なのか自分の知識の範囲内でそれを確認していると

『システムを起動しました。』

「うわっ、なんだ!?!勝手に起動したぞ!」

そのメッセージを皮切りにコンソールは勝手に起動し始めてしまったんだ。

『セットされている音声データを再生します。現在読み込み...読み込みが終了しました。音声を再生します。』

少し短い電子音が鳴るとその音声は流れた。

『あー、あー。よし、録音は出来てるみたいだな。えーっと、俺の名前はバーンズ。今このメッセージを聞いているということは君がこの駐在所に無事到着したということだ、ここまでお疲れご苦労さん。』

「は、はあ……」

『まあ、挨拶はこの辺にしてだな。このメッセージをセットしたのには訳があつてな……事情はまあ後で話してやれるが少し手が離せない仕事になっちまって君が到着する時間にそっちに居れなかつたつて訳さ。普段はこんなことは滅多にないんだが、何が起ころるか分からないこの情勢下では致し方ないな…… ああ、それで本当に言うことを忘れかけるところだった。』

「？…なんだろう。」

『もし、俺が居ない間に万が一にだが何か連絡が入ったら対応するように努めてくれ。対応の仕方は事前に貰ってるマニュアルでまあ適当に流してくれて構わないさ……それと、これも限りなく起ころることは無いと思うが現地急行の連絡が来たとしても待機していてくれよ。まだ君には武器も渡していないからな、取りあえずそう覚えておいてくれ。じゃあ以上、ロッカールームで制服に着替えてから待機するように、サイズは君にぴったりのものだ。初日だがそれなりに頑張るように、な？ 帰ってきたらまた話そう……』

再生が始まる前に鳴った物と同じ電子音が鳴った。

『音声データの再生が終了しました。』

「誰も居なかったのはそういうことだったのか…… まあ、取りあえずメッセージの通り着替えてから待機するしかないよね……」

誰も居なかった訳を知ることが出来た僕は安心からどっと疲れが来てしまったので机に備え付けられていた椅子で少し休んだ。それからちよつとして一旦休めてから廊下に出てロッカールームに入ったんだ。

「明かりが付いてるとさっきの部屋と同じ位の明るさなんだな……」

部屋に入った僕は手探りで照明のスイッチを探し当てて部屋の電気を付けた。明るさはさっきの部屋と同じ位だ。

「ロッカーに名前が付いてるみたいだな。ということは僕の名前で探せばこの辺りに…… これかな？」

見つけたそのロッカーには僕の名前が表示されていた。中に制服があると聞いたので僕は迷わずにロッカールームを開けて中身を早速確認することにしたんだ。

「…… 検査の時に着た服よりも何だか安っぽい作りだなあ。」

検査の時に着た服はアークスの着ているような強固な作りの物だったんだけどこの

制服、M・Sの制服は限りなくコストの削減を行った結果が生み出したような程に安い作りになっていた。

「アークスを押さえこむ時もあるはずなのに一般員の着る制服と同じぐらいの強度じゃこの間みたいになっちやうじゃないか……」

制服の内容としては薄手のシャツを下に着てその上からズボンを締めてジャケットを着る、という説明が無くても誰でも着れるような簡単な物だった。確かにこれだけなら本当に一般員の服とほぼ同じ性能かそれ以下になつてしまう……。だけど、服には装甲板を取り付けられる部分が所々設けられていて制服はこれだけで完成じゃないみたいだ。

「……後は制服の着方で変なところがあればバーンズさんが今取りかかつてる仕事から帰ってきてから色々指摘してくれるだろうし、今はこんな感じで良いのかな？」

そうして取りあえずマニュアルを数ページ分参考にしながら制服を着た僕は電気を再度消して、ロッカールームを出てさっきの待機室に戻って指示通りに待機することにしました。

「緊急で何か連絡が入らなければいいんだけど……」
そう思いながらも僕は待機を続けた。

：あれからどれ位時間が経ったんだろう。

服を着替えてからのこと待機室でずっと待機を続けていた僕はふとそう思って時間を時々確認しながら待機を続けていた。

「確かに何も起こらないのは自分的にも仕事のにも良いことなのかもしれないけど、することが無いのも困るな……」

それもそのはず緊急の連絡はおろか連絡の一本もかかってこなかったので僕は椅子にずっと座っているだけで特に思いつくような出来ることも無くて……時々コンソールのキーを弄りながらも仕事に全うしていた。

そうして段々と眠気すら来かかったという時にドアが開く音とそれから少しして廊下から歩く音が聞こえてきた。バーンズさんか？ そう思った僕は視線を部屋の入り口に向けていた。すると。

「ふう……取りあえず戻って来れたな。」

「あ、バーンズさんお疲れ様です。」

僕の思っていた通りその音の正体はバーンズさんだった。まあ、これでバーンズさんじゃなかったらもつとも一番困るんだよね……

「ん、君こそ待機お疲れ。今のところどうだ？何か連絡が来たりしたか？」

「いえ、特に待機を始めてから今まで連絡は一つも入ってないですよ。取りあえず大

丈夫でした。」

「そうか…… まあ、何も無いことには越したことはないか。まだ君には明確な仕事の内容を教えてなかったしその方が良かったのかもしれないな、ははは……」

「はあ……」

「それでだ、まだ面と向かって話せてなかったしな。もう一度ここでしておくよ。俺が同じ隊に配属になってるバーンズだ、宜しくな。」

「僕の方はノアです、こちらこそお願いしますね。」

お互いに手を差し出して握手する。

何だかこうして挨拶をするのも久しぶりに感じるな……

「取りあえず制服はしっかり着れたんだな。メッセージではああ言ったが時々上手く発注が通らなくてサイズがおかしかったりしてな…… まあ良かったさ。」

「そうなんですか……」

「うん、まあ万が一後から合わなかったりしたら言ってくれよ、今に始まったことじゃないから支部も対応してくれるしな…… ってこんなこと話してる場合じゃなかったな。あれを渡しておいた方が良いか。」

「?」

「いや、特に何か変な物じゃないぜ。君はまだ武器を持っていないだろう? 今からそ

れを渡すから少し付いてきてくれ。案内する。」

「分かりました。」

そう言われた僕はバーンズさんに付いて行って、装備がしまわれている部屋へ向かったんだ。

「二応（こ）が武器、防具とかを置いておく部屋にはなっているがまあそれ程高い頻度では使わないものばかりだな。それに、一部は劣化していて使えるのかもわからないんだ。」

「な、なるほどです……」

部屋にバーンズさんに入った僕は置いてある備品の説明を時折受けながら進んでいた。

「まあ、この俺が持っているような武器、この銃はかなりの頻度で使うことが多いか。」
「そうなんですか？ てつきり武器はあまり使わないのかと思いましたが……」

「いや、流石にな…… まあ何処かで聞いているとは思いますが俺たちはそれなりの頻度でアークスを鎮圧しなきゃならない。それを生身一つでやれというのも無理な話だ。だから武器も高い頻度で使うことも覚えてはおいてくれ。」

やっぱりバーンズさんでもアークス1人押さえるのは大変なんだろうな。それと比

べて僕の方が力が無いのに大丈夫なんだろうか……

「それでだ、えつと……これだな。かなり旧式になる物だが性能はそれほど差はない程度だ。ほら、持ってみな。」

そう言うのとバーンズさんは僕に武器を投げ渡した。少し気が抜けていたから落とすてしまいそうだった。危ないな……

……まあそれで、バーンズさんから渡された武器は銃の中でもハンドガンに分類されるようなものだった。けれど僕の手には少し大きすぎる位でなおかつかなりの重さだった。

「見た目の割には、結構重いんですね。」

「仕方がないさ、それが作られた時には軽く作るなんてことは考えていなかっただろうしな。確か何処かで昔聞いたがそう言ったコンセプトじゃなかったはずだ。」

バーンズさんはそう言うのと僕の方に来て、僕が持っている銃を眺めながら話を続ける。

「ああ、この銃……PIA2オートリボルバーって言うんだが、今からもつともつと以前からあった武器でな？それこそ皆が指定教育課程で教えられたあの500年前よりも前、アークスという組織が発足されたばかりの時にフォトン銃に應用できるかどうかのテストの為に作られたシリーズの一部なんだから。まあ、俺は当時の人間じゃ

ないから昔の詳しいことは知らんがな。」

「そんなものがあつたんですね……一般員だと知らないことが多いみたいです。」

一応掻い摘んでの歴史は一般員でも指定教育で学ぶけれど、当然そんなことは教わっていないくて……僕は初めて知った。

「ああ、それが今ここにあるからな。でも流石にその当時使つてた物じゃなくてこれはその銃の改良型さ。だから……銃のシリンドーの下辺りに印字が入つてるんだが型式番号でP1の後ろにA2つて入つてるだろ？それがその銃がオリジナルの銃から2回改良を施したモデルということを表してるんだ。」

そう言われた僕は渡して貰つた銃のシリンドーの下を言われた通り見てみると確かにA2と文字が印字されていた。確か検査の時に使つた銃にもこんな感じの印字があつたかな……

「じゃあ、それ程古くは無いですね。元になつてゐる銃が昔からあつただけでこの銃自体はそれなりに最近できた感じですか。」

「そういうことになるな。銃の機能自体もかなり上方修正されていて、その上OSまで積んでゐるからな。見かけの割に上等な代物だぜ。」

「OSが？特に制御するようなどころはないような気がしますけど……」

そう思つて銃を傾けたりしてそんな部分がないか探してみたりした。

「確かに普通のリボルバーなら使うところはないな。だが、この銃は違う。」

「違う?」

「ああ、この銃はフォトン連発弾を装填できてな……シリンダーは4発しか弾が入らないようになってるが最大で80発まで撃てる設計になってる。」

「80発!? そ、そんなのサブマシンガンと変わらないじゃないですか!」

自分の持つ物には到底似合わないような機能を聞いて、僕は驚いた。けれどバーズさんは半ば僕をなだめるような形で更に話を続けてくれた。

「まあまあ、出来るというだけで実際にはやらないさ。それで、その連発弾を使う時にこれのOSがなんだが弾の撃ち切りを判定して自動でシリンダーを回すんだ。勿論自分でグリップに付いてるスイッチで回転させられるんだが……これは連発弾とウイークバレットを交互に使えるようにする為の物らしい。」

「はあ、なるほど……」

「取りあえず装弾数は凄いが……それ以外のスペックは普通よりも少し低いぐらいだな、だけど鎮圧にはそれが丁度良いらしい。まあ、壊さない程度に頑張つて使つてくれ。」

「わかりました。なるべく大事に扱います。」

「じゃあ、待機室に戻るとするか。連絡が来ると困るからな……」

そうして武器を受け取った僕は腰に銃を身に付けてからバーンズさんに続いて僕も待機室に戻った。

E—04 「たいせつなもの」

「……何時ものことだがすることが無い。なあ？ノア君。案外この仕事大変でもないだろ。」

コンソールの冷却用ファンが回る音だけが響く中、バーンズさんが呼びかけてきた。

「そ、そうですね……僕の勝手な想像ではもつと忙しくなるものだと思いますけどよほどの緊急時にならないければ出ることもですか。」

倉庫から戻った僕とバーンズさんは今のところ、というよりも常時義務付けられている待機状態を続けていた。けれど、特に何かが起こることも無かったけどね。

「そう、まあ一応ここは区分分けで言うならBの第2部隊だろ？うちが管理しなくちゃならないこの艦アーキスシップは旧型で乗っている乗員も他の艦と比べれば少ない。だが、だからと言って管理にかかる人員の多さは大して変わらない訳で……こうして各艦に配置した支部を拠点として各区画に駐在所を置いて、そこに少人数待機させると。まあ、それもあつてか危険度の違いがかなり目立つな。」

「そう考えるとここに配属になった僕はまだ運がついてる方なんですかね……？」

「他の場所と比べるのならそういうことになるな。」

「…… なら少しは頑張る気には、ですか。」

「なに、俺はノアくんには期待してるさ。明日もしつかりと出勤してくれるだろうし何よりも腕が立つ…… ような顔つきだからな。」

「は、はあ。」

そう言われた僕はまた検査の時のことを思い出して情けない気持ちになった。期待されるほどでもないのにな……

「今まで連続して新人育成は失敗続きだったからなあ…… これだけの良い人材が来るのが嬉しくない訳が無いぜ？」

「失敗続き？ 何かあったんですか……？」

そう聞くとバーンズさんは顔の眉を微かにしかめてから話し始めた。

「ああそうさ、あれは酷いもんだった…… 大抵は2日もせずは何処かに消えちまうんだよ。初日には面倒くささそうに話もまともに聞かないわ指定の制服も着てこない、コンソールまわりだつてあの有様さ。」

そう言うのとバーンズさんは僕が最初にこの部屋に入ってきたときに目に入った私物と一般員用の簡易携行食のゴミが散らかっていた机を呆れたように指で指した。

「でも、乗員は基本的に任じられた役職をせずに逃れるなんてことは出来ないはずですよ。指定教育でもそう言ったことは教えてもらいましたし僕でも流石に知つてま

す。」

バーンズさんは新人職員が失踪したって言っているけれどそれはアークス組織全体で決まっている規則にのっとれば出来ないことなんだ。だからこの艦アークスシップに生まれたら最後、必ずアークスの何かの役職に就くことになっているんだ。そしてそれを放棄することは当然できない。だからそういうことがあったとしても捜索が行われて、見つかり次第教育が施されてから帰ってくるんだ。だけど……

「そうだ、確かに規則ではその様に決まっています。俺も支部に届け出てからこの地区も捜索をしたさ。だけどな、不思議なことに奴はいくら探しても見つかることは無くても今でも消息が分からないままで。」

バーンズさんが言うにはその新人の人は艦を捜索しても見つからなかったらしい。大体的場合は何かしらの施設、道にある自販機なんかを利用して履歴が残るからそれから辿れるんだけどね。

「そんなことって、僕の経験が浅いだけなのかもしれないけどそんなことは聞いたことが無いですよ。だってそんな消息ロスト不明するなんて船外に出て逃亡するとかそんな自殺じみたこと……」

「……そうだな、その見方が一番正しい。ここの支部も同じような判断を事実上出して捜索を打ち切ったようなものだ。」

「そうですか……」

「まあ、M・Sだって暇な訳じゃない。一人程度の人員が減ったところで追加で補填を行えば良いだけだからな。そいつがどうなろうと知ったことじゃないって訳だ、消息不明の場合には特に。」

「……」

「あー……悪い、話を変えようか。ほら、携行食だ。」

そう言うのとバーンズさんは簡易携行食のパックを渡してくれた。

「この時間だけでもまだ飯食ってないだろ？今日の仕事分で余分に買ったのが余ってるからよ、あげるさ。」

「ありがとうございます。」

「それはM・S用の携行食だから少しだけ味は濃いぜ、普段は薄いもんだらうから少しは美味しいだろうよ。飲んでみな。」

そう言われた僕はパックからストローを取り外して中身を飲んでみることにした。微かにだけ匂いはちよつと違うかも。

「……あんまり変わらない気がしますがどちよつとだけ濃いですか。」

「M・S用とは言うものの規定摂取カロリー数に合わせて作ってるだけだからな……」

はあ、俺もアークスだった頃は天然素材の……いや、何でもない。」

「そ、そうですか。」

そうして携行食を食べ終えた後、数時間程度また待機を行っていたけれど先程と特に変わらず何も起きることが無くて気が付いた時には終業のアナウンスが部屋に響いていた。

「?ノア君、銃は置いて行かなくて良いぞ。」

仕事が終わった後、僕とバーンズさんはロッカールームで着替えをして自室に帰るところだった。

「へ?置いて行かないんですか?」

ロッカーに先程渡された銃^{PIA2}を置こうとしたときに不意にバーンズさんに声をかけられた。

「ああ、俺らの待機勤務は今日のところはここで終わりだが勤務外でM・Sが関わらなきやいけない事態が発生したときに使えるように一応持っておくことになってる。普段は艦内のロックが掛かっているから撃てないが許可が下りれば使えるからな。」

「はあ、バーンズさんはそういうことあったんですか?何か急を要するような事とか……」

それを聞いて少し心配になった僕は万一を考えてバーンズさんにそういった前例が

あるのかどうか聞いてみた。

「まあ、一度だけあったかな。あれは帰っているときに……そうだな、それなりに用心はしておいた方が良いか。」

「あるんですか……」

「だからその銃は持つておいてくれよ。」

「はい。」

そう言われた僕は一般員用の服の上からもう一度付け直そうとした。すると。

「いや、そういうものはなるべく見えない位置に持つ方が良い。もしもの時に相手を警戒させちまうからな……だからノア君なら上に羽織ってる服の下に隠れるように入るのがか、ここが良いだろう。」

どうやら相手の警戒心を煽るような付け方だったようで、バーンズさんがそれなりの場所に付け直してくれた。

「基本的には許可が下りるまでその銃ははつきり言うただの玩具だ。それを相手に見られてみる、撃たれると思って逃げ出すか焦って攻撃してくるかもしれないしな、そうなたら最後だ。だから今言ったのも覚えておいてくれ。」

「わかりました。」

「よし、ここまでできればM・Sとしてはほぼ問題はない……はずだ。まあ明日から

も頑張ろうか。」

「そうですね……」

明日のことを想像しながら重く返事を返した。

「じゃあ、先に帰りますね。お疲れさまでした。」

「ああ、気を付けて戻れよ。」

そうして僕は駐在所を後にして、自室のある区画行きのコンベアに向かった。

「…… イレノア、お前は何処に行っちゃったんだ……？」

自分以外誰も居なくなつたロッカールームで古い日付の写真を見ながらバーンズは一人言葉を漏らした。

「駐在所からは少しかかるんだな……」

あれからコンベアに乗つた僕は特に何もなく自室にまで戻ることが出来た。腰の銃には一度も触れていない。

「まあ、前みたい遅刻することが無ければ大丈夫か。取りあえず今日はもう休もう……」

そうして僕はカードをドア横のスロットに通してドアを開けようとした。

「…… 開かないな、もしかしてまた立て付けが悪くなったのか……？」
何かが突つかかる音が連続して聞こえてくる。

「修理してもらえないのが辛いな…… つと力を入れて押して、開いてくれよ……！」

両手でドアを強く押し続けると、それに答えるようにして大きい金属音が鳴った後に
普段通りスムーズにドアが開いた。

「はあ、帰ってきた後にこれじゃ体が持たないな。」

誰にも聞こえない文句を漏らしながらもようやく自室に辿り着いた。

「…… 取りあえず水でも飲もう。」

冷蔵庫から飲みかけの精製水を取り出してから椅子に座って少し休むことにした。

まあ、さつきドアの立て付けが悪くなったようにここは新しく作られた場所じやない
んだ。アークスがまだ分離化される以前から運用されている艦で施設自体も使いまわ
し…… それでこの僕の部屋はアークスの自室として使われていたものを一般員用に改
修したものなんだ。

普通なら新造艦を作って旧型艦なんて破棄してしまえば良いじゃないか、なんて思う
けどもコストがそれだと掛かりすぎてしまうからね。だけど、大して大きな事も起こら
なくなつた時代で人員が嫌でも増えてきているからやむを得ずに新型艦をまれに作る

こともあるんだけど……

「はあ……」

……それにしてもこの部屋は酷いけどね。部屋の壁の塗装は雑で擦り傷だらけ、照明も薄暗くて使い物にならない。別の艦に移動したいものだけどそれには申請しなきゃいけないし、それ相応適当な言の理由訳が無ければ生活どころか移動さえ認められない。

「……取りあえずもう寝よう。考えても何も出来ないや。」

そうして寝ることにした僕は銃をサイドテーブルに置いてからベッドに適当に横になった。また、悪い夢でも見なければ良いけど……

「……ちゃん、レピカちゃん、そろそろ起きないと先生にみつかつちゃうよ。」

「ん……まだ、まだだいじょうぶ……ねむい……」

「はやく起きないとほんとうに……ひっ!？」

「レピカさん、起きてください。まだ講義中ですよ?。」

「?。」

わたしがねているとあたまを何かでたたかれて、それで気になってうえを向いてみた

んだ。そしたら…

「とても、とても、とても良い心掛けです。ねレピカさん。講義中に居眠りとはですね…。今日は残っていただきましようか。」

「ひいひい…」

そういうところ、可愛い笑顔をしながら、せんせいは画面をさす棒をつよく手のひらで叩いていたんだ。

「むう…。せんせいのことわたしきらい…」

「だって起こしても起きないんだもん。レピカのじごくつてやつよ。」

「そんなあ…」

こうきがおわった後、わたしはともだちのメリッサといっしょにパツクのたべものを飲みながらおはなししていたの。

「ちゃんとべんきようしないとアークスにはなれないっていつもせんせいが言ってるじゃん。」

「そうだけど…。ねむいのはしかたないもの、アークスのひとだつてねるでしょ？」

「そういうもんだいじゃないんだけどなあ…。」

メリッサはこまつたような顔してる。なにかへんなこといったかな？

「まあいいや、またあしたね。きょうはしつかりねるんだよー」

「はーい。」

そういうと飲んでた。バックをゴミ箱にすててからメリツサは帰っていった。

「わたしもかえろつと。」

わたしもはなすあいてがいなくなったから帰ることにした。

「〜♪」

わたしはともだちとおはなしするのも大好きだけど、こうしてさんぽしながら帰るのも好きなの。

お部屋はべんきょうするところの近くにあるけどわたしの足だとちよつと遠いから時間がかかるけど、この時間はきらいじゃないからいいかもしれない。

「あつ、そろそろ橋だ！きょうはなにがみえるかな…。」

そうして歩いているといつもとおる橋が見えてきたんだ。この橋からはこのぼしよを見渡せるばしよだからいつも眺めてからいくの。それでいつもちこくしちやうんだけどね…。

「ひとがたくさん歩いてて… あつ、あのくるま速いなあ。」

こうして遠くからみているとじぶんがおつきくなつたみたいでなんだかたのしいん

だ。それで、きょうはちよつと前にあたまをいつもより橋から出してみていたんだ。そうしたら。

「あつ、わたしのぼうしっ……」

そのときにつよいかぜが後ろからふいてきてぼうしがとんでつちやっただ。

「……ど、どうしよう。さがしにいかなきゃ！」

とんでいくところは見ていたからそれをおいかけるようにしてはしりだしたんだ。

「……ここ、どこ？」

あれからぼうしをおいかけてはしってきたけど、気が付いたときには知らないぼしよにきちやっただみたい。

「うう…… たんまつの使用方おぼえておけばよかった……」

せんせいが地図があればまいごになってもだいじょうぶだっていつてたけど見方が分かんなかった。

「こうなったらみつけるまで帰らないんだからっ！」

いろいろあつてイライラしていたわたしはやけになってみつけるまでかえらないことにしたの。

ぼうし、あのぼうしはおかあさんからもらっただいいじなものだから……なくすのは

いや。

「でも、さつきとんでいったところはこのあたりなんだけどなあ。地面におちていたらすぐにみつかるけど、まさかだれかにもつていかれちゃったりして……」

ちよつといやなことが頭にうかんだ。

「…… うんうん、そんなことない。きつと、きつとどこかにあるはず。」

だけど、そうしたらここまで来たいみが無くなっちゃう。そう思つてさつきよりもつとくわしくさがすことにしたの。

E—05 「おにいちゃん」

「うう… さつきまではどうにかなるっておもってたのに。もつと奥のほうまできたらなんだか怖くなつてきちやつた…」

ぜつたいに見つかる!… そうきまつているわけじゃないのに意気こんだわたしは最後にぼうしを目でおいかけられたばしょ、開けたどうろからいくつか細いみちを通つてぼうしが飛んできそうなばしょをあるいていたんだ。

「でも、どうせ地図もつかえないしいま諦めてもしようがないか。」

だけどいくらさがしてもぼうしが飛んできそうなところはみつからなかつたの…

「うーん、足がいたくなつてきちやつた… すわつて休も。」

そうしてつかれたわたしは行きついた先で見つけた広場にあつた椅子にすわつて休むことにした。

「… やつぱりみつからないものはみつからないのかな。」

さつきまで強気だったけど、なんだか無駄なことをしてる気分になつてそんなことばが勝手に出てきちやつた。

「あーあ、勝手にもどつてきたりしないかなあ…」

おとぎ話みたいなことを考えたりしてぼうしが見つからないことからにげて、上を向いたんだ。

「まったく、木にでもひっつかかかっていればって思ったけどそうならまたさいしよから探さないと…… って、あれは！」

上を向いてこれからどうするか考えようとしたら、そこにはわたしのぼうしが木の枝にひっつかかっているのが見えたの。

「や、やっぱり無駄じゃなかった…… よかったあ……」

それでようやくぼうしを見つけれられたわたしは最初は見つけられて喜んでいただけ、途中からあることに気がついて……

「……わたしの身長じゃとどかない。」

「んっ！んっ！…… 跳んでもだめかなあ……」

ようやくくぼうしを見つけることができた！…… けど、身長がたりなくてぼうしまで手がとどかなかったの。

「もう少しわたしがおおきかったら…… んっ！、だめだあ……」

それで、どうやってぼうしを取ろうかほかの方法をかんがえていたら…… おとこの人に声をかけられたんだ。

最初の日の仕事を無事に終えた僕は自室に帰ってから安心しているのもつかの間、あつという間に日が明けてしまっていて仮眠を取った後にふと窓を見た時には人工太陽が艦内に差し込んでいたんだ。それで焦った僕は急いで着替えを済ませて、忘れかけそうになった銃を腰に付けてから急ぎ目で駐在所に來た、だけど。

「はあ……バーンズさんもまだ來てないのに気を張りすぎたかな。」

少し早め……いや、かなり早めに来てしまった僕はバーンズさんよりも早く來てしまったんだ。特に仕事も無くてただでさえ退屈な時間だつていうのにその時間を増やしてしまつたみたいだ。

「まあ、早く來すぎたからといって何かペナルティがある訳じゃないんだけど。取りあえずマニュアルの再確認でも……つて、あの女の子どうしたんだ？」

それで、退屈しのぎにでも電子マニュアルをもう一度読んでおこうと思つて端末を開こうとしていたら……部屋の窓越しに木の下で必死に飛び跳ねている女の子が目に入ったんだ。

「木の下で跳ねて…… 木に何か引っかかったのか？」

女の子はアークス用の制服…… を子供サイズにしたような可愛らしい服を着ていた。噂には聞いていたけど特別指定教育レベルの子なのかな？ そのレベルの子は飛び級というか一般の指定教育とは違って年齢に関係なく高度な教育を受けさせられるとか、それで基本的にはアークスに所属になることも決まってしまうらしくて小さい子でもアークスの制服を着ている子は少なくない。

「することも無いし…… 怪我をしても大変だろうから様子見にでも行くかな。」
そうして気になって、というよりも心配になった僕は椅子から立ち上がってから直ぐに建物から出て女の子の居る場所に向かった。

「だ、大丈夫かい？ さっきから何か取ろうとしてるみたいだけど……」

窓から見えた場所は駐在所のすぐ横にある広場で建物から出て数分も掛からずに行くことが出来た。

「木にぼうしがひっかかっちゃったの…… でも届かなくて、どうしよう……」
やっぱり木に物が引っかかかってしまったみたいだ。

「この木、帽子はあれであってるのかい？ 今取ってきてあげるから。」

「うん…… だけどおにいちゃんはあのぼうし取れるの？」

「これぐらいの木なら登れるだろうから……この枝から登れるな。」

そうして僕は登れそうな枝を手で確認して、登れそうな枝を見つけてから登った。

「わあ……」

女の子が目を光らせて下から見上げていた。

「そうだ、危ないから木から離れているんだよ。」

「うん、わかった!」

木はそれ程まで高くないので少しコツを掴めば簡単に登ることが出来て、帽子にまで手が届く場所にゆっくりと移動してから落とさないようにして帽子を手を取った。

「この帽子だな……って、それにしてもやけに使い込んである帽子だ。あの子の所持品にしては少し違う気がするけど……まあ、僕が気にすることじゃないか。」

帽子を無事に掴めた僕は行きと同じようにして枝を伝って木を降りて行った。

「ほら、ちゃんと取れただろう? 今度からは飛ばさないように気を付けるんだよ。」

「ありがとう! こんどからは気を付けるね。それじゃあバイバイ!」

そう言つて女の子はあつという間に走り去ってしまった。

「はあ、小さい子は元気だなあ……」

これで要件の済んだ僕は駐在所に帰って仕事の準備でもしよう、そうして来た道を戻ろうとしていたら女の子が走っていった方からまた走ってくる音が聞こえてきた。今

度は何だ……？そう思っているとその足音は僕の横で直ぐに止まった。

「はあ、はあ…… そうだった。わたし、地図がつかえなかったの。」

さっきの女の子だった。

「えっと、話をまとめると君は飛ばされた帽子を取りに行こうとして追いかけていたら分からないところまで行っちゃって。取りあえず帽子は見つかったけど帰り方が分からなくなってきた、ここまでは大丈夫？」

「うん…… あつてるよ。途中で地図が見れないことにきがついてそれでかえろうとしたけど使いかたがわからなくて。迷っちゃったの。」

あの後、女の子から帰り方が分からないと言われて…… 取りあえず僕の仕事上しつかりと取り合わないといけないから待機室までついてきてもらってそこで今に至るまでの経緯を話してもらっていたんだ。

「二応だけど…… 端末の使い方は指定教育とかで学ばなかったのかい？多分そうだったことも教えてもらえるはずなんだけどな。もしかして特別指定教育レベルでもまだだったか……？」

女の子は地図の見方が分からない、要するに端末の使い方が分からないみたいだった。それなのにどんどん奥の方まで進んで帽子を探しに来たらこうなってしまうたら

しい。

普通の指定教育レベルでしか僕は勉強したことが無いからこの子が何処まで物事を勉強しているのかは分からないけど端末の使い方はそれなりに最初の段階で勉強するんだ。

「うっ…… たんまつの使いかたはベンキようしたよ、わたしがわすれてただけ。」

「じゃあ、教えてはもらっていたんだね？ただ使い方を忘れていただけ。」

女の子は少し俯いている状態で首を縦に振った。まあ、色々考えてはいたけど結局のところ使い方を忘れてしまっただけみたいだ。

「まあ、人は完璧に物事を覚えるのが苦手なんだ。だから忘れてしまうのは仕方の無いことだよ。僕だって時々大事なことを忘れかけたりしちゃうし…… だからあんまり自分を責めない方が良いよ。その方が気が楽になるし。」

「…… すみませんでした。」

「良いんだよ、今度から気を付ければ大丈夫なことだし。それじゃあ端末の使い方からおさらいしておこうか。端末は出せるかい？」

取りあえずこのまま無事に送り届けるっていうのでも良いんだけどそれだとまた迷ってしまったときに困るだろうから端末を出してもらってそれで使い方を教えてあげることにした。仕事もすることがね……

「うん、いま出すね。」

そういうと女の子は空を切るように手を前に出した。すると空中に画面が浮き出てきたんだ。

「あれ、君が持つてるのはホログラムタイプなのか。やっぱり凄いなあ。..。」

「?おにいちゃんのたんまつはこれじゃないんだ。..。」

「うん、僕が持つてるのは物理端末だからね。」

まあ、普段から良く見慣れているからそこまで驚くことじゃないんだけどホログラムタイプの端末は羨ましかったりする。ちなみにこの子が持つているタイプの物はあくまで基本支給されるタイプの物で僕みたいなあくまで基本支給されない役職、もしくは一般員の場合には余程のことが無い限りは基本的に貰うことは無いんだ。

どうしてこういったホログラムタイプの物をあくまで基本支給されるのだったのか? まあ、どんな環境下でも邪魔にならないように使えるから、なんて習ったような気がする。

ちなみに僕が持つている物理端末は一番普通のやつで旧型艦とか僻地として扱われている艦では基本的にこのタイプの物があくまで基本支給されるんだ。ちなみに壊れた場合以外には新しい物は支給されないからずっと古いものを使い続けることになっていて、つまりとるころ僕が持つている端末はかなり年季が入っていた。

「まあ、中身は一緒だから大丈夫。ちゃんと教えられるよ。」

それと中に入っているOSは同じものになっていくから他の人と接続をしたりする時でも互換性が無くて困ったりはしないようにできている……とは言っても今まで他の人と接続をしたことが無いから知識だけなんだけどね。

「じゃあ使い方を教えていくよ。まずはメインメニューから……」

そうして僕は基本的なことから順序に沿って教え始めた。

「うん…… だいたい思いだせたかも。地図もつかえるようになったし。」

「なら良かった。使えるものは使えるようにしておかないとね…… まあ、忘れないようには一応気を付けてね。」

あれから1時間ぐらいかけて僕は小さい子にも分かりやすいようにしながら端末の使い方を言葉だけじゃなくて実演も交えて説明をしていた。まあ、最後の辺りは段々と思い出してきたみたいでほとんど僕の説明は要らなかつたみたいだけどね。分かつたのなら良かった。

「わかつた！ いろいろ助けてくれてありがとうおにいちゃん！」

「いや、こういうことを解決する為にこの仕事はあるからね…… お礼を貰うほどのことじゃないよ。」

「そうなの……？」

女の子は不思議な顔をしながら首を横に傾けていた。

「ノア君、今日も頑張っているか……って、その女の子はどうしたんだ？」

そうして女の子と会話をしているとバーンズさんが待機室に着替えを済ませた状態で入ってきた。会話に気が行って全く気が付かなかったよ……

「え、えっと、この女の子はさっき隣の広場で会った子なんです。それで、どうやら自分の帽子を探しに来たら道に迷ってしまったみたいで……それで対応してしました。」

「はあ、要するに迷子ってやつか。まあ俺はそういうのは苦手だから君に任せるさ。」

「分かりました……と言ってももうほとんど要件は済んだんですけどね。」

「なんだそうだったのか。いや、ノア君は本当に腕が立つなあ。」

すると昨日と同じようなことをバーンズさんは言う。きつと僕の刃物の扱いを見たら卒倒するだろうなあ……

「そんなこと、ないですよ。現にM・Sになっているのも才能が無かったからなんですから。」

そう言うときバーンズさんは少し残念そうな顔をして話を続けた。

「そうだと俺は思うんだがなあ……まあ、要件も済んでいることだしその子、ウイオ

ラマガ力を着た子は送り届けてやってくれ。その間の仕事は俺がしておくからさ。」

「……分かりました、じゃあ行つてきますね。」

そうして僕は女の子を頼りに送り届けることにして一緒に建物から出た。

「道はこれであつてるかい？」

「うん、なんだかここは通つたようなきがするからだいじょうぶ。」

そんなこんなで女の子の言葉を頼りにしながらもその子の自室に向かつて歩いて行つていた。

この子を通つてきた道に戻つて歸つているんだけど見る限りでは地図が無いと一人で歸るのは絶望的だな……

「偶然だったけど駐在所の近くにまで辿り着いて良かったなあ……もしずっと迷つていたら何か事件に巻き込まれてしまうこともあるしね。」

「そうなの？」

女の子は何も知らないようだった。まあ、このぐらいの子なら何も知らないか……

「まあ、世界には色々な人が居てね、優しい人が居る反面優しくない怖い人も居るんだ。だからなるべく入り組んだ所とか人氣が無い場所はなるべく避けるんだよ？」

「はい。」

取りあえず女の子の調子は普段通り？に戻ったみたいだ。駐在所で話を聞いていた時よりも何だか元気だ。

「うふふつ、わたしレピカっていうの。おにいちゃんは何て名前なの？」

「？僕はノア、ノアって言うんだ。」

「ノアおにいちゃん…… 何だか良い響きねっ！」

「そうかな？普通の名前だと思うけど。」

「おかささんから良く聞いたの！響きのいい名前は良い名前だって。だからノアおにいちゃんの名前は良い名前だね！ふふつ。」

名前についてあんまり話したことは無いけどこうして良い名前なんて言われたのは初めてかもしれない。何だかちよつと嬉しい。

それから女の子は気分が良くなったのか歌を口ずさみながらスキップをして上機嫌に目的地に向かって進み続けた。

E—06 「急行」

「この部屋で間違いないかい？」

扉の前に立った僕は隣に居るレピカちゃんに確認を取った。

「うん、ここでまちがってないよ。わたしの部屋。」

「…… そつか。じゃあ、今日のところは部屋でゆっくりと休んでね。明日も勉強あるんだらう？」

「…… うん、あんまりしたくないけど明日もあるの。」

さつきまでの調子とは変わって何だか落ち込んでしまっているようだった。返事もうつむいたままだ。

「…… もしかして勉強が嫌いなのか？」

そう聞くとうつむいたまま上目で返事をしてくれた。勉強かあ……

「べんきようしているときも寝ちやったりしていつもせんせいに怒られて…… もううんざり。」

「でも、今の今まで途中で諦めたりしないで行けていたんだらう？」

「…… それは、おかあさんとよくそくしたから。」

その時のレピカちゃんの顔を見てみると同年代の子ではしないような神妙な顔つきになっていた。

「約束つて、嫌なら良いんだけど…… 良かったらさ、どんな約束をしたのか教えてくれるかい？」

そうすると小さい、消えそうな声で話し始めてくれた。

「りっぱなアークスになるつて、そうやくそくしたの。そのときにこのぼうしをもらつて……」

頭から外した帽子を手にとって摩つている。あの帽子はそういうことだったのか。なら、あそこまで躍起になつて探すのも無理ないか……

「じゃあ、お母さんの為にも頑張つてアークスにならないとな…… 僕はなれなかつたけど、レピカちゃんならきつとなれるよ。」

「ほんとうに……?」

レピカちゃんはさつきまでうつむいていた顔を少し上げてそう返事した。

「ああ、だからちゃんと勉強をして立派なアークスになるんだ。お母さんもそう願つてるはず。」

「…… うん、わかつた。」

するとレピカちゃんは顔を上げてしっかりと返事を返してくれた。これならこれが

らも大丈夫そうだ。

「よし、そろそろ僕は仕事に戻らなきゃな……」

時間を確認すると駐在所から出てからそれなりに時間が経っていた。早めに戻らないとバーンズさんに迷惑になるしな……

「おにいちゃん、もういつちゃうの……？」

「ごめんよ、仕事だからね。また何処かで会えたらその時は話の続きでもしようか。」
そうして僕が来た道に戻ろうとするとレピカちゃんが焦ったように話しかけてきた。

「ま、まつておにいちゃん。わたしのコード、おにいちゃんにあげるからメールでこれからも話さない？」

「メール？僕なんかとで良いのなら良いけど…… 実のところ話す人が居なくてあんまり使ったことが無いんだよね。」

僕は気が合う友達とか、そういう縁が無かったからメールの機能は受信ぐらいしか使ったことが無かった。それもあつてコード交換で連絡しあえることも忘れていたよ……

「ふふつ、今度はわたしがおにいちゃんに使いかた教えてあげるっ！」
そう言ったときのレピカちゃんの顔はとても明るかった。

「…… おつ、ノアくん戻ったか。」

「すみません、少し遅れました。取りあえずさっきの女の子は無事に届けましたよ。」
あれからレピカちゃんを送り届けられた僕は彼女からコードを貰った後、手短かに説明をしてもらってから直ぐに駐在所に戻った……。それにしても楽しい会話つていうのはつい時間を忘れちゃうな、ほんとに。

「そうか。取りあえず出勤早々お疲れ様だったな、まあ休んでくれ。」

「はい……」

そう言われた僕は自分の椅子に座って、備え付けのコンソールに端末を接続した。折角メールの機能を思い出したしね……。どうせだから調整しておいた方が良さだろうな、これから使うんだし。そうして僕は作業を始めた。

「…… 面白いえばあれから何か連絡はありました？ 少しでも時間経ちましたけど。」
作業の片手間に気になっていたことを聞いてみた。レピカちゃんを送り届けるのに少し時間が経ったしね。

「いや、連絡は特に入ってないさ。平常通りに待機状態のままだぜ。」
けれどバーンズさんは特に動じることも無く返事を返してくれた。

「そうですか……。まあ、何も無いことに越したことは無いですね。」

「実際のところは何かは起きていると思うんだが……。こつちの駐在所に要請が回っ

てきていないだけさ。」

バーンズさんは背を伸ばしながらそう言った。この間も言っていたけど僕は不幸中の幸いというのに遭遇したのかもしれないな……

「……何か飲み物でも持つてくるか。」

体を伸ばしきったバーンズさんは振り向きざまにそう聞いてきた。

「ノア君は何かが良いよ？今持つてくるぜ。まあ規定摂取カロリーの範囲でだがな、ははは。」

「僕は水で大丈夫ですよ……」

「……分かった、直ぐに持つてくる。」

そうして椅子からバーンズさんが立ち上がって、普段通り待機室から出ようとした時だった。聞いたことのないアナウンスと電子音が鳴ったのは。

『一般区画、Eの8番で事態発生。一般区画、Eの8番で事態発生。暴走状態にあるアークス複数人に対し鎮圧を速やかに行ってください。出動部隊はB第2部隊、直ちに急行を。繰り返しします。一般区画……』

何があったんだ？と僕が思考を巡らせているとバーンズさんがすぐさま倉庫へ向かって走り出して行った。僕も無理矢理思考を中断して動き出す。

「ノア君！現場急行だ！取りあえず倉庫に来てくれ、早く！」

呼ばれる声に煽られて、意識がようやく戻つて来た。僕は足先を倉庫へ向ける。

「：： わ、わかりました今行きます！」

その時でも相変わらずアナウンスは鳴り続けていた。

「取りあえずブーツの紐と服のベルトを確認しなおして、後それからジャケットを着たら教えてくれ。装甲板^{アーマープレート}の着け方を教える。」

「わ、分かりました、急いでやります。」

部屋に入るとバーンズさんも慌ただしく準備を進めていた。僕もそれに合わせるようにして準備を進める。

「バーンズさん！指示通り出来ましたよ！」

取りあえずバーンズさんが言った通りにズボンのベルトを強めに締めてからジャケットを着て、その上からピストルベルトを追加で締めた。二重でベルトを巻いているから少し苦しいけど実用性だ実用性……

「よし、じゃあ今から俺が着けるから良く見てくれ。難しくはないから大丈夫だ。」
そう言うとバーンズさんは様々な形の装甲板？をロッカーの中で並べた。

「取りあえず肩からだ。ほら、こつちがノア君の分だぞ。」

バーンズさんが収納箱から装甲板を取り出して渡してくれた。

「分かりました。それでどう着けるんです？何となく嵌まるところは分かるんですけど……」

「まあよく見ててくれ。まずこれを肩に乗せるようにして着けるんだ。そうしたらもう一つのそれとかみ合う装甲板がある。それを合わせてからスイツチを押すだけだ。」

僕は指示通りに肩に乗せられる形の物を肩に乗せてからもう片方の装甲板を嵌め合わせてからスイツチを押した。すると装甲板同士がロックして、それから空気が自動で入って隙間が無く安定するようになった。

「装甲板の方も問題ないな。じゃあ後の装甲板も同じように着けてみてくれ、後は脛当てと胸当て部分だ。その間に他の物も準備するから……」

「これで大丈夫ですか？もう着終わりましたけど……」

「は、早いなノア君……まあ、付け方は大丈夫だ。それと渡し忘れていたがこれも着けてくれ。胸当ての部分に穴があるだろう？」

「胸当ての部分、ここですね。」

僕は少し大きめなくらいのバツチ状の物を胸当てに嵌め込んだ。

「説明したいところだが事態が事態だ。外で車を出すから銃とヘルメットを着けたら出てきてくれ、じゃあまた後でな！」

そう言うとおバーンズさんは部屋に入って来た時と同じ速さで部屋から出て行った。

僕も銃を収め直し、ロツカーに掛けてあつたヘルメットを被つた後緒を急いで締めてからバーンズさんを追うようにして部屋から走つた。

「思つたよりも事態が深刻みたいだな……ノア君！急いで助手席に乗つてくれ！」
外に出ると運転席の窓から顔を出す形で僕に向かつて叫んでいた。車つて装甲車のことだったのか。

「すみませんバーンズさん！これどうやって開けるんですか!？」
「ノブを引き出してから回すんだ、強く回さなくても開くぞ。」

装甲車に乗るなんて初めてのことからドアの開け方すら分からなかつた。やっぱ普通の車両じゃないから簡単には開かないみたいだ。

「よし、乗つたな。飛ばすからその辺りにあるグリップを掴んでおいてくれ。行くぞ！」

「わ、分かりました。」

そうバーンズさんが言うのと電源がエンジンに入る音がした後、アクセルをべた踏みして急発進した。

「……. 面白いえばノア君、まださつき渡したものについて説明していなかったな。取りあえず用法について説明しておくぞ。」

道を曲がりながらも器用にバーンズさんは言う。さつき渡したって……この小さいやつかな？僕はそれを手のひらに出して良く見てみた。

「それはフラッシュバッチって言つてな、相手に危害を加えることなく強力な発光で無力化できる優れたものだ。使うのもボタン一つで使える。」

僕はバッチを見ながら話しの続きを聞く。こんなに小さいのに……

「ただ、そいつには決定的な欠点があつて一度使うともう一度チャージするまでに時間が掛かるんだ。だからあまり無暗に使わないように気を付けてくれ。分かったか？」

「分かりました……ちなみに、これはどれぐらの範囲で使えるんですか？」

「まあ……正直なところ、至近距離じゃないと大して効果は無いな。だからそういうことも頭に入れておいてくれ。」

そうして駐在所から出て数分も経たないうちに車が止まった。

「……到着したんですか？」

「……ああ、現場に到着した。直ぐに出るから銃の確認を最後にしておいてくれ。」
「わ、分かりました。」

僕は緊張しながらも腰から銃を取って弾薬の確認をした。連発弾が2発、実弾が2発だ。直ぐに使い切らないようにしなきゃな。

「弾は共有だ、何かあれば言つてくれ。じゃあ行くぞ！」

バーンズさんの掛け声で僕も装甲車から飛び出て鎮圧に向かった。

「良いか！キヤスト以外は殺せ、確実に仕留めろよ！」

合成されたような男性の声が現場に、人通りの多い大通りに響いている。声からしてキヤストの男の人みたいだ。

「分かつていますよ、全てはC・R・S・Fの思想通りに……ふふふ。」

続いて女性のタイプの声が響いた。相手は2人何だろうか……

「そのアークス！M・Sだ、武器を破棄して直ちに投降しろ！繰り返す、武器を捨てて投降しろ！」

どんなものか偵察していると不意にバーンズさんが物陰から出て、拡声器で警告をそのアークスに向かつて始めた。凄いや……僕じゃ緊張して出来ないな。

「はっ、なんだ。何が来たと思えば役立たずじゃなやか。何の用だよ……？」

けれど相手のアークスには警告は全く効いていないみたいだ。M・Sはこういう相手に脅威になるはずじゃなかったのか……？

「お前らの暴走を止めるためだ、そんなこと自分達でも分かるだろう！」

「暴走……？そつちこそ何を言っているんだ。これはそんな野蛮なものではなくて思想に基づいた粛清だ、お前たちのような者に邪魔されるべきことではない！」

「バーンズさん伏せてください！構えてます！来ますよ！」
「へ!？」

キャストの男がバーンズさんに理由を述べているときに僕には密かに何かを準備しているのが見えた。バーンズさんの体を掴んで無理矢理伏せさせる。

「くそつ、外したか。酷く勘の良いやつだ。」

伏せた瞬間それなりの大きさの爆発音が聞こえた後、頭の上をフォトン弾が飛んで行つた。

「バーンズさんあれは話の通じる相手じゃないですよ！思想が何だか分からないですけどこれは実力を行使するしか……」

先程から見て聞いていて簡単に判断したことをバーンズさんに伝えた。すると少し苦しい顔をしてから僕に返事した。

「…… 仕方ないな。リスクが高いがノア君の通り実力行使しかないみたいだ。」
先程と同じ爆発音がかもう一度響いた。

「畜生、時間が無い。取りあえず散開して合間を見計らつてから攻撃するぞ！ノア君はあそこの残骸に移動してもう一人の女女性キャストの相手をしてくれ！」

「わ、分かりました！」

緊張から返事が上手くできない。

「M. Sに用はないが……我々の目的はキャスト以外の殲滅だ、勿論お前らも含まれている。予定には無かったが丁度良い、ここで厄介者も始末しておく、行くぞ!」

その言葉の瞬間ホバーを吹かすような音が聞こえてきた。そしてそれを合図に僕とバーンスさんは分かれて鎮圧にあたる。

「逃がすか!」

「うわっ!」

僕が分かれた後に車の残骸に向かって走っていると男のキャストから機銃を撃たれた。さつきまで走っていた場所がどんどん穴だらけになる。

「? やけに小さいM. Sだな……最近はガキでも編入しないとやってられないってか?」

何かまた言っているみたいだけど緊張から何を言っているのかさっぱりだ。荒い呼吸が自分でも分かる。

「おい! よそ見とは良い心掛けだな! お望み通り吹っ飛ばしてやる!」

「何!」

するとさつき分かれたバーンスさんの声が聞こえてきて、同時に小さい爆発音、発砲音が聞こえてきた。

「うっ! ……生意気なあ!」

命中はしたらしい。けど、跳ね返ったみたいであんまり効いてないみたいだ。僕が適性検査の時に間違えて壁を撃った時と同じ音だ。

「ば、バーンズさんは凄いや……」

僕の方はというと半ば腰が抜けかけていた。足に若干力が入らなくなってる。

「つて、僕の相手はあの^{男性キャスト}人じゃなかったんだ！」

そう思い出した僕は急いで周りを確認して女性のキャストを探そうとした、すると。

「貴方もよそ見はいけませんよ……じゃないとこうしちやいますよ？」

「あっ！」

突然後ろの方から声がして、背後から首を絞められた。

「生身というのは脆い……殺してもつまらないですね。」

「はっ、はっ、あがっ……」

首の氣道が狭くなつて上手く息が出来ない。苦しい。

「けれど私達の目的は、思想はそれが目的ではない……ふふふ。なるべく苦しまないように殺して差し上げますよ……？」

駄目だ、まだ、死んだら……

そう考えた時、気づいて当然のことに気が付いた。なん

だ、首以外は自由じゃないか！

「……ふっ！」

そのことに気が付いた僕は残っている力を出し切る勢いで女性キャストを思い切り蹴り飛ばした。あまり威力は無かつたみたいだけど、取りあえず拘束は解けた。

「……手を抜きすぎましたね、油断しました。」

距離を詰められたらさつきみたいになる……そう覚えた僕はさつきの痛みに耐えながらも走って別の物陰に逃げた。

「はあ、はあ……に、逃げなきや！」

E—07 「完了」

「ど、どうすれば良いんだ？ 相手と武器が釣り合わないし、火力がまるで違うじゃないか！」

「逃げても、結果は同じですよ……」

逃げ隠れた物陰に身を潜めながら相手と自分の力の差を再確認していた。

「銃は確かにあるけど…… フォトン弾なんかであんな体に攻撃が通るのか？」

さつきバーンズさんが男のキャストに向かって一発撃ちこんでいたけど、跳ね返っていたことがもう一度頭を過る。

「…… しょうがないですね、面倒ですから一気に行きましょうか。」

「？」

そうして短い間對抗策を物陰で練っていると女性の声が出た。声が聞こえた時、同時に何かを構える金属の音が鳴る。

「弾が無駄になってしまいますが障壁を排除するにはやむを得ませんね。」

その言葉が出た次の瞬間、凄まじい速度で弾が射出される轟音とも取れるような連続した爆発音が始めた。隠れるために使っていた残骸が弾丸によってみるみるうちに

削られていく。

「ら、ライフルなんて全然違うじゃないか！どうすれば……どうすれば攻撃を加えられるんだ。」

残骸が削れていくなか、最後の気力で僕は対抗策を考えだそうとしていた。

「体には装甲があるわけで、武器も強力なわけで、火力も違うわけで……」

色々と思考を足早に考えているといよいよ残骸が攻撃に耐えきれなくなつたのか所々弾が貫通し始めた。時間が無い！

「こういうのも悪くないのかもしれないね……ふふふ。」

「……ど、どうにでもなれっ！」

「ー」

結局、最適解が出なかつた僕は勢いに任せて物陰から飛び出た。その瞬間に少しだけ相手が見えて、その表情は驚きを隠せていなかった。

「う、うわあああああああああああ！」

怖さから叫び声を出してしまいがちながらも僕は銃を構えて引ける限り銃の引き金を引いた、勿論狙いなんて適当だ。連発弾からしきりにフォトン弾が打ち出される音が響く。

「そんなっ…… ああっ!!」

目を瞑ってしまつて何も見えないけど僕の銃声に紛れて相手の声が聞こえた気がした。けれど僕は引き金を引く指を離さなかつた、離せなかつた。

「ひっ、ひっ、ひい……」

そうして自分でも訳の分からないほど混乱している状態だつた僕は弾を撃ちきる音が聞こえてくるまで一心不乱だつた。

「た、弾切れ、弾切れか……」

弾が切れてからはそれを証明するかのようになり引き金を引いても金属音が鳴るだけだつた。シリンダーは無いはずの弾を探そうとしては見つからず止まったり動いたりを繰り返していた。

「…… そうだ！ キャストの人は、キャストの人はどうなつたんだ！」

それから少しした後、ようやくはつとして我に戻れた僕は当初の目的を思い出してさつきまで闇雲に撃ち尽くした場所に居た相手を確認する為に銃を下ろしてからその場所を確認した。

「何処だ…… 何処に行つたんだ？」

最初に油断していて後ろに回られたことから少し焦りながら探す。舞い上がった砂埃で上手く見えない。

「あれ、この装甲はもしかしてボディパーツの破片…… だとしたらこの辺りにまだ居

るのか？」

何とかボデイのパーツの一部、僕が攻撃したときに壊れた部分が散乱しているのを発見してそれから少し歩いていると不意に足に何か当たったんだ。

「なんだ…？」

それで、当然のことながら気になった僕は何かにぶつけた方の足の付近を振り返って、それを注意深く見てみるとそこには

「え？」

さっきまで戦っていた女性キャストの頭が無造作に転がっていた。

「ノア君、そっちの方は大丈夫か？」

しばらくするとバーンズさんの声が聞こえてきた。今では誰も居なくなつた大通りにはつきりと響いている。

「……」

「？取りあえず確認の為にそっちに行くからな。そのまま待つていてくれ。」
けれど、そんな大きい声でも僕の中には全く届いてなんかいなかった。

「し、死んだのか…？それも僕が殺して、それで…」

人を殺めてしまったのかもしれない、その言葉だけが頭の中を永遠と巡っていた。

キャストであつたからか転がつている頭からは血なんてものは一切流れていなくて、その断面には配線と細々としたパーツが垣間見えるだけだった。床にも擦れた後しかない。

「あ、ああ……」

ちなみに頭を発見した後そこから下の部分になるボディの部分は少し離れた場所に横たわっているのを見つけた。

「おいノア君、怪我は無かつたか？かなり激しく撃ち合っていたみたいだが……」
そうして僕が固まっているとバーンズさんがさっきの通り駆けつけてきた。

「片割れの方の女はどうなった……って、相当激しくやったんだな。首と体が綺麗に分離してるじゃないか……」

僕よりも落ち着いていたバーンズさんは特に動揺することも無くその僕が殺してしまつたであろう相手の頭の部分にゆっくりと近づいて行って、その場でしゃがんだ。

「……バーンズさん。僕、僕……殺してしまいました。」

ようやく口がまともに自分で動かせるようになった僕は消えるような小さい声でぼそぼそと言つた。

「へ？殺した？何言ってるんだ、まだこういうのは生きてるさ。」

けれど、それを聞いたバーンズさんは呆氣にとられたようにまだ生きていると僕に伝

えた。まさかこれでまだ生きてるのか……？

「これで生きてる……？ そんなことってあるんですか？」

少しだけ落ち着きを取り戻すことが出来た僕は一旦冷静になってバーンズさんに聞いてみることにした。

「ああ、キャストっていうのは脳の部分だけが生体部分。つまり生きている部分だろう？ だから基本的には首が残っていれば回収して適当なボディなんかに接続してやれば直ぐに復旧するさ。ボディには生命維持装置……まあ俺らでいう心臓の代わりになる部分が基本備わっているから応急処置でその様になる。」

そう言うところとバーンズさんはその女性の頭を丁寧に拾い上げた。

「首だけでも緊急用の維持装置が働くから問題は無い、まあだからこそさつきから何を言っても反応しないんだけどな。今は脳を保護する為に簡易的な睡眠状態になっているだけさ、それで死んだように見える。」

女性の目を手で流すように閉じさせながらそう教えてくれた。キャストにはそんな機能が備わっていたのか。

「じゃあ、僕は殺してはいないんですね……？」

まだ安心することが出来ていない僕は若干怯えながらバーンズさんに審議を聞いた。

「ああ、腐ってもこいつらはアークスだ。そんな簡単に死んだりはしないぜ。だから

ノア君も気にしなくとも大丈夫だからな。」

「は、はあ…… 良いんでしょうか。」

「良いに決まってるだろう？ 今回に至っては警告をしたのにも関わらず無視をして、更に攻撃まで加えてきたんだからな。これで死んでいたとしてもノア君が問われることは無いさ。」

確かにバーンズさんの言う通り相手は警告を無視した上で攻撃をしてきた。落ち着いて考えればこんなこと当たり前の処置だ。だけど、だけど同じ生き物同士で殺しあうのはどうしても受け入れ難かった。どんな人にも大切な人が居るだろうから。

「…… そうですか。」

「そうだ。まあ、これで仕事は終わりだ。奴らの持つていた物を回収してから後少ししたら来る応援車両にさっきの連キャストの2人組中を引き渡してから駐在所に戻るぞ。ノア君は女の方が持つていた装備品を集められる限り集めてくれ。また後で合流しよう。」

こうしてバーンズさんと手分けをして装備品を回収し始めた。

「…… 良し、この辺りまでで良いだろう。後の処理はこの区画の担当者が引き継ぐからな。」

あらかた回収をし終えたのかバーンズさんはそう呼び掛けてくれた。意外と時間が

掛からないものなんだな。

「分かりました。後の物はそのままにしておきますね。」

「ああ、そうしておいてくれ。」

バーンズさんは一か所に物をまとめながらそう言った。ちなみにバーンズさんが相手した男のキャストは気絶させられているのか反応が無い状態でぐったりとしている。やはりバーンズさんの方が腕は上なんだな……

「お、そうこうしている内に車両が来たな。ノア君は積み込めるように準備しておいてくれよ？それが終わったらすぐに戻る。」

「分かりました。」

そう返事をした僕は女性のボディパーツ部分を抱きかかえて、その後すぐに到着した車両の座席に座らせた。頭は自分の手で持たせるような形で置いた。

「こんな感じで良いのかな……」

武器などの装備品は乗り物に積んであった容器に入れておいて分別？はそこでようやく終わった。

「良い感じだな。それじゃ、この仕事の報告書も作らなきゃいけないし直ぐに戻るとするか。」

そうして僕とバーンズさんは行きにも乗ってきた装甲車に乗り込んで再びエンジン

をかけなおした。

「…… そうですね、バーンズさんってキャストに詳しいんですね。」

車で駐在所に戻る最中に僕はバーンズさんにそう聞いてみた。さっきのキャストの生命維持装置の話、キャストでしか知り得ないことだろうから気になってね、それで聞いてみたんだ。

「俺がキャストに詳しい？ そんなことは無いとは思うがな……。」

バーンズさんは少し笑ったような表情を浮かべながら半信半疑に返事を返してくれた。もしかしたら僕の認識がおかしいだけで常識なことなのかもしれないけどね。だけど、聞けることは聞いておきたいから……。

「さっきの話を聞く限りでは僕はそう感じましたよ。そもそも僕らには関係の無いことですから知っているのは凄イと思つてですね……。」

「うーむ…… まあ、俺がアークスだった時にキャストの奴と知り合いだったんだよ。そいつに色々なことを教えてもらつて、それでそれなりにキャストについて知つているのかもしいな。」

バーンズさんはハンドルを切りながらそう答えてくれた。そうですね、バーンズさんは元アークスからのM・Sだったことを思い出した。

「そうでしたか……ごめんなさい、何だか深く聞いちゃって。」

「いやあ、別に気にすることじゃないさ。こうやってお互いに深く話をするのは大事なことだ。それは仕事においても日常においてもだからな。」

「そうなんですか？」

「ああ、これからも長い付き合いになりそうだしな。遠慮せずにそういう話はしてくれて構わないぜ。」

「わかりました。何か気になったら聞いてみますね。」

そうして話を終えた後、気が付いた時には既に車は駐在所に到着していた。

『……プロテクトが解除されました。入力されたプログラムを実行します。』

機材の駆動音だけが響き渡る部屋に通るような声が響く。

『システムの再起動、エネルギー充填率47、69、75、81、97。再起動を行います。』

しばらくの間充填を行う低い金属音が響いたが一瞬のうちにそれは終わり次の動作に入り始めた。

『No. 01、試験体の容態の確認……許容範囲内の事象であるため許可。強制的にスリープを解除します。』

そのアナウンスが響くと何かを外れるような音が響き渡る。

『No. 02、No. 03の確認を行います……行えませんが。重大な異常発生が発生しています。現状の復帰を行ってください。繰り返します……』

「……………」

「…… 出来ました！バーンズさん、報告書はこんな感じで大丈夫ですかね？」

「ん、少し待てよ今確認する。」

あれから駐在所に戻ってきた僕はバーンズさんと今当たつたばかりの仕事の報告書を書いていた。

「…… この文章は変えた方が良くもしいれないな。どれ、少しマニュアル出してみろ。」

「は、はあ……」

けれどこれが一番大変だった。この報告書っていうのは以前に貰ったマニュアルに

記載されている通りの文章でないと承認がされないらしくて……それでバーンズさんに教えてもらいながら少しずつやっているところだ。

「僕、こういうの…… こういう文章作成苦手なんですよ…… はあ。」

「こらっ、弱音を吐くんじゃないぞノア君。これだつて重要な仕事なんだ、M・Sになつたからにはこういうことも慣れてもらえないと俺も困るんだぞ？」

「それはそうですけどね…… 苦手なものは苦手なんですよ……」

ちなみに指定教育でも僕は文章関連の学習過程だけは飛びぬけて低かった。あの時にすっかりやつておけば良かったなあ……

「それは分からなくは無いんだがな…… 今回のものになると2人で分かれて対処に当たつただろう？だから各々が見たこと、起こつたことはそれぞれにしか書けないんだ。つまり報告書を完成させるにはノア君の力も必要だな……」

「はあ……」

こんな形で僕はしばらくの間待機室のコンソールと睨みあっていた。まあ、コンソールが悪いわけじゃないんだけどね……

「…… まあ、俺も嫌なことには変わりはないさ。こんなものを書いたところで上は何も見えていないからな。常に自分の保身のことだけさ…… 面倒事、厄介事には一切手を出さない。」

「?」

「ちなみにM・Sでこんなんだがアークスはもつと劣悪な環境にある。報告書なんてでたらめばかりが書き連ねられてるってな、俺が居た頃から噂になってたぜ。」

バーンズさんはため息交じりに話してくれた。

「全く、先の人方500年前の人々にこんなんじゃないや面目が立たないもんだな、本当に……。」

僕も数回は遭遇したことがあるけれどアークスの暴走、最近では特に多くなってるって僕も噂に聞いたことがある。今のこの情勢が原因だつてもっぱらの考察が多いけど、根本的から何か別のものが働いているようにも感じるんだけどなあ……

「……そうですね。」

そうこうしながらも僕はマニュアルに沿って文章の作成を続けた。

E—08 「改革」

「……まあ、形式はこんなもんで大丈夫だろ。文章はそれで大丈夫だから次からはマニュアル無しで出来るようになる？」

「ぜ、善処します。」

仕事の後、マニュアルの再説明……無駄話もやや含めてバーンズさんに手伝ってもらいながらも報告書をどうにかして作成することが出来た。

「送信はこのファイルで……よし、これで作業は終わりですね。」

あらかた作業を終わらせることが出来た僕はデータの送信後、コンソールの画面に表示されていたタブを複数個閉じてスタンバイ状態にした。

「ああ、一応は仕事が入った時は今回のような順序で事態を処理することになる。基本的なことでお節介かもしれないが忘れずにそういうこともしつかり頭に入れておいてくれ。それで効率が良くなって、お互いに悪いことは無いからな。」

「そうですね……まだ僕も慣れないですけど経験して直します。」

「そこまで硬くならなくても良いさ、分らないことがあれば直ぐに答えられるからな。人っていうのは一回慣れちゃうとそこからは早いもんだぜ。」

「はあ、慣れですか……」

「そう、慣れだ。まあ時としてその慣れが危険を呼ぶこともあるんだがな……いや？　こういうことは言わない方が良かったか、ははは。」

バーンズさんは右手で頭を少し掻きながら失笑気味に話してくれた。確かに慣れは怖くもあるね……

「ふう…… やっぱり俺は教官とかそういう教育育成は向いてないみたいだ、全く。」

「そ、そんなことないですよ！　バーンズさんは教えること、下手ではないと思いますよ。今回も以前も教えてもらったときには直ぐに違和感なく言葉が呑み込みましたから。こんな要領の悪い僕でもですか……」

「俺もノア君に言われたら信じたいとは思いますが…… 機械の判断に基本的に間違いはない。悔しくもあるがああいうのは人間の素質、適性なんかは生きてる人間よりも正確に判断出来るんだからな。君も適性確認テストは受けただろう？　あれは凄まじい精度だぜ。」

そう言われて自分が適性確認テストを受けた時のことを思い出した。確かにあのシステムは的確に僕の詳細を数値化していたような気がする。実際自分でも自覚できるほど得意だと思ったり下手だと思ったりするもの同士は数値の差が歴然だった。

「確かにそうですけど…… 機械でも弾き出せないデータはあるはずですよ、ちよっ

とした誤差だったりして。」

「…… そう信じたいもんだなあ。俺だって機械に自分の限界を勝手に決められるなんて、そいつは癪に障らない訳が無いぞ？」

それからバーンズさんは深いため息を吐くと席から立ち上がって軽く背伸びをした。

「ふう…… さて、仕事のせいでさっきは飲み物飲みそびれちまったな。今度こそ持つてくるぜ。」

そう言ううと待機室のドアを潜り抜けて行った。

「おい…… ouch に行つたはずだ！」

低い男の声が狭い路地に冷たく響く。どうやらまだあいつらを撒けていないみたいだ。

「くっ、無駄に追いかけることだけは得意なんだから……」

私は男たちに見つからないよう音を殺して歩き続けた。尚もやつらの会話が聞こえる。

「畜生あのアマ、金を払う前提で摘発せずに容認しておいてやると言ったものを……」

M. Sを舐めた真似しやがって。見つけたら身ぐるみ剥いで金だけは回収してやる。」
「ああ。あのパーツは市場（開市）で出せばそれなりに価値が出るタイプのやつだからな
とつ捕まえたら直ぐにばらすぞ。」

金のことしか頭にないような連中ね、呆れしかないわ……

「……扉はこの辺りだったかしら。」

私は何の変哲もない壁に手をかざしながら扉へのアクセスポイントを探す。ただで
さえミスが多いのにこれ以上のミスは……

「……！」

そうして手で扉のアクセスポイントを探しているとようやく発見することが出来た。
音を立てることなくスライドドアが開く。

「今度からは忘れないように、か。」

周りに追手M.Sが来ていないことをもう一度確認してから私は隠れ家に入った。

「……只今戻りました、現地の方は異常ありません。計画なら問題なく出来ます。」

建物に入った私は中に居る仲間偵察を行ってきた結果を伝えていた。ちなみにま
だこの組織に入ってから私は2回目の仕事だった。

「了解しました。その様に本部に伝えます。」

彼女の方はオペレーター職員に偽装する為に職員の制服スーツを身にまとっている。情報収集にはこれが良いのだとか。

「…… それとフィリンさん。今度からはあれに見つかからないようにしてくださいね。ここはかなり本部から離れている艦で賄賂に割けるほどの資金は受けられないんですから。」

「分かっているわ。今度からは気を付ける。」

そうして報告を終えた私は通信室から出て待機室に向かった。この場所は狭い場所だけれど機能面では困ることは無い。私達が使う武装も虚偽の報告を管理者にでつち上げてアークスの格納庫からせしめてきたものなの。

「お帰りフィリン、少し遅かったんじゃない？」

同じ部隊の仲間が声をかけてきた。やっぱ遅くなってしまったのかもしれない。

「…… 別に、偵察に手間取った訳じゃないわ。M・Sの連中が追いかけて来て来たのよ。」

「まあ、ここが見つかっていなければ特に拘らなければいいけど…… 今度からは気を付けてね。」

「そのつもりよ。それなりのリスクを承知でこつちだつてやつてるんだから。」
椅子に腰を掛けながらも話を続ける。

「それに、この後は作戦なんだからそつちも気を引き締めてよ。それこそ失敗は許されないんだから。」

「分かつてる。武器の準備も並行してやってるわ。」

そう言うのと彼女は手の加えたライフルを持ち上げて答えた。

「…… 今回の作戦、上手くいくと思う？」

私はそこで話を変えて不安に思っていることを聞いた。最初のうちは組織の思想を聞いて心を躍らせていたけれど、自分がそれを行うことを考えるとその気持ちも薄れてきて自信が無くなっていったんだ。

「恐らくは、ね。結局のところイレギュラーが起こらないとも言えないしそのところは完全には言えないけど成功はすると思う。」

彼女は何処か遠い場所を見つめながら言った。確かにイレギュラーが無ければか……

「まあ私達は思想を達成できればそれで良いのよ。C.R.S.Fの名の下に肅清をね。」

「…… 以上で作戦の指示は終了です。何かご意見があればどうぞ。」

「…… 大丈夫よ。」

あれからしばらく経った後、私の居る部隊は会議室で作戦の打ち合わせをしていた。

「そうですね、なら後はお伝えすることはありません。以上の通りフウリンカ部隊は作戦を的確に実行してください、以上です。」

作戦と言っても内容は簡単でキャスト以外の殺害、粛清を行うということ。

「……はあ。」

だけど私には出来ないようなことなのは明白だった。勿論のこと武器を、銃を味方に向けることなんて一度もしたことが無いし……ましてや一般員を殺すなんてことは私には出来そうにない。

「フイリン? どうかした?」

「いい、いや。何でもないので、気にしないで。」

確かに最初のうちは良い思想だと思ったわ。現にアークスの上層部、ひいては内部のシステムは腐敗し続けているし全体的な治安も悪くなる一方で……そういった環境で事態を変えようという改革の思想を聞いた時にはそれは素晴らしいと思った。でも、粛清……人殺しで解決するような過激なものだとはその時には気がつけなかった。

「……今更抜けるなんて言えないわ。」

誰も居なくなつた会議室でつい言葉が漏れた。今はまだどうにかなっているけれど近いうちに早く手を打たないとこのままじゃ……

『定刻です。急いで配置についでください。数分後に開始です。』

「……行かなくちゃ。」

色々と思考しようとしていたけれどそれはアナウンスによつて遮られてしまった。

重い金属音が建物の中に響く。シャッターがゆつくりと上がっていつて隙間から光が漏れてくる。

「もう最終確認は済ませてあるから余計なことは言わないわ、私が出たらそれに続いて来て。」

「分かったわ。」

全員が銃を正しい位置に構え直して態勢を整えた。レッグパーツのスラスターにも十分にエネルギーが行つてる。

「カウント、行くよ。10、9、8、7、6」

……作戦行動中、私は粛清をしない。防衛兵器を破壊するだけにすれば殺さなくとも済む。

「5、4、3」

私は、人殺しじゃない。

「2、1、0！スラスターを最大で吹かして、行くよっ！」

先頭の掛け声で脚部のスラスタの出力を最大にした。勢い良くエアが噴き出る。そうして出力が一定まで安定させてから私も続いて市街地の方へと向かっていった。

「確かこの辺りには防衛用のタレットが埋まっていたはず……」

警戒をしながらも事前に偵察しておいた防衛兵器を見つけては破壊していった。床下からせり出す仕掛けになってはいるが見つけにくいわけではない。

「旧式のがらくたの癖にまだ弾が撃ちだせるの……!?!」

勿論、防衛兵器であるからかどれだけ長い月日の間眠っていたとしてもその機能は正常に作動していた。撃ちだせる限りの弾を吐き出し続けている。

「なるべく直ぐに処理しないと……っ！」

焦りから注意が散漫になっていた私は遅れて背部から出てきたタレットに気が付くことが出来ずに数発弾を喰らってしまった。ボディパーツの装甲の一部が吹き飛んだ。

「このっ！」

銃では破壊するのに時間が掛かると判断した私は少ない手持ちの衝撃信管の手榴弾をタレットにすかさず投げ当てた。タレットにそれが当たると数秒もせずにそれなりの音を立てて爆発した。

「…… やられた。」

心なしか損傷を受けてから出力が落ちてきている気がする。

『非常事態発生中、非常事態発生中。このアナウンスが放送されている区画の一般員は退避して下さい。繰り返します……』

「システムの方もようやく異常を発見したようね。」

作戦が始まってから数10分程経過したところで区画に避難用のアナウンスが流れ始めた。このアナウンスが鳴るとM・Sが足早にやって来るはずだ。

「後残っている防衛兵器はあの辺りのはず……って、危ない！」

「！」

そうして残りのタレットを破壊しようと移動を続けていると突然黒い影が飛び込んできて、慌てて回避を行ったせいなのか私は態勢を崩して不時着してしまった。頭から地面に突っ込む形で床を転がった。地面と体のパーツが激しく削れあう音が火花とともに散る。

「っ……小さい破損が響いたわね。」

幸いキャストなお陰で怪我という怪我にはならなかった。ただ引き換えにパーツは擦り傷だらけだ。

「全く何が飛び出して来たの……？」

そうして自分の身が大丈夫かを手短に確認してからあの横切った黒い物は何なのか辺りを見回してみた、すると思つたよりも原因は直ぐ傍に居た。

「…… 一般員の子供か。」

その証拠に私が態勢を崩した場所で倒れ込んでいる。当たってはいないはずだから気絶だけだと思いたい。

「…… 普通のC・R・S・Fならここで殺すのよね。」

撃つわけではないけれど持っている銃を小さい男の子に向けた。銃口がその子の頭に向かう。

「…… 無理よ、こんななの。」

そこで嫌気がさした私はその辺りに銃を放って男の子に駆け寄った。傷は無いからせめて安全な所に……

「…… こんななら大丈夫ね。区画からも外れているし直ぐに見つけて貰えるだろうか。」

あれから男の子を抱えながら移動していた私はようやく安全な場所を見つけることが出来た。

「…… やっぱりこんなこと間違ってるよね。」

男の子を退避させることが出来た私は引き続き作戦に戻った。

「…… つ、やっぱり損傷が激しいみたい。」

けれどさつきからの出来事のせいで全体的なパーツの破損度が高くなっているのか、スラスターの出力が上手く安定しない。安定して浮上できなくて時々足を地面に擦ってしまおう。

「こんな時に何かなければ良いんだけど……」

そう思った瞬間、想像しうる最悪の事態が起きた。

「あつ！居たぞ！C・R・S・Fの連中の片割れだ！」

「……こんな時にM・Sに遭遇するなんて！くそつ！」

「全員撃てつ！殺しても構わん！早くしろ！」

気が付くのが遅くなってしまったけれど私は急いでM・Sが居る方とは逆の方向にスラスターを出来る限り一杯に吹かして逃げようとした。

「お願い、お願いだから当たらないで……っ！」

けれど出力が不十分なせいでまともに弾をよけることが出来なかった。

「ああああああああつ!!」

後方から雨のように弾丸が飛んでくる。装甲板はあつという間に貫通、もしくは碎け散ってその下にあるパーツをことごとく貫通していった。

「良いぞ！そのままぶつ殺しちまえ！弾ならいくらでもある、成果を一つでも何でも良いから出すんだ！」

その掛け声が聞こえると更に弾の勢いは増して行つた。パーツに力が入らなくなつて行く。ただ分かることは体が粉々になっていくこと。

「あ…… ああ……」

「…… もう良い！それ以上撃つても無駄弾になる！」

機能が生きている片方の耳が何とか声を聞き取つた。発砲を止めた……？

「おい、ちよつと確認してこい。確認が取れたらそいつはその辺に転がしておいて後の奴らも仕留めるぞ。」

「分かりました。」

何かのやり取りがあつた後、何かが近づいてきて私の体を転がした。

「おい、多分だけど死んでるよな？」

「俺あんまりキャストは詳しくないんだよ…… まあ、適当に死んでるとでも言つておけば良いだろ。」

もう一度転がされた。

「そうだな、あの人そういうの気にしなさそうだし。そうするか。」

そうしてそのやり取りが終わると足音は遠ざかっていつて、それと同時に私の意識も限界に近づいていた。

「……………」

それから数秒だったか、数分だったかは分からないけれど私は強制的に^{スリ}気絶した。

E—09 「搜索」

「はあ、はあ…… ああ、ノア君！そっちの方は一人でも見つかったか？」

「い、いえ！こっちの方もまだ見つけられてないですよ！」

お互いに息絶え絶えに現状の報告をした。

「畜生、相手はスラスターなんてもの艦内で使ってるのに俺たちは自分の足で移動かよ……」

バーンズさんは現場に急行してからずっとこんな調子で、今回はどうにも相手が悪かったみたいだ。僕も急行して来るまでの間に装甲車の無線で対象がどんなものなのかを聞いてはいたけれどこの間バーンズさんと一緒に交戦した相手の所属組織C・R・S・F、その組織に所属しているアークスが前回よりも更に計画的に事態を起こしているらしい。

「しようがないですよ……ここじゃ装甲車は足場が悪くて進めませんし、もし進めたとしてもあのスラスターの出力には勝てないですから。」

ちなみに最初のうちは装甲車で追跡をしようしたけれど防衛兵器の残骸は勿論のこと、もはや原型を留めていないような瓦礫が路上に点在していて装甲車が通ることが出

来なかったんだ。

「確かにそうだがな……まあ、今は文句を並べているときじゃないか。」

そう言うのとバーンズさんは頭を掻くのを止めてしつかりと銃のグリップを握り直していた。

「よし、後は俺がこの辺りを続けて警戒しておく。ノア君は隣の区画に行つて対象の搜索、それと方が一にだが生存者が居た場合に連絡を送るように頼む。あっちの方は被害の程度が低いようだからあまり危険も無いはずだ。」

バーンズさんは区画のある方を指で指しながら指示をしてくれた。確かにここから見える限りでは建物の損壊もそこまでは酷くなくて色々な意味で安全性は高そうだ。

「……あの、指示に不満は無いですけど……僕が安全な方の区画で良いんでしょうか。」

話を聞いているうちに気になったことを聞いてみた。指示の内容としてはおかしくはないけど……これだとバーンズさんが自ら危険な道を選んでいるようなものじゃないか。

「良いのさ。ノア君にはこの間随分と仕事してもらったからな、その分のお礼だ。」

「は、はあ……」

けれどバーンズさんは意図的にその選択をしていたようで特に問題は無さそうだった。

た。お礼とは言われたけどあの時はそんなに役に立てた気がしないんだけどな……

「それでも危険なことには変わりはないからな、もう一度気を引き締めておいてくれ。それじゃあまた後で合流だ！」

「分かりました！何かあれば連絡しますね！」

こうして僕は再びバーンズさんと別れて搜索作業に戻った。

「損害が少ないとはいえ酷い状況だな……煙も酷い。」

隣の区画に移動した僕は指示通りに対象と生存者の搜索をしていた。だけど普通にとはいかなくて煙が区画一帯に立ち込めているからか時々むせながらの搜索だったけどね。

「げほっ……流石に生存者、逃げ遅れた人は居ないよね。」

しばらくの間辛抱強く探していたけれど考えた通り人影は一つも確認できなかった。そうして取りあえず現状をバーンズさんに連絡をしようと思って立ち止まれる場所を探しているとさつきまでの場所とは打って変わって煙があまり充満していない場所に出たんだ。

「……ここは煙が少ないな。この区画の中でも特に被害が少なかったのか？」

辺りを見渡しながら状況を見ると瓦礫がほんの少し落ちていただけで装甲車で

も問題なく走れそうなくらいだ。

「こういう場所ならさつきとは違って人が居てもおかしくは無さそうな気がする……もう少し探してみるかな。」

それで、生存者の居る確率が上がったように感じた僕は連絡をせずに探索を続けると不意に声をかけられた。

「……おい！その歩いてるの！そう、お前だよ。悪いが少し確認したいことがある、良いな？」

「？分かりました。」

相手は僕とは違う部隊の所属のM・Sみたいだった。見てみると服装は同じだけど会ったことのない人、バーンズさんではない人だったから違う部隊の人なんだろうな。

「お前はこの辺りを搜索してるようだが……もしかして俺たちと同じで対象の搜索か？」

「はい、もう一人の方が隣の区画の搜索に当たっているので僕の方はこちらの方の搜索に当たっているとこですよ。」

そうして当たり障りないように質問に答えるとその人は少し短い時間渋い顔をした後、はつとしたような素振りを見せるとそれと同時に口を開いた。

「い、いや、そうだったか。えっと、そうだな……ああ、この辺りは既にうちの部隊

の方が搜索を行つてあるからお前はもうこの区画を探さなくて良いぞ。搜索中のところ悪いがな。」

何故だが慌てたような口調でそう伝えてきた。詳しくまで理由は分からないけど一体何が……？

「良くは分かりませんが…… そちらが言うのなら分かりました。じゃあ、こちらの方ももう一人の方と合流することになりますね。」

「…… ああ、そうするようにしてくれ。」

こうしてきまりが悪そうに挨拶をしたのを最後に気が付いた時には急ぎ足でとつととその場を去つてしまつていた。本当に何だつたんだろう……？

「取りあえずバーンズさんに連絡をして現状の報告でもするか……」

それで僕は端末を開いて今あつたことを報告しようとするけど今まで見ることが出来なかつたものをそこで見たんだ。

「……？人影に見えるけどさっきの人じゃないな、服の色が何となく分かるけどM・Sの制服の色じゃないし。」

一瞬さっきの人が居るのかと思つたけどその影は大人にしては小さすぎる形だった。だとしたら子供か？

「大人じゃないとしたら…… まずいな、早く行かないと！」

確認をするためにも僕はその影のある建物の軒下まで走っていった。

「……ふう、やっぱり小さい男の子じゃないか。道理で影が小さいと思つたら……」
そうして短い間走つて、その場所に着いた僕はあの影の正体を知ることが出来た。まあ、やっぱり小さい男の子だったんだけどね。

「怪我はないみたいだけど気絶してるな。よっぽどでも強い衝撃を受けたのか？」

男の子に怪我は無くても脈も正常、息もはつきりとしていた。本当に最初の時かそれ以外に何かの反動で頭に強い衝撃が加わつたんだろう。

「……？この辺りの道だけやけに擦り傷が多いな。こういう擦り傷は車両とかじゃ付かないはずなんだけどな……不思議だ。」

確かに良く足元を見てみるとそこら中何か金属か何か硬いもので地面を擦つたような跡が付いていたんだ。しかも塗料？も一緒に？がれていた。

「他の道にある傷はどれも古い物だから大して目立たない程度になっているけど、この傷だけは何だか新しいな。」

普通なら上から更に削れたりゴミが入り込んだりして案外道路の傷は古ければ古いほど目立たなくなるはずなんだけど……この傷だけはまだ最近できたばかり、ついさつき出来たばかりにも見える。

「もしかしてキャストのスラスト移動の時に地面を擦ったのかな……？でも、スラストを使うなら地面からはしっかりと離れるはずだし地面に当たるとは思わないか。」

ちなみに傷は道に沿って続いていて何かを引きずったようになっていた。傷も次第に深くなっている？ようで奥に行けば行くほど傷跡が深くなっているって聞いた。

「…… 辿っていけば対象を見つけることが出来るかもしれないな、幸い傷は劣化していないし見つけるのも難しくないかも。」

それで対象を発見することを優先することにした僕は男の子を一旦建物の路地に安置させて安全を確認してからその傷を追うことにした。

「ごめんね、この後直ぐに迎えに来るから…… って気絶している子に何言ってるんだ。」

生存者を送り届けるのは重要だけれどもより安全に運び出すには対象を鎮圧する方が先になる。その方が被害も少なくなつて人命も多く待てる事が出来る…… ってマニュアルに書いてあつたけど確かに対象を片付けてからの方が良いのかもしれない。

「よし、そうと決まったら早めに行動しなきゃな。男の子のことも心配だしな……」

この後の行動を決めた僕は早速傷跡を頼りに道を進んでいくことにした。傷はさつき見た通り塗料と一緒に剥がれ落ちていることと傷が大きく深くなっているから追うのは簡単だった。

「…… 最悪の時にはこの間みたいに戦闘になるんだよね。」

傷跡を追いながらもその様なことが頭を過った。確かにこの傷を追っていけば対象に遭遇することが出来るかもしれない。けど、それはつまり相手が敵対しているということだから交戦になるのは間違いないか。

「…… はあ。大丈夫、大丈夫だ。僕にも銃はあるんだから落ち着いて冷静に対処すれば僕だってバーンズさんみたいに出来るはずだ。」

あの時は慣れていなかったと言ってしまったえばそれまでだけど冷静でなかったと見ると裏を返せば冷静に対処すれば僕にでもバーンズさんのようにやりようはあるつてことだ。

「まあ話し合いでどうにか出来るのなら良いんだけどね……」

結局は思考が屁理屈に落ち着いてしまいなながらも僕は引き続き傷跡を追い続けた。

「何だかこの辺りは臭いが強いな…… 何だろうこれ？」

あれから引き続けて傷を追っていた僕は臭いが強い場所に来た。炎の燃えた後のような、もしくはガスが燃えた後みたいな臭いがする。

「げほっ、げほっ…… うう、折角煙からおさらば出来たと思っていたのに……」

臭いの激しさからついむせてしまいなながらも辺りを見渡して対象が潜伏していない

かどうか確認しながら一歩一歩進んでいく。そうすると瓦礫の少ない道にそれなりに大きな黒い塊が見えた。

「?この辺りは瓦礫が少ないはずだけどあの大ききで色も黒なんて言うのはまだ見てないな。」

ここまで僕が歩きながら見ていた瓦礫や残骸は大抵塗装が?がれてしまっていて中身が?き出しな状態のせいで濃い色の瓦礫?が落ちているのは珍しかった。

「黒色:.. もしかしてさつきまで傷に落ちていた黒色の塗装と同じ物かな?」

道に落ちていた塗料と同じ色に見えたのでそう思ったんだ。だとしたらあれは武器か何か何だろうか。そうだとするなら中々に大きいサイズだな。ライフル:.. には大きすぎるしランチャーには小さすぎるか。

「現場の物品は後で回収するんだし確認位はしておこうかな。」

そうして確認をするために僕はその黒い塊に近づいていった、けれど。

「:..?」

けれどそれは武器なんかじゃなかったんだ。形状から見てそうだと分かるんだけどどつちかかって言えばキャストの人向けに作られているパーツにも見えなくはない。

「一体これは何なんだ:..」

そうして気になった僕はそれを今まで見ていなかった逆側から見てみることにした。

「……！これはただのパーツなんかじゃない、キャストの人じゃないか！」

見てみるとそこには何と人の顔があつたんだ。だけど目は閉じていて……この間バーンズさんに教えてもらったけどこれがキャストに備わっている緊急用の維持装置なのかな。

「すみません大丈夫ですか！」

早速僕はそのキャストの女の人の傍に座ると自分の出来る限りの応急処置を施すことにした。敵だとか味方だとか、今だけはそういうことは考えたくない。

「維持装置って、ボディには首が繋がったままだから大丈夫か……他の部分は酷いな、原型なんてほとんどないぞ。」

基本的にキャストの人はその硬い装甲板のお陰で滅多に怪我を負うことなく無いです。ただ、この人は文字通り蜂の巣にされてしまっているような状況だった。

「……この人が組織の人間だとするならこれをしたのは僕とバーンズさん以外のM・Sか。」

ふとさつきすれ違ったM・Sの男性の姿が脳裏を過った。

「僕も似たようなことをしてしまつたから強く言い出すことは出来ないけど、ここまでやる必要は無いんじゃないか？武器も殺すことを目的に作られていないんだからせめて無力化程度が良いんじゃないか……」

彼女のパーツの欠損部分を携帯していた包帯で覆い隠しながらもそう思った。何処かの言葉で何かに対抗するためにはそれと同じものをぶつけなければ勝つことはできないと言われたようにあの組織C.R.S.Fのように過激な思想を持つているところには同じように過激でなければ対抗することは出来ないだろうか。

「……よし、これぐらい覆っておけばこれ以上壊れることも無いだろ。取りあえず対象を見つかることもできたし生存者も一人、現状を報告しないと。」

そうして僕は端末を起動してバーンズさんに通信を飛ばした。

『ノア君、さっき連絡で話していた少年の方だが俺の方で保護しておいた。怪我についてだが外側から見る限りでは傷は無いが体の中までは分からん。取りあえず今からメディカルセンターまで届けてくるからよ今回の仕事から駐在所に戻るときにはコンベアを使って戻るようにしてくれ。費用は俺が押さえておくから気にしないでくれよ。』

「分かりました、取りあえず駐在所まで戻りますね。」

バーンズさんと連絡の取れた僕は先程発見した生存者と対象の内の一人をどうするべきかを話し合つて、結果としては男の子をバーンズさんが受け持つことになつて僕の方がこの対象、キャストの女の人を受け持つことになつた。

『そのキャストは万が一スリープから目覚めたとしても暴れることは勿論逃げることも出来ないとは思いますがそれなりに計画性のあることをしでかしてくれた連中の一人だ。駐在所に運ぶ時にも到着してからも気を抜かないようにな。まあ到着してからそのキャストの対応については説明する、それじゃあまた後でな。』

そこで電子音が短く鳴って通信は終了した。

「……よし、気を付けて戻ろう。」

そうして僕は背中にキャストの人を背負う形で移動をして駐在所まで向かうことにした。

E-10 「苦悶」

「うう……手足のパーツが無いからって甘く考えすぎちゃったな。実際に背負うとこんなにも重いなんて……」

以前の仕事の時に部分部分のパーツを回収して応援車両に乗せたことはあったけどこうして背中に背負い続けると段々と重さを感じるようになってきて最後には苦しい状況になるんだな……

「まあ、この女の人の運搬はバーンズさんから割り当てられた僕の仕事だしここで投げ出したり文句を言うなんてこと出来ないか。バーンズさんには色々教えてもらっているしこちらとしてもお礼したい位なんだけどね、いつかできないかなあ。」

そんなこんなで他のことを考え始めた時には既に重さのことなんてどうでも良くなっていた。まあ、こういう時は後々からどつと疲れが来るんだけどね……

「……スリープ状態なのは分かってはいるけどいざ自分の背中に背負っているって考えるとやっぱり怖いな。」

ふと意識が女の人に向いた僕はそこまでじっくりとではないけれど観察感覚でその人の顔を覗いた。心臓の鼓動は勿論聞こえないし呼吸で肺が膨らんで肋骨が上下する

ことも無いから傍から見ると死体にしか見えない、だけどこれで生きているって言うんだからキャストっていうのは本当に不思議だな。僕はキャストではないけど興味はあるからそういったことも勉強してみるのも良いかもしれない。

「キャストのことについて詳しく知れば今までみたいながあつても攻撃をするときに効率良く対処することに生かせるのかも知れないし……そうだ、今度バーンズさんにも掛け合ってみよう。」

そうしてあれこれ考えながらも現場から更に離れた区画に移動して、そこから一番近い位置にあるコンベアに通りを幾つか歩いて着くことが出来た。普段通りのコンベアが見える。

「そういえば誰かと一緒にコンベアに乗ることって経験したことが無いな……まあ、背中に背負っているから実際は一人か。」

到着していたコンベアのシートベルトを締めながらも口から言葉が漏れる。時間帯というよりかは避難指示が解除されていなくて人が少なくて良かった。あんまり目についても困るしね……

『…… 認証完了、ロックを解除します。場所を指定してください。』

「駐在所の番号で……ここだな。」

普段通りカードを挿入してから行き先を指定して、浅いクッション材のシートに腰を

下ろした。

「艦の中つてもつとこう、殺風景で味気ない景色が続いていると思ひ込んでいたけど……レピカちゃんの言う通り同じ景色は無いっていうのはあながち間違いないじゃないかもな、少しだけ綺麗になって景色が見える気がするよ。」

コンベアの上から見える区画の建物が普段よりも違つて見える。もう何回も見て見飽きたぐらいなのにね。

「ふう……時間が取れるようになったら連絡でも返しておかないとな、折角交換したんだし会話の内容の一つでも用意しておいた方が良いか……」

そうしてしばらくの間呆けながらも流れる景色に意識を取られていた。けれど、その落ち着いた時間は突然聞いたことのない甲高い音、電子音によつて妨げられたんだ。僕は驚いて席からバランスを崩しそうになった。

「な、何だ!?! 僕の端末の音じゃないぞ!」

端末を急いで確認しても何も通知は入っていなかった。だとしたら何だつて言うんだ?
だ?

『本体の精神状態、体力状態ともに基準値にまでの回復を確認。応急処置スリープを解除します。』

「スリープの解除……不味い！こんなところで目が覚めたりなんかしたら暴れるに決まってるじゃないか！」

『カウント5で復帰します。ショックまで5、4、3、2、1……』

突然の解除警告に動揺してどうしたら良いのか考える間もなくカウントが始まって、気が付いた時には既に読み上げは終わっていた。合成音声の読み上げが終わると小さい電気の弾ける音が飛んだ。

「あっ……… ああ………」

「駄目だっ！……… って、え？」

何が起こるのかわからなくて、それで身構えていたけれど……聞こえてきたのは爆発音でも、怒号でもなく呻き声にも似た女の人の声だった。

「………」

「え、えつと…… 大丈夫ですか？」

答えを聞いても返ってくることは無くて、ただそのキャストの女性は黙って僕の目を真つすぐに見つめるだけだった。ちなみにその顔からは何も感情を感じることが出来なくて…… また少しの間、間隔が空いた。

「……… 殺して。」

「へっ？」

それからしばらくの間コンベアの駆動音だけが響いていたんだけど、突然なことに女の人の方から口を開いたんだ。けれどその言葉は聞き返して間違っていないか確認したいような言葉だった。殺して……？

「……殺して……殺せ……殺せっ!!」

「うわっ!ちよつと、危ないですよ!落ちたらどうするんですか!」

その言葉に頭が追いつかなくなっていると女の人は段々と言葉の勢いが強くなってきたて上半身だけで暴れだしてしまったんだ。

「落ちる……?」

「そうですね、ここはコンベアの上ですよ!?分かったら着くまで大人しくして下さい!話は後からでも聞きますから!」

「……分かったわ。」

それで最初の内はその人が興奮してしまっていて危ないところだったけど場所が場所なお陰で今すぐに暴れられることは無くなったみたいだ。動くことが無くなってバランスを取りやすくなった。取りあえず大丈夫か……

「……」

「……」

取り合えず何か問題に繋がることは無かったけれどその代わりにお互いに何も言う

ことなく到着のアナウンスが流れる時まで気まずい時間が流れた。

「……すみません、今降ろしますね。少し危ないですよ。」

「……」

コンベアで現場から駐在所にまで戻ってくるのが何とか出来た僕は普段通りの流れて待機室に入って、それから僕とバーンズさんが使っていない空いている椅子に女の人を座らせることにした。今はもうスリープから目覚めてはいるけれど今の体の状態じゃ出来ることなんて無いだろうからね……

それで、その人に害が出ないようにしながらゆっくりと座らせることが出来た僕は自分も椅子に座ってバーンズさんからの連絡をひたすらに待つことにした。何だか、最初があまりにもあれだったからね……今更普通の人と会話する時みたいに話を切り込んでいくなんてとてもじゃないけど出来ないよ。

「……ふう。」

それからは精製水を飲みながら端末に通知が入らないかどうか待っているのと特に何の前触れもなくバーンズさんから連絡が入った。端末の画面に通知を知らせるマークが出て、電子音が小さく鳴った。すかさず連絡を受け取ると通信接続時のノイズが数秒だけ響く。

「はい、こちらノアです。」

『バーンズだ。こつちの方は要件が取りあえず終わった感じだな。少年の方も特に重症な部分は無くて簡単に治療をしたら数時間後には帰れるらしいぞ。』

「そうですか……」

あの男の子には特に何もなく無事だったらしい。良かった……内臓に何かダメメージがないか心配だったからね。

「……ねえ、その男の子って建物に寝かせてあつた子？」

「へ？」

バーンズさんと連絡を取り合っていると女の人が再び口を開いたんだ。まさか男の子について聞いてくるなんて思っても居なかつたからちよつと動揺してしまつた。

「……そうですよ。被害の激しい区画から隣の区画に移動をして捜索の最中に見つけたんです。確かに建物の軒下に居ましたからその子に間違いないはずです。」

「……分かつた。」

『おいノア君。さつきから声が聞こえないがそつちで何かあつたか？』

女の人と会話をしているとバーンズさんの声が聞こえてきてはつと現実に戻つた。

「い、いえ、何でもありません。それで、男の子の方は分かりましたけどこちらの方はどうしたら良いですか？取りあえず椅子には座らせておきました。」

その人を見ながらバーンズさんに話を聞く。

『うーん…… 実のところこういった事はあんまり経験が無くてうろ覚えなところもあるんだが……』

「は、はあ……」

『まあ、ノア君だけだとやっぱり限界があるだろうから本格的なことは俺が到着してからにしよう。それまでの間だが軽くそいつについて質疑応答してくれ。』

「質疑応答ですか？」

『ああ、その名前や所属している組織について…… それから今回の事を何故起こしたかについてだな。聞ける範囲で構わないから聞き出せる限り話をしておいてくれ。』

「分かりました。」

さつきから一度もまともな会話はしていないけど僕に出来るかな……

『それじゃ俺は直ぐに戻るぜ。道も空いてるからそれまで頼む。』
そう言うのとそれを最後に通信が切れた。端末の画面に通信履歴が表示される。

「…… やるしかないか。」

女の人の方を横目で見ながら覚悟を決めた。

「…… 僕は強制はしません。ですけど、話してもらえることがあればここで話して欲

しいです。」

それがその人に対しての僕から発した言葉だった。強制だ、何て言ったら余計に相手を刺激してしまうだけだろうと自分で考えた結果だ。

「……」

「…… そうですね。短い間ですが…… しばらくの間ここに居てもらいますから一応教えておきます。先程の通信で聞こえていたかも知れませんが僕はノアです、宜しくお願いします。」

名前を名乗らないのも何かおかしいと思って僕は自分の名前をまず女の人に伝えた。こうした方が警戒心を持たれない…… のかな。

「…… 私はファイリン、ファイリンよ。」

あんまり上手くいくとは思わなかったけど、取りあえず名前だけ聞くことが出来た。ファイリン、珍しい名前だな……

「ありがとうございます。では、ファイリンさんに簡単にお聞きしていきますね。」

そう言うときファイリンさんは一度視線を外して下を向いた後、何かを悟ったように再び顔を上げて視線を戻してくれた。

「…… 構わないわ。こんな状態で抵抗は無駄なもの。」

「…… 分かりました。」

僕の方もしっかりと目線を合わせる。人と目を合わせて話をするのは苦手だけど……これは仕事、仕事なんだ。贅沢なんて、自分の都合なんて考えてはいられない。

「では、貴方の所属している組織について教えてください。アークスではなくて非公式ののです。」

「…… C. R. S. Fのことかしら。」

少し間を開けながらもフィリンさんは的確に返答してくれた。悪いとは思うけれど状況が状況だからね……

「そう、C. R. S. Fですか。分かりました。では、その組織についてももう少し教えてもらえませんか？これも良ければですけど……」

「…… 最悪な所よ、もう二度と戻りたくないわ。」

「最悪なところ……？」

そう返すとフィリンさんは諦めたような、それでいて疲れ切ったような声色で話を続けてくれた。

「…… C. R. S. Fは腐りきったアークスの内部構造に対して抗議を行って……改善を求めようというキャストの小規模な集まりから始まったの。だけど、最近の状態を見れば分かると思うけどもう今のC. R. S. Fには原型は無いわ。ただ無差別に人殺しをする過激派のテロ組織でしかないわ。」

アークス内部の改革……それが思想？だったのか。

「キャスト以外の手術を受けていない種族の奴、ヒューマン、ニューマン、デューマン、これらの種族が腐っている部分に多く居ることが何処かで分かった、なんてことを組織全体に浸透させたのが居るのよ……」

内容だけを聞けば偏見のような考えだつていうのに……それでも信じなければいけない程の何かがあるんだろうか。フィリンさんの話は続く。

「……それで、C. R. S. Fは最初の頃とは考えが全く変わってしまったけれど過激派として今も存在してる。組織としてはまだ小規模みたいだね。」

「組織としては小規模つて……もしかしてこの艦フェルグート以外にも組織があるんですか？」

「組織の通信を聞く限りではそのようよ、だけど確信は無いわ……私だつて組織の中心人物に会ったことが無いんだから……」

どうやら僕が知っていることはまだ一部分だけみたいだな……

「……でも、もう私は組織から離れるわ。人殺しなんて私は嫌だから……現にあと少しで一人の人間に危害を加えてしまうところだったしね。」

あの男の子のことだろうか、確かに気絶する程のことがあったようだからきつとフィリンさんが何かしてしまつたんだろう。

「それに、こんな状態じゃアークスとしても駄目ね……」

フィリンさんは今は無い手足を目で見つめた後、何処でもない虚空を見つめていた。

「組織にも、アークスにも私はもう戻れないわ。」

「えっ……？」

そう言うのと彼女は何もない場所を見るのをやめて僕の目をしっかりと見つめてきたんだ。人工の綺麗な黒い瞳がはつきりと捉えてくる。

「だから、私をここで殺して？」

「!？」

その瞬間、フィリンさんは上半身だけで椅子から転がり落ちて……僕の足元に来た。

「この、貴方の銃で私を殺して。そうすればもう終わりに出来るの。」

フィリンさんの視線は僕の腰の拳銃に向いていた。そんなこと……

「銃ぐらい撃てるでしょう……？」

「う、撃てますけど僕には貴方を撃つ理由が無いですよ！」

僕は息が詰まりそうになりながらも言葉を出した。

「……理由ならあるわ、M・Sは治安維持が目的なんですよ？なら、人殺しを……子供を手にかけてようとした私を撃つ理由になる。だから、早く……！」

「そんなのって、自分勝手ですよ！駄目ですよ！」

「ああ、そうだな。そいつは自分勝手な話だな。」

その時、待機室の入り口から声が聞こえて来たんだ。

「それに、お前が死ぬのにはまだ早い。しっかりと話してもらおうぞ。」

「バーンズさん……？」

そう言うとバーンズさんは普段とは違った顔つきで部屋の中へ入ってきた。

E—11 「移送」

「……色々と考えた末に仕方が無く死を選んで、それで死ぬってんなら誰も、俺も止めはしない。」

床に転がっていたフィリンさんを両手で持ち上げると僕と同じように元の座っていた椅子に戻した。その時にフィリンさんの顔が少しだけ見えただけだ…… さつきまでの表情とは打って変わって唾然とした顔になっていた。

「だが、それが……それが許されるのはそいつが何もしていなかった場合に限る。」
バーンズさんがそう言うのとフィリンさんの顔に手を持って行って、僕から見て左の頬に手のひらを当てた。フィリンさんは依然と訳が分からないと言った顔だった。

「バーンズさん一体何を……」

何をしようとしているのか。それが気になって仕方が無くなっていた僕は当の本人、バーンズさんに聞こうとした。だけど、僕が答えを聞くまでも無くそれは突然目の前で起こったんだ。

「……っ！」

その瞬間、人の肌を手で打つ乾いた音が無機質な部屋に響いた。

「……少しはこれで目が覚めたか。」

「バーンズさん！やり過ぎですよ！」

欠損の状態からして今のフィリンさんはただでさえ限界に近い状態だ。そんな状態で何を……

「ノア君。」

「へっ？」

自然と言葉が出てしまった僕に対してバーンズさんは落ち着いた顔で僕の名前を呼んだ。そういつた顔は今ままで見たことが無かった。

「少し静かにしていてももらえるか？」

「……分かりました。」

バーンズさんが詳細をこの短い間に言ったわけじゃないけど、僕にはその場の雰囲気から察することが出来た。ただ、悪意のある感情では無くて少しの優しさを含んだような忠告に近かったように感じる。そうしてバーンズさんは向きを変えてフィリンさんの方へ向き直った。

「……もう一度言うが、目は覚めたか？」

「……」

「……そうか。」

最初にフィリンさんの頬を打った時と同じ文言を言っただけから何かを感じたバーンズさんはもう一度フィリンさんを打った。さつきよりも大きめに部屋に乾いた音が響く。

「……痛いじゃないの。」

するとフィリンさんはそこまで閉じていた口を開いてか細くそう答えた。いくらキャストだと言ってもその中身は人と同じだ、精神的な限界もあるだろうに……

「それはそうだろう？ 痛くするようにしているんだからな。」

そう言うときバーンズさんは一旦その場から離れてから自分の椅子に座ってフィリンさんと目線が合うようにし、話を続けた。

「……それで、目は覚めたか？」

「とつくに覚めてるわよ……」

「そうか、なら話を続けるぞ。」

そこでバーンズさんは自分の端末を取り出してある画面を表示させるとフィリンさんにそれを見せた。何の画面だろう。

「これが見えるか？」

「……何の数字よ。」

「これは今回の暴動での死傷者の数だ。メディカルセンターからの正式な情報で間違

「はいない。」

その言葉を聞くまでは冷静だったフィリンさんの表情に曇りが見えてきた。

「こんなに、こんなに酷かったの……？」

「ああ、これほどの規模の事態は中々に起こらないからな。俺も実際の被害状況を知って驚いたさ。」

バーンズさんは端末をジャケットにしまいながら話を続ける。

「それで、今更言うことでもないがお前はその当事者の内の一人だ。どうせこの内の何人かはお前がやったんだろう？」

「ち、違うわ！」

「嘘を言うな！現場に居た人間からはお前の目撃証言を聞いているんだぞ！」

バーンズさんは言葉を強めてフィリンさんに言い放った。

「現場から回収したあの少年からも話が聞けたが…… あんたが吹き飛ばしたみたいじゃないか？ええ？」

「くっ……」

「子供に手を出していない場所を見れば少しは良心があるように感じるが、人殺しは正當にならんで。それがお前らの思想だか何だかの為だとしてもだ！」

「バーンズさん！その人は誰も殺してなんかいいですよ！」

人殺しという言葉聞いて今までは黙っていた僕だけどバーンズさんに口を出した。僕は話を聞いたから分かるけど、バーンズさんは何も知らないんだ！フィリンさんはそんな人じゃないって……

「ノア君……それはどういうことだ？」

その言葉を聞いて一瞬はつとしたバーンズさんはそれまでの勢いから一転して驚いたような風貌だった。そこで僕はバーンズさんが来るまでの間にフィリンさんから質疑応答で聞くことが出来たことを短く説明した。

「……そんなことがあったんだな。」

「はい。組織のこともそうですがフィリンさんは後に引くこともできずに仕方が無く参加したんですよ、今回の暴動にですか。」

僕の説明はお世辞にも上手いとは言えないものだったけれどバーンズさんからの理解は得られたようで信用してもらうことが出来た。

「組織、C. R. S. Fは現在暴走状態にあると言っても良いな。それが本当のことだとすればこのままだと最悪の事態になりかねないぞ。」

頭に手をやりながらバーンズさんは悩んでいるようだった。確かに暴走状態にあるのは分かるけれどそれが原因で最悪の事態が起こるのか？

「最悪の事態？それって一体……」

「……今までは特に思想を持たずに何かしらの個人的な要因で暴動を起こしたりして事態の発生に繋がっていた。だから計画性も無く不定期だからこそ鎮圧することも簡単だったんだ。」

視線をフィリンさんの方から僕の方へ変えてから説明をしてくれた。

「だが、今回の事態はそれには当てはまらない。それなりの規模であつて尚且つ計画性のある行動だ、今のM・Sのような組織にそういった規模のものを鎮圧する力は無いに等しくてな。それで鎮圧が出来ずにその組織C_RS_Fにアークスのシステムの全てが乗っ取られる……地獄が始まるぞ。」

確かにM・Sはあくまでも治安維持が目的の組織で規模の大き過ぎる事態には対処することが出来ない。武装なんかを見ればその差は歴然だ……

「じゃ、じゃあ、僕らはどうすれば良いんです？」

「……上の判断が下りるまで待機するしかない。今はそれしかできない……残念だが俺達も組織に縛られている人間だからな。」

「……そうですか。」

どうしようも出来ない、やるせない気持ちを味わいながらも今はただ歯を食いしばるしかなかった。

「よし、取りあえず移送の手続きは出来たな。」

「フィリンさん、無事に治るんですかね……」

「大丈夫だとは思うがな…… まあ、今回の処罰についてはじきに判断が出るだろ。」

「はあ…… 重い処罰じゃないと良いんですけどね。」

取りあえずフィリンさんから一連の話を聞いた後、体の状態を考えてメディカルセンタ―に移送することになった。処罰に関しては治療が終わってから下されるらしい。

「処罰は重くない方が良いつて…… ノア君の知り合いか何かだったか？」

「いや、知り合いじゃないですよ。今回初めてお会いしましたし。」

「じゃあどうしてそんなことを？ 別に関係の無いことじゃないか。」

バーンズさんが不思議そうに聞いてきた。

「…… あの人、優しい人だと思つてですね。実際今回のことも成り行きでなつてしまつただけでそこにはフィリンさんの意思があつた訳じゃないですし被害を抑えようとも考えていたわけですから重くなくとも良いなつて、それでですか。」

その場で実際に見ていたわけじゃないから確実にはないけどフィリンさんから聞いた話からはとてもじゃないけど人を殺すような人じゃないと感じることが出来て、優しい人だと思つたんだ。

「確かにそうかもしれないな…… まあ、処罰が下りた後は連絡が付くだろうし話してみるのも良いんじゃないか？そこまで気になるならか。」

「いや、そんな…… それほどまでのことじゃないですよ。ちよつと気にかかっただけですから。」

優しい人だと感じただけで連絡を取りたいわけでもか……

「そうか…… まあ、今のうちに休んでおいてくれよ次にいつ事態が起こるか分かったことじゃないからな。」

「そうですね。休んでおきます。」

それで休もうとして椅子にもたれているとバーンズさんが忘れかけていたことを言った。

「…… と思ったが報告書の作成があつたな。取りあえず文章の作成を終えてから後のことは考えるか。」

「ほ、報告書を忘れてたな……」

そうして僕とバーンズさんはコンソールに向き直って書類の作成をし始めた。

「…… あの人、優しい人だったな。」

移送車両の窓から見える景色を見ながらそんなことが口から漏れた。

「確かノアって言ってたわね、M・Sにしては若すぎるくらいだけど…… 何か理由があるのかしら。」

基本的にM・Sは元アークスが何か問題を起こしたとき。もしくは何か問題を抱えていた時に異動させられるところだから比較的年齢層は高めなの。

「それともアークスに所属することなくM・Sに所属した……？ そんなことないわよね。」

色々なことを考慮すれば最初からM・Sに所属したとしか考えられないけど、そんなことってあるの……？

「フィリンさん、もうすぐ着きますよ。」

「…… ああ、ごめんなさい。ちよっと考え事をしていたわ。」

考え事をしている移送車の助手席に座っていたナースに声を掛けられて、そこでようやく意識が現実に戻った。

「欠損しているパーツの方の接続部分は大丈夫ですか？ それでまだ生きている部分があれば修理は直ぐに出来ますから。」

「ちよっと待って、少し確認するわ。」

パーツの接続部でまだ生きている場所……左手と右足、耳だけか。

「……ほとんど駄目みたいね。時間が掛かりそうかしら？」

「そうですね……生きていない部分には既存のパーツが直ぐに取り付けられないので応急処置用のパーツの取り付けになりますしそれにも時間が掛かりますから……」

「そう……」

改めて自分の体を見てみると銃弾で貫通していたりへこんでいたりしている。ヘッドパーツにダメージが無くて本当に良かったわ……

「……そういえば貴方は私のことは怖くないの？」

「へ？」

「一応これでも人殺しに加担したような屑よ……」

さつきから普通に会話の出来ているナースに少し違和感を感じた私は思い切って聞いてみた。

「……移送される際にフィリンさんは悪い方ではないと連絡のあったM・Sの方からお聞きしていましたから、大丈夫です。」

「そんなことまで……本当に優しいんだから。」

あの人、ノアって言ったかしら。優しいのは良いけど何時か騙されないと良いのだけ
れど……

「フィリンさん、到着しましたよ。今降ろすので少しの間辛抱してくださいね！」
「辛抱も何も動けないわよ……」

車両が停止するとナースは車から降りて他のナースと一緒に私が乗せられた担架を運んで行った。

「……取りあえず腕の取り付けはこれで終わりです。右腕と左腕が違うパーツなので動かし辛いとは思いますがしばらくは我慢してくださいね。」

「四肢が全部無いよりは良いわ……ありがとう。」

「良いんですよ、仕事なんですから！」

あれから施設に運び込まれた私はすぐさま処置を受けることになって今日のところは腕の修理だけは大体終わった。まあ、右腕は代替品だから完全ではないのだけれど。

「……そういうえば貴方の名前をまだ聞いていなかったわね。良ければ教えて貰える？
次にまたこうなったら担当して欲しいものだから……」

「私の名前ですか？……り、リエって言います、宜しくです！」

「リエさんね、これから何かあれば。」

「は、はいっ、こちらこそです。」

そうして私はまだ取り付けたばかりの右手で握手を交わした。

「…… ちなみに完全に修理が完了するまでには大体どれぐらい掛かりそう？ 見当が付けばだけど。」

「難しいですが3日程あれば完璧にだとは思いますが。そこまで重症ではありませんでしたから…… ってシステムの方が、ですか。」

「そう、教えてくれてありがとう。」

3日、処罰が下るまで後3日か。戻れないのは覚悟しているけどどうなることか…… では、私はまだ仕事があるので行きますね。また時間が空けば見に来ますから！ それでは！」

「分かったわ。」

そう言うとりエは病室から出て行った。

「…… 綺麗な景色ね。」

そして、しばらくの間何もすることが無くなった私はただ窓を見つめて外の景色を眺めることに専念した。

E—12 「連絡」

「……はあ。」

暇つぶしにコンソールで調べ物を続けていたけれど……今のところ知りたいと思うようなことが無くなってしまつてその作業をする手も止まつていた。

「飲み物でも取つて来よう……」

そう考えた僕は机のコンソールの電源を一旦落としてから椅子を立ち上がった。朝駐在所に来てからというものずつと椅子に座り続けていたせいか立ち上がると少しだけ目眩がした。

「うっ、酷いな……」

少しだけ吐き気を覚えながらも取りあえず息を深く吸つてから気分を少し落ち着かせた。

「こういうのを貧血とかつて言つたっけ……おかしいな、既定の食事はしっかり摂つているはずなのに体調不良になるなんて。」

誰も居なくなつた部屋で部屋で僕は誰かに言い聞かせるように文句を呟いた。ちなみにバーンズさんは数時間前に入った連絡で現場に向かつてここに居るのは僕だ

けだった。

「食べている物じゃなくて別の要因があったりして……また調べなきゃいけないことが増えたな。」

C・R・S・Fの暴動からかなりの時間が経ったけれどあの組織は次の行動を直ぐには起こさないのか数日ほど経過していた。普段ならあまり大々的に報じられたりはないけれどあの暴動は珍しくかなり大きく広まったようで艦内は一般員もアークスも含めてとても警戒心が高くなってきているみたいだ。それで、そのことが問題でちよつとしたいざこぎに発展してしまつてM・Sが呼び出される……こういうことが最近は多くなつてきているかな。ちなみにバーンズさんはそのタイプの問題で現場に行つてい

る。

「それにしても大きな問題が起こらないのは良いけれどこうやつて意味もなく小さい問題が頻発するようになるのはあんまりだな。いざという時に動けないじゃないか。現にバーンズさんが居ないしこんな状態で事態が起こつたら……なんて考えたら駄目だな。」

そうして考え事をしながらも僕は駐在所の直ぐ横にある自販機で普段の精製水を買つて、取り出し口から商品を取り出していた。

『……』

「……？なんだろう、一瞬だけノイズが聞こえたような。」

キャップを開けて精製水に口をつけようとした時、無線が入った時に聞こえる独特なノイズが聞こえてきた。

「もしかしてバーンズさんから連絡、だったとしたらしつかりと受信できているはずか。ここなら電波は悪くないはずだし……」

基本的に僕に入る連絡はバーンズさんからしか入らないからそれ以外の人物からっていうのは普通なら無いはずなんだけどね、ここなら電波が妨害されるような場所じゃないし上手く受信できないなんてはずは無い。でも、だとしたら……？

「……取りあえずあつちで何も起きていないか一応連絡しておくかな。」

それで僕はバーンズさんに向かって連絡を飛ばした。するといつもの通り無線は普通に使うことが出来た。接続時のあの音が聞こえる。

『どうしたノア君、いきなり無線なんて飛ばして……何かあったりしたのか？』

普段しないようなことをしたせいかな不思議そうにバーンズさんは話してきた。通信自体は問題なく出来るのか。

「い、いや、無線の調子が悪いみたいで……もしかしたらそちらから連絡が入ったよ
うな挙動をしたのでそれで確認の為に連絡しました。」

『？そうか、まあこっちの方は特に問題は無いぞ。大して大事でも無いから普段通り

直ぐに戻れるさ。』

「何もなければ良かったです。じゃあ、こちらも待機状態を維持しますね。」

『ん、宜しく頼む……。っておい！やめろお前ら！こんなところで殴り合っても何もないぞー！この……。』

「……。は、はあ。」

そこで連絡は切れた。

「……。一応バーンズさんからじゃないことは確認できたけど、そうだとしたら僕に連絡を入れることのできる人物は居ないぞ？」

確認することはできたけれど逆に謎は深まるばかりだった。こんなことは今までなかったから少し不安だな……

「連絡先も持っているのはバーンズさんを除いてレピカちゃんしかいないし、流石にあの子が連絡を飛ばしてくるなんてことは無いはずだしな。まったく……。」「

取りあえず外で突っ立っていても仕方が無く思った僕は駐在所に戻った。

「……。やっぱり無線機にも問題は無さそうだな。何処も故障していない、とは思うけど。」

あれから待機室に戻った僕は椅子に座り直すとコンソールの電源を再び入れ直して、

それで自分の使っている無線機のマニュアルを調べ出して故障をしていないかどうかを調べていた。

「やっぱり僕の知識量じゃ理解するには限界があるな。本当に壊れていないかも分からないや……」

けれど僕の知っていることでは限界があつて詳細までは分からなかった。壊れると困るんだけどな……

『……通信を受信しました。ファイルデータのダウンロードを開始します。』

「ファイルデータ?……って不味い!ウイルスか何かか!」

無線機が壊れているかどうかあらかた調べ尽くして疲れた僕はコンソールに前につ伏せになっていると突然コンソールからアナウンスが流れてきたんだ。ファイルデータのダウンロード?

「ど、どうしよう、作業進行が止まらないぞ……」

コンソールの画面に表示されているダウンロード作業中と表記されているタブをいくら閉じようとしても閉じることが出来なかった。かなり強引なプログラムが組み立てられているみたいで普通には閉じられそうにない。

『ダウンロードが完了しました、通信を終了します。』

そうこうしているとダウンロードは終わったようでもコンソールの画面からはダウン

ロードの画面が消えて一つのファイルデータが表示されるだけになった。

「……何も起こらないけど、一体何のファイルが送られてきたんだ？」

ダウンロードは終了したけれど特にコンソールに何か動作不良を起こすということも無くて機能も普段通りだった。

「開けてみようかな……」

普通ならここでファイルを開けるなんてことはしないはずなんだけど……僕の場合は好奇心の方が勝ってしまったってついそのファイルを開いて見てしまったんだ。

「これは……この艦の地図か。一部しか映っていないけど……地図の番号がフェルノートの物だから見当は付くな。」

ファイルを開けてみるとそれにはこのフェルノートの地図の一部が入っていたんだ。どうして一部分だけなのかは分からないけど……

「……この部分だけ何か印が付いているな、何だろう。」

そうして地図をゆっくり眺めていると一つだけ気になるところがあつたんだ。そこには赤く印がつけられていてカーソルで調べることが出来るようになっていた。

「押してみるか。これが何なのか分かるかもしれないし……」

それで僕がその印を調べてみると地図の表記されているタブの上に重なるようにして文章が表示されたんだ。文章は短く一文だけですぐさま表示された。

「えっと、救助要請、記載の地点にまで合流を願う……って救助要請!」
その文章は助けを求める文章だった。

「こんな方法で連絡を受けるのは初めてだな……というよりもこれってM・S宛に送ったというより僕個人に当てて送ってきたのか?」

普通ならこういったことはM・Sに連絡をするものだけど、これは明らかに僕個人に向けて送られた物みたいだ。

「マニュアルにもそういったことは書かれていないし、これに答える義務はないみたいだけれど放っておくのもな……」

M・Sのマニュアルでは基本的に支部を経由して送られてきた連絡に対して対応をするように。そうやって表記されているけれど直接個人に送られてきたものに対しては何も書かれていなかった。

「……バーンズさんに連絡をして現場に向かおう。何かは分からないけど……ここには何かあるはずだ。」

こうして僕は連絡を改めてバーンズさんに飛ばした。

「地図によればこの辺りのはずなんだけど……」

端末にコンソールに送られてきた地図のデータを映しながらも僕はその地図が指し

示す場所を探していた。

「おかしいな、廃墟のビルがあるだけじゃないか。」

けれど、その指し示す場所は今は使っていないビルの位置でとてもじゃないけれど人が居そうな気配はしない。

「大通りからも離れているし路地だから薄暗いし……どっちが救助して欲しいか分からないじゃないか。」

文句を漏らしながらも僕にデータを送りつけてきた人物がいないかどうか探し続けた。けどどやっぱりその地点の周囲には誰も居なくて無駄に時間が過ぎるだけだった。

「……想像はしたくないけどこのビルの中じゃないよね？」

僕は嫌なことを想像しながらも目の前にそびえるビルを見上げた。

「かなり古い建物だな、人の手も全く入っていないし……随分前から使っていない気がする。」

入るつもりは今のところ無いけれど、取りあえず僕は建物の入り口に向かった。

「ドアは……流石に機能してないよな。電気も通じてないみたいだし。」

自動ドアの前に立ってみただけでドアが開くどころかセンサーすら反応していないみたいだった。まあ、これだけ埃だらけなら見た目から分かるか……

「仕方ないな……バーンズさんに連絡をかけてから駐在所に戻ろう。やっぱりいたずらか何かだったんだ。」

そうして踵を返して帰ろうとした時だった。

『助けて…… 助けて下さい…… 私、私はここに……』

「!？」

その時、僕の無線機にノイズが走った。あの時と同じだ！

「ま、待つてく下さい！ 貴方は、貴方は一体……」

『……』

返答を聞こうとしたけれど、その声を聞くことなく連絡が切れてしまった。

「くそっ…… やっぱり中に入るしかないのか？」

私はここに、そう聞いた僕はその時まで中に入ることなんて考えていなかったけれど…… 意を決して中に入ることにした。

「げほっ、げほっ…… やっぱり埃が酷いな。マスクの一つでも持つてくれば良かったよ……」

自動ドアを無理矢理手で押して何とか開けることが出来た僕は暗い室内に持つていたライトで照らしながら進んでいた。だけど埃が歩く度に床から巻き上がってむせて

いた。

「見たところ普通のビルの受付みたいだけど、まるで人が踏み込んだような形跡が無いな。」

今までのことから考えると唯一の入り口である自動ドアは閉じていたしこの建物の床は埃だらけだから歩けば跡が付くはずだけど……

「これは探すのが大変だぞ……？」

それで探すことが難しいということに気が付いて少し落胆していると電気の通っていないはずの建物の中に光る何かを見つけたんだ。

「緑色の光…… おかしいな、ここには電気が通っていないはずだぞ？」

その光に向かって歩いて行くとその光っている場所が見えてきた。ライトの光ではつきりと見える。

「キーロック付きの扉か、ここだけに電気が通ってるのか？」

それはドアの横に鍵のシステムが取り付けられている一般的な扉だった。けど、どうしてここだけに電気が通ってるんだ……？

「鍵を持っていないから開けられないか……って、開いてる？」

鍵を持っていないけれど、一応確認の為にドアを手で押してみると簡単にそれは開いてしまったんだ。

「……ここまで来たら中に入るしかないよね。」
そうして僕はドアを開けて中に入ってしまった。

「凄いな……ここだけはまだ電気が通ってるのか。」

あれから建物の中にあつた扉に進んで行つた僕は中にあつた施設の中を搜索して
た。

「どんなことをする為の機械なのか分からないけれど、何かを作っていた場所みたい
だな。」

施設の中はさっきまでのビルとは全く違つて電気が付いていて明らかに生きている
場所だつた。だけど人気が感じないのは変わらなかつた。

「さつき連絡をくれた人が居るのならここに間違いは無いはずだけど……気配すら感
じないのは何か怖いな。」

配管を潜り抜けながらも数回階段を下りて施設の内部をくまなく搜索していた。だ
けど肝心の連絡をくれた人は見つからなかつたんだ。

「何処かに人が居そうな場所があれば良いんだけど……」

そうして電機は付いているけれど微妙に薄暗い室内にライトを照らしながらそう
言つた場所を探していた。

「……？あそこだけ周りとか違うな。」

すると他の場所とは違う雰囲気のところを見つけてきた。

「あれはカプセル……？何なんだろう。」

そうして近づいた僕は恐る恐るカプセルの中を覗き込んだんだ、するとそこには……

「こ、これは……」

そこには、女の人が横たわっていた。

E—13 「遭遇」

「どうしてこんなところに人が……」

廃墟の内部に入り込んで行った僕がその謎の施設で見つけたもの、それは女の人だった。

「ロックが掛かるように作られているみたいだけど…… どうしてこのカプセルだけ開いてるんだ？」

その女の人が入れられているカプセルのようなものを良く観察してみるとスライド式のカバーが後ろに動いていてカバーの動く部分にあるレールには埃が一切着いていないことからつい最近に開閉したことを物語っていた。

「連絡を送ってきたのはこの人…… にはしてはこんな状態じゃ無理なはずだしな。」
もう一度カプセルの中に目を向けて女の人の状態を良く見てみる。

「大体呼吸してないんじゃないか…… 呼吸、呼吸をしていない!？」

最初は閉じている目の方ばかりを見ていて他の身体の状態をあまり詳しく見てはいなかった。だけど、それから少しして胸の辺りから腹部にかけて容態を確認したときにある重要なことに気が付いてしまったんだ…… 肺が機能していないということに。

「そ、そんな、死んでるんじゃない……」

その証拠としてその人の胸は上下に動いておらず、ただ死体のように静止するだけだった。

「ようやく、ようやくここまで来れたのに結局のところ助けられることが出来なかったのか。」

もしかしたらだけど、このカプセルは生命維持装置でそれが何らかの理由で破損、それによってロツクが外れて機械の機能も停止……。それでどうにかして連絡を送ることが出来たけれど僕が辿り着くのが遅くて、それで間に合わなかったのか？

「……誰かは分からないけど、誰なのかは分からないけど、ごめんなさい。」

そうして僕はもうそこには居ないであろう女の人に形だけではあるけれど謝罪をした。気持ちで冷静では無くなりかけていたけれどどうにかしてそれを落ち着かせて。それで、僕は取りあえずバーンズさんに結果の報告をしようとして一旦カプセルのある方に背を向けて無線機を付けようとした……。その時だった、思いもよらないことが起きたのは。

「……助けに、来てくれたんですね。」

「えっ？」

何処からか聞こえた声に気を取られた僕は本能的にその声が聞こえた方向に首を回

した。

「……」

そこには、カプセルから上半身だけを起こしてこちらを見つめている死んだはずの女の人が居た。

「あ…… あ…… ああ！そ、そうでした。」

突然のことで頭の中で情報が処理しきれなくなつて、破裂しそうになりながらも僕の口から出た言葉がそれだった。

「えつと…… 連絡に応じて急行したM・Sの者です。その、身体の方は大丈夫ですか？」

「…… 問題、無いと思います。多分、ですけど。」

女の人は一瞬だけ視線を僕から自分の手の平に持つて行って手の指を曲げては広げてを繰り返しながら僕にそう言った。

「あの、お願い、あるの。聞いてくれる？」

「？」

その人は白く細い手でカプセルの傍にあるモニターのようなものを指した。あれは何だろうか？

「私はまだ、固定されてる。その機械を外してくれますか？」

「…… やってみます。」

どうやらまだ何か固定するものがあつて女の人は動くことが出来ないみたいだ。僕はそのモニターに近づいて何処からかアクセスできないかを探した。

「何処からだ……？ 何処からなら行ける？」

そうして試行錯誤しながらも色々モニターに対してアプローチをかけているとある拍子にモニターに手が触れてしまった。

「しまった！…… っであれ？」

だけど、それでモニターの電源が付いたのか画面が表示されてホログラムタイプのキーボードが表示された。まさかこんな起動方法だったなんて……

「…… 取りあえず起動できたから良いか。」

電源が入って起動が完了すると僕の端末に入っているものや駐在所のコンソールに使われているものとは全く違うようなシステムが表示されていて完全にこのカプセル専用のコンピュータとして改造されているようだった。どことなく玄人向けな仕様だと感じる。

「えっと、このカプセルの管理システムの場所は…… 名前からしてここかな。」

「そのファイル、名称は何ですか？」

「？ 名称は試験体用カプセルシステム、ですか。」

「それで、あつていると思います……」

そこから女の人の指示も受けながらも細かい設定を行って不具合が発生しないように解除できるようにした。それにしても仰々しい名前のファイル名だな。

「……よし、これで多分ですけど出来ると思います。そちらの方は大丈夫ですか？」

「……問題ありません。」

「じゃあ、外しますよ……」

あちらの確認を取ってから準備の完了をして僕は解除の入力をした。

『接続中のケーブルの切り離しを行います。現在状態の確認中……… 確認終了、切り離します。』

モニターから大きめの音で合成音声の無機質なアナウンスが流れると何かを外れるような金属音が連続して聞こえてきた。どうやら固定していたものが取れていつているみたいだ。

『……切り離しを完了しました。プログラムの実行を終了します。』

「どうですか？外れましたかね。」

「……ありがとうございます。大丈夫、外れました。」

そう言うとき女の人はカプセルから完全に起き上がって僕と同じように立った。さっきまで横になっていたからあまり分からなかったけど身長は僕と同じくらいなんだな。

「…… そうですね、まだ言っていないませんでした。」

すると女の人は何かを思い出したように声を出すと僕の目をしっかりと見つめてからこう話してくれた。

「私は試験体、N o . 0 1、助けてくれて、ありがとう。そして、これからも、宜しく願います。」

「試験体…… お名前の方は何と言うんですか？」

「…… ?これが私の名前、私の名前です。」

頭をかしげながら不思議そうな顔をしてそう返してくれた。試験体…… って流石にそんな名前の人居るわけがないな。と言うことは名前が無いってことか…… ?

「ほ、本当にそれが自分の名前だと思って…… いや、覚えているんですか？」

「はい、そうです。これが私の名前…… 変わり、ありません。」

この人は自分の名前が試験体N o . 0 1だと覚えているからそれと同じ名前で呼べば反応してもらいやすくて良いんだけど…… でも、それだとやっぱり何か違う気がするな。

「…… ちなみに僕の方はノア、ノアって呼んでください。まあ、呼ぶ機会は無いですけど……」

「分かりました。そう、覚えておきます。」

何か、何かいい名前は無いか。どうにかしてその女の人の名前を考えられないかどうか…… そうして色々と思いを巡らせていると突然地面が、施設全体が大きく揺れたんだ。

「はあ…… はあ…… おい、もう気は済んだか？ 気が済んだのなら早く行ってくれ、こっちも忙しいんだよ！」

俺が少し大きめに声を出すとさつきまで殴り合っていた二人組は観念したように逃げ散っていった。いい歳してやめて欲しいぜ全く……

「ただでさえ今は仕事が多いってのに…… これも全部 C・R・S・F の所為だな。」
少し前からその活動の規模が大きくなり続けて来ている C・R・S・F。最初の頃には小規模の特に危険性の低い組織だった…… というように情報が回って来てはいるがもしそれが正しい情報であるならこの短い短期間でこれ程にまで組織が肥大化していったのには必ず何か裏があるはずだ。

「取りあえず一旦駐在所には戻れそうだな……」

過去にもこういった行き過ぎた組織は存在したことがあったみたいだが今回のよう

な組織は例が無いらしい。まあ、それは被害大ききを見れば分かることか。ともかく現段階でも未だに判明していないC・R・S・Fの中心人物について更に捜索が必要だ。

「どれどれ…… さっきの奴らの識別カードのコピーでも詳しく見るかな。」

M・Sの方で特に何か指示が出たわけではないがC・R・S・Fの関係者を探し出して情報を聞き出す為に識別カードのコピー可能な一部分だけをコピーして保存してある。まあ、この方法で探し出せたのは一回程度しか無かったんだがな。

「…… やつぱりそう簡単には見つからないか。」

やはり今回も特に関係のない人物だった。まあ、種族がキャストのみに限定されている組織？だというのも情報として上がって来ていることだし今度からは種族を限定して聞いて行った方が良さかもしれん。

「はあ、そういうえばノア君も出払っているところだったな。確か救助要請が何だから言ってたか……」

さっき殴り合いに発展する数分前に無線機の調子が悪いと言ってノア君が連絡を飛ばして来たのを思い出していた。

「無線機、壊れていなければ良いんだがな。今まで行ったことのないような場所に向かうようだったから何かあった時の為に連絡が繋がれば良いんだが。」

そうして俺は現場から離れて行って駐在所へ戻るために近くの場所にあるコンベア

に向かつて歩いていった。

「取り敢えず今日は駐在所に戻ってから報告書の作成をして、その後からデータの整理をして……。」

いくら規模が小さくとも報告書の作成はやらされるからな……そんなことを考えながら歩いていると普段ならここでは聞くことの無いはずの音が遠くから微かに聞こえてきた。

「何だ……って、あれは!？」

その音に反応した俺は瞬時にそれが聞こえた方を向いた。ここからだど上手く見ることが出来ないがかなり近い場所で今のは起きたらしい。まさかC・R・S・Fがやったのか。

「施設の爆発、にしては規模が小さいな。もしかしてあそこで撃ち合いでもやってるのか？」

はつきりとは分からないが断続的な破裂音、重火器を放った時のような音が聞こえてきて……それから撃ち合いなのかもしれないと思った。だとしたら不味いぞ？

「…… 良し、俺も直接になるが早く現場に向かわないとな。」

それで今の今までは駐在所に向かつていたが進路方向を変えてその現場の見える方に向かつて俺は駆け足で向かっていった。

「一応基本的な物は持つてきておいたが正解だったぜ。」

走りながらも俺は腰から拳銃を取り出して調子を確認していた。

「……特に問題は無いな。後は弾さえ気にすれば。」

駐在所を出る直前のことを思い出しながらも急行を続けた。確かに装備は持つてきてはいたが流石にこの事態を予測していたわけでは無いから持つてきていた弾薬はそれ程まで無かつたはずだよな……

「くそ、ノア君が居れば……ノア君？」

不意にノア君という単語が出てきたとき思考が白になりかけていたがどうにかして持ち直した。そして更にあることを思い出した。

「廃墟の多い場所で撃ち合いなんて……組織の行動にしては意味が無いんじゃないのか？ それにあの区画はノア君に貰った地図の場所だし……待てよ、ノア君の地図？」
少し前にノア君から貰った例の地図救助要請がそこで気になって軽く足を動かしながらも走る速度を落として俺は端末でもう一度その地図を見ることが出来た。

「……少し嫌な感じがするが、あの場所はこれだとどの位置にあるんだ？」

周辺の建物から推測してその印のある場所を検討をつけて探した。この辺りは使われていない建物がほとんどで地図と照らし合わせれば見つかるのは時間の問題だった。

「よし、あのビルの向かい側にある大通りを後ろに……」

そうして多少手間取ったがどうにかノアくんが向かったであろう場所を見つけるところが出来た、だが。

「……畜生、綺麗に潰れてるじゃねえか。」

その向かったであろう建物は既に爆破で破壊されていた。

「……駄目だな、完全に壊れちゃってる。建物があつたのかすらも分からないぞこんな有様じゃ。」

向かう最中で数回程戦闘になりかけてしまったが基本的にあまり攻撃をこちらから仕掛けないように、逃げながら動くことでどうにか建物の残骸がある場所に向かえた。

「……無線機も駄目か。やっぱり壊れちゃったのか？それとも電波が届かないような位置に居るのか？」

一応さつきから連絡を飛ばしてはいるが一向に応答は返っては来なかった。事前に故障しているかもしれないなんて言うもんだからこれじゃノアくんがどんな状態にあるのか分かるはずが無い。

「まあ、取り敢えず電波が届かないと言うように仮定しよう。そうだとしたら居る可能性が高いのは……地下か。」

故障してしまったと見切りをつければ探す範囲が膨大過ぎて俺だけじゃ無理だが地下に居ると仮定できるならまだ見つけられる筈だ。

「何処かに階段が、とは思ったがこんな状態だとそれを確認するの何か。」

けれどそのような階段は当然ながら何処にも無い。だが、諦めてしまうよりは探せる方が良いだろう？ そうして俺は瓦礫を手で掻き分けながら下から空気が流れていなか警戒を欠かさずに1人探し始めた。

E—14 「換装」

「い、今のは何だ？ 凄く大きく揺れたけど……」

今まで感じたことのないような揺れを感じて僕は体制を崩しかけた。この揺れ方は何か違うぞ……

「……何か、嫌な予感がします。言にくいですが、息苦しさを……早く出ましよう。」

女の人は僕と同じで床に尻餅をついてしまっていたところを近くのものに掴まりながら立とうとしていた。嫌な予感……？

「あ、入り口なら僕が入って来る時に使ったものが戻った方にある筈ですよ。少し遠いですけど。」

僕はさつき通ってきた道を指で指した。心なしか通路の光が弱くなっている気がするな、やっぱりこの人が言う通り何かあるのかもしれない。

「そう、ですか。私はそう言ったこと、知っていないので。では、行きましようか。」

「……分かりました。気を付けながら行きましよう。」

女の人が歩くのが覚束ないところを横から補助しながら来た道に戻ってこの施設か

ら出来るだけ早く出ることにした。

「やっぱりまだ体が…… というよりもパーツですか。」

僕は女の人の方を見る。人工皮膚の部分に走っているいくつかの繋ぎ目の部分を除いてしまえば普通の人と大差変わらないほどの見栄えのパーツだった。普通はキャストの人は戦闘用にかんりの装甲パーツを取り付けているからこの人みたいな物は初めて見たかもしれない。

「ごめんなさい。まだ、スリープから解除されたばかりで、上手く動かなくて。」

確かにあのカプセルでずっと横になっていたのなら、いつからかなのかは分からないけどあの状態を見る限りはかなり以前だろうから最後に動かしたのも…… まあ、上手く動かないよな。

「あのパーツがあれば……」

「？」

「……ごめんなさい。何でも、無いです。」

そうして引き続き僕らは出口に向かって進んだ。

「よし、ここまで来れば後は階段を昇るだけだ。」

通路を着た時の通りに戻っていると最初に下った階段の場所にまで辿り着くことが

出来た。何だか来た時よりも戻るときのの方が体感時間が早い気がするな。

「じゃあさつきみたいに気を付けてステップを踏んで……？」

女の人を続けて補助しながら階段を上るために先に階段の段を上がった僕は頭の上
に何かが落ちてくるのを感じた。何だろう？

「瓦礫？来た時にはこんなもの落ちてこなかったのに。何か崩れて……」

「危ない！」

その瞬間女の人が繋いでいた僕の手を体重も使いながら引つ張ってきた。すると、そ
れに続けてとてつもない轟音が響いて辺りは一瞬の内に砂埃で何も見えなくなつてし
まった。

「うう……」

「大丈夫、ですか？」

「……はい、何とか。ありがとうございます。」

少し倒れた時に腹を床にぶつけてしまつて痛めたけれど致命傷にはならなかった。

「これじゃ、ここから出られないな……」

だけど、助かることはできたけれど目的だった出口への道が無くなつてしまった。
弱つたな……ここ以外の出口なんて分からないぞ？

「……ノアさん、少し、相談があります。良いでしょうか？」

「へっ？そ、それは勿論……」

そうして考えても結論が出ないまま困り果てていると女の人が提案してきてくれたんだ。

「……この施設には恐らく、残っていればですが、私の試験時に使用していたパーツ、それがまだある筈。あれを使うことが出来れば……」

「そのパーツであれば元の力が？」

「はい、恐らくなので、まだ断定はできませんが……」

「出来ることの候補はなるべく多い方が良いでしょう。それで、そのパーツは何処にあるかとかは……」

「記憶通りなら、あのカプセルの付近です。」

それで僕らは一旦引き返すことにしたんだ。ここに居るままじゃ何もできないしね。

「じゃあ、早く行きましょうか。」

再び立ち上がってまたカプセルのあった場所へ……その時だった。

「おいっ！あれって俺たちが探してた試験体じゃないか？と言うことはあいつに……」

「！」

厚めの装甲を身に着けた男性のキャストが僕らの通ってきた通路に現れたんだ。

「待て！そこから動くんじゃない！殺すぞ！」

僕が女の人の手を掴んで立ち上がろうとした時、その男はライフルを構えて僕の方へ照準を向けた。不味いぞ。

「わ、分かりました！動きませんから撃たないでください！」

「よおし、そのまま……そのまま動くなよ。」

両手を上げて待っていると男はゆつくりと僕の方へ近づいてきた。その人の脚部のパーツが床を進む度重い音が鳴る。

「へへ、M，Sも大したことねえな。いつも震えてたのが馬鹿らしいぜ。」

今ならもしかしたら……男が気を抜いているのを見て僕は対抗策を考え始めた。こういう時に使えるもの、銃以外で！

「……」

「よし、その腰に着けている物外して手を出せ。お前は俺の方が連れて……」

僕は胸の部分にあるチャージ済み知らせるランプを確認して、それから思い切りスイッチを押した。

「目を瞑って！」

「！」

スイッチを押して数秒後、軽い金属音が鳴ると辺り一面が真っ白になるほどの光が一

瞬にして狭い通路の中に広がった。

「あああああああつ!!」

次の瞬間フラッシュバッチを向けた男の叫び声が聞こえてきた。この人には悪いけど目に向かつて照射したからしばらくは……

「い、今だ!」

そこで僕は女の人の手を掴んで床に倒れ込んでいる男の人を尻目に一目散に走り出した。

「何だったんだ今の光……って、お前は! 待て!」

「……悪いけど、今は相手にしてられないんだ!」

僕は走りながらも片手で持っていた拳銃P1A2を抜いて出来るだけ装甲の薄い場所をめがけて数発相手に撃ち込んだ。合計4発。最初の弾は弾いてしまったけどその後の弾はヘッドパーツの胴体との繋ぎ目に命中した。

「ごめんなさい!」

「うおっ!」

それ以降追ってくることは無かったけれど僕らはひたすらに走った。

「はあ、はあ……何とか出来たかな。」

あれから走り続けているとすぐさまカプセルのあった場所の付近にまで戻って来る
ことが出来た。それにしてもあの人達は一体？

「ノアさん、こちらです。」

「あ、ああ、そつちが目的だった。」

緊張から冷静な判断が出来なくなりかけていたけれど女の人からの声掛けを聞いて
少しだけ冷静になれた。

「電気は……あれ？つかないな。」

「古くなったか、先程の衝撃か、分かりませんが……仕方がありません。奥の方です
から、私について来て下さい。」

そうして今度は女の人に先導してもらおう形になってその部屋の中を進んだ。部屋の
中はしばらく外の世界と隔離されていたのかとても冷たい空気が流れていた。

「そういうばですけど……そのパーツのだと交換は普通に出来るんですか？あんま
り見たことが無いタイプだったので……」

手を引かれながらも僕は聞いてみた。この人に会ってから気になってはいたけれど
どこのタイプのキャストの人は見たことが無くて、どうやってパーツの付け替えを行う
のか想像もできなかつた。

「それなら問題、ありません。交換用の装置、それがありますから。」

「そうなんですか?」

「はい、形はあのカプセル、あれと似ています。操作時には貴方の、ノアさんの力を借ります、お願いしても……?」

「お願いされる程でも……僕しか居ませんからやらせていただきます。」

「どうやらこの人の入っていたカプセルと同じような物で出来る? みたいだ。それにしてもこの施設、この人もそうだけど色々謎なことが多いな……まあ、今はそんなことをしている暇は無いから気にするのは後からだけ。」

「ノアさん! ありました。この装置です。」

「そう言うのと女の人は手で装置を指した。」

「凄いな……見たことが無いぞ、こんなの。」

装置は体を固定する場所を中心に作業用アームが随所に取り付けられていて人の手は触れずに作業が出来ると言った風だった。そのすぐ隣にはカプセルに備え付けられていたのと同じモニターがある。

「では、今から私が接続します。出来ましたら、システムの起動を。」

「そういうと女の人は装置の中に足を踏み入れていつてあのカプセルに入っていた時にケーブルが接続されていた部分を体を固定する部分に合わせていた。よし、僕の方も準備しないと。」

「…… ノアさん！こちらの方は、準備が出来ました。何時でも始めてください。」

「分かりました、電源を入れますね。」

僕はカプセルの時と同じようにして画面を触った。キーボードが表示される。

「良かった、まだ使えるみたいですよ。」

「それは良かったです。では、ファイルはN o. 01から番号12を、それで大丈夫です。」

ファイル名称はN o. 01、番号12番。中に入っているデータは少なく直ぐに探し出すことが出来た。項目を選択するとアナウンスは無くそのまま作業が始まった。

「は、はあ…… 初めて見たけどキャストの人はこんな風にパーツを交換するんだな。」
頭が後ろ側から支えられると頭部と胴体の切り離しが行われ、胴体は別の場所に運ばれた。しばらくすると黒に近い灰色の外装に赤いラインが走っているデザインが施された別の胴体パーツが来て頭部との接続が行われた。

「かなり厚い装甲が着いてるな。前に見たファイリンさんのフウリンカタイプとはレベルが違うぞ……？」

そうして頭部と胴体の接続が終わると両腕と両足が運ばれて来た。色は胴体の物と同じカラーリングでどちらとも角張ったデザインだった。ちなみに足の方はシリンドアが外側からでも確認できる物でスラスターも複数取り付けられていた。

「凄く見た目だけで火力がありそうだけど、こんなものは見たことが無いな……アークスの人が使っているの何か。」

両腕、両足の接続がスムーズに行われると作業が終わったのか女の人は目を開けて僕の方を見つめていた。改めて全体を見てみると先程までとは打って変わって人工皮膚が頭部以外に無い見た目になっていた。これなら数発の弾丸にも耐えられそう……

「…… どうやら無事に、出来たようです。これでここから出るには、十分です。」

そう言うのと装置から自力で離れてさつきまでよりもしつかりと自立していた。今まで着けていたパーツよりも今つけている物の方がこの人には合っているのかな？

「無事に出て良かったですよ、これであの瓦礫も退かせそうですか。」

「はい、可能性としては、ですか。」

「じゃあ、早いところここから出しましょう。することも無いですしね。じゃあ画面を……？」

それで僕は装置の電源を切ろうとしてモニターをもう一度見た。すると、画面には今女の人に取り付けたパーツの名称？が設計画像と一緒に表示されていたんだ。気になった僕は少しだけ詳しくそれを見た。

「A. G. T No. 01用ミーンシリーズ…… ミーンシリーズ、ミーン。」

「ノアさん？どうか、されましたか？」

「い、いえ…：今、良いことを思い付いて。貴方の名前のことなんですけど、ミイーンって名前。その貴方が取り付けているパーツの名前で、お嫌なら別に良いんですけどね…。」

僕は名前を考えるのが苦手でこの人のことを何と呼んだら良いのか分からなかったけど、丁度良い物があつた！…：。だけどこの人が気に入ってくれるかは別か。

「私に…：。私の名前、嬉しいです。嬉しいですよ、ノアさん…。」

「気に入って貰えたのなら良いんですよ。じゃあ、これからはお名前で…：。ですか。」
気に入って貰えないだろうと少し諦めかけていたけれど、この人は…：。いや、ミイーンさんは気に入ってくれたみたいだから良いのかな。

「そういえば、話は変わりますが…：。さっき戦闘したあの人達が入ってきたのは何処からなんですかね。崩落して出られなくなった場所以外には出入口は確認していませんから。」

今は落ち着いているから分かることだけれどあの崩落してしまった入り口の他に入る場所は無かつたはずだ。だとしたら他の入り口から…：。？

「ここにはあまり、詳しくですか。私が覚えているのは、この部屋、それとカプセル。それだけです。」

「そうですか…：。」

「どうやらミーオンさんでもこの場所には詳しくないらしくてあの場所以外の出入口は見当がつかなかった。」

「そうであるなら出入口が2つも無ければ無理な話だし……2つ？」

あの入り口からではない場所から、つまりあの場所以外からになると出入口は2つあることになる。けれどその様な物は入ってきたときに確認できなかった……と言うことは。

「もしかして新しい入り口を作ったのか？」

「新しい、入り口？」

「そうですね、この施設は下にありますから上から見当をつけて穴を開けてしまえば出来ることです。ただ、彼らが何の目的で来たのかは分かりませんが……」

確かに穴を開けたところまでは分かるけれど目的が無ければそんなことはしない。目的……あるとすればミーオンさんか？

「……あの人方の目的、恐らくは私です。試験体という、言葉を口にしていましたから。」

そう思ったときにはミーオンさんがその答えを出していた。

「何となく、何となくは分かっていますけど……詳しく聞くのは後からにします。出ることを優先しましょう。」

「……分かりました、行きましよう。」

ミイーンさんは少し俯いた後、装置横のラックに置かれていた小銃を手にとって安全装置を外していた。

E-15 「逃走」

「おい！カプセルを発見したぞ！こっちだ！」

「！」

パーツの換装が終わって少し息をおいていると不意に部屋の入り口の方からノイズ交じりの低い声が聞こえてきた。さつき遭遇したキャストの人達の仲間か？だとしたら……

「確かにカプセルはあるけれど、中身が無いじゃないの！」

高めの声が聞こえる。キャストの女の人も居るのか。

「しかし、聞いていたのはこの形状の难道？見ろ、3つのカプセルの内の一つじゃないか。」

「……あのねえ、中身が入っていないって言うているでしょうが！」

どうやら僕の方が先に来てしまったみたいだ。あっちの方の作戦にも異常が出てるみたいだし……。まあ、僕はM・Sだから悪いことじゃないんだけど。

「はあ、取りあえず他の場所も探すよ、それはもう良いから。」

「分かったよ……」

「どうやらここは保留にして他の場所を探しに行くみたいだ。今の状況としてはありがたいことだけど、あれが3つのカプセルの内の一つだって？ 一体どうということなんだろう。」

「……行つた、ようです。反応が遠く、確認できません。」

カプセルについて考えているとミイーンさんは突然そんなことを伝えてくれた。だけど、ここからだと思えていないはずなのにどうしてだ？

「反応つて……そんなことも分かるんですか？ もつと大掛かりなものが無いと正しく表記されないとか、聞いたことがあるんですけど。」

そう聞くとミイーンさんは一度頷いてから詳細を教えてくださいました。

「正確に言えば、その通りです。ですが、私に装備されている、これは独自の物で、性能は少しは良いはずですよ。」

「そ、そんなことまで……」

ミイーンさんは目を閉じながら続ける。

「……まあ、より気を引き締めて行きましょう。見つかると想像の通り面倒なことになるますから。」

そうして僕とミイーンさんは装置のあつた部屋からなるべく音を立てないようにしながらも急ぎ足で出た。

「…… 本当に居ないですね。」

部屋の入り口の角から少しだけ顔を出して確認をしたけれど…… ミイーンさんの言う通りそこには誰も居なかった。

「ですが、相手は何人居るのか…… 察知出来なかった時は、ごめんなさい。」

「いい、いえ、情報は多い方が有利ですからありがたい限りですよ。だから、謝らないで下さい。」

「…… 分かりました。」

ミイーンさんはそこからはしっかりと持ち直したようで顔を再び上げていた。

「取りあえずですけど、さっき通った道は行っても仕方が無いですから可能性の高い場所に行ってみましょう。ここだってそう大きくは無いはずですから。」

そう言いながら周囲を見渡す。

「えっと、まずは反対側に行ってみましょうか。」

「…… はい。」

閉じてしまった出口の方へ向かう通路を通っても仕方が無い為に僕とミイーンさんはそちらとは逆の方向へ進んで行った。僕のブーツとミイーンさんの足のブーツが床に当たる音が静かに響く。

「何も無いと良いけれど……」

警戒を怠らずに神経を常に尖らせ続けながら進んでいく。かなり疲れてしまうけれど見つかるよりはいい。

「……ノアさん。」

その時ミイーンさんが突然後ろから何とか聞き取れるほどの小さな声で僕を呼んだ。それであり声も出せないから僕は目線で返事を返した。

「今居る通路、正面突き当り右……反応があります。」

騒ぎを起こさないように静かにここを出ようと考えたけれど……どうやら誰にも遭遇せずに行くのは無理みたいだ。こればかりは仕方が無いと思つて僕は咄嗟の判断でミイーンさんと別れて丁度死角になる部分にある通路の脇に身を潜めることにした。まだ気配とか足音とかが聞こえてきた訳じゃないけど、ここは待つしかないな。

「……」

さつきよりも更に音を立てないようにしながら通路脇で息を潜める。するとノイズのようなものが向こう側から何度か流れてきた。耳障りな音が広いとは言えない通路の壁を反響して伝わってくる。

「……おい、もう一回画像を確認しておけよ。何か間違いがあると困るからな。」

さつきとは違う男の声が聞こえてきた。画像つて、さつきの人達と同じ物なら……

C. R. S. Fか。

「だけだよ……こんなもの画像を見なくたって分かるぜ？馬鹿にするなよ。」

もう一人の方も男の人か。基本的にここに割当てられているのは2人組？で行動しているみたいで今まで遭遇してしまつた人達もそうだった。その会話をしたところで一旦歩くのが止まつたけれど、また動き出したみたいだ。女性用のパーツとは違って重厚な音が連なつて近づいて来る。

「だからこそだ。こんな簡単なものを失敗なんかしてみろ、後ろから指を指されるぞ。」

「そりゃあ、ごもつともなことだけだよ……」

やっぱり、バーンズさんが言っていたようにC. R. S. Fはこのままだと更に過激な状態に入っていくのかもしれない。僕の予想でしか無いけれど……多分この人、ミーンさんを連れて行って何かをしようとしているんだ。それも、とてつもなく恐ろしいことを。

「……」

聞こえてくる会話から想像して思考を巡らせているとミーンさんがこちらの方を向いて口ではなく目で合図を出してきた。もうすぐ近くまで来ているのか。

「あ……俺もこんなことしていないで肅清とかやりてえんだけどなあ。」

正規規のアークス規なんかじゃ暇潰しにもならないぜ。こう、もつと手応えのあるものをやりたいたんだがな。」

「…悪い知らせだが近いうちには無いぞ、少し前にやったのでかなりこちらでも消耗して捕まった奴も少しばかり居る。そんな状況ではな。」

続けて歩く音が響く。このまま何も無ければ良いけど…深く呼吸をしながらそう思った時だった、僕の持つている端末が不意に鳴ってしまったのは。

「？何か聞こえたよな。」

今思えばこんなことになるなんて全く考えていなくて…端末の電源なんて確認すらしていないかった。それから僕は慌てて端末の電源を落とした。事後で意味は無いだろうけど…

「こつちも今聞こえたが…ここには他の奴C.R.S.Fらも居るんだ、珍しいことじゃないだろう。」

「だけどよ、あんな音鳴らすのは一般員用の安物ぐらいだぞ？俺たちが正規じゃないにしても使うものは正規のアークスと同じ物だしな…。」

くそ、変なところだけにだけは感が良い人だ。音で聞き分けるなんて…

「…確かに考えてみればそうだな、確認をする必要がある。音の聞こえてきた方は分かるか？」

ど、どうするんだ、こんな状況で一番の最適な答えなんて。一番良いのは今までやったことを再現してみることだけど、さつきと同じように済ませる……には無理があるな。おまけにフラッシュバッチはあれからまだチャージが終わってない。ランプはまだ赤だ。

「少し奥に行った方の角からか？そこからだった気がするな。」

着実に近づいてくる足音が大きくなってくる。どうすれば……

「……」

手段は無いかと考えているとミイーンさんがもう一度こちらを向いて合図を送っていた。それも今度は目じやなくて手で。僕はハンドサインには詳しくないけれどニュアンスで情報を読み取って……私が、前に出る、拳……は攻撃？だとしたらミイーンさんがやるのか？

「……！」

まだ起きてから幾分も経っていないミイーンさんに駄目だと合図を送ろうとしたけれど……既にミイーンさんは動き始めてしまっていたんだ。彼女は隠れていた場所から男の人達の居る通路に飛び出た。

「な、何だお前は！動くんじゃねえぞ！」

「待て！銃を下げろ、相手を良く見るんだ。情報にあつた試験体にそっくりだろう？」

「…… 確かにそうだが、パーツが違うじゃねえか。もつとこう…… 人工皮膚の露出が多かったはずだ。」

「どうやらさつきパーツの交換をしたことはあつちにとつても想定外だったみたいだ。」

「まあ良い、発見できたことには変わりはないからな。俺が拠点まで連れて行く、残りはお前が……」

その言葉が聞こえた時、ミイーンさんは既に小銃を構えていた。

「馬鹿な、そんなに早く……」

男の人の言葉が出たと思えば間髪入れずにすぐさま凄まじい轟音が響いた。同時に発砲時の発火炎で通路が橙色に染まる。

「うわああああっ!!」

大きな発砲音に紛れて少しだけ叫び声が聞こえてくる。けれど、それも長くは無く数分も経たないうちに終わった。僕はどうなったのか確認する為にミイーンさんと同じように通路へ飛び出した。

「ミイーンさん！大丈夫ですか！」

「は、はい……」

通路へ出ると真つ先に見えたのはさつきまで話をしていた人達でヘッドパーツの接続部分だけを綺麗に撃ち抜かれて床に倒れていた。ちなみにミイーンさんは大した攻

撃は受けていないみたいだけれど通路の床に座り込んでいた。

「何処か怪我でもしたりとか……」

「いえ、大丈夫です。少し、精神を……」

さつきまでと比べてかなり弱ってしまっているみたいだ。キャストなら僕ヒューマンなんかとは違って普通の体調不良じゃないと思うけど。

「……ごめんなさい。まだ、万全では。」

「万全ではないのは分かっています！だから、今みたいな無理はしないでください。僕が止められなかったのもありますけど……」

ミイーンさんはうつむいたままだ。こういう時にどうしたら良いのか知ってさえいれば…… そう思った時だった。

「…… 駄目、みたいです。」

「へ？何がですか？」

「……」

「ミイーンさん？どうしたんですか？」

『本体の精神状態に異常あり。応急処置、スリープ状態に移行します。』

ミイーンさんが倒れてしまったのは。

『No. 02の確認が行えません。重大な異常が発生していいいます。現状の復復帰を行ってください。繰り返しま

…… 何度システムのアナウンスが繰り返し鳴ったのか分からないほどに時間が経過した後、ワタシはどれぐらいの時間か分からないけれどカプセルの中で目が覚めた。それで、強制的にカプセルから出ようとして何とかカバーを破壊した。偶然だけど、パーツが付け替えられたままの状態で良かった。破壊と同時にあのうっとおしいアナウンスが停止する。

「この感覚、もう一人のワタシに何か……」

目覚めてから感じるこの感覚は……もう一人のワタシに何か起こっている知らせだ。なら、急いでいかないと……

「…… そうだ、もう一人の方のワタシにも来てもらわないとね。」

急いで向かおうとしたけれど、まだもう一人の方のワタシが出てきていないことを隣のカプセルが閉まっていることで確認したワタシは同じようにしてカプセルのカバーを破壊した。今度は簡単だった。

「…… もう一人のわたしも感じたのですね。この感覚を。」

中を見れば以前と同じようにしてワタシと同じ姿形のワタシがそこに居た。

「そうね、だから早く行きましょう。もう一人の方のワタシ。」

そうして完全に起き上がることが出来たワタシはもう一人の方のワタシと一緒にもう一人のワタシの居る場所へと惹かれるようにして向かい始めた。

「……駄目だ、スリープモードに入った時の対処法なんて知ってる訳ないじゃないか！」

ミーインさんが小銃を放ってから数分後、僕は突然スリープモードになってしまったミーインさんを抱えて途方に暮れていた。

「前にも同じようなこと、ファイリンさんの時に同じようなことがあったけれど今とは状況が違うし。どうしたら良いんだ？」

確か前にファイリンさんが応急処置のスリープモードから復帰した時って何かの条件を満たしたから、だったかな。やっぱり規定の値にまで容態が回復しないと駄目なんだろうか。

「運んであげたいところだけど……と、とてもじゃないけどこれを持ち上げるのは、

うっ。」

取りあえず運び出して適切な治療を、と思っただけの上半身だけのフィリンさんでも相当な重さがあったっていうのにそれを次は五体満足のキャストの人を持ち上げるなんてことは到底できなかつた。せめて後1人、いや2人居ても良いぐらいだ。

「ここだと通信機は使えないし、バーンズさんもか。僕だけで行動してスリープ状態のミイーンさんを連れていかれても困るし、ここからは動けないな。何か考えないと……」

助けを呼びに行こうとしてもミイーンさんは絶対に放置出来ないし……運びながら行動をしようとしても僕自身が抱え上げられないし一体どんな方法を考え付けば良いんだ？他にもC・R・S・Fが居るということもあつて焦りを感じながらもその場から動けずにいた。

「うーん…… って、足音!？」

そうして悩んでいると何処からか走るような足音が聞こえてきたんだ。それも、かなり軽快な感覚で。

「ここで僕達以外に来ると言えば、C・R・S・Fしか居ない！取りあえず攻撃は出来るようにしないと……」

僕はその近づいてくる何かに備えるためにミイーンさんを抱えていた手を一旦放し

てからゆっくりと彼女を床に寝させると腰から急いで銃を取り出して残段数を確認した。

E—16 「自我」

「この辺りから感じる……」

「！」

そうして身構えているとキャストの人が通路から飛び出てきた。僕は下げて構えていた銃を上げて照準をすかさず構える。

「う、動かないでください！」

その人は最初何処か虚ろな声だったけれど、僕が銃を向けていることに気が付くと意識が元に戻ったのか引き締まったような声色になった。こ、怖い人だな……

「……何のつもり？」

「動くと、動くと撃ちます！だから、動かないでください……！」

なるべく戦うことで無暗に消耗したくなかった僕は咄嗟の判断で武装解除の要求を見様見真似でやつてはみたけれど…… やっぱりあの時のバーンズさんのようには上手く出来ていない気がする。というよりもこんなに引け腰じゃ相手に対して効果も無いか。

「……はあ。」

「?」

それでも引き続き震える手で無理をしながら銃を構え続けているとその人は呆れたような返事をして、要するに警戒を解いたようだった。この人は何か違う……? そう思っているとその人はゆつくりと歩み寄ってきた。

「ほら、これで良い? ワタシはまともな武器一つ持ってやしないわよ。」

手を腰よりも高い位置に上げて何も持っていないことを表していた。本当に何も無いのかな……?

「それに第一貴方に危害を加える理由が無いわ。ほら、武器は下ろして。」

「は、はあ。」

突然の出来事でそれまでは緊張していたけれどその人の言葉で空気が変に変わって気が抜けた僕はその人が言うように銃を下げて腰に戻した。

「ああ、こちらの方向でしたか。如何せん起き上がったばかりでセンサーの感覚が鈍くて……」

銃を戻して再びミーンさんを手で補助しようとしているとその人が来た方向からその人とそっくりな風貌をした人が出てきたんだ。そっくり、と言うよりほぼ同じ規格みたいに見えるけど。例えばパーツの形状とかカラーリングとか……あれ、何処かで見たような。

「私の方も無事発見できましたし、この……？」

後から来たその人は一度確かめるようにしてミイーンさんの方を見たかと思えば次には僕の方を見ていた。僕に何か気に障ることもあつたかな。

「もう一人の方のわたし、この方は一体……」

首を傾げながら先に来ていた人の方を見ながらも僕の方も終始覗き込んでいた。付いているゴーグルでその人の目元が見えないから何とも言えないけど何となく困惑しているように仕草からも感じた。

「こつちも聞きたいところね。出会ったことがある以前に名前すら知らないような人物が倒れているもう一人のワタシの傍に居たのよ？ 気にならない訳が無いわ。」

ミイーンさんが目的なのはC. R. S. Fと同じだけれど、その理由は全く違うみたいだ。

「…… あ、あの、話しているところで悪いですけどちよつと聞いても良いですか？」
気になって僕はそこで思い切つて聞いてみることにした。どうしてミイーンさんを探しているのか。

「？別に構わないけれど、何かしら。」

「えつとですね、率直に聞きます。何故ミイーンさんを……この人のことを探していいんですか？」

僕は目線を下げてミイーンさんを見やる。

「探していた、か。まあ君から見ればそう見えても仕方ないか。」

そう言うとその人は胸の前で組んでいた手を腰にやって言う。

「貴方には：：：そうね、にわかには信じがたいことかもしれないけれど探していたわけではないのよ。」

探していたわけじゃないって、どういうことなんだ。

「そう、探すなんてことをしたところで、ワタシ達は最初から一つでしかないのだから。」

私達は最初から一つ：：：？直ぐにその言葉が何を表しているのか僕には理解が出来なかった。それで少しの間固まっただけで、意識がふつと戻った次の瞬間にはその人達は頭に取り付けていたゴーグルを外し始めて：：：幾分も経たない内にそれは外された。

「：：：どうかしら、これで説明しなくても分かりやすいでしょう？」

そして、そのゴーグルの下にあった顔は。

「この通り、ワタシ達は一つなの。」

良く見知ったミイーンさんと同じ顔だった。

「そ、それは……その顔は……」

僕はそのシヨックから何が何だかわからなくて、混乱していた。だって……同じ顔の人が3人も居るんだよ？

「貴方が支えているワタシと……こっちの方のワタシとも同じ顔でしょう？」

後ろに居た後から来た方の人が前に出てきてその人と横並びになった。そこでようやく気が付いたけれど……顔以外の物も同じだということに。そこから続けてミーンさん？は話を続ける。

「……私たちは最初は一人の人間だった。だけど、ある時を境に分けられた……分けられてしまったの。」

少し苦しい表情をしながら話を続ける。

「分けられた？」

「……そう、分けられたのよ。ワタシやこっちのワタシは後から知ったことだけれどそういう実験をされていたのよ。」

するとミーンさん？は通路の壁を見やった。

「ここはそれを行うために作られた場所、辺境にある主力艦とも呼べない旧型艦のアークスシップに秘密裏に作られたこの場所だね。」

秘密裏について……そういうのは指定教育で勉強したことがあるけれどそれはもう

過去のことではそんなもの無いはずじゃ……？

「秘密裏について、それは昔ならやっていたって聞いたことがありますけど……今はもう無いはずですよ？アークスの上の方でもそう決まってるんですから。」

「……はあ、貴方ってあんまり人のことを疑わないタイプの人ね？」

「？」

「どうということだろう。そう思つて気が抜けているときつきみために呆れたように言葉を返された。」

「素直過ぎると言うか、純粹過ぎると言うか……まあ今は良いわ。」

「は、はあ……」

「取りあえず、貴方の知つていることは恐らくだけど半分合つていて半分間違つているの。現にその組織が作り出したものが目の前に居るから信じないというのも無理だと思ふけれど。」

確かにそう言われれば信じざるを得なくなるけど……やっぱり、今のアークスには何かがあるのかもしれない。C・R・S・Fのこととかを正当化することはできないし認めることはできないけど、ああいったことをしたくなる気持ちにもなる何かが起こつてゐることなのかな。フィリンさんの言つていたことを思い出しながら僕は想像した。

「……ワタシ達は元々一人の人間だったけれどここでの実験でそれは変わったわ。」
「ここでの実験？」

「そう、実験。それも今までにされたことも無いようなものをね。」

「ミイーンさん？は僕が抱えている方のミイーンさんの方へ来て説明を続けた。」

「昔、凄いアークスが居たことは知ってる？教わったことがあると思うけど……」

「凄いアークス……あの500年前の戦いで活躍したとかいう人ですか？僕が知っているのはその人だけなんですけど……」

「そう、その人で間違っていないわ。500年前のその人よ。」

500年前、名前は忘れてしまったけれどその大きな戦いで大きく貢献をしたアークスが居るんだ。でもその詳細は明かされていなくて見た目どころか名前も分からないらしいんだけど……その人が何の関係があるんだろう？

「そんな人材が居ればアークスは安泰して暮らせる……だけど、それはその人が不老不死ならのお話。永遠に生きられる人間なんて、生き物なんてこの世界には存在するわけが無いわ。」

「……」

「そこでアークスは慌てたのよ、頼りにできるものが居なくなってしまうのだから。」
その人はミイーンさんの頬を撫でながら話を進める。

「…それで、誰が考えたのかは知らないけどそれを解決する為にあることが考えられたの。何だと思う？」

「何、ですかね。居なくなってしまうのを防ぐために…：… 延命処置とかじゃ本質的な解決にならないですか。」

その人が居なくなってしまうこと、死んでしまうことが危惧していることなら延命処置を施したり…：… どれも人道的じゃないけどそういう視点から考えるならあり得ることだ。

「それも一時期は考えられたみたいだけれど人の身体には限界があるから…：… だからそれは行われなかったわ。」

「…：… そうですね。じゃあ、別の方法が？」

そう聞くとその人は軽く頷いた。

「その考え方では、だけど。維持するのではなくて同等の力を持った者を沢山作り出す…：… 量産することに計画は転向されたの。」

「量産、ですか。」

「…：… ワタシもその計画に使われた人間の内の一人で、気が付いた時には強制的にキャストにされていたわ。」

そう言うとその人は自分のボディパーツを眺めていた。

「だけど、性能としては中途半端なもので正直なところ失敗作だったって良く言われていたわ。身体的負荷を下げるために施したキャスト手術が逆に仇になって、生身だった時よりも低くなってしまったらしくてね。」

「そういう現象は良くあるって聞いたことがあります。生身の時よりも少しだけ劣ってしまうつて。」

「うん……その通りよ。だから、それを解決する為にあることをすることになったの。それがワタシ達が生まれる理由になるんだけれど……」

この人たちが生まれることになった理由……何だろう。ミーンさん？が複数居ることは分かっていたけれど、何故なのか……

「……簡単に言ってしまうえば一つしかないワタシの脳を3つに分割して、それをそれぞれのヘッドパーツに取り付けたのよ。だからワタシ達は元々一人だったの。」

「脳を分割つて、そんなことが出来るんですか……？」

「出来ることには出来たわ。ワタシ達が居るのがその証拠だけれど……やっぱり弊害はあったのよ。」

そう言うともう一人の方のミーンさん？も近づいて来てミーンさんの下に集まった。

「そもそも、本来の形であればワタシ達は自我を持たないはずだったの。こうして話

すことだって……でも、ワタシ達を接続する為のシステムが敏感に反応し過ぎたのが原因で元々のワタシがその性質ごとに分裂してしまったのよ。」

するとその人達は僕に代わってミイーンさんを手で支えた。こうして見るとミイーンさんが3人居るようにしか見えないな……

「別にそのこと自体は想定内の範囲内だったのだけれど……ベースになるワタシ、貴方が出会った方のワタシは主なコントロールを行う役割があるというのにそのコントロールを行うために必要な精神の力がとても弱かったの。それで今みたいに倒れてしまったらね。」

ミイーンさんが倒れてしまったのはそういうことだったのか。精神を使う……あの時に戦わせなければ大丈夫だったのかな。

「でも大丈夫よ。ワタシ達が元の通りにこのワタシの中に戻れば良いだけのことだから。」

二人は立ち上がると目を閉じて意識を集中させ始めていた。ミイーンさんに戻る……？

「大丈夫なんですか？僕にはあんまり分かりませんけど……」

「不安定だけれど、大丈夫よ。何度もしたことがあるから。」

するとミイーンさんの方で何かが作動したようだった。アナウンスが流れてくる。

『システムの接続を行います。接続状態の確認を……接続状態の確認終了。N.O. 01へのN.O. 02、N.O. 03の接続を開始します。』

「ワタシが目覚めたら宜しく頼むわね。そのワタシは精神力も勿論だけど戦闘には向いていないの。だからなるべく安全な場所に……お願いするわね。」

「わたしからも、お願い致します。」

『接続進行度、カウント6、5、4、3……』

「わ、分かりました。安全な場所に運びます。」

僕がそう言ったときには既にカウントは終わっていた。

『……0。カウント終了、接続を行います。』

そのアナウンスが流れると二人は立っていた状態から突然体から力が抜けたように倒れてひざまづいてしまった。そうしてそれに驚いていると次のアナウンスが流れて来たんだ。

『……精神状態の基準値にまでの回復を確認。応急処置スリープを解除します。』
するとミイーンさんは再び目を開けた。

「あ、れ。私は何をして……」

「ミイーンさん？大丈夫ですか？」

少し混乱しているミイーンさんを見て僕は声を掛けた。

「ああ、ノアさん。やつぱり駄目、でしたね。倒れてしまいました……」

「良いんです、僕にも原因がありますから。」

そうして話しているとミイーンさんはさっきの二人の方を見た。

「やつぱり、来てくれたんですね、私達。」

「……ミイーンさんが倒れた後、直ぐに駆けつけてきましたよ。」

「そう、ですか。」

ミイーンさんは再び俯いた。

「取りあえずその方達から安全な場所に連れて行くように頼まれて……早くここから出しましょう。上に向かって空いた穴はここからそう遠くないと思います。」

「……分かりました。」

ミイーンさんがそう返事をした後、立ち上がるとそれに反応するようにして今までひざまづいていた2人だったものが動き始めた。接続ってこういうことだったのか……

「す、凄いですね……」

「……私自身、欲しくは無かったです、この力は。だけど、こういう状況なら、問題ないですね。」

そうしてミイーンさんは……ミイーンさん達は完全に立ち上がった。

E—17 「帰投」

「うおおあああつ!!」

「!」

ミイーンさん達が立ち上がったのを見て少しぼうつとしていると通路の奥から叫び声が届いてきた。そうして何が起こったのか考えていると軽い発砲音と共に聞き覚えのある声が続けて聞こえてきたんだ。

「このつ、何だつて言うんだ? いきなり数が増えやがつて……」

この声、もしかしてバーンズさんか?

「バーンズさん! こつちです!」

僕はとにかく声の聞こえた方へ向かって名前を呼んでみた。

「その声、ノア君か?」

「は、はい! ノアです!」

やっぱりバーンズさんだったみたいだ。知っている人が来てくれたのは心強い……けど、どうしてバーンズさんがこつちの現場に来ているんだ? あの人は別の件で違う現場に行っていたんじゃない……

「分かった、今そっちに行く。」

そう返事が返つてくると軽いブーツの音が響いて来て、確実に僕の方へと近づいてきた。それが目の前にまで来たと思えば角からバーンズさんが出てきた。どうやらバーンズさんの方も無事だったみたいだ。

「ここに居たか。全く探したんだ……」

そうしてバーンズさんと何故か合流出来たかと思えばバーンズさんの視線は早速僕の方ではなくてミイーンさんの方へ向けられていた。それこそ最初の内は普段通りの目だったけれど、ミイーンさんが視界に入った途端バーンズさんは突然止まった。

「……ああ、そういうことか。ノア君の横に居るのが連絡で言っていた救助要請者だな。」

少し考えた後でバーンズさんは口を再び開いた。そういえばバーンズさんにまだミイーンさんのこと、連絡していなかったっけ……

「そうです、無線機が使えなくて連絡できていませんでしたけど……取り敢えず今は無事を確認してこの施設から出るところでした。」

「そうか……まあ、双方無事だったのなら良いことだ。小さい怪我も無いんだろ？」
そう言う少し前かがみになって僕とミイーンさんのことを覗き込んだ。バーンズさんぐらいキャストについて知識があれば見るだけでも調子とか、分かるのかな。

「一応ですけど、大丈夫だとは思いますが。複数回戦闘して危なくはありませんけど……」

僕は腰から銃を外してシリンダーのロックを外してからバーンズさんに見えるようにした。今見てみると実弾3発と10発分の連発弾しか入っていないのが見えて少しだけ怖くなった。後数回戦闘になったら……考えないようにしよう。

「あんまり弾、持って行かなかったんだな。まあ……特に指定はしていないが時と場合に応じて持ち運ぶ弾数は考えるようにしろよ？ いつでも俺が居れるとは限らないからな。ほら、取り敢えず今は持つておけ。」

バーンズさんはそう言うのと今シリンダーに入っている連発弾と同じ弾を1発渡してくれた。

「…… あ、そう言えばバーンズさんはどうしてここに居るんですか？」

弾を制服のジャケットに仕舞い込みながら僕は気になっていたことを聞いてみた。もしかしてそれ程重要な件じゃ無かったのかな。

「どうして…… まあ、俺が居た場所から見える所で火が見えたから来たのさ。それで偶然にもその場所がここだったって訳だ。」

「火が見える？何なんですそれ。」

「おいおい……何なんですかも何も上で起きてること、何も知らないのか？かなり酷

いいことになってるぞ。」

酷いことって…… さつき起こった大きな揺れが何か関連しているんだろうか。あれで施設への本来の入り口が崩れたくらいだし良く考えれば相当、なのかな。

「今の今までこの下の施設跡に居たので気が付かなくて…… 一体何があつたんですか？」

「何がって、そいつは言葉にするのはかなり難しいが…… まああれだ、C. R. S. Fがまた大きく動いたってところか。上に上がれば分かるとは思うが上にあつた建物は全壊だな、もはや跡形もない。」

バーンズさんは両手をお手上げだと言わんばかりに上げながらそう話す。確かに感じたことが無いぐらい大きな衝撃だったけど、まさか入った建物が全壊だなんて……

「取りあえず上の方でいろいろやっていた連中^{C, R, S, F}も今は大半がこの区画の担当になつてるM. Sが鎮圧済みだ。それで上の方が終わったから後は下の方を…… そう言う経緯だな。ちなみにそれで聞きたいんだがまだここには奴^{C, R, S, F}らは居たか？」

取りあえず今は上の方だけを見れば何とかなつたみたいだな、下の方はまだただど……

「遭遇したのは6人程でその内動ける状態だったのは2人ぐらいだったから…… とにかく2人ほどまだ居るはずですよ。ただ僕が全員見ていないだけで本当はもつと居る

のかもしれないけど……」

覚えている限りだと確かミーンさんのパーツの交換して、それからあの部屋から出ようとしたときに危うく出会いそうになってしまった2人組を思い出した。

「そうか…… まあ何かが居るといことだけでも分かれば十分さ、教えてくれてありがとう。」

そう言うのとバーンズさんは無線機で連絡を取り始めていた。そうだ、僕も今のうちに付け直しておかないと……

「あーあー…… 良し、繋がっているな。連絡だ、こちらBの第2部隊。対象の区画に残っている残存勢力は2から4人と推定。繰り返す、残存勢力は2から4人と推定。気を抜かないよう複数人での行動を、以上…… ふう、こんなもんか。」

バーンズさんは短い連絡を終えると無線機のスイッチを切り替えていた。まあ、僕とバーンズさんの所属部隊の管轄はあくまでも駐在所からの一定の距離範囲までだから余程のことが無ければその区画の担当と交代して自分たちの仕事に戻るんだ。

「良し、俺たちは一旦戻るとしよう。ノア君も疲れただろ？」

「あ、はい…… かなり緊張しました。」

「こんな狭い場所では今までやってこなかったからな…… まあ、経験になったと思えば少しは楽か。もしかしてまた射撃の腕前でも上がったんじゃないのか？」

「そんなこと……これでも僕、銃を使うと言うか戦うの苦手なんですからそこから成長なんて……」

バーンズさんは良く僕が射撃が上手いって言うけれど、本当はそんなことないのにな。さつきまでだつて焦ると必ず外して……情けないなあ。

「いや、正直なところアークスになりたてだった頃の俺と比べてはあれだが本当に筋は良いぞ。どうしてそれでアークスになれなかったのか未だに分からないが……まあ今考えることじゃないな。」

そこでバーンズさんはもう一度ミイーンさんに視線を戻した。

「……少し長話をしてしまつて済まない。今すぐにも解放、したいところだが今回の事について一応聞くべきことがあつてだな。つまるどころ同行してもらいたい。」

「……ノアさん。大丈夫、なんですか。」

「大丈夫ですよ。この人は悪い人どころか僕の尊敬している人なんですから。」

僕は心配そうにしているミイーンさんにそう返した。勝手な想像かもしれないけどミイーンさん、特にこのミイーンさんはあんまり初めて会う人とは上手く話せないみたいだ。さつきまで僕とバーンズさんが話しているときだつて得に話すことも無かつたしね……

「ん、どうかしたか？」

「あ、その……な、何でもないです！」

「?そうか。」

「……ふう。」

あれから駐在所に戻るとともにミイーンさん達に同行してもらったために僕は装甲車に乗り込んで帰路についていた。今は特に現場に向かうわけじゃないから車両の速度も心なしか緩やかだ。不快にならない程度の振動が続く。

「……何だか、新鮮です。こういうの、乗ったこと、なくて。」

「そうなんですか? てつきり乗り物ぐらいは乗っているかと……その、もう一人の方のミイーンさんが元々はアークスだっけって言っていましたから。」

確か今話している方のミイーンさんがスリープ状態にあつた時にもう一人のミイーンさんから聞いた話、元々はアークスだっけって言っていたけれどこういう乗り物には縁が無かつたのかな。

「適性が、あつただけ。私は、強い訳では、無かつたから。簡単な仕事……そればかりで、乗り物なんて。」

すると、ミイーンさんは少し申し訳なさそうな声色で返事を返してくれた。確かに今でも強さによって区分分けがされているわけじゃないけれどその個人の強さ、技量に

よって任される仕事……と、言うよりも任務か、その内容の達成難易度も異なっていることはあるらしい。だとしたら乗り物になんか乗らずともこなせるような仕事ばかりであつてもおかしくは無いか。

「……良い景色、ですね。外の景色。」

「外の景色？」

そう言われた僕はミイーンさんが視線を向けた方を見てみた。装甲車の窓は小さいからあまり良くは外が見えないけれど、何とか見えるそこからの景色は普段通りの整備された区画だった。だけど、ここはいつも使っているコンベアの走っている場所よりも高い位置にあるからまた少し違つて見える。

「外の景色は、見たこと、あつたはず……なのに、忘れてしまつて、駄目ですね。」

ミイーンさんは続けて外の景色を眺め続けていた。見たことがある筈なのに忘れて……まあ、キャスト手術を受けた時に何かの理由で抜けてしまつたか、それともミイーンさんにあるあの接続システムが原因で性質どころか記憶まで分裂してしまつたか。どちらもあり得ることだけどミイーンさんの状況から考えれば後者の方になるのかな。あの接続システムと言うのは不安定だつて言つてたし、あり得ないことじゃない。

「よし、そろそろ着くぞ。いつでも下りられるようにしておいてくれよ。」

「：あ、分かりました。」

そうして話しているとうやら駐在所までかなり近づいていたみたいだった。運転席の方からバーンズさんの声が聞こえてくる。

「じゃあ、そろそろ下りられるようにしておきましょうか。」

「：：：分かりました。」

するとミーオンさんは一旦景色を眺めるのを中断して下りられるように準備をし始めた。まあ、それほど手の込んだ準備をするわけじゃないんだけど：：：

「：：：ノアさん。」

「？」

それで、僕もミーオンさんに合わせて準備を進めっているとミーオンさんに再び呼ばれたんだ。どうしたんだろうか。

「：ノアさんは、外の景色、お好きですか？」

外の景色が好きか、か。少し前までは好きじゃないどころか嫌いなぐらいだったけれど：：：今ではレピカちゃんの影響かちよつとだけ好きになれたのかもしれない。

「好きですよ、まだ少しだけですけど。」

それからしばらくすると車は駐在所に到着した。

「……じゃあ、君はC・R・S・Fとは何も関わりが無いということか？」

「……はい、私はその組織、関わりを持つ以前に、存在を、知りませんでした。」

「まあ、疑うことはしないが狙われたことは事実だしなあ。困ったもんだ……」

装甲車で現場から駐在所まで特に何もなく戻ることが出来た後、バーンズさんと僕はミイーンさんに行くつかの質問をしていた。だけどミイーンさんは何かをしたわけじゃなくて、あくまでも被害者側の方だからフィリンさんの時のように強制するようなことはしないけどね。

「……そういうえばノア君が発見した時にはどんな状態だったんだ？まだ聞いていなかったな。」

「発見した時、ですか？」

「ああ、この方から聞けるのは起き上がってからのことだけだからな。それより以前のことはノア君しか知らないだろう？」

まさか僕の方に質問が回ってくるとは思わなくて少し戸惑ったけど、すぐに僕はその時のことを思い出し始めた。ミイーンさんがカプセルから出る前か。

「えつと……バーンズさんへの最後の連絡の後、現場に向かうと廃墟の状態になっている建物を見つけたんです。どんなことをする為の建物なのか全く検討が付きませんでしたけど。」

覚えているけれど僕がああ施設への入り口を見つけたのはああの建物の中だった。建物には物がほとんど置いてなくて殺風景で埃だからけだつたのも良く覚えてる。

「じゃあ、その建物の中に施設への入り口があつたんだな。」

「はい。バーンズさんが到着した時には何も無くなつていたみたいですけど…。」

そう、バーンズさんがああの場所に着いた時には僕の入つた建物は完全に破壊されていて跡も分からなかつたらしい。

「そこが一番不可解な所だな。この方を拉致するだけならそんな真似はしなくとも穏便に済ませられるはずなんだが、一体何があつたのか…。」

確かに、ミーオンさん達を狙うのならそんな大規模なことはせずに済んだはず。だとしたらそれなりの理由が？

「…：まあ、今考えられることには限度があるな。今日はこのぐらいにしてだ、ノア君は先に帰つてくれて構わないぞ。もう出来ることも無いからな。」

「は、はあ…。」

「時間も丁度だ、ゆっくり休んでくれ。この方については俺が色々やっておくから…。」

そうして色々と分からないことがまだ多いけれど、ひとまず僕はバーンズさんの言う通り自室に帰ることになった。

E—18 「事故」

「ノア君、銃は持っていくようにな。」

「大丈夫です、しっかり持っていますよ。じゃあまた明日……」

挨拶を交わすとノア君は普段通りに駐在所から出て行つた。

「…… 良し、話の続きをするか。」

ノア君には悪いが…… ここからは俺の私情が挟むからな、なるべく聞いては貰いたくないことだ。今日はかなり疲れていただけだろうから休んで欲しいというのが6割、この話の為に4割と言つたところか。

「ミイーンさん、だつたか？」

「…… はい、何でしょう。」

そう、全てはこの人物と話す為だ。

「少し、気になることがあつてな。強制はしないが…… 出来ることなら話して欲しいんだ。」

彼女が発見された場所、ノア君の言う通りなら建物に偽装した施設か。そこがどんな施設なのかなんて分からないが…… そうやって隠さなければならぬようなことをし

ている施設だ、俺が知りたいことと繋がっているかもしれない。

「……」

「…… 悪い、嫌だよな。」

やっぱり、俺みたいなのよりもノア君のような男の方が口も開きやすかったか。話を聞くのは無理か……？

「い、いえ…… 嫌では、ないです。」

…… そう思ってしまったが少し抵抗はあるものの嫌ではないと言ってくれた。

「…… さっきも言ったが嫌なら話さなくても大丈夫だからな。」

「…… はい。」

返事を聞いた俺はもう一度椅子に深く座り直した。

「…… そういうことが、あつたんだな。」

「……」

彼女は今まであつたこと、されてきたこと、施設について…… 恐らく言える限りのことを全て話してくれたんだと思う。彼女の顔もその所為か少し疲れているように見える。

「…… 話してくれてありがとう。少し、休もうか。」

キャストになったのは何故なのか、自分が3つに分割されたのは何故なのか。そして、それを行った計画とは何なのかを俺は聞くことが出来た。アークスの特殊防衛システム……そのことについて。俺は椅子から立ち上がって考えるのを続けた。

「……少し、俺の話をしてもらいたい？」

「？」

待機室の窓から外を見ていた俺は首だけを彼女に向けて言った。もつとも、突拍子も無いことを言われて彼女は不意を突かれたような顔をしていたが。

「いやまあ、独り言だと思って聞き逃してくれて良いんだけど……」

あまり話したくは無いことだが……話すことで得られることがあるかもしれない。そう思った俺は自分にあった過去について彼女に話そうと思った。

「何でしょう……私で、良ければ、お聞きします。」

良い反応では必ず帰って来ないだろう、それで一応身構えてはいたが彼女はそんなことは無くむしろ逆に興味があるぐらいの反応を示してくれた。

「……分かった。」

そうして俺は少し昔のことで記憶にある限りを瞼の裏で再び再生し始めた。

「君はアークスの特殊防衛システム、あの計画については良く知っていると思う。」

「… はい、私はその計画、使用されましたから。」
彼女は俯いて返事を返した。

「だが、その全てについては恐らく君も…：… そして俺も知らないはずだ。計画に関わった人間でも自分の関わった物しか知らないだろうな。」

「…」

「こんなことは勿論記録なんて残っている物じゃない。正直なところ、全て夢だったと言うこともできる位だ。」

そう、この計画…：… 計画とは名ばかりに機密度が高過ぎたことで計画に参加していた者ですらお互いが同じ計画に参加しているとは知る由もなかった。だからこそ計画なんて無かった、そう言ってしまうても良いわけだ。記録データという証拠が無いからな。

「…：… だから、このことは君が参加した事とは何の関係も無いかもしれない。それだけは念頭に置いておいてくれ。」

関係の無いことなのかもしれない。そのことを伝えてから俺は話を続けた。

「そうだな…：… A I Sは知っているか？アークスだったというのを聞いたが一応な。」

「…：… はい。A R K S I N T E R C E P T I O N S I L H O U E T T E、略称としてA I S。もつとも、使用したことは、ないですが。使い方だけは。」

搭乗兵器は使ったことが無いと車の中で言っていたからな。一応確認してみたが……どうやら使い方だけは一応講習を受けているみたいだ。

「A I S、対ダーカー用として開発された主に拠点防衛用の人型兵器。まあ、今では500年前に原型が完成した第1世代から改良を加えた第4世代のA I Sが主に使用されているんだがな。」

「……そうなんですね。私は、そこまで講習で、教わりません、でしたから。」

どうやら、必要のないことはあまり教えないようにアークスの方も効率化して来ているのか彼女はそのことは知らなかったようだ。まあ、知っていても仕方の無いことか。

「まあ、そのことは良いとしてか……A I Sの弱点についてはどうだろう。教えて貰ったことがあるか？」

「一応、ですが。操作性、行動可能時間、浸食のされやすさ、これらについては、知っています。」

「……そうか。」

A I Sはアークスが乗ることでその個人の戦闘力を大幅に引き上げることが可能で、例えば人手が回らない際に補助として使われることが多かった。これだけを聞けばかなり便利な物、そう感じるかもしれないがこれには大きな弱点があった。今彼女が説明してくれたことが大体のことだが……その中で一番の問題点があった。行動の出来る

時間に限りがあること、浸食のされやすさだ。

「まあ、今説明をした通りA I Sには第1世代から第4世代までの間がある。その間に様々なことを改良しようとして実現したのもあれば実現しなかったものもあったんだが……. ともかく、第2世代ではダーカー因子の浸食を受けづらくする為に浸食を未然に防ぐ、軽減させるということをやったんだと。」

「それは、成功したんですか？」

彼女は少しだけ興味があるように聞いてきた。まあ、講習でも教えてはくれなかったことだからな…….

「まあな、今の第4世代と比べれば完全な物じゃないがこれで戦う相手、ダーカーにA・I・Sを利用されることも減ったさ。」

そう、これによってA I S同士で戦わなければならぬなんてことは激減、とはいかなかったが減らすことが出来て無駄な戦闘を避けることに繋がった。

「それで、次の第3世代では残る課題になる行動可能時間を伸ばそうとしたらしいが……. これは上手いかなかったらしい。」

行動可能時間の延長、A I Sの構造で考えるのならエネルギー……. 要するに搭乗者のフォトンなどを使って動く構造であるからそのエネルギーの使用効率を良くするか、それとも搭乗者を強化するか。勿論最初は前者の方が選ばれた。だが、上手いはいかな

かった。

「乗っているアークスのフォトンの使用効率を良くする為にはA I Sの基礎設計から何から何までを全て考え直さなきゃいけなくなつたみたいでな。労力的にも、コスト的にも、様々な観点から考えた結果エネルギーの使用効率を良くするという事は駄目になつた。」

「で、では、どうやって、改良を……？」

「勿論、エネルギーを増やす方法だ。」

「……効率を良く出来ないのなら搭乗者を強化する、もしくはエネルギーを増やす別の方法をすれば良い。そこで、A I Sに乗る搭乗者を2人にするという試みがされたんだ。」

効率を良く出来ないのなら燃料、エネルギーを多く供給できるようにすれば良い。この為に搭乗者を増やすことになつた。

「だが、知つての通りA I Sには基本的に、というよりも1人しか乗ることはできない。その場合、どうすると思う？」

「座席を増やす……でしようか。」

確かにそうだ、1人しか乗れないのなら更にもう1人乗れるようにすれば良い。けれ

ど、それには別の問題が発生する。

「まあ、間違つてはいないな。だがA I Sにはそんな余剰スペースは何処にもない。普通に増設をすることはまず不可能だ。」

そう、A I Sにはそんなスペースは何処にもない。元々1人用として作られたものだからおかしいことじゃないが……これをどうにかする必要があった。

「では、どうやって……」

「……簡単なことさ。どんな形であつてもA I Sに乗つていれば良いんだ、A I Sの外側にでも括り付けてやれば良い。」

A I Sに括り付ける……まあ、これは少し誇張しすぎだがすることは似たようなものだ。A I Sの外部に人が1人どんな形でもくっ付いていければ良い。

「そこで作られたのが外部から人間を接続することのできるパーツが取り付けられた第3世代A I S、それが開発されるところだった。」

「開発される、ところだった？」

「ああ、第3世代A I Sは後少しのところで開発が停止した。ある事故の所為でな。」

この段階では既に実用段階まで進んでいて後少しのところで事故が発生したんだ。そのエネルギーの接続方法に問題が発生して……

「その事故が起こった計画こそ、俺が参加していた計画で……俺はその事故でパート

ナー失ったんだ。」

「パートナーの方、ですか。」

「ああ、名前はイレノア…… キャストのな。」

俺はパートナー…… イレノアの写った写真を彼女に見せながら教えた。

「ある時俺は新型のA I Sのテストの対象になったんだ。勿論、イレノアも。」

俺は、上からの連絡でテストに参加するようにという電子メールを受け取ったあの時のことを思い出していた。

「後から分かったことだが…… エネルギーの供給量を増やす、つまりフォトンの量を安定して供給する為にはその搭乘する2人がそれなりに信頼関係を築いていなければならなかったんだと。そこで俺とイレノアのタッグが選ばれたんだ。」

写真を目で追いながら話を続ける。

「まあ、理由としてはそれだけじゃなくてイレノアがキャストだったこともあって接続を行いやすいからというのもあったか。その時の試験に使われたA I Sにはかなり小型の接続用パーツしかなくてな、接続時には手と足のパーツを外した状態でなければならぬようにそういった条件をクリアした俺たちが選ばれたんだ。」

「…… 外部からでも、余裕は、ですか。」

「テストが上手く行けばキャストでなくとも接続が出来るようになるとは言われていたが……その試験の時にはコストの問題でそれしか用意できなかったらしくてな。その時だけさ。」

俺とイレノアがテストに参加した段階ではまだ全部が完璧な状態ではなくて、そのエネルギーの供給がしっかりと行えるかどうかのテストを最低限行えるものだけしかついてはいなかったんだ。そして、それらのことからの条件をどうにか満たしたのが俺達だった。

「最初の内は、俺だけが搭乗して作動させているときには何ら変わらない普通のAISだった。まああのテスト機は通常のAISとはかなり仕様が違ったから操作の感覚だけが似ていたのかもな。取りあえず何もなくテストはそのまま進められていった。」

そう、最初の内は本当に何も無かったんだ。あの時が来るまでは。

「……それで、ある時にイレノアを搭乗させている状態でエネルギーをどれ程まで供給させることが出来るかをテストした時があったんだ。あれは今でも忘れていない。」

突然のことだった。普段通り俺が動作のテストをしていると手足が外された状態のイレノアが運ばれてきてAISへの接続作業が行われたんだ。

「俺が普段通りに事を済ませようとしていると下から声を掛けられたんだ、接続のテ

ストと供給のテストをするってな。」

運ばれてきた時のイレノアは不安そうな顔だった。そこで俺は何度も声を掛けたりしたけれど、それでもやっぱり拭えない程の不安があったのか顔は晴れないままだった。

「まあ、通常の量を供給している段階では何も問題は無かったんだが……供給のレベルを引き上げた時にそれは起こったんだ。」

その時のことを思い出すと、今でも冷汗が出る。

「俺が順調に供給のレベルを上げていると後ろからいきなりイレノアの叫び声が聞こえてきたんだ。それで驚いた俺は供給量のメーターを見ると規定値よりもはるかに大きく供給していることが、吸い出していることが確認できた。」

「……」

「どうにかしてそれを止めることはできなかったがその時にはイレノアはもう……」
機能は止めることが出来た。だが、イレノアは重傷を負ってしまったんだ。

「……その後、俺はイレノアに駆け寄ろうとしたがすぐに何処かへ運び込まれてしまつて……本当にそれつきりだ。一度も会えていない。」

「……そう、でしたか。」

そこで俺は出していた写真をジャケットにしまった。

E—19 「処遇」

「……あれからしばらく経って、色々なことを知って。そして、君のことを聞いて。俺はあることに気が付いたんだ。」

ジャケットのファスナーを閉じた俺は彼女の方に向き直った。

「最初に言ったようにこのことは、この過去の事故は君には関係のない事かもしれないが……逆に、関係があるとして仮定したらどうだろうか。」

そう、関係が無いと言ってしまえばそれまでだが仮にでも関係があるとしたらどうだろう。関係が無いと考えるよりかは答えに行きつきやすいはずだ。まあ、場合によつては行き過ぎた妄想でしか無くなつてしまうこともあるが……無駄にはならないはず。

「私の計画と、関係があると、仮定する……ですか。」

「……ああ。少し乱暴かもしれないがそういう思考回路を組むことは出来る気がするんだ。何故なら、君の関わった計画と俺の関わった計画には本質的な共通点があると見ることも出来てな。」

俺は一度立った椅子にもう一度座り直して話を続ける。

「君の関わった計画、アークスの特殊防衛システム……言い換えれば特異的に強力

な兵器としてのアークスの量産計画。その計画の目的は言うまでも無く、ダーカーを一挙に殲滅し得る程の兵器の作成、そして量産だ。」

「兵器……ですか。」

人間を部品として使う強力な兵器……冗談じゃないが彼女はそんな目的でキャストにされ、そして運用される予定だったんだろう。

「……その兵器を作るといふ点では俺の関わった計画、今までの問題だった弱点を可能な限りまで削りアークス全体の戦力を増強させる。この改良型A・I・Sの量産計画と似ていると思うんだ。」

ダーカーの残党の始末を容易に済ませられ、アークスシップへのダーカーの襲撃の鎮圧を速やかに行える。この2つの計画の目的は同じなんだ。そして、更に言うのならこれらはどちらも記録にすら残っていない機密隠し事、類似点を挙げるならこれだけ出てくるんだ。関わりが無いと無いと言う方が難しくも見えるさ。

「計画の目的が似ているのなら、したいことが同じなのであれば……これらは繋がっている1つの計画だという見方もできる。そう思わないかい？」

そう聞くと彼女はしつかりと俺の眼を捉え、はつきりと返事をしてくれた。

「……それで、君の調べられることで、知り得られることで俺のパートナー、イレノアのこと分かるかと思ってな。まあ、これこそ今までの過程がどれでも崩れてしま

えば意味の無いことになってしまふんだが。」

計画が何処かで繋がっているとしたのならイレノアについて少しでも何か知ることが出来るかもしれない……が、これは俺がここまでで考えた仮説が全て正しければの話だ。そうでなければ彼女が何を調べようと意味は無くなる。だけど……

「それでも俺はしたいことがあつて……無駄なことかもしれないが、君に頼みたいことがある。」

俺はしまった筈の写真をもう一度取り出して彼女に向けて差し出す。

「イレノアについて知ることが出来れば、教えて欲しい。」

その時には、窓から差し込む燃えるような光がイレノアの写真を照らした。

「……よし、ここで合ってるな。」

「……が、ですか。」

駐在所で少しばかり長い会話を終わらせた後、少しの片付けを済ませてから彼女を……いや、彼女達を急ぎで用意した部屋に連れて行っていた。流石に3人もの……更には同じ顔のキャストの女性が仰々しく隊列を組んで闊歩するというのは恐ろしいほどに目立って騒ぎになるのでは。そう思ったがその頃には艦内の人工太陽は完全に沈み切っていて辺りは暗く、通りには人通りも少なくどうにか想定した事態は遂に起こ

らなかつた。

「少し待ってくれ、今開ける。」

俺は自分の物ではない識別カードを取り出し出して扉の自動ロックへ通した。小さい音が連続してしばらく鳴った後、鍵は外れた。

「まあ、問題なく使えるよな……良かつた。」

「……？」

そうして無事に新しい識別カード偽造を使うことの出来た俺は安堵した。かなり急いで作成したものだ……特に違和感も無いな。

「一応だがこのカードを君に渡しておく、持っておいてくれ。」

「これは、一体……」

「……まあ、俺が急ぎで作った君用の新しいカードだ。何かをするのには必要になるからな。」

もう一度カードを目で不備が無いかを軽く確認した後、写真を渡したときと同じように彼女に差し出した。

「当然のことかもしれないが……君はデータ上では今頃死亡扱いロストになっているはずだ、昔の俺と同じように。そうなると君の元々使っていた部屋は勿論使うことは出来なくなっている。」

まあ、仕方の無いことだが彼女は見る限り、聞いた限りではもはや死亡扱いにされているだろう。ここまでで彼女についても色々聞いてきたがノア君から聞いたような状態が本当であるなら…… 破棄されたんだろう、道具的に。そうであるなら基本的に情報上で殺されていても別に変なことじゃない、過去にもそういうことはあったからな。

「君が嫌なら仕方の無いことだが、ここを君の新しい部屋として使つて貰いたいんだ。もう以前の部屋には戻れないからな……」

「……はい。」

そう言うのと彼女は俺の差し出したカードを受け取つた。

「まあ、これも君がアークスやM・S、またはC・R・S・Fなんかを利用されない為のことだ。隠すと言つて俺の部屋やノア君の部屋なんかに居てもらうよりも別の人間として存在してもらう方が安全度は高まる。だからこそ、少し身勝手かもしれないが…… こういうことをさせて貰つた。」

正直なところこのまま俺が彼女のことをまともに上へ報告をして、彼女にまともな処遇が与えられるとは当然思えない。彼女の欠陥があるにしてもその強力な力は戦力として利用されてもおかしくないものだ。そうなると彼女は計画の通り、彼女の関わった計画の通り兵器として利用されることになる。それだけは避けたい。

「…… ありがとう。」

すると彼女は胸の前でカードを抱えながらそう返してくれた。これで少しは状況が良くなれば良いんだがな……

「良いんだ、礼なんか。それよりも部屋の中をまだ見てないだろ？ 今電気を付けるからな。」

そこで俺は部屋に一步踏み入れると壁を手で探って照明の切り替えスイッチを押した。

「…… フィリンさん。これで最後のパーツですけど、問題ないでしょうか？」

「うん…… 今のところは大丈夫よ。問題なく動いてる。」

「そうですか……」

そう言うのとナース、リエはなぜか落ち込んだようにして返事をした。まあ、リエにも教えていたものね…… 私の手術が終了するということがどういうことか、それぐらいのことは。

「…… 良いのよ、心配しなくて。私だって処罰は妥当なのは分かっているんだから。」

それよりもありがとうね、ここまで付き合ってくれて。」

「いえ、そんな。以前も言いましたけどこれが私の仕事ですから。出来ることをしたまです。」

「……でも、そういう当たり前が出来る人は少ないわ。だからこそ貴方はもつと自信を持つても良いと思うの。」

私は座っていた椅子から立ち上がるとリエの傍に寄った。

「ふい、フィリンさん？」

「だから、そんな顔をしないで、ね？」

こんなことではどうにかなることではないけれど、私はなるべくリエに負担が掛からないうようにして抱き着いた。少しでも励みになれば……

「……分かりました。」

……まあ、これなら大丈夫そうね。目に少し自信が出ているもの。抱き着きながら横目で見えたリエの瞳にはさつきよりも少しだけそういったもの感情が見えた。

「おい、治療の終わった対象が居るのはここか？」

「……あ、はい！すみません、今開けます。」

すると数回ノックが聞こえたかと思うと低い男の声が聞こえてきた、もう時間か。

「……フィリンさん、ありがとうございました。」

そう言うとりエは私から離れて部屋の入り口ドアに向かった。扉が開くとこの間のM・Sとは違う男2人が見えた。

「……無事に治療は済んだみたいだな。おい、あれを出せ。」

「分かりました。」

前の方に出ていた男が後ろの男に向かってそう言うに出てきたのは手錠だった。

「何もしないだろうと信じたいところだが、一応付けさせてもらう。こちらに手を向ける。」

私は指示に従って手を後ろにして向けると手のパーツに密着するようにして手錠が取り付けられた。それと同時に手の機能が制限される。

「よし、出るぞ。外に車を止めてあるからな。」

「……分かったわ。」

私は抵抗せずに落ち着いて出口に向かって歩き始めた。

「あの……その、頑張って下さいね。」

これからどうなってしまうのか、そう考えながら私は歩き始めようとした時リエが声を掛けてきた。頑張る、ね。そう思ってみようかしら……

「……リエこそ、頑張ってね。」

「は、はい！」

その会話を最後に私は病室を後にした。その時の外の景色は、少し曇り掛かっていた。

「…着いたな、今そつちの扉を開けるから少し待っている。お前の方は何時でも出られるようにエンジンは切らないでおいでくれ。」

「…」

あれから数10分後。特に何も無く車両での移動は済んだ。まあ、特に話すことなんてなかったから…

「少し段差がある、踏み外すなよ。」

「…分かってるわ。」

それにしてもあの人はどうしているのかしら。あまり、戦闘には向いていないようだったから何も無いと良いのだけれど。私は来た道の方を見ながら考えに耽った。

「これからお前の処罰が下りる、かなり短い時間だな。中の方にハイキャストが待機させられている。結果はしつかり聞くんだぞ。」

男は扉の鍵をカード認証で外した後、部屋の中で手錠を外すとすぐに部屋から出て行った。恐らくだけれど、人の手が介入しないということはあまり深くは考えられないのかしらね。それが良いことなのか、悪いことなのかは分からないけれど…

「フィリンさん、ですね。お待ちしていました。そちらにおかけ下さい。」

「……ありがとう。」

部屋に入つて少し奥に進むと待機状態だったハイキャストが声を掛けてきた。全く、外側は私と同じような物なのにね……。やっぱり不気味だわ。ハイキャストつて。

「では、手短かに要件を済ませます。これから説明を行いますので良く、聞いておいてください。それではまず……」

「…… というようにこちらには報告が行われています。特に不備はありませんね？」

「…… そうよ、私がしたことはそれで間違いないわ。」

私はあの時自分がしたことについての確認をしていた。特にあちら側の報告と違った点が出ることも無くスムーズに話は進んで行つたわ。それにしてもこれ程の細かい報告、誰が作成したのかしらね……

「では、そのことは受理した上で貴方に今回の処遇をお伝えいたします。本部との連絡を取りますから少々お待ちください。」

そう言ううとハイキャストは目を閉じて通信をし始めた。

「……」

「…… 処理が終了しました。結果の方をお伝えいたしますね。」

それで、特に気にかけることも無く椅子に座り続けていると通信が終わったのか目を開けたハイキャストが再び口を開いた。まあ、どんな結果だとしても受け止めるつもりよ…… そう覚悟を決めてハイキャストに答えを聞いた。

「それで、私の処遇は…… 処罰はいかほどなのかしら。」

「はい、では順を追って説明いたします。まずですが貴方はアークスの任を解かれることになりました。その為に次の役職としてM・Sへ配属されることになりました。」

「…… そう、M・Sね。」

もっと重いものを想像していたけれど、どうやらあては外れてしまったみたいね…… そう思いながら話の続きを聞く。

「はい。なのでこの後、早急にM・S支部のAブロックへ向かって下さい。そこで備品、配属先などの指示があります。良く聞くようにして下さい。説明は以上です。」

そう言うとう自分の責務は全てこなしたと言わんばかりに再び待機状態に入って行ってしまった。全く、気楽な物ね……

「はあ…… 場所は、少し遠いわね。急がないと。」

そうして地図を確認してその支部の場所を特定できた私はいつの間にか空いていた部屋の扉を抜けて建物から出て行った。

E-20 「転属」

「何だか、寂れた場所だったわね。もつとM・Sには人手があると思っていたのだけ
れど……」

M・Sの支部で備品の受け取りと諸々の説明を受け終わった私は次に指示された場
所へと向かうために最寄りのコンベアへ向かっていた。

「まさかハイキャストしか居ないなんてね……人は全員現場に当てられているって
ことかしら。」

ちなみに支部では不思議なことばかりだった。だって、生きている人間が1人も居な
かったんだから。居たのは汎用タイプのハイキャストだけ。何だか不気味だったわ。

「旧型艦なのが理由の1つだと思いたいけど、まあ気にしても仕方が無いことよ
ね……」

基本的に重要度の高い艦、つまり比較的新しい艦の方が優遇される。まあ、人手が多
く回されるってところかしらね。そう考えればこんな状態なのも理解できるわ。

『識別カードを挿入してください。』

「カードね、えっと…… あったわ。」

ただ、最近の状態を見ればこの艦にも増員をした方が良いとは思うけれど……上には上の考え方があるのかしらね。

『認証中です…… 認証完了、ロックを解除します。場所を指定してください。』

「行き先はさつき貫った地図の位置で、ここよね。」

考えたいことはあるけれど…… 私は目先のコンベアに行き先を的確に入力していた。

「……この辺りね。」

私はコンベアから降りると端末で地図を確認した。

「それにしても、見にくいわね。物理端末なんて昔に少し使ったくらいよ。全く……ちなみに以前まで使っていた端末は回収されて、今は新しく支給された物理端末を使っているわ。正規のアークスでないとはあれは所持できないから。」

「それにしても静かな場所ね…… こんな場所でM・Sが必要になることなんてあるのかしら。」

私は建物を探しながら周りの風景も視界に入ると人通りの少ない静かな通りが見えた。

「まあ、私のようなを送り付けるには最適な場所辺境なのかしら。面倒なことを起こさ

れても隠すことが簡単に来るものね、処罰としては正解だわ、大正解。」

それにしてもこの辺りの風景に見覚えがある気がするのは気のせい…… やっぱり気のせいね、私の自室からは遠すぎるもの。

「……？あのマーク、M・Sのマークよね。」

そうして探していたけれど、ある建物が視界に入った時にM・Sのマークの入ったドアを見つけた。私の眼の拡大機能がおかしくなければあっているはず。取りあえず私はその建物に近づいた。

「……もあまり管理が行き届いていないわね……」

ドア越しに見える室内の様子を見ると清掃の行き届いていない床が見えた。人手が足りない影響は意外と大きいのかしらね。

「まあ、贅沢なんて言えないわね……」

それで、引き続きドアの前で中の様子を見てみると不意に後ろから足音が聞こえた。

「あの、何か御用ですか？」

続けてその足音の主の声が聞こえてくる。

「御用も何も私は今日ここに配属にな……って、貴方は。」

返事を返すために私は振り向くと、見覚えのある顔がそこにはあった。

「あつ！フィリンさんじゃないですか。どうしてここに？」

この間のM・S、ノアって言ったかしら。出会ったときには不明瞭にしか顔を見ることが出来なかったからあまり覚えていなかったわ……

「どうしてって……私はここに配属になったのよ。貴方こそどうしてここにいるの？」

そう聞き返すと彼は困ったように返事を返して来た。

「いえ、ここは僕も配属になっているところですから……取りあえず中に入りましようか。」

色々と言いたいことはあるけれど、私は一旦抑えて彼と一緒に建物へ入った。

「二度来たけれど、あまり覚えていないものね……」

「まあ、あの時は落ち着けるような状態じゃなかったですから。」

中へ入ると何となく覚えている内装が広がっていた。やっぱり、完全には覚えてはいなかったけれど。

「少し飲み物を取ってから行きますから先に待機室で……えっと、あの部屋ですね。先に行かれてください。」

「分かったわ、明かりのついてる部屋ね。」

指で指された方を見ると明かりが洩れている部屋が見えた。あそこが待機室ね。

「それにしても質素な作りね、駐在所の規模なら当たり前なのかもしれないけど……少し心細いわね。」

待機室、ロッカールーム、倉庫…… 本来に必要な部屋しかないわね。まあ、費用がかけられないのは以前から聞いていたけれどまさかここまでとは思わなかったわ。

「ここは、何となく覚えてるわね。あの机の後ろだったかしら……」

私は微かに覚えていた机の方を見た。あの時は椅子に立てかけられて……ここだけは記憶にあるわ。

「あ、その席の椅子は今は誰にもあたっていないものですから座られて大丈夫ですよ。」

そうして待機室を眺めていると用事を済ませた彼が待機室に入ってきて来ていた。取りあえず私は言われた通り近くにある椅子を手で寄せて座った。しばらくは使っていない椅子みたいね……

「ここに配属になったということはこのうちのコンソール台の1つがフィリンさんに割り当てられるはずなんですけど…… ちよつとバーンズさんに聞いてみますね。」

そう言うのと彼は無線機を取り出した。バーンズ…… もう一人いた方のM・Sだったかしら、彼よりも少し大きいぐらいの。

「あ、バーンズさんですか？少し聞きたいことがあって、はい。そちらの方に何か連絡とかって……」

それからしばらく会話をして、無事に連絡を取ることが出来たのか無線機の電源を切ったのが見えた。

「…… どう？連絡はとれたかしら。」

「まあ、一応はですか。バーンズさんの方には連絡が来てるみたいです。僕はまだ経験が浅いですからそう言った連絡はバーンズさんに行くみたいです。」

どうやら彼には連絡は来ていなかったらしい。まあ、教えることに適していないという判断なのかしらね。

「取りあえず、バーンズさんから簡単なことは教えておいて欲しいと言われたので軽く説明していきますね。」

「じゃあ、お願いするわね。私は貴方よりここには詳しくないから。」
そうすると彼はまず目の前にあるコンソール台の説明から始めてくれた。

「…… まあ、こんなところですよ。倉庫はそれなりの事態じゃないと滅多に使わないので使用頻度もですか。」

倉庫の方を見ながら彼は言う。

「あの倉庫にはそういう役割があったのね。」

「はい、良ければ後でお見せしますね。一応の確認は必要ですから。」

「ここまでで彼は様々なことを教えてくれたわ。彼自身は経験が浅いと言っているけど……そんなことは無いように感じる。まあ、日が浅いってことなのかしらね。」

「……ああ、そう言えばフィリンさんはもう備品の確認はしましたか？」

「備品……支部で貰った物？」

「支部で貰ったのなら多分それだと思うんですけど……少し見せて貰って大丈夫ですか？」

「大丈夫よ、少し待ってね。」

そこで私は少し前に支部で貰った備品の入った箱を出して彼に見えるように机の上に出した。

「えっと……ああ、僕が貰ったのと同じデザインですね。毎回違うものが使われるのかと思ってましたけど、どうやら違ったみたいです。」

そう言うのと彼は自分の机の方？から自分の空になった備品箱を見せてくれた。それは確かに私の貰ったものと同じ物だった。

「ちなみに中はもう見ましたか？色々と入っているの目目は通しておいた方が良いでしょうけど……。」

「……いえ、まだ開けてないわ。」

そうして私は内容物を確認する為に備品箱を開けた。箱は特に何かで止められているわけでもなくすんなりと開いた。

「んーと、中身は特に変わってないみたいですね。マニュアルとか、書類とかがいくつか入っているだけなんですけど……」

彼の言う通り箱の大きさに反して数枚の書類と薄いマニュアルが入っているだけだった。マニュアルは端末で見れるようになっていけるけれど、実本でも用意されているみたいね。

「……あれ、これはなんだろう。」

中に入っているものを粗方取り出した私は1つずつ雑に確認をしていると彼は何かを見つけたようで机の上にあった物の1つを指で指していた。これがどうかしたのかしら。

「すみません、見せて貰っても良いですか？書類じゃなくてこれなんですけど……」
そう言うとうと書類を1枚捲って彼はその目当ての物を私に見せてくれた。

「……ステンスルシート？」

それはM・Sのマークの形に切り抜かれたステンスルシートだった。

「これ、何に使うんでしょうね。M・Sのマークの物とB2つて切り抜かれてるのが

ありますけど……」

「分からないわね……特に何か説明用紙がある訳でもないし、マークを付けることは分かるのだけれど。」

もしかして私のパーツに使ってことなのかしら。識別の為に付けるといふのなら筋は通るわね。

「ちよつとバーンズさんに聞いてみましょうか。今無線機を……」

「いや、ノア君。その必要は無いみたいだぞ。」

それで彼が無線機で連絡を再度取ろうとした時、気が付くとそこにはバーンズと言う男が居た。

「あれ、現場の方はもう大丈夫なんですか？」

「まあな、普段通りの小競り合いだよ。組織性が無いだけまだ良いところさ。」

「あまり覚えてはいないけれど……この人がバーンズね。」

「……まあその、なんだ。こうなるとは俺も思っていなかったがよろしく頼む。」

「……こちらこそ、お願いするわ。」

そうして私はバーンズと手を交わした。

「……よし、挨拶はこのところに収めておいて俺の方からも説明をしておくぞ。」

そう言うのとバーンズはさつきまで私とノアで話していたステンシルシートを手を取って説明をし始めた。

「これは俺の方から説明しておかないとな、説明書きも無かっただろ。」

「…そうね、このシートが入っているだけだったわ。」

私は備品の入っていた箱を手にとってバーンズに見せた。

「これは何に使うんですか？印字するのに使うのは分かりますけど…」

「まあ、使い方は特に変わらないさ。問題なのは位置だ。」

そう言うのとバーンズはシートを掴むと私の傍に来た。

「よし、少し付けさせてもらうぞ。直ぐに終わるから待つてくれ。」

するとまずは私の右肩にM・Sのマークのステンシルを張り付け、次に2枚目のB2と切り抜かれたシートを右の大腿に付けた。

「まあ君はキャストだからな、M・Sの制服を着ることが出来ないことを考慮して基本的にキャストのM・Sにはこうしてマークを付けて貰うことになっている。嫌かもしれないが我慢してくれよ。」

「良いわよ別に、マークの1つや2つ…。」

「…そうか、なら良いんだが。」

そうしてバーンズはシートの部分に向けて白色のスプレーを吹きかけた。

「一応消せるインクで塗り付けてあるから何かあれば消してくれても構わない。だが、仕事の最中は必ず付けるようにしてくれよ。」

「相分かったわ。」

塗り付けるのが終わるとバーンズは私にスプレーを投げ渡してくれた。

「……まあ、コンソールはこの机を使ってくれ。片方の机よりかはまだ綺麗な方だからな、もしあれなら軽く掃除してから使ってくれ。急な連絡でまだ掃除が済んでいないものでな、悪い。」

「良いわ、道具があるだけ良い方よ。」

私は自分にあてられた机の方を見た。少しだけ埃が積もっているけれど、隣の方のゴミが散乱しているよりは良いかしら。

「ノア君からは聞いているとは思いますが……基本的に動くことは少ないからな。気長に待機しておいてくれ。」

「大丈夫よ、待つのは慣れてるわ。」

私はマークを付けた部分を触りながら答えた。落とせるインクだと聞いてはいたけれどしっかりと塗れるようね。

「そうか、じゃあ少し俺は倉庫の方に行っているから何かあれば呼んでくれ。」

そう言うとはーんズは通路の方に出て行った。

「…… どうですかね。」

「どうって…… 何がかしら。」

そこですることが無くなっているとなアが話しかけてきた。

「いや、やっついていけるかどうか、とかですか。」

やっついていけるかどうか…… まあ、まだ仕事を實際にしていなからまだかしら。

「まだ分らないわ、雰囲気は嫌ではないけどね。アークスなんかと比べれば……」
確かに現状のアークスと比べればまだ良い方なのかもしれないわね。

「まあ、貴方もよろしく願うわ。」

「あ…… はい！」

そうして私はノアとも手を交わした。

E-21 「違和」

「……大体同じ物なのかしらね。」

自分にあてがわれたコンソールの初期設定を終わらせた私は手を休めて、口から言葉を漏らした。

「まあ、フィリンさんの今まで使っていたホログラムタイプより使いにくいとは思いますが……基本的な機能は同じですから困ることは無いと思いますよ。特に仕事で使う機能はそういった高度なシステムを使ったりはしなくていいです。」

そう言うとなら自分の机の方のコンソールを軽く操作すると画面上のフォルダから文書データのファイルを一つを取り出して見せてくれた。何の文章なのかしら……

「二応例になるかは分からないですけど……これ、この間僕が担当した仕事の報告書です。」

時刻、区画、状況説明、対象の特徴……基本的な項目に沿って作成された文章が画面に映し出された。やっぱり、こういうところを見ても几帳面なのね。文に性格が出るもの。

「こんな程度で、まあ文書の作成位にしかり使いませんからその辺りについては大丈夫

ですよ、心配しなくても。」

あらかた文章を私に見せ終えたノアはそのファイルを元のフォルダに戻すとコンソールの電源を落としてから深く椅子に座り直した。

「：なるほどね、ありがとう。確かにこれなら多少は古くても仕事で使うのなら十分過ぎるわね。」

私もノアに続いてコンソールの電源を落とした。まあ、本当のところは今までの端末を使いたかつたけれど……あくまでもこれは処罰、贅沢は言えないものね。

「これ自体を使うのも仕事が終わった後に少しか、それとも何かの書類を出さなければならぬ時だけです。それからそれ程にまで使用頻度が高い訳でもないですね。実際頻度が多いのはこの待機室で待機している時間ですから……。」

ノアは端末で時間を確認しながら少し面倒にそう告げてくれた。思ったよりも時刻はまだかなりある。

「それでも、そういうことは良いことなんじゃないのかしら？仕事が少ないということとはリスクが少ないということよ。」

私は椅子に座りながらノアと同じように話を続けた。仕事、M・Sのこの仕事が好きであるなら話は違うけれど、どう見たところでノアはそういう人間じゃなさそうだしね。まともなアークスを一人相手に鎮圧することも正直なところ難しそうに見えるわ。

「はあ、確かにそうなんですけどね、何も無ければ安全なのは。」

ノアはそう返してきたけど、あまり良い顔はしていなかった。

「でも、最近だとそれなりに組織性を持った人達が相手ですから結局のところはリスクが高いんですよ。近いうちにあつたような簡単な仕事でも相手は普通に武器を持っていますから。」

彼は腰に下げていた武器の位置を正しながら言う。恐らく、組織性があるというのはC・R・S・Fなども含めたそれなりに脅威になり得やすいようなところの事だ。基本的にそう言った場所では曲がりかなりにも現役のアークスが相手になるわけだから……難しいことだわ。

「本当ならこういうことじゃなくて農業区画の担当とか、そう言ったことがしたかったですけど……僕にはM・Sの方が合っているみたいで駄目でしたね。」

どうしようもない、そういうった風貌で答えてきた。一般員の担当できる範囲でのリスクの低い仕事ね……良いかもしれないわ。

「おい、待機しているところ悪いがちよつと話したいことがあるんだ。フィリンは倉庫の方に来てくれ。」

「ん……少し行ってくるわ。」

そうしてちよつとした無駄話をノアと続けていると不意に通路の方側からバーンズ

に呼ばれた。突然な物だから少し驚いたけれど。

「じゃあ、また。」

そこで私は一旦話を切り上げてから最初に入ってきた時に少しだけ見えた倉庫の方へと向かった。

「……取りあえず大きさは大丈夫みたいだな。持ってみた感覚はどうだ？」

「それなり、かしらね。扱いにくいわけではないけれど……」

呼ばれてから数分後。私はバーンズと一緒に仕事で使用する武器装備についての説明を受けていた。

「でも基本的な作りはアークスにあるようなものと同じなのね。元アークスであればなんなく出来そうだわ。」

私は持っていたライフルを右手だけで支えながら答えた。確かに私が今持っているライフル、バーンズの拳銃、どれも現行のアークスでも普通に扱うことが出来そうだ。

「俺もアークスだったが……ここにある武器は500年前よりも前に作られたアークス用の武器の派生形だからな。今の武器に対してもそういった繋がりがあるのかもしれない。」

500年よりも前、つまりはアークスが出来た頃に作られたものの派生形だと言うこ

とかしらね。そう言うことであるならこの構造の類似性も分からなくもないわ。

「まあ、使う理由としては……使わざるを得ない理由としてはそこまでのコストを掛けたくないから、だな。」

バーンズは腰から自分の銃を取り出すと各部の確認をしながら話を続ける。

「M・Sはあくまでも各艦それぞれの治安維持を行うためだけに存在する公式に定められた組織だ、故に規模も大きい……が、取り扱う仕事はの大半は武装を必要としない。特にダーカーに使用するような程の火力なんてあつたとしても無駄に力と費用を浪費するだけだ。」

「そうなるわね……」

私は一旦ライフルを触る手を止めてバーンズの話に耳を傾けた。

「まあ、そう言ったことから削れるものは削るとしてこういったやり方がされているか。さっきフィリンが言ってくれた通り機能面では一般のアークスが使うものと大差ない物だが、挙げるとするなら火力が低くてな。それだけは困ったもんだ。」

そう言うのとバーンズは自分の持っていた銃、拳銃のシリンドーを目に見えるように出してから私の方に向けた。何だか、これだけシンプルな構造なら壊れにくさもあつて良さそうね。どんな状況でも使えるのはありがたいことよ。

「一応現行のライフルで使用されている連発弾を装弾することが出来るようになって

はいるが…… 致命傷にならないことが大半だ。」

シリンダーから1つ連発弾を取り出すと私に見せてくれた。見慣れてはいるけれど…… これを拳銃にも使えるようにするのは良い改良なのかしらね。

「最低でも5発、更に言うのなら死に至るほどの致命傷を負わせないことを条件に的確に相手に撃ち込まなければな。特にキャストであるなら頭部の接続部分を狙うしかない。当てることは当然至難の事だがな。」

そうしてバーンズは自分の銃をしまった。

「…… ところでファイリンは今のところはライフルか？」

銃をしまったバーンズはそう聞いてきた。

「そうね、以前から良く使っていたのはどちらかと言えば拳銃よりもそれなりの大きな小銃だったから。」

「続けて私は腰の位置にまでライフルを持っていくと正しい位置で構えたりして安定させられるかを確かめていた。」

「使えそうなら良いんだが……」

「…… ええ、火力がどうかまでは分からないけど使うぶんには問題ないわ。これで大丈夫。」

大体の銃の機能を確認し終えた私は一旦銃をテーブルへ置いて返事を返した。少し

足りないとは思うけど……用途で考えればこのレベルでも大丈夫そうね。

「そうか、じゃあそいつはこれからフィリン、君が管理するようにしてくれ。」

そう言うのとバーンズは近くにあつた簡易的な椅子から立ち上がった。

「ちよつとした手続きがあるが、君だけだと時間が掛かるだろうしな。俺の方も同時に取りかかるからなるべく早く終わらせられるようにしておく。」

「分かった、私の方もいつでも出来るようにしておくわ。」

そうして私は倉庫の電気を消してからバーンズと揃つて待機室へ戻つた。

「……物理キーボードは癖が強いわね。」

倉庫から戻つた私は早速、使用武装の登録申請の文書をバーンズにも手伝つて貰いながら作成していた。けど、物理キーボードの独特な癖の所為で中々進まずにいたの。

「やっぱり、勝手が違うんですかね……」

ノアが横から声を掛けてきた。確かに勝手が違うと言えばそうもなるわね……

「何というか、この押し込みの具合が違うのよ。ホログラムタイプのキーボードはもつと軽いのだけれど……まあ、慣れるしか無いわ。」

「慣れるのが一番良いんですけど……ほら、人によつて好き嫌いがあるように合う合わないもありますから出来ればホログラムタイプの物が用意できれば良いんですけど

ね。」

ノアは精製水のパックをひと吸いしてから話を続ける。

「でも、決まり事は決まり事ですからそんなのは通らないですよね。自分勝手過ぎますし。早く慣れることが出来れば良いんですけど……」

「……まあ、気持ちだけで十分よ。大体こつちに来る前にホログラムタイプの端末を回収されているから何となくは察していたもの、貴方が深く考えることじゃ無いわ。」

「は、はあ……」

そうして特に脈略も無いような話をそれからしばらく続けて数分が経った頃、丁度バーンズとほぼ同じタイミニングで申請用の文書を作成し終えることが出来た。

「良いタイミニングだったな、特に意図していなかったが……まあ、確認するぞ。」

そう言うとバーンズは自分の机から移動して私のコンソールの方へ回ってきた。席を立った直後に私の方のコンソールの方にもファイルが送られて来る。

「二応マニュアルには沿ったわ、どうかしら。」

私がそう言うとバーンズはコンソールのキーを操作して今作成した文書の確認を始めた。意外と速読なのね……

「……うん、特に挙げる程のミスは無いな。送るのならこれで大丈夫だろう。今俺の送ったデータと合わせて支部の方に転送しておいてくれれば後は勝手にやってくれ

る。」

「転送先を支部に……これで大丈夫ね。」

私は指示通りに転送先を支部にして文書を送った。

「……何も無いですね。」

あれからまたしばらく経った後、コンソールの稼働音だけが静かに響く中でノアが突拍子も無く口を開いた。

「普段何も無いのは分かっていたけれど、まさかここまでとは私も思わなかったわ……」

私も釣られて口を開いた。

「さっき来た連絡でバーンズさんが現場に行ったのが最初で最後で……来てないです、連絡。」

そう、バーンズは数分前に入った連絡で現場に向かっている。誰が向かうかどうかは少し考えられたけど、現場に居る人間が過去にバーンズが対応した人物だったのもあって彼がもう一度向かうことになったの。それで今はノアと私の2人だけという訳よ。

「……このまま何も音沙汰無いまま当日終わるなんて無いわよね？」

少し冗談混ざりにノアに聞くと、案外それでも無いような声で返ってきた。

「いや……意外とそう言う日もあるのであり得ますよ、それ。」

取り敢えずすぐに仕事に慣れる必要はないかと考えを落ち着かせて、もう一度深く椅子に座ろうとした時にある意味で私が待っていたものが来た。

「……！連絡が来、つて貴方も？」

「は、へ？フィリンさんですか？」

けれどそれは2人に同時に、だったけれど。

E-22 「現場」

「特にどつちが行かなくちやいけないとかは無いですけど……どちらも似たような件みたいですから取りあえず自分の方に入った連絡の方を対応しましょうか。」

連絡が入った後、少しの間固まっているとノアの方からはつとしたように口を開いた。

「自分の方にかかって来た方をね、分かったわ。」

自分の無線に入ったものは自分の仕事として割り当てられると思っていたけれど、どうやらその辺りは現場の裁量なのね。

「あ、あと、僕の方のコードを渡しておきますから何かあれば繋げてください。マニュアルだけだと理解しにくい部分もありますから。」

「…… ありがとう、受け取っておく。」

私はノアから連絡用コードを貰った。端末の方に通知が入る。

「それと武器は面倒ですけど必要のない場合でも持ち歩くようにして下さい。決まり事なものもありますけど危ないですしね……」

「言われなくとも、是非持ち歩かせて貰いたいものだわ。そうでないと気が知れない

もの。」

そうやって私はコンソール台の下からカービン型のライフルを取り出した。やっばり、間近で見ると古きは否めないわね。強化樹脂で出来た外装部分が黄ばんで劣化しているもの。

「あれ、フリーリンさんは拳銃じゃないんですか？」

するとノアが不思議そうにして聞いてきた。

「拳銃じゃないといけなかったかしら……」

私は銃に不備が無いかどうか確認しながら答える。

「い、いや……あんまり見たことが無くてですか。バーンズさんは僕と種類は違いますけど拳銃を使っていますし、他のM・Sの方も基本は拳銃を使っていましたから。あるのは知っていましたけどね。」

「そうなの？意外と居ると思っていたけれど。」

「まあ、取り回しが悪いからじゃないですかね。狭い場所であると使いにくいですし、何よりも持ち歩くのが大変ですからね。」

確かにその言葉は間違っただけではないなかつた。狭い場所、つまるところ部屋の中であるとライフルのような長物を扱うのは非常に不効率。持ち歩くときにも人であればそれは大変になるものね。

「確かにそれには一理あるわね……でもまあ、持ち歩くことは特に問題は無いわ。こうすれば大丈夫だから。」

そうして私は銃を片手で掴むと腰にある右側のスリットにライフルを滑らせた。特に音は鳴らないけれどしつかりと保持される。

「どう？これで両手も塞がらないし、動くのも簡単でしょ。」

軽く私はその場で回転して見せた。保持されているお陰で腰に取り付けたライフルは微動もしない。

「そんな使い方も……キャストの方は便利なんですね。装甲が付いているので十分凄いなと思ってましたけど、これならもつとですか。」

ノアは少し驚いたように私の方を見る。ノアはアークスになったことが無いから珍しく見えるのかも知れない。基本的に一般員のキャストにはこういった物は無いし、見かけることも少なかったんでしょね。

「まあ、アークスになっっているキャストはほとんどがこういうものが備え付けられているわ。直ぐにでも武器を取り出すのは重要なことだしね。覚えておくと便利かもしれないわよ？」

「最近ではキャストの鎮圧を行うことが多いですからね、覚えておいた方がですか。」

キャストの鎮圧…… やつぱり、C・R・S・Fは確実に進んできているみたい。今

はどうにも出来ないことだけれど頭の隅には残しておくほうが良さそうね。

「それ以外にも何かキャストのことで分からないことがあれば、逆に私に連絡をしてくれて構わないわ。」

そう言うところアは少し困ったような、恥ずかしいというような顔をする。

「で、でも、フィリンさんに連絡なんて迷惑にならないですか……？」

何か複雑な事情でも話すかと思っただけれど、大したことじゃなかったわね。私はそれに対して軽く返した。

「迷惑なんて、大丈夫よ。私こう見えて普段は暇だから。」
軽く手を翻しながらそう答えた。

「…… もう少しで着くわね。」

端末の位置情報を確認しながら連絡にあった現場の位置を確認する。

「それにしてもたかが言い合いでM・Sを呼ぶなんて呑気なものね。」

私は連絡で聞いた話の内容を思い返しながらかう思った。どうやらノアによれば種族間のトラブルらしい。

「彼の方も何もないと良いけど、あの様子なら大丈夫そうね。」

待機室を2人で出る時に少し顔色を見たけれど特に心配をするほどのものではな

かった。

『一般区画、Eの4番に到着しました。お気をつけて。』

そうやって考え事に耽つているといつの間にか乗っていたコンベアは目的地に到着していた。到着を知らせるアナウンスが鳴る。

「さて、ここからは遠くは無いはずなんだけど……」

コンベアから降りた後、すかさず端末を取り出して位置を確認する。やっぱり物理端末は難しいわね……

「今居る場所がここならもう少し奥に行つた路地、あつちね。」

大体の位置が掴めた私は少し早足で目的の場所へと向かった。一応スラスタはあ
るけれど、艦内での使用は原則禁止だから使えないわね。

「ここであつていると思うけれど……あれね。」

それではばらく歩いてみると少し大きい会話が聞こえてきて、その場所である路地が
目に入ると2人組が目に入った。私は路地に入つていつて近づいた。

「だからお前の方が……って、ようやく来てくれたか。」

それなりに近くまで行くと片方の男が私が視界に入ったのか反応を返して来た。
アークスがこんなところに居るなんて、よっぽど暇なのね。

「楽しいお話のところ悪いわね、M・Sよ。連絡を出したのはどっちの方？」

そう聞くと男の方が反応した。そこまで感情が高ぶっているわけじゃなさそうね。まともな会話が出来るそうで安心したわ。

「俺の方だ。こつちの方とまともな会話が出来るようになってな、それで仲介して貰いたくって呼んだんだ。」

すると男はもう一人の方、女性の方を指して話した。見る限り特に何かするようには見えないけれど……

「あんたの方は状況を詳しく知らないだろうから説明するが……俺が歩いていた時だ、もちろんここをだがその時にこの女、このデューマン^{化物}がふらふらしながら歩いて来て俺にぶつかって来やがったんだよ。」

「ぶつかられて、それでどうしたの？」

ふらふら歩いてきた……この人の様子を見る限りでは少し疲れているからその様になっていたのは本当みたいね。私は話の続きを促した。

「それで、俺は謝罪しろと言ったんだがこいつは謝りたくないと言いつつ続けるばかりで話にならないんだ。」

男はそう言うのと彼女の方に向き直って話を続ける。

「おい、いい加減謝ったらどうなんだ？お前が悪いのは明らかなんだぞ。」

「……私は、何もしていません……断じて。」

声を掛けられた彼女はとても落ち着いた様子で返事を返した。私の主観だけど、そんなことする人にはやっぱ見ええないわね。

「……この通りさ。どうにかできないかね？」

「どうって、私はM・Sでそういうのは専門じゃないのよ。」

私は手を軽く上げて意思を示しながら出来ないという旨を伝えた。専門の연구원なら出来るだろうけど、私はあくまでもただのM・Sだから。

「だけど……一つだけ解決させられる方法はあるかもしれないわね？」

そう言う男は少しだけ機嫌を持ち直したのか期待をするような顔をして私の方を見てきた。

「そいつを待つてたんだ。それで、その方法をするには何をするんだ？」

「大丈夫よ、直ぐに終わるから時間は要らないわ。」

「おお、じゃあやつて見せてくれ。俺も忙しいんだ。」

忙しいと言つても本職の方が忙しい訳じゃなさそうだけれど。

「あらそう、なら丁度……良かったわね！」

その言葉を合図に私は思い切り男の腹部に向かって拳をめり込ませた。アークスの制服のお陰でそこまで致命傷にはならないでしょうけど。男は2m程吹き飛ばされた。

「……貴方、大丈夫？あれに何かされたんでしょ。」

体制を戻した私は彼女の方に向いて声を掛けた。すると下を向いていた顔を上げて驚いたような表情を私に向けた。

「へ、あ、はい……」

震えたような様子の子の声色で私に返事をしてくれた。もしかしてやり過ぎたのかしら……

「……ごめんなさい、怖かったわよね。でも貴方には危害は加えないわ。安心して。」
私は肩に手をやって落ち着かせるように働かせた。私の手は暖かくないけれど……

「……この、やりやがったな！」

するとさっきの男は持ち直したのか既に立ち上がっていた。意外と早いわね。

「やりやがったも何も私は彼女の代わりをしただけよ、何も悪いことはしていないと思っただけ。」

「ふざけるな！ たく、こうなったら仕方ないな…… お前にも同じ目になって貰う！」
そう言うとなんか大剣ソウを取り出して構えを取り始めた。どうやら武器の制限解除を出る程度の力はあるみたいね。

「はあああああああ！」

「！」

次にどう動くか、そう考えていると男は何の前触れも無く突っ込んできた。

「くそ、次は当ててやる！」

「紳士的じゃないのね、不意打ちするところくなことにならないわよ！」

直ぐに動くことが出来なくて、少しだけ胴体部の装甲板を撫でるように大剣が通った。

「そつちが先に始めたんだから、容赦しないからね。」

取りあえず私はそこで今の今まで抜けていなかったカービンライフルを腰のスリットから外した。保持が外れて私の手に納まる。

「さつきから言わせておけば、この！」

男はそう言葉を吐き捨てるともう一度向き直って切りかかって来た。今度は距離が近くて直ぐに行動が始まっていた。

「隙が、多いわね！」

次に来た一振りはかなり上を狙ったものだった。そこで私は少し体を屈めてから伏せるようにして交わして、すれ違いざまに後ろ足で蹴りを入れた。

「ぐっ……この……」

「中々に、身体だけは硬いみたいね、キャストの硬い蹴りを喰らってもこんなだなんて。常人なら肋骨が軽く砕けてるわよ。」

アークスの制服の性能の高さは相変わらずみたいね。私はキャストだから着たこと

は無いけど。

「うるさい、うるさいぞ！M・Sの癖に、ああああ！」

すると男は今までで一番大振りに大剣を振りながら切りかかって来た。避けるのも簡単じゃないのよ！

「もう、怪我しても知らないんだから！」

そうして私は瞬時に安全装置を外すと切りかかる男に向かって、胴体と右腕に集中して弾を放つ。狭い路地に軽い破裂音が数回響いた。

E-23 「対処」

「……うん、まだ生きてるわね。」

短い揉み合いの後、武器をスリットに戻した私は音の容態を確認していた。

「全く、これだけやっても痣だけなんて腐ってもアークスはアークスか。」

吹き飛んで消失した制服の部分から肌が見えるけれど、目視で確認できる限りでは何処からも出血はしていないようだった。

「取りあえず連絡の方を通してこの男は移送ね。そうなると後はこっちか……」

私は傍にいた彼女デューマンと同じ目線になるようにその場でしゃがんだ。

「ごめんね、身体の状態を見せて貰っても良いかしら。」

「え、ええ……」

聞くと彼女は少し動揺しながらも着ていた上着を脱いで状態が確認しやすいように動いてくれた。それにしても彼女もアークスだったのね。

「……ありがとう。」

そうして私は服をはけながら身体の程度を確認すると最初の内は特に何も問題は無さそうに見えた。腕とか足みたいに直ぐに見える場所から確認をしたけれど痣のよう

な外部の怪我は見受けられなかったしね。

「これなら精密検査を受けて、身体の中の方に異常が無いかどうか確認をすれば問題な……い……」

けれど、それが服に隠れて見えていなかった部分に差し掛かると今まで見えていた部分とは全く違う状態になっていることに気が付いてしまったのだ。

上着がはけられて見えるようになった部分を見終わつた後、少し詳しく見るために服の一部分を更にはけるとそこには大きな痣がいくつも残っていた。

「……そこまではしていないだろうと思つていたけど、まさかここまでとはね。私も想定していなかったわ……こんなの。」

「……私の方もこんなことは初めてでした。」

私がそう言うのと彼女の方も顔を少し歪めながらもそう答えてくれた。

「じゃあ、ここに至るまでに一体何があつたのかを教えて貰える？一応そういう手順があるからなるべくそうしたいけど……嫌であるなら話さなくても大丈夫よ、これは尋問じゃないから。」

取りあえず大きく痣になつている部分に対して軽い応急処置を施しながら私は彼女から詳しい状況を聞こうとしていた。形だけではあるけれど一応報告書は作成しなけ

ればならないそうだしね、出来れば聞きたいところだけどこれは強要するものじゃないから聞けるかどうかは分からないか。

「いい、いえ… 拒否するほどの事ではないですから。大丈夫です、お話しできます。」

… そう思っていたけれど杞憂だったみたいね。

「まあ、それでも深く込み入ったところまでは聞かないわ。概要的に現場を理解できればいいから。」

「はい…。」

「それじゃ、取りあえずこの男に遭遇したところから始めましょうか。」

私は引き続き彼女の痣の部分を処置しながらも話を聞く。

「… あれは数分前のことでした。今から大体20分前でしようか。」

すると彼女は路地を抜けた先の方を見つめながら話を続ける。

「普段通りに同じ帰り道を通って、それで自分の部屋に戻るところだったんです。今日の仕事が丁度終わったところでしたから。」

そう言うのと彼女はホログラムタイプの端末を目の前の虚空に映し出して、今日の任務記録の情報を見せてくれた。確かに任務が終了した時刻は今から数十分前になっていた。

「それで普段通る場所でもあるこの路地の付近を通った時に男の方… この方が肩

からぶつかって来て、それですか。」

まあ、大体予想はついていたけれど手を出したのは向こうの方が先だったみたいね。

「最初の内は私からではないと反論したりしましたが、最終的には路地に連れ込まれて一方的に……」

そこで彼女の話は終わった。まあ、この男が見る限りであまり頭が冴えていないことを考えればこれ以上のことは起きてなんかいやしないだろうからこれで十分か。少しでも考えるところがあればわざわざM・Sなんて呼ばないだろうし。

「……そう、酷い目にあつたものね。」

私は彼女の傍に寄って落ち着けるようになだめた。

「でも、安心して。このことに関してはM・Sが対処するから同じようなことが起こることも少なくなるはずよ。」

片腕でなだめながらも私は開いている手で通信機の電源を入れる。

「もし、ノア？こつちの方の処置が終わつただけけれど怪我人が居るわ、勿論対象もね。それでここからどうすれば良いかしら。」

連絡の接続先はノアだった。先程貰つたコードを入力し終えて回線が繋がる。

『えーつと、支部のコードとメディカルセンターのコードが端末に入っているはずで
す。確認してもらえますか？』

聞いた私は物理端末を取り出して、ノアの言う通り登録されているコードの一覧を確認した。確かに今言った2つは最初から登録してあるわね。

「大丈夫よ、しつかり入ってる。」

『なら良かったです。後はそのコードの方に連絡を掛ければすぐに車両が来ますから、そのまま待機してください。番号の方はM・Sが使うと自動的にそう言った方の通常回線でない方に掛かりますから細かな説明は無くても大丈夫です。』

そう聞いた私は早速2つのコードに連絡を送った。すると回線が繋がった音というよりも短い電子音が鳴って自動的に接続が切れた。これで大丈夫なのかしらね。

『では後は向こうからの指示通りにしてください。僕の方は自分の方に戻りますけどまた何かあれば。』

そうしてノアとの連絡は終了した。

「今、車両を手配したわ。数分程度で来るでしょうからそれまで我慢してね。」

「……はい。」

私はそれから引き続き彼女に寄り添った。

「……あ、来たわ。」

連絡をしてから数分後、それなりな時間で両車両が到着した。M・Sの移送用車両は

見たことが無かったけれどメディアカルセンターの車両は私の時と同じみたいね。何だかあの時のことを思い出すと車両からナースのリエが下りてきそうな気がして……

「あれ？フィリンさんじゃないですか！」

…… そう思っていると本当にリエが車両から出てきた。もしかしてリエは車両の補助要員としての役割の方が多いのかしらね。

「処罰だと聞いてどうなってしまったのか心配で心配で…… ですけど大丈夫そうですね。」

リエはあらかた私の立ち姿を見てそう言った。

「まあ、処罰としてはM・Sに転属することになったわ。私としてはまさかとは思ってたけれど。その証拠がこのマークね。」

私はリエに右肩が良く見えるようにした。これを見れば分かるわよね。

「M・S、ですか。大変な仕事だとは聞いていますけど…… なるべくお怪我の無いようにされてくださいよね？」

「大丈夫よ、そこまで大変な訳じゃないから。今日だつてこの一件で終わりそうなんだから。」

両腕を上にあげながらも今日のことについて軽く触れた。

「…… っつて、今日はフィリンさんじゃなかったですね。運ばれる方は何処にいらつ

「しゃいますか?」

「ここに居るけれど……少し説明しておくわ。」

そうしてリエとの会話を一旦区切った私は足元に座り込んでいる彼女を手で指した。

「状態としては出血が無いけれど、打撲が酷いわね。今確認しただけでもかなりの数よ。ここだと限度があるから精密検査で良く見てあげて。」

私はさつきまでで確認することが出来た彼女の容態をリエに伝えた。これで少しは良くなるのが早くなれば良いんだけど。

「そうですか……では、メデイカルセンターの方でもっと良く診てみますね。」

そう言うとりエは彼女の傍へ行つて、立ち上がれるように補助を行っていた。

「んしよ、そう言えばお名前は何という方なんですか?一応確認しなければいけませんから。」

リエがそう言う。そう言えばまだ名前を聞いていなかったな。

「ごめんなさい、お名前を聞いても良いかしら。」

私がそう聞くと彼女は特に嫌そうな素振りを見せることも無く教えてくれた。

「私はエリシア……エリシアです。デューマンの。」

エリシア。残念だけど聞いたことは無いわね。私がアークスだった時でも会っていないということはきつと普段の担当の範囲が違ったのかしら。

「エリシアさんですね、分かりました。後で登録をしておくので取りあえずセンターの方に行きましょつか。」

そうしてリエは無事に彼女、エリシアを無事に車内に運び込み終わると軽く会釈をしてから出発して行つた。

「……さて、後はこの男を移送するだけね。こういう時はキャストで良かったと思つたわ。」

私は少し力むと床で気絶して倒れ込んでいる男を両手で軽く持ち上げて車両の方へ收容した。運転手は居たけれど顔を知らなかったから特に話をする事も無く終わつたわ。

「今日の仕事、どうでしたか?」

「どうしたも……はあ、無いわよ。」

「?」

自分に割り当てられた仕事を終えて、駐在所へ戻ろうとコンベアに乗っていると偶然にも同時期に仕事を終わらせたノアと鉢合わせた。それで今日の仕事、初めての仕事はどうだったかという話になっていた。

「M・Sは鎮圧もするとは聞いていたけれど、まさか話し合いの仲介で終わりそうな

件で銃を使わされるとは思わなかったわ……」

そう、私が担当した仕事は連絡された時点では話し合いの仲介と言うだけで攻撃を伴うとまでは聞いてなんかいなかったもの。確かに用心を言うとって銃を持ったけれど、ここまでするとは思わなかったのよ。

「え、発砲したんですか？少し揉み合いになった位だと思つてましたけど。」

ノアは気が抜けたように言う。そうね、何も伝えてないものね……

「発砲したわ、それも数十発もね。対象がしぶとかったのよ。」

一応は無力化をすることを優先して攻撃を加えたけれど、それにしたって生身の人間相手には少しやり過ぎた位だつて言うのにあの軽傷は呆れるわ。

「しぶといつて、そんなにですか？」

「相当な位ね。終わった後に身体の確認をしたけれど血の一滴どころか痣の一つもなかったわ。」

まあ、制服は限界に近かったみたいだから後しばらく続けていればそれなりに致命傷だったでしょうね。あれはフォトンを通すことで防御能力を高めるものだから綻びが出れば満足には発揮出来ないだろうし。

「やっぱり、キャストの方よりもヒューマンやニューマン、デューマンの方がフォトンの使用効率は遥かに良いですからね。もっとも僕は基本的にキャストが対象の仕

事が多くて実感がないですけど……」

…… 確かにノアの言うことは教本通りね。キャストは生体部分が基本的に脳しかない影響で満足にフォトンの力を使うことが出来なくて、それでヒューマンと比べれば当然差が出る。勿論私もキャストだからフォトンの扱いなんて皆無よ。守ってくれるのは基本この装甲板だけ。

「そのうちヒューマンが対象の仕事が来れば分かるわよ。かなりやり方も変わってくるから気をつけられれば良いけどね。」

「は、はあ……」

「…… 最近だと、種族間の言い合いが多いみたいだから出番は多いんじゃない？ 貴方が1番多く関わっているのがC・R・S・Fってだけで案外キャスト以外の種族同士も良い関係じゃないからね、特にニューマンとかデューマンは標的にされやすいから。」

「…… デューマン、ですか。」

そうして会話しているといつの間にかコンベアの到着を知らせるアナウンスが鳴っていた。

E-24 「機器」

「……ここでも駄目か。」

ワタシはコンソールへの接続を切りながら一人呟いた。

「まあ、予想はしていたけれどローカルネットワークにそんな仰々しいデータが乗っている訳ないわね。そもそもある確証が無い物なんだから。」

コンソールへの接続が完全に切れたことを確認したワタシはそれからまた別のコンソール…… もとい、艦内に設置されている機器の元へ足を向けた。

「はあ…… もう一人のワタシには任せられないからもう一人の方のワタシに任せて出てきてはいるけれど効果があるかどうかね。ワタシ達で話し合ったときにはこう決めたけど、やっぱり駄目なのかしら。」

少し前、数日前だけけれどワタシ達はM・Sという組織の男、バーンズからの頼みでイレノアと言う人物を探すことになった。それでまずは何か手掛かりを得るためにこの艦にあるデータベースにアクセスを試みることになったのだけれど、中々にそれは上手くいかなかった。

この艦でバーンズの言っていた計画が行われていたのなら記録は残っていないにし

ろワタシ達と同じで本来は必要のない無駄な部分が艦内の何処かにあれば……と、仮説を立てて計画の残滓に近い物を探し出そうとしていたのだけれど。

「逆に考えてこの艦フェルントじやない別の艦でやっていたのならこんなことをしても無駄ね。何かしらあれば、とは思っていたけど。」

そう、このワタシ達の考えはバーンズの言っていた計画がここで行われていないのであれば全くの無意味になるということだった。いくら考えを張り巡らせても始点が駄目になればそれまでだわ。

「……仕方ないか。今出来ることをするしか、ないものね。」

けれど、そうは言ったところでこの艦から別の艦に移動をすることは出来ないしね。精々アークスでも一般員でもないワタシ達に出来るのはこれぐらいのことか。

「それこそ目立ったことをして面倒なことになるぐらいならまだこの方が良いのかもしれないか。結果はあまり良くないとは思うけど……」

そうして次のポイントに着いたワタシは再び端末を起動して機器に接続を始めた。こういったことは元から得意ではなかったからかなり手間取るけど。

「良くないことだけれど、人助けになるのならね。」

自室で打ち込んで作成したプログラムを機器の中で起動させる……それにしてもワタシが作成できるような物で突破出来るなんて少し不安だけだ。

「よし、これで中を見れるわ。」

無事にそれが終わるとモニターに小さいメニューが表示される。ここから接続することの出来る限りのデータの一覧が出て、フォルダーの名称から見当を付けて探し当てようって訳よ。

…… だけど、ここの機器で接続できるデータの数は少なくてあったとしても関係のないようなインフラ関連のデータばかりでめぼしい物は無かった。

「…… まあ、思っていた通りだけどやっぱり駄目ね。自室に戻って考え直した方が良いかもれないわ。」

そしてその考えに落ち着いたワタシは機器からの接続を解除して足早にそこから離れることにした。

「こんな場所に長居したら何が……」

だけど、振り返って元来た道を見た時だった。少し気味の悪い男が視界に入ったのは。

「…… 何よ、貴方。」

そう聞くとその男は表情を変えずにまわりつくような声で返事を返して来た。

「ん、僕がどうかしたかい？」

男は飾り気のないような灰色のアークスの制服を着用していて、短く切りそろえた黒い髪の間から出るニューマン特有の耳が嫌でも主張していた。

「人が何かをしているところを後ろから見るなんて、何かなければいけないことだしよ。」

一目見た時に一般員か、それともM・Sの人間に見られたかと思つたけれど……どうやらそれらとは全く違う何かみたいね。

アークスの制服を着用しているからアークスなことには変わりはないと思う。けど、この人物が持つている雰囲気は何かが違う気がするわ。はつきり言つて異質よ。

「そうだね、確かにそうだ。何かなければ後ろから見たりなんかしない。」

男は話を続けながらこちらの方に歩み寄ってくる。武器があれば取り出していたけれど、今のワタシにはそんなものは無かった。

「じゃあこうしよう、僕は君の行動に興味があつたから観察をしていた……こうすれば何もおかしくは無いだろう?」

まあ、あつたとしてもこの男から感じる異質さの圧力で取り出すことすら出来ないと思ふけれど。

「……だとして、ワタシに何の用がある訳よ。顔も知らない貴方と関わるいわれは無いわ。」

ワタシは薄々と感じ始めて来ていた恐怖からか顔の表情を硬くして男にそう言い放った。すると男は駄目だとも言うように首を横に振りながら返して来る。

「うん…… 駄目だなあ、君のような人がその様な顔をするものじゃない。それに怖がらなくて構わないよ？この通り僕は丸腰だ。」

そう言い放つと手を横に広げながら何も持つていないということを手張してくる。ワタシは言葉を発することなく表情をさらに硬くした。

「…… まあ、確かに君の言う通り関わるいわれはないね。僕と君が。」

「そ、そうよ、貴方とは関わるいわれも、理由も無いわ。」

緊張して少し声が震えた。ある意味、ここまで怖さを感じたのは久しぶりのことかもしれないわね。

「では、僕はここで失礼するよ。すまなかつたね。」

「……」

男はそう言うのと興味の無くなったものを放り出すような態度で踵を返して行った。振り向きざまに言葉を一つ残して。

「そうだ、身の回りには気を付けると良いよ。近頃は何が起こるか分からないからね……」

そうして気が付いた時にはその男は消え去っていた。元からそこに居なかつたよう

に。

「……今戻ったわ。」

あの男と遭遇した後、ワタシは一目散に自室のある区画に向かつて走った。途中躓きそうにもなったけれど、そんなことなんて気にせず走り続けた。

「そ、そんなに慌てられてどうされたんですか？」

もう一人の方のワタシが驚いた様子で自室のドアを開けた私の方に駆け寄ってくる。

「戻るのが遅かったですから少し気に掛かっていましたが、何かあったんですか。」

気が付いたワタシは自室の壁に取り付けられた電子表示の時計を見た。確かにかなりの時間が過ぎてしまっていた。

「いや……特には無いけど、変なのに会っただけでそれ以外は。」

「変なの？」

そう、変なの……最後に確認した機器の場所で遭遇したあの異質なニューマンの男のことだ。

「アークスの制服を着ていたから多分そうなんだろうけど、ニューマンの変な男にね。」

「それって、大丈夫なんでしょうか……」

もう一人の方のワタシが心配そうな顔をして言う。

確かにワタシも遭遇した時にはそういったことを心配していたけれど、あれはそんなものとは全く無縁で……何か違うものだと思えて本能で感じられた。

「……最初は私もそう思っていたけど、そんなものじゃなかった。もつとこう……別の物だわ。」

「別の物、ですか。」

でも、まだあの男が何なのかすら分かって居ない状態で深く考えたところで意味も無い。余計な心配事を増やしても仕方が無いし、話題を変えるしかないわね。

そこでワタシは話の方向を変えて別の話をすることにした。

「そう言えばもう一人のワタシの方は大丈夫？少しの間離れてたから。」

「……そちらの方なら、大丈夫ですよ。今奥の方の簡易ベッドでスリープに入っています。」

言われた通りに暗い室内の奥の方を見るとそこには目を閉じて落ち着いた様子のワタシの顔が見えた。まあ、キャストだから寝ていても胸は上下しないから分かりづらいのだけれど。

「ワタシの方もしばらく休んでて良いわよ。ずっと付きっ切りだっただろうから交代するわ。」

そう言うのとワタシは少し考えた後にはいと答えた。

「分かりました、お願いしますね。」

そうしてワタシはさつきまでもう一人の方のワタシが座っていた椅子に入れ替わりで座って、引き続き待機状態を維持した。

「ふう……全く、同じ人物に同じようなことを起こされるとはな。一般員とはいえ教育が甘いんじゃないのか？再発を防ぐ為のものだというのに……」

新しく配属になった元C・R・S・Fのフィリンを迎えて、その後直ぐに来た仕事を普段通り済ませた俺は最寄りのコンベアに向かって歩みを進めながら愚痴を漏らしていた。

確かに最近ではアークスに対する教育、再指導は相も変わらず厳格に行われているが一般員に対してのそれらはかなり軽視されているように感じた。まあ、この艦フェルナートでのことしか見ていない限りは何とも言えないが。

「取りあえず、早いところ帰って報告書を書き上げるのが最優先だな……？」

そうしてコンベアまで辿り着いた時、不意に端末に通知が入った。テキスト文じゃな

くて通話回線の通知か。

「どれ、移動中はすることも無いからな、出ておくか。」

通知を確認して、俺は回線を向こう側……送って来た方と繋げた。最初に少しノイズが走った後安定した音が入って来る。

『……バーンズ、で合ってるわね。回線は繋がってる?』

「ん? ああ、無事に繋がっているぞ。」

まず入って来た声はこの間の施設の件で関わったミーインさんの声だった。と、言っても口調は別人だったが。

「もしかしてメイソンの方じゃない方の君か? 最初に会った時と少し違うが。」

『ええ、貴方の話したことがある方ではなくてもう一人の方のワタシよ。説明が遅れたわ。』

「いや、何となく分かっていたから大丈夫だ。」

それにしてもあれからして初めてこのコードに連絡が掛かってきたな……。もしかしてだがイレノアのことでも何か分かったことでもあるんだろうか。俺は少しだけ期待しながら話の続きを聞いた。

『……それで、本題に入るわね。イレノアさんのことだけれど、何処の艦で計画をやったかは覚えている?』

計画を何処の艦で行ったかか、そう言えばあの時には言っていないかったな。

「計画を行っていたのは俺が元々居た場所、第182番艦のアークスシップシークマーカード。フェルノートからはかなり近い距離にあるな。」

そう、まだイレノアが居た頃に俺がアークスとして活動していた艦、シークマーカード。このフェルノートとはほとんど同型で内部もそこまで差が無かったのは良く覚えている。

『そう…… 良いことを聞けたわ、ありがとう。また何か分ければ連絡を繋げるわ。』
少し期待はしていたが、まあそんなに上手くいくはずが無いよな。俺は普通に挨拶を返して通話を閉じた。その頃には駐在所も見える頃合いになっていた。

「お、先に戻っていたか。」

待機室の入り口をくぐるとそこには既にノア君とフィリンが居た。どうやら俺の方が手間取っていたみたいだな。

「先に、と言っても数分前なんですけどね。仕事が終わった後の移動で合流出来たので一緒に戻ったんですよ。」

なるほどな、それで戻ってきているのが同じくらいのタイミンングだったのか。

「ノア君の方は普段通りだっただろうから良いとして…… フィリン、そっちの方は大

丈夫だったか？」

「…… まあ、怪我はしなかったわ。私はね。」

俺がフィリンの方を向いてそう聞くと右手をひらひらとさせながら答えた。

「自分は…… と言うことは対象がか。」

「ええ、勿論。だけど血が出る程じゃなかったから大丈夫だと思っうわ、アークスだったもの。」

何となく嫌な予想はしていたが、まさか本当に最初の仕事から撃ち合いか。

「まあ、手順通り対象の移送と被害者のメディカルセンターへの搬送、基本はこなせているからな、これからもよろしく頼むぞ。」

「言われなくとも宜しく願っうわ。」

そうして俺はフィリンと手を交わした。

「さて、取りあえず報告書の作成だな。2人とも出来上がったら俺の方に出してくれ目を通して置く。」

そう言うとなア君とフィリンはほぼ同じタイミングで返事を返して来た。

E—25 「虚夢」

「じゃあ、また明日お願いします。」

「ええ、私が言うことでもないけれど気を付けてね。」

僕が振り向きざまに挨拶をするとフィリンさんは少しほくそ笑んで返事を返してくれた。

「大丈夫ですよ、僕を襲ったところで何にもならないですからね。」

服のポケットから識別カードを取り出しながらそう答えるとフィリンさんは呆れたような表情をした。

「違うわよ…… 貴方がM，Sだから言ってるの。ただでさえ問題が発生しやすい時勢なのよ？」

前にバーンズさんが言っていたように自室に変えるまでの間に遭遇したり…… 無いと良いけど。

カードを持っている手とは逆の手で腰に身に着けている銃PIA2を叩きながらフィリンさんに言葉を返した。

「分かっていますよ、変な心配させてごめんなさい。」

「…… はあ、なら良いけど。それじゃあね。」

そうしてお互いにコンベアのカードスロットに識別カードを差し込んだ。

「はい、また明日。」

その言葉を最後にコンベアは何事も無く低い音を立てながら動き始めた。

「…… 今日はずんわり開くんだな。」

自室の扉に付いているスロットに識別カードを通すと普段は中々開かない扉がスムーズにスライドした。特に何か良い日でもないんだけど……

「まあ、気にしても仕方が無いか。」

僕は扉横にあるスイッチを押して部屋の電気を付けた。特に何も変哲の無い部屋が薄暗く照らされる。

特に拘りがある訳じゃないけど部屋にはM・Sの仕事場で使っている物よりも古いコンソール台、それと作業用の机とそれなりにクツションの利いたベッドをこしらえておいてある。もつとも、これを揃えたのを最後に特に何も弄ってはいないから全く様変わりしないんだけどね。

「…… あ、買っておいた精製水、これで最後か。追加で買っておかないと。」

ふと、普段通りに冷蔵庫から精製水を取り出そうとするとそれが最後の予備だという

ことに気が付いた。ただでさえ何も入ることのない冷蔵庫から物が消えて、見晴らしがやけに良くなっていた。

最近の仕事が忙しい状態にあるせいで自室に戻って来てはすぐに寝てしまうから簡単に分かることにも気が付けなくなっていたのかもしれないな。

「うん、いつも通りの味だな。代わり映えないや。」

精製水のボトルを開けてそれを口に含むと安心感のあるいつもの味が口に広がって、そして体に回った。

普段食べる……というよりも飲んでいる携行食があるけれど、僕はあれと比べてこの精製水の方が飲むならまだ好きかな。携行食は何と言うか、味の押し付けが強いとか雑というか……まあ、そんな理由で僕は携行食は好きじゃなかった。それよりも精製水を飲んでおけば口に残る嫌な味も忘れられるしね。

「ん……？」

そうして水を飲んで気持ちいを落ち着けていると、突然端末からメールの受信を知らせる電子音が短く鳴った。

こんな時間に誰だろう……そう思いながら僕は端末の画面に指を走らせた。

「えっと、差出人はリピカちゃんか……レピカちゃん!？」

差出人の項目を見た僕は驚きのあまり二度見してしまった。こんなに遅い時間に連

絡って、一体何なんだろう。そう思ったときには既にメールの文章の羅列に視線が行っていた。

「……何だ、そういうことか。」

何事かと思つて焦りながらも全文を、というよりも最初の文を読んだところで僕は肩をなで下ろした。どうやら最初の文を見る限り急ぎの用じやないみたいだしね。この時間に連絡をしてきたのは何故なのかは分からないけど。

「えっと、指定教育……勉強についてか。何か嫌なことでもあったのかな。」
あまりまとまりのない拙い文章で可愛らしく愚痴？のようなものが長く書かれていた。

先生の事、講義の事、友達の事、最近あった出来事……最後にメールを送ってくれた日から少し期間が空いていたけれどこんなことがあったということを書き文章から知ることが出来た。

「勉強が苦手なのはやっぱりか……」

その文章の中でもやはり際立っているのは勉強のことについてだった。

最初にレピカちゃんに会ったときに聞いたけれどあの様子だと……今度分かるところだけでも時間のある時に教えてあげたほうが良さそうかな。一応だけど普通の教

育レベルの過程は済ませたから特別なことじゃなければ教えられるしね。

「仕方ない、僕だっていつも楽しい話をしたいけど……これもレピカちゃんが立派なアークスになるにはか。この時間にメールを送って来るのもあれだからそれについても書いておかないとな。」

そうして文章を、レピカちゃんのメールの全文を無事に読み終えた僕は新しいメールの作成をし始めることにした。

ちよつと遅い時間だけど朝には時間が無いからこういう時にしか返信できないからね。

「えっと、文の作成はここで良いんだよな。」

一旦メールの文章を閉じてからレピカちゃんに教えて貰った通りに項目を処理していく。

それで画面が幾度か切り替わると宛先、件名、差出人の表示。文章入力欄の画面に辿り着くことが出来た。

「ふう……やっぱり普段から使っておかないと頭から使い方が抜けてるな。忘れなように気を付けなさい。」

そんなことを口から漏らしつつ、僕は文章を打ち込んでいった。

文章を送ってくれたことに関して、勉強について……そうして色々

と書いた後にあまり夜更かしをしてはいけないという旨を伝える文章を打ち残した。メールを送つて来てくれるのは嬉しいけど、レピカちゃんの年頃であんまり夜更かしはいけないしね。次の日にも響いてしまいうだろうからね。

「…こんなところかな、うん。明日の暇な時間にも読んでくれると良いけど。」それで数分ぐらいだったかな。文章をあらかじめ入力することが出来たのは。

打つことは決まっていたけれど一応読みやすいように調整が必要だからね、手間になるけど別に苦になるほどではないか。

「宛先がここで件名は… 当たり障りが無いようにこれで良いか。」

そうして最後に宛名の指定と件名を入力した後、送信を押してレピカちゃんとのやり取りは無事に終わった。

「… あ、もうこんな時間か。僕の方もそろそろ寝ないとな。」

メールの作成を済ませた後、精製水を飲みながらくつろいでいる時にふと視界に時計が入るとかなり遅い時間になっていることに気が付いた。

「前に遅刻しかけたことはあったけど、ペナルティは無いにしろ遅刻は駄目だからね。ただでさえ人手が足りないし。」

そうして僕は着ていた一般員用のジャケットを脱いでそれを椅子に掛けるとベッド

にもう一度座る。

それから腰に付けていた銃を取り外して、その安全装置が作動していることを確認してベッドの横にあるサイドテーブルに置いてからベッドに横になった。

「はあ、今日も疲れたな。こんな風にしていたら直ぐに寝てしまい、そうだ……」
そんなことを言っていると数回瞼が閉じたかと思えば既に意識は何処かに飛んでしまっていた。

……あれ？何処だろう、ここい。

気が付くと、僕は記憶の無い場所に立っていた。

えっと、僕はさつきまで何を……部屋で寝ていたんだっけ。

何だか記憶のぼけていた僕は最後にしていたことを思い出そうとしていた。

それにしても明るい場所……と言うよりは真っ白？なのかな。

そこが何処であるかを確認しようとすると辺りはとにかく真っ白で、その場を形容で

きるものが存在しなかった。

…… 　　そうして困り果てていると何処からか何かの音が聞こえてきて、それは段々と近づいてきた。

？ 　　なんだろう、この音。

それで、その正体を探ろうとした時だった。それが飛んできたのは。

！

最初に飛んできたのは何処かの天井だった。そう、何処でも見たことのないような。

それが大きな音を立てて…… この音も今まで聞いたことのないようなものだった。そうして白い空間のそれがあるべき場所に固定される。

次には外壁が、床が、様々なものが飛んできて自らがあべき場所へ固定されていつて、それは1つの場所になった。

ここは…… 何処かで見たような気がする。僕自身が直接赴いた記憶は無いけど、何処かで……

そうして出来上がった1つの場所に覚えが何故かあつた僕はそれを必死に思い出そ

うとしていると、今度は聞き覚えのある音……そう、激しく金属がぶつかり合うような音が聞こえた。

そこで僕はようやく思い出した。

あの剣を持つている人、前に夢で見た人……？

音の響く方に目を向けるとそこには以前夢の中で見た男の人？が居た。アークスの少し古いスーツを着た、あの人だった。

「……………！」

攻撃をしながらも何かを話しているみたいだったけれど、何故か僕にはその声は聞こえなかった。その部分にだけノイズを走らせたみたいにも何も。

「…………………………」

聞こえないのはその人声だけじゃなかった。前にこの人が出てきた時に側にいた杖のような見た目の武器を持った女の人の声もだった。

あの時はあまり気にはしていなかったけど、女の人が着ている服はやっぱり不思議な物でアークスで作られたような量産品とは違う雰囲気……だとしたら、アークスでないとしたのならこの人は一体何なんだろう。

「……………？」

そうして聞こえてくるノイズはその女の人の声もそうだけど、何よりもその目の前にある何かからも発せられていた。

それは男の人？や女の人とは違って姿自体にもやが掛かっかけていて形すら見ることが出来ない。それが人であるかすらも分からない。

ただ一つ分かることはそれがこの人達と敵対しているということだった。

でも、どうして僕が夢……夢なのかも分からないけど、この光景を見ているんだろう。夢には経験したことしか出てこないって言うのはやっぱり嘘だったのかな。

夢は経験したことから構築されるものであつて経験をしていない範囲外のものとは描かれることはない。何処かで聞いた話だけれどこれが正しいのか正しくないのか……というよりもこれ自体が夢じゃないんじゃ？

そう考えている間にも目の前の時間は確実に進んでいた。

E—26 「退避」

「どうやら話し合い……と言うよりも交渉が決裂したのかさつきまでその何かと対峙するだけだった男の人？と女の人は何かから発せられた攻撃のような物を受けたのを皮切りに動き始めた。」

「何だか、別の場所から映像を見ているような感覚だった。実のところその場にいる僕は認知されていないみたいだったしね。勿論今飛んできた攻撃のようなものも来はしなかった。」

「やっぱり、あんな武器は見たことが無いな。人の手で作れないような……何だろう。僕は以前に見たことのある物を見てそう思った。あの、杖みたいな物だ。」

「一応M・Sのマニユアルでアークスが基本的に携行することが許されている武器を確認したけれど、あれに近い物を考えれば長杖ロッドの武器種に近い気がする。」

「……」

「そうして僕が女の人の持っているものに注目している間にも事は着実に進んでいて、」

その時になると段々と以前見た夢の場面と同じような状況になり始めていた。

普段通りの僕なら無駄でも何かしよう、声だけでもかけようと出来たかもしれない。だけど今は頭がはつきりとしないうような……霧が掛かったようであらなくて動くことなんてできなかつた。寝起きで考えがまとまらないみたいにな

「……！」

男の人？があの大きな剣を両手でしっかりと構えながら何かに向かって叫ぶ。前と同じだ。

大振りだというのに的確に標的に向かって振られた大剣ソードは何度も弾き返されていた。もつとも、その何かは霧がかかっていて何が起きているのかまでは詳しくは分からなかつたけど。

「……………」

それに合わせて女の人も長杖？のような物を媒体にしてテクニクを放っていた。現物は見たことが無くて映像でだけだったけど、それがテクニクであるということは直ぐにでも分かつた。

だけど、それらもその何かにはあまり効いていないようだった。弾き返すというより

かは吸い込まれるような形で。

「……………！」

そこでようやく僕が以前見た夢の部分に繋がった。男の人？が何かを叫んだ後、歯を食いしばって勢いよくそれに向かって切りかかっていく。隣に居る女の人の表情が辛そうに歪んで、その直後にとてつもないくらい眩しい光が――

――そう考えていた時だった。一瞬だけその何かの靄の一部が晴れたのは。

その時僕はそれまでぼうっとしていた意識が凍り付くようなものにさらされて、無理叩き起こされたような衝撃が来た。

血のような赤い瞳が、こつちを、僕を見ていたから。

「……………終わらせてしましましょう、全てを。」

その言葉が聞こえた時、再び世界は真っ白に吹き飛んだ。

「……………」

あれからどれ位時間が経ったんだろうか。僕は再び体にベッドのクッションの感覚を思い出した。

まだ動悸が落ち着いていなくて、自分の鼓動がはつきりと聞こえてくる。

「何だったんだ、何だって言うんだ、あれ。」

思考が落ち着かなくて混乱しながらの目覚めだった。普段なら少しぼうつとしていられるけれど、今は違かった。あの赤い目に睨まれた僕は。

「……よし、取りあえず落ち着こう。慌てても駄目だ。」

そうして僕はどうにかして気を一旦落ち着かせて、それで一呼吸置いてからベッドから立ち上がった。暗い室内が目に入る。

「うん、何も変わってないよね。あれは夢だったんだ、かなり質の悪い。」

それで、どうにかしてその場は落ち着かせようとしていると今度は部屋の扉を叩く音が聞こえてきた。

「？何だろう。」

気になった僕はドアの方へ行って扉のロックを外して様子を確かめようするともう

一度扉を叩く音が聞こえてきた。

呼び出し用のブザーを使えばいいのに……そう思いながらも扉を開けてみると開くと同時に人影が素早く滑り込んできた。

「ノア！こんなところで何してるの！」

「へ？何って、休んでいただけですけど。」

滑り込んできたのはフィリンさんだった。

もしかして仕事の時間だから呼びびに来た……訳じゃないか、時間はまだ余裕がある。だとしたら何だって言うんだ？

「さっきまでの艦内放送聞いていなかったの？」

「艦内放送？何ですそれ。」

「……ああもう！私達も早く行くわよ！」

そう言うフィリンさんは僕の手を強く掴んで走り始めようとした。

「あ、待つてください！足が。」

けれど僕は何も察知できていなかったせいでドアの縁に足を引っかけてしまった。

「何度も連絡したのに、眠っていたわけ？」

「は、はい、気が付かなくて。」

転んでしまった後、少しだけ待ってもらうことが出来た僕は銃と端末だけを持って部屋を出た。

退避指示のアナウンスが鳴り響く中を走り続ける。

「……まあ良いわ、詳しい話は後。とにかく一番近いドッグまで行って退避するわよ。」

「ドッグって、一体どこまで避難するんですか？もしかして別の艦にまで行くとかじゃ……」

そう僕が言うとフィリンさんはまた少し呆れたような顔をして話を続けた。

「そのまさかよ。今説明すると面倒だと思っていたけれど、少しぐらいは説明した方が良いわね。」

フィリンさんは走りながら説明を続ける。

「手短に言うわ、この艦の周辺区域に異常レベルのダーカー因子が確認されたの。」

「ダーカー因子って……そんなことってあるんですか？」

「……そうよ、私も驚いたけれど。」

宙域のダーカー因子の濃度が高くなる、つまりその場所にはダーカーが発生するということ。それが艦が対象になるとするとダーカーによる襲撃になる。

今でこそダーカーの勢いはとても激減したけれど、だからと言ってその脅威がなく

なった訳じゃない。実際アークスが残党狩りをしているわけだしね……。だけど、ここまでの規模になることは無いはずなんだ。

「まあ、何かしらの原因で起こっていることには間違いないわ。今のダーカーにこんなこと出来るはずが無いもの。」

「どうやらフィリンさんも同じみたいだ。」

「まあ、この話はここまでにしておいて避難の方を先にね。この先に昇降機がある筈よ。」

「そう言われた僕はフィリンさんが言う方向を見る。すると確かにそこには中程度の大きさの昇降機があった。あまり使っていないようだけれど。」

「ここから行くのが一番近いはずよ。何番のドッグに出るかは分からないけれど、船に乗れるなら何でも良いわ。」

「は、はあ。乗れるなら良いですけど。」

「大丈夫なはずよ。ほら、取りあえず電源を入れて。」

僕は指示に従って昇降機の電源を入れた。移動用のコンベアと同じような低い音が鳴り響きながら重く動き出した。

「駄目だ！一般員は別の船に乗れ！アークスを優先して搭乗させているんだぞ！」

「そんなことどうでも良いだろ！早く乗せろよ、見殺しにする気か！」

まあ、想像していた通りか……

俺は頭を手で掻きながら心の中でそう言った。

「おい、落ち着けて。この船はアークスだろうと一般員だろうと定員が溢れてるんだ。別の船を探した方が良いぞ。」

今しがた叫んでいた一般員の男に向かってそう言ってなだめる。

「そうだけど、そうだけだよ、このままここで死ねって言うのか？船に乗れなきゃ宙域で死ぬんだぞ？」

「誰もそんなことは言っていないだろ……ほら、別の船を探せ。出発の邪魔になるだろ？」

「……分かったよ、この。」

そう言うとその男も、周りに居た一般員も続けて別のドッグに向かった。

「はあ、酷い状況だな。全く。」

連絡が早いからもう少し冷静に動いているかと思えばこの状態なんて最悪だな。定期訓練を怠っているんじゃないか？確かに急な連絡で混乱するのは分かるが……こんな

なことだと思うつぼだな、誰のつぼかは分からんが。

「それにしてもノア君とフィリンは無事だろうか。連絡通りなら一緒に動いているはずだが……」

そう思った俺は端末を取り出して連絡が来ていないかどうかを確認したが特に何も来てはいなかった。連絡履歴も数時間前で止まっている。

「まあ、逃げ遅れるなんてことないが良いがまあ大丈夫だろう。」

そうして俺もさつきまでの一般員と同じように乗れる船を探し始めた。

「フィリンさん！そっちの方はどうでしたか？」

「駄目ね、何処も手一杯みたいよ。」

昇降機から降りた僕とフィリンさんはどうにかドッグに着くことが出来たけれど、そこで肝心な船に乗るということが出来なかった。

理由としては色々なんだけれど一番は僕とフィリンさんがM・Sだと言うことだった。

「一般員なら良かったんですけど……服でばれちゃいますね。」

そう言うのとフィリンさんもあまり良くは無い顔で言葉を返して来た。

「まだ服なら可愛いものよ、こっちは種族で駄目だったわ。キャストはC. R. S. Fの危険性が高いから駄目だ、なんて言われていたもの。酷いわね。」

やっぱり、この状況でもそう言ったトラブルは多いみたいだ。

「…… はあ、大丈夫なんでしょうかね。」

「?何がかしら。」

僕がそう言うのとフィリンさんは首だけを傾けて返事を返してくる。

「いや、無事に避難できるのかなって。このままだと船にすら乗れないかもしれないかもしれまんし……」

船に乗れないのであればこの艦に残されることになる。つまりは死をあらわすということだ。もつともそれは最悪の場合に、だけど

「…… じゃあ、一応これでも被ってなさい、少しは宙域に出たとしても大丈夫なはずよ。」

そういうとフィリンさんは通路の壁から出ていたヘルメットを投げ渡してくれた。

「確かに大丈夫ですけど、心もとないですね。これ。」

僕は受け取るとバイザーを開けた状態で頭から被った。

「生身だと色々と不便なのよ。私は別に良いのだけれど、嫌なら外せば?」

「そ、それはないですよ……」
僕は少し困惑したようにして言葉を返した。

E—27 「戦闘用艦」

「そういえばですけど、別の艦に退避をした後はどうするんですか？」

ヘルメットと着ていたジャケットの襟の部分の接続を整えながらフィリンさんに聞いた。

自分の部屋から出てきた直後は慌てていたから聞くことが出来なかったけれど、まだ肝心なことを聞いていなかったからね。

「私の知るところでは一応だけれどアークスの規定におおむね沿って動くはずだから…… そうね、無事が確認でき次第戻るんじゃないかしら。今回の事が想定の範囲内の出来事で済むのただけれど。」

「想定範囲、ですか。」

フィリンさんは僕と違ってアークスであったからその辺りの匙加減については良く分かっているのかもしれないな。僕に今のところ分かることと言えばダーカーがいかにか凶悪であるかと言うこと位で、それ以外のことは聞いた言葉だけでさっぱりだから。

……でも、限りなく今のダーカーと言うのには昔のような勢いは無いということだけは何となく分かる。アークスの人達が昔の時ほど忙しくないのを見れば残党狩り程

度なのも理解できるからね。

「そうよ、これは想定範囲ならの話。出る被害が酷ければ戻れないどころかもっと酷いかもしれないわ。ただでさえ私達みたいな辺境にあるような旧型艦余剰人員の人間の扱いは必要最低限なんだから、気が気じゃないわよ。」

フィリンさんはため息交じりに言葉を吐き捨てた。

「もつと酷い、ですか。仮にそうなったとしてフィリンさんはどうなると思います?」
 そう聞くと少し難しい顔をして、それからフィリンさんは話を続ける。

「どうなるか、ね。一番最悪の事態を想定するのならこの艦フェルノートが今回の襲撃でそれなりの被害を受けたとして、しばらくの間はここには戻れないでしょ? だけど、そうなたとしても自分達の艦に戻らなくちゃいけないの。一時的には別の艦に留まれるかもしれないけど、それはあくまでも一時的なものでずつとではないわ。」

「で、でも、被害を受けて普通じゃない状態の艦に戻って言うんですか?」
 少し戸惑いながらそう言うのとあっさりと言葉が返って来た。

「そうよ、規定通りなら原状復帰で戻ることになってる……けど、実際にはそんなこと無理なのは分かるわよね。」

「……はい。」

「退避先の艦に残ることはできない、かといつて元の艦フェルノートに戻って平常通りに戻すこ

とも難しい。この状況から割り出せることと言えば大体決まってるけど、どうかしらね？」

そう言つてフィリンさんが頭の後ろで手を組みながら通路を進み始めた時、横から声を掛けられた。

「なんだ、ここに居たのか。随分探したんだぞ？」

そこには僕と同じく一般員用の服を着たバーンズさんが居た。

「連絡が来ないものだから気になつて仕方が無かつたんだぞ？今となつてはいつでも良いことだが。」

それを聞いた僕とフィリンさんははつとしてそれぞれ持っている端末の電源を入れて連絡を忘れたかどうか確認した。勿論のこと最後の送信履歴は数時間前で止まったままだつた。

「……まあ、今回は良かったが似たようなことがあれば連絡は怠らないようにしてくれ。とにかく何時でも重要なのは情報なんだから、忘れないでくれよ。」

「すみません、わかりました……」

僕は申し訳なくバーンズさんに頭を少し低くした。

「……と、俺が話したかったことはこれじゃなかつたな。本当に話したいことがある

というのに無駄話とは俺も駄目かもしれないな。」

「そう言う少し照れくさいような顔をしながら目的であろう場所をバーンズさんは人差し指で指す。」

「あつちの方がどうかしたんですか？」

「ん？…… ああ、暗くて良く見えなかったか。もつと良く目を凝らして見てみる。」

「……？」

「そう言われた僕は目をすぼめてそこにある物を見ようとする。」

最初の内は建物か何かの一部かと思つた、中々に全貌が見えなかったからね。それで段々と暗所に慣れてきた目でそこにある物を特定しようとしているとその輪郭から浮き彫りになり始めて、とうとう全貌が確認できたところでそれが何なのかを知ることが出来た。

「もしかして船……ですか？何処となく姿は似ているような気がしますけど。」

見えたのは船だった。それも普通ではなくて戦闘用の兵器が装備されているような、アークスで使うような見た目の物だった。

「そうだ、かなり旧型だが退避に使うのは十分過ぎる位だ。心配なところもあるが…… まあ、大丈夫だろう。」

ほんの少しだけ影のかかったような顔をしてバーンズさんは言った。

僕からすれば特に何も、旧型だつて言うこと以外には特に問題になりそうなどころは無いように見えるけど何処かに問題があるのかな。そう思ったときには既に口から言葉が出ていた。

「何処かに問題があるんですか？ 心配になりそうなどころは無さそうな気がしますけど……」

そう聞くとバーンズさんは不思議そうに聞き返して来た。

「直ぐに分かると思うんだがな……もしかしてノア君はアークスの戦闘用艦を見たことが無かったか？」

戦闘用艦、それを聞いても何のことなのか分からなかった。

指定教育では一応アークスについては勉強するけど、まあそれはあくまでも一部分だけであつてあまり詳しくはやらないからね。当然使っている物もあんまり良く分かっていないんだ。

「それはそうですよ。僕はアークスに居たことが無いですし、こういった物もあんまりですか。」

言うところとバーンズさんは少し納得したように答えた後、船の内部への通行用ハッチの一部を指で指していた。

「見たことも聞いたことも無いのならそう言うことになるか……まあ良い、取りあ

えず乗り込むぞ。これの管理者には既に連絡を取ってあるからな、乗ってくれ。」

「……ほら、行くわよ。」

そうして僕はまたもフィリンさんに手を引かれる形で連れられて行った。

「……ん、バーンズか。例の奴らは見つけられたのか？それならもうここを出るが。」
俺が船の甲板に上がると調整作業を続けている男の姿が目に入った。年齢は俺に近い。

「ああ、偶然に近いがすぐ近くの通路の方だな。もう大丈夫だ、いつでも出してくれ。」
そう言うのと作業の手を止めてから男は機体収容庫の方へ向かって行く。

「何やってるんだ？もう出発だぞ。」

「んあ、分かってるさグレイド。俺も行く。」

そうしてグレイドについて行く形で俺はノア君とフィリンと同じく船内へと入っていった。

「それにしてもそつちから連絡してくるなんて何かあるとは思ったが、まさかこんなことになってるとはな。想像してなかったぞ？」

「グレイドお前、艦内放送聞いてなかったのか？」

グレイドに向かってそう聞くとそうだと言わんばかりに返事を返して来た。

「それはそうさ、こちとら寝ていたんだからな。寝ているときになんかあんな音量の小さい放送聞けるわけないだろ？」

「それは、そうだが…… まあ起きられてここまで来れたのなら良いか。」

そこで俺は話を転換する。さっきまでノア君に言っていた心配な部分についての確認だ。

「ところでグレイド。動きそうか？これは。」

そう聞くとグレイドは最初の内はそれなりに元気に答えていたが段々と自信のないような声色になっていた。やはり問題があるか。

「少し前に大部分は改修できた…… つもりだが、やっぱり不安要素が強いな。船を出せるかに関しては問題ないだろうが、本当に問題になるのは空域に出てからだな。」

グレイドはそう言いながら器用にポケットから端末を取り出して不安要素を説明してくれた。簡単なことなら俺でも分かるが専門知識は専門の技師の方が上だからな。こうしてもらった方が分かりやすいな。

「空域に出てから、か。グレイドは宙域に出てから戦闘が起こると思うか？」

聞くとグレイドは特に驚くこと無く返事をしてくれた。

「当然と言うか、そうなるだろうな間違いない。アークスでなくとも感で分かるもんだぜ？　こういうのって」

「……まあ、俺もそんなところか。」

俺は少し鼻で笑いながら答えを返した。グレイドは数学的な男かと思えば以外とこういったところもある奴だからな、嫌いになれんな。

「それにしても間に合わせの物だけで良くここまで復帰させられたな、この巡洋艦^{戦艦}クラス。右横から見ればこれが動いていた頃と変わらないんじゃないのか？」

そう聞くと少し悩んだようにしてグレイドは言葉を捻り出す。

「性能面では当時よりもそれなりに補えて、傍から見れば俺もそう言いたい……ところだったが問題が多くてな。まあ外側から見れば分かるだろ？　何がいけないか。」

「……強引にやり過ぎたような形なものな、これは。」

グレイドの端末の画面に映るこの船の全体図を眺めながら言葉を言い放つ。確かにこの船は俺が言ったように正面から見て右側から見ればあまり変わっていないように見えるが、左側から見れば酷いものだった。

まず、大前提としてこの艦は前から見た左側部が大きく破損している。その為にこの戦闘用艦の特徴でもある艦橋横に設置された2つの機体収容庫が片方しかなく、勿論のことその収納庫から伸びているはずのカタパルト部もその大部分が欠損している。

それを補うために同じ形式の戦闘用艦で、なおかつ巡洋艦クラスのロケットエンジンを欠損部位に追加して船の重量均一を保たせてはいるが…… 勿論、想定範囲外のやり方の所為もあつて強度が無いことが1つ、動作不良を起こす可能性もまた1つということらしい。

「まあ仕方が無いさ。これをしなかつたらこいつは傾いちゃうし、まともに動かなくなる。選択としては正しい選択をしたつもりだが…… 安心はできないか、この状態。」
グレイドはまた少し不安を顔に浮かべながらそう言った。

一番良い選択をすることが最適、なのかもしれないがそれにそれなりの欠点が生まれないとも言切れないことがあるということだろうな。

「なに、今回運んでもらえるだけでも十分にこいつは役に立つさ。最悪の事態…… 襲われることは考えられることだが必ず起こることじゃないからな。適度に肩の力でも抜いておこうぜ、な？」

「…… そうだな、そうしておくか。」

そうしてその話題になった頃には俺達は既に艦橋に着いていた。

E—28 「旧型」

「結構暗いんだな……」

フィリンさんに連れられてアークスの旧型戦闘用艦に乗り込んだ僕は船内の通路を歩いていた。

けれど通路は電気が通っていないようで薄暗く足元に気を配りながら歩かないと怪我でもしてしまいそうだった。

「多分けどまだ電源が入っていないんじゃないかしら。」

僕が口から言葉を漏らしているとフィリンさんが話しかけてきた。確かに外から見ただ時も照明が点いていなくて、それでこの船の外観すら良く分からなかったことから考えればそうなのかもしれない。

「そうだとしたら……この船は動いていないんですね。駆動部と言うか心臓部がですか。」

フィリンさんは僕の先導をしながら声を返す。

「正直なところ、私も貴方と同じでこういった戦闘用艦には乗ったことが無いから文面で知っていることしか分からないけれど純粋に考えればそうなるわね。」

「フィリンさんは乗ったことが無いんですか？」

「無いわ。だけどバーンズならあるんじゃないかしら？あの人、結構実戦経験ありそうだから。」

「そうなんですかね……」

僕は考えるようにして言葉を返す。

まあ、恐らくと言うよりもバーンズさんなら乗ったことがあってもおかしくは無さそうな気がするな……今のところそれを証明できるほどの根拠がある訳じゃないんだけど。強いて言えば雰囲気、なのかな。

「私なんて入って数年程度しか経っていないような人材よ。おまけに辺境のアークスシップに所属のアークスなんかそんなものに乗れる機会なんて更々ないわ。ほら、乗って。」

「あ、はい！」

呼ばれた僕はフィリンさんと一緒に小型の昇降機に乗り込んだ。これは船の主電源とは違う電源が付いているみたいで電機は点いていないけれど重い音と軋むような音を立てながら動き出した。

「……それにしても、ノアがどうして最初からM・Sに配属になったのかは分からないものね。」

ぼうつとして昇降機の壁を見ているとそう言われた。

「それは僕だつて分からないですよ、実際に判定した人間じゃないんですから。」

「そうだけど……普通じゃあんまりないことよ、最初からつて。検査機が何処か壊れてたりでもしていたんじやないかしらね。」

フィリンさんはため息をつきながら言う。

何だかバーンズさんと同じ話をしたような気もするけど、そうであるなら後から連絡でもなんなりが来て取り消しになるはずだからやっぱりそういうのは無いのかな。今もこうしてM・Sに居るわけだしね。

「そうだとしたら今頃は僕はここに居ませんよ。」

「まあ、それもそうね。」

そうして話をしていると気が付いた時には昇降機は目的の階に到着した。

「……取りあえずここで待機するように言われているけど、休めるような場所じやないわね。」

昇降機から降りた後、道なりに細い通路を進むと少しだけ開けた場所に出た。暗いせいで全体は良く見えないけど。

「この部屋、何なんでしょうか？」

そう聞くとフィリンさんは少し考えた後に答えてくれた。

「そうね……まあ、構造からして休憩室か何かでしょうけど物が無いから詳しくは分からないところよ。」

「暗くて良く見えないですけど、確かに何もありませんね……」

暗所に慣れてきた目を何度もすぼめてもう一度部屋を見てみると確かに構造では休憩室のようになっていているけど、椅子とか机とか……そういった物が一切無くて元々の部屋としての機能はほぼ死んでいるようだった。

「でも、ここで待たなくちゃいけないんですよね？」

「ええ、バーンズから聞いている話ではそうよ。この部屋で待つて居ろつて。」

フィリンさんはそう話しながら首を部屋全体に動かした後、更に続ける。

「……でも、やっぱり無理があるわよね。この状態じゃ。」

そう言うのと部屋の奥の方へ進んで行った。歩いて行ったところだけ埃が舞って無くなっていて、水に濡れた足で床を歩いたようになっていた。

「どうやらまだ何かあるかどうか探しているみたいだ。」

「やっぱり何も無いですか？」

「……そうね、椅子の1つでもあれば良いと思っていたけど駄目だわ。」

フィリンさんは振り向きながらそう言った。

「そうですね……？」

それでフィリンさんが振り向くのを見て、それから僕も見える範囲で使える物が無いか探していた時だった。部屋の奥の方の通路に人影が見えたのは。

「ノア、さん？」

「ミイーンさん？ミイーンさんじゃないですか！」

薄暗い通路から出てきたのは暗めの灰色に赤いラインが入っている装甲板……もとい、ミイーンさんの姿が見えた。暗い室内で外装の溝を走るラインが赤々と鈍く光っていた。

「ん、知り合い？」

最初は少し不思議そうにしていたフィリンさんは僕の方を向いて聞いてくる。そうか、フィリンさんはミイーンさんと面識が無かったんだっけ。

「ええまあ、一応ですけど知り合い？になるんですかね。」

「なるほど……珍しいこともあるのね。」

そう言うとフィリンさんはゆっくりとミイーンさんの方へ歩み寄っていった。

「以前僕が担当した仕事でお会いした方なんですよ。」

「そう、ミイーンさんね。私はフィリン、宜しく。」

「フィリンさん、こちらこそ、ですか。」

そうして2人は手を交わした。

「…… あ、そう言えば他のミイーンさんはどうされているんですか？今は居ないみたいですけど。」

一旦握手も終わってひと段落した後、周りを見渡してみても違和感を感じた僕はミイーンさんに聞いた。

見てみればもう2人のミイーンさんが居ないことに気が付いたからだ。

「残りの私は、別室ですか。待機を伝えられて、部屋を割り当てられて、ですね。」

「そうでしたか…… まあ、無事に退避できているみたいで良かったです。」

聞くところによればこことは違う部屋に待機させているみたいだ。やっぱり同時に動くのにはそれなりに精神を摩耗させるのかな。

「あの方に、教えて貰って、ここに。」

「もしかしてですけど、それってバーンズさんですか？」

そう僕が言うとミイーンさんは軽く頷いた。

まあ、ドックがあんな調子じゃバーンズさんも思うところがあったんだろうな。

「取りあえず、出発までの間ここで休みましょうか。いつ頃に出るのか分かりませんから……。」

すると僕がその言葉を口にした瞬間、部屋の中……というよりも船全体に電子ブザー音が鳴り響いた。続けて男性の低い声が聞こえてくる。

『あー……聞こえているな。』

バーンズさんと思っただけで、良く聞いてみると全然違う声だった。もう少しそれよりも低いような……そんな感じだ。

『出る準備が整った、それなりに強い衝撃が来るだろうから他の搭乗者は何処か安定して掴まれるところか座れる場所に居てくれ。発艦直前にはもう一度連絡する。』

「何処に掴まれて言うのよ、もう……」

フィリンさんの言う通り、ここには掴まるところさえなかった。唯一掴まれるなら……壁くらい？

「あの……良ければ、ですが。私達が居る部屋、あそこなら大丈夫……」

僕がどうしようかとフィリンさんに聞こうとしたときには既にミーンさんが話し始めていた。

他のミーンさんが待機している部屋、少し迷惑かもしれないけど掴まる程度の物ならありそうなのかな。

「だけど、良いのかしら。貴方に割り当てられた部屋なのに私達が行くのは。」

「良いんです、減る物ではないですから……」

そう言うとミーロンさんは来た道を振り返って、その部屋の方を手で指した。

「おいグレイド、お前掃除とかしてないだろ。」

艦橋にあるコンソール台を操作しようとした俺はグレイドに向かってそう言った。

「仕方が無いだろ。：：： 第一に俺はこれの管理を任されているだけで維持は頼まれていないんだ。大体追加の担当だってよこしやしないのにこんなでかい船の掃除出来る訳ないだろ、まったたく。」

「それはそうだがな。：：：」

試しにコンソール台の上に指を走らせると深く積み重なった埃が抉れていった。どれだけ掃除していなければこんなことになるんだ？

「：：： はあ、まあいい。これが動きさえすればそんなことも関係ないからな。準備の方はどうだよ。」

俺は指に着いた埃を払うと横のコンソールを調整するグレイドに向かって確認を取った。

「準備ならいつでも出来てるさ、問題は動くかどうかだな。バーンズ、そっちのコン

ソールも電源を入れてくれ。」

「分かった。」

そうして俺はコンソールの電源を入れた。幸いにも普段駐在所で使っている物に近い構造だったこともあつてすぐに入れることが出来た。

コンソール台のファンが回り始めると正面のスクリーンが起動を始める。

「何処かに主電源の起動用プログラムがある筈だ。探してみてくれないか？」

「何も弄られてないのならすぐに見つけられるだろうが……まあやってみるさ。」

起動が完全に完了すると表記は若干違うものの普通の画面が表示された。画面下部にはアークスのロゴ表記が出ている。

「俺はこいつを引継ぎで管理していたただけだから当時のことは分からんが、それなりに被害を受けて使い物にならなくなった物をこの辺境フェルノットにまで引つ張つて来て使い切るつもりだったらしいな。」

グレイドは操作をしながらも器用に口を動かす。

「それにしてもここまでの損傷度で使うのは執念に近い気もするが……まあ、そういうこともあるか。」

そう言う奴は手を後ろにやって体を伸ばした。

「……ん、これじゃないか？今見つけられたが。」

そうこうしているうちに俺はコンソールの画面上で起動用のプログラムのようなものを見つけることが出来た。それにしても手間のかかる船だな。

「多分それで合つてると思うぞ、試しに入れてみる。」

言われた俺はその見つけたファイルを選択して実行のコマンドを選択した。

選択をすると重い駆動音が段々と大きくなり始めて高音になっていく。

「問題なさそうだが……」

「そうだな。」

しばらくすると安定して電力を供給できるようになったのか艦橋にある照明に火が入り始めた。いくつかは点かないままだったが。

「よし、良いぞ……このまま安定させてノズルの方にまで回せれば、マニュアルを再確認するから少し任せるぞ。」

「ん、分かった。」

グレイドは席をコンソールから離れると自分の持っている端末でそれを確認し始めた。一応奴はアークスだが整備の役職の人間だから持っているのは物理端末だった。

E—29 「発艦」

「エンジンの方は大丈夫なんだな？」

「ああ、今やってみたが十分なはずだ。試しにやってみろ。」

その目の前の男の方が言う和小さめの振動が船に響いた。どうやら上手くやれたみたい？

「おいつ、もう少し静かにやれ！怪我人が居るんだからな。」

「難しい注文を後から言うなよ、こつちだつて初めてのことでただでさえ手間取つてんだ！」

短い間に複数の怒号が飛び交う。

「うっ……」

「あ……何処かまた傷が、大丈夫ですか？」

そうして少し考え事をしてしていると傍で介抱していた患者の人の声を聞いて、ぼうつとしていた私はふと我に返った。

「ごめんなさい、少し響いたものですから……もう気にされなくとも大丈夫ですよ。」

彼女はそう言うや椅子に座り直してからまた落ち着いた様子に戻っていた。

「悪いな、俺達も扱うのは初めてで手際がな……」

男の方は彼女の方を向くと申し訳ないようにして少しかがんだ後、操縦席の方に改めて進んで行った。

「もう出れるか？時間は余裕があるがなるべく早く出た方が良いからな。」

「ちよつと待て……」

どうやらもうじきに出発するようだ。今席に座っている方の男性がコンソールで何かを確認し直しているのが見える。

「エリシアさん、もうすぐまた動きますからこちらの方に。揺れると危ないですから。」

私はこの後に来る衝撃が彼女に響かないようにする為になるべく近くに来るように促した。手で補助できれば少しは抑えられるだろうし。

「すみませんリエさん……」

「別に良いんですよ、仕事ですから！」

少し寄って貰ったエリシアさんを全体的に支えるようにして私は彼女に手を回した。これで大丈夫だろう。

「……よし、安定したな。ドックから出すぞ。」

前の方からそう聞こえると船の中で低い駆動音が響いた後、ゆっくりと浮上を始め

た。宙域でも大丈夫なように分厚く加工された小さい窓からその様子が伺える。

「す、凄いですね……」

エリシアさんを補助しながらも窓からの景色を見た私はちよつとだけ驚いていた。段々と艦フェルノットのドックから離れていくのが見える。本当にあの場所から出たんだ……

「リエさん……？」

そうして私が小さい子供のように窓から興味津々に外を見ているとエリシアさんが気になったようで私に声を掛けてきた。

「何か、見えるんですか？とても集中されていますけど……」

「へ……あ、いや、特に何も……ですか。」

後ろから急に声を掛けられたこともあつて少し声が裏返ってしまった。ちよつと恥ずかしい……

「その……あんまりこういうのに乗ったことが無いというか、艦から出たことが無くてですか。物珍しくて。」

アークスの人なら普段から宙域に出たり、惑星に降りたり……そう言ったことをするみたいだけれど私はただのナース、そう言った事とは程遠い役職の人間。確かに宙域には居るはずなのに艦の中にならずと居るせいで何処か遠い場所に感じてしまう。それもあつてか私には船から見える宇宙が特別に感ぜられた。

「： それにしても急でしたね。 退避までには少し時間があつたというのに私、道具とか色々と放り出したままで来ちゃいましたから。」

さつきまで覗いていた窓にはしわだらけになつたナースの制服が写つていた。

「私のところへは特に連絡が来ていませんが：： ダーカー因子の濃度が高くなつたということだけで今すぐにも事態が起こる訳ではないですからね。ただ、それが早くなるのか遅くなるのかは分かりませんけど。」

エリシアさんは少し俯いて考えるようにしてそう話した。

「でも今回のような予兆も突拍子も無く、それも数年に一度にしか起こらないようなことが起こる：： 少し怖いですね。」

そう言う彼女の眼は宇宙の何処か遠い場所を見つめていた。

「くっ：：： このドアも、中々、このっ。」

「駄目よノア、もう少しこういうのは腰を入れてやるのよ。ちよつと変わりなさい。」

「：：： すみません、お願いします。」

立て付けの悪いドアを前に苦戦していた僕は呆れるようにして忠告をしてきたフィ

リンさんと交代をした。

「さつきまでは、大丈夫でしたけど、駄目ですね……」

後ろから申し訳なさそうにしてミーンさんが言う。どうやらさつきまでは普通に動いていたみたいだ。さつきまでは。

「ん……あれ、おかしいわね。私の力で押ししても開かないなんて、もしかして何か別の物が引っかかっている……?」

「そうなんですよ、立て付けが悪い他にも何か原因があるみたいな。」

そうしてもう一度詳しく見てみようと思つてドアにもう一度近づいた時、それなりに大きい振動が響いた。

「な、なんだ?」

振動で少し動揺しているのもつかの間、低い音が音が響くと通路の電気が一齐に点き始める。もしかして船の主電源が入ったのか?

「多分だけど予備電源が限界だったのね。ほら、普通に開くわよ。」

フィリンさんがそう言つてドアの横に備え付けられたスイッチを押すと問題なく開いた。僕の部屋のドアもこんな風に滑らかに動けばな……

「こつちの方は少ないけれど家具みたいなのはあるわね。」

そう言いながらフィリンさんは部屋の中へ入つて行く。僕も続いて入つて行つた。

「何だか簡易的な自室みたいですね、この配置。」

見渡せるほどの広さは無いけれど見る限りでは僕の自室を少し小さくした感じの大きさに置いてあるものも同じような物だった。

「随分と埃まみれだけ……机に椅子、ベッドがしつかりと備え付けね。」

フィリンさんは更に奥の方に行く。埃まみれだということを聞いてふと部屋に備え付けられている机の上を見てみると埃の所為で真っ白になっていた。何だかずっと放置していたみたいだな。

「それでベットの方にもうお二人が居るといわけね、ベットには……？」

奥の方に進んだフィリンさんがベットの方を見ると不思議そうな顔をしてそれを見つめていた。

「ミイーンが2人……？」

そう言うときフィリンさんは入り口の方に向き直ってミイーンさんの方を見る。

「いや3人？どういうこと？」

その反応をしているところで僕はようやく気が付くことが出来た。フィリンさんにまだミイーンさんについて詳しく説明をしていなかったことに。

「なるほど……そういうタイプもあるのね。同じキャスト種族だつて言うのにな

かったわ。」

「知られなくとも、仕方が無いです。私は、少し違いますから……」

あれから軽く事情を説明するとフィリンさんはすんなりと理解できたようで、その後は普通にミイーンさんと談笑していた。

どうして自らが分離しているのか、今は何故一人だけしか動いていないのか。そう言った事やキャスト同士の話の適当に交わっていた。僕はヒューマンだから何のことだか分からなかったけど……

『…… あー、船内各位に連絡する。船各部へのエネルギーの安定供給を確認することが出来た。これより直ちにでも発艦する。もう一度言うが掴まれる場所に掴まるか深く椅子に座ってくれ、以上。』

そうして談笑をしていると突然艦内放送がノイズ交じりに響いたかと思えば伝えることだけを言うともたすぐに放送は切れてしまった。船内各位って僕ら以外にも搭乘している人が…… まあ当然だけど居るはずだね、少なからず。

それを聞いた僕はまだ立ったままだったので適当に開いているスペースを探してそこに座り込んだ。

「それ程激しくなければ良いんですけど……！」

それ程発艦の時の衝撃が激しくなければ、なんて言おうとした時にはそれなりに激し

く船全体が大きく揺れた。危なかった、あと少して舌を噛むところだった。

「大丈夫ですか……？」

心配そうな顔をしてミイーンさんが声を掛けてきた。

「大丈夫ですよ、ちよつと体制を崩しちゃって……安定？してきたので問題ないですよ。」

そう僕が言うのと少し安心したようにしてミイーンさんは表情を緩めた。

「……グレイド、少し強すぎたな。お陰で吹っ飛んじまったぞ。」

「お前がしつかり掴まっておかないのがいけないんだろ？ほら、手貸すぞ。」

「悪いな……」

座りが甘いせいで椅子から転げ落ちた俺はグレイドに手を貸してもらって起き上がる。

「少し強めに、吹かしすぎたな。同じ規格とは言え別物のエンジンなのがあだになつたか。」

取りあえず無事に……まあ船を動かすということは達成できた。見つかった問題も

多くあるが急を要するものではないしひとまずのところか。

「それでも十分にお前は良くやってるよ。動かすの、初めてだったんだろ？」

「ま、まあな……」

「なら上出来だよ、このまま頼むぜ。」

「ああ。」

そういうと奴はもう一度コンソールに向き直って船の舵を握り直した。

最初の衝撃はそれなりにあったが、宙域に出てからは比較的安定し始めたようで船は通常通りの動きを見せている。このまま無事だと良いんだがな……

「よし、サブカメラをフェルノート側に向けよう。頼めるか？」

そう聞くとグレイドは特に気に障ることも無く返事を返してくる。

「いつでも状況を把握できるようにした方が良いからな、いつ事態が発生するか分からない。」

けれど俺がそう言うのと今度は少し不安げな表情を浮かべた。

「確かにそうだが…… ちなみにダーカーが予定通り出現する場合にはどうするつもりだ？この通り人材不足だが。」

グレイドは少し首を回して艦橋を見渡すような仕草をして見せる。

「一応この船には主砲があるにはあるが…… あくまでも対艦用の奴だし、おまけに出

力不足で上手く撃ちだせない問題もある。だとしたら必然的に船に標準配備されている対空砲やら機銃なんなりを使うしか安定は無理な訳だが、俺は勿論のことながら非戦闘員だからあてにしないでくれよ。」

そういうとグレイドは両腕を上げて降参と言った様子を伝えてきた。

「分かってるさ、第一お前には舵を切って貰う責務があるからな。」

「じゃあ、お前一人で銃座に座るのか？」

そうして冗談交じりの言葉を言われた俺は口角を少しだけ上げた。

「俺だけじゃないさ…… まあ、出来れば使いたくはない人材だが。」

「……？」

「ん、ノア？どうかした？」

「い、いや、特に何も…… 何だか呼ばれたような呼ばれていないような。」

「何よ、はつきりしないわね。」

フェルノートを発つてからしばらく経った後、僕たちは最寄りのアークスシップに寄港するまでの間ここで待機していた。

「…… といつても特にすることがあるわけではないから外の風景を部屋の壁に映し出して、それを眺めていた。」

「…… それにしても宙域から見る宇宙は何だか違うわね。」

ホログラムの窓に改めて向き直ったフィリンさんはそう言った。確かにさつき僕もその窓から外を見た時には普段艦に居る時に見ている宇宙とは何かが違う気がした。

何だろう、普段とは違うから怖さは勿論あるけど、何処か不思議な感覚で…… 難しく言葉にし辛いな。

「…… 私にも分かります。この、不思議な感覚、難しいですね。」

「どうやらミーリンさんも感じていたようだった。」

「…… まあ、単純に物珍しいからつてことで良いんじゃないかしらね？ 普段私たちが見ているものが違つて見えるだなんてそれだけで一大事なもの。」

確かに、フィリンさんの言うことも間違つてはいないな。普段見ているものが違つて見える…… 不思議な現象だな。

「これがまだ落ち着けるような平時ならもつと良かったけれど…… そんな都合良くことは進まないわね、まったく。」

そう言うたフィリンさんは窓から離れるともう一度椅子に座り直した。

「でも、想定外とはいえ少しの間は休めますから…… 少し長い休憩だと思つてこの

時だけは気楽にした方が良いのかもかもしれませんね。次に動くときには中々休めないかもしれないから。」

「……途中までは良いアドバイスだけれど最後のはちよつと余計だったわね。」

フィリンさんは少し不服そうな顔をしていた。こういうことは少しでも前向きに言った方が良かったかな……次からは気を付けよう。

「はあ、少し長い休憩ね……」

そう言うのと彼女は座っている椅子の背もたれで遊びながら暇を持て余し始めた。

E—30 「発現」

「……ノアさん。少し、良いですか？」

することもとうとう無くなつてただ床に座るだけになっていると不意にミイーンさんが声を掛けてきた。

「別に構わないですけど……どうかしました？」

返事をするついでに僕は首を回してミイーンさんの方を向く。するとそこには困つたような、心配しているような普段の表情ではなくて程度の違う別の顔があつた。何かあつたんだろうか。

「何だか、空気に……いえ、周囲に違和感を、感じて、ですか。」

彼女は椅子からおもむろに立ち上がつて、それで部屋の壁の奥に行くとホログラムの窓の電源を点けながらそう答えた。

窓？窓から何か見えるのかな。

「僕は特に何も……僕が鈍いだけかもしれないませんが特にはですか。」

そう言つて僕も座つていた床から立ち上がつてミイーンさんの方に向かった。

「いえ……私は通常よりも、普通よりも少し、感覚が敏感なだけ、ですから。」

僕がそう言うときよそよそしい風にして彼女は答えた。

「私に搭載されている……以前使用した、レーダー系統は時々、本来の役割ではない別の……別の何か、それを捉えて、感じてしまうことが、ですか。」

「レーダー系統って、以前初めてお会いした時に使っていたやつですか？」

ミーインさんは静かに頷く……レーダー系統。それを聞いた僕は以前ミーインさんに初めて出会った時に周囲の索敵をしていた時のことを思い出していた。

そこから更に聞くとところによればそのレーダー系統の装備の追加によって副作用的に生まれてきてしまった物だという。その装置が単なるレーダー機能の付いた機械じゃないかららしいけど……あまり詳しいことまでは分からなかった。

「そのせいで変な物、そういった物がですか。」

そう言うとき窓の方を指で指した。

見てみるとどうやらフェルノートの方を今度はホログラムが映していた。遠目ではあるけれどそこにははつきりと古びた艦の全体が映っている。

「もうこんなところまで……」

「どうやら現在、艦橋？の方で、使用中の、ようですから。こちらに繋がりました。」

ミーインさんが言うにはこの映像は艦橋？が使っているサブカメラの映像を回して来たものらしい。と言うことはバーンズさんが見ているのかな。

「ダーカー因子の濃度、それなのかも、しれません。」

彼女は首を回すと窓の方を見た。僕も続けて視線を窓の方に向ける。

「少し、色が違く、見えませんか？」

そう言われた僕はホログラムを良く目を凝らして見てみる。

「……赤い？」

赤、血のような赤。さつきまで黒一色だった宙域が染められたようにその色に変わっていた。

「そう、これが因子、ですか。」

「来たな。」

サブカメラの映像をモニターで確認していた俺は隣に居たグレイドに向かってそう言った。

けれど、返事がすぐに帰って来なかったことから俺は隣を見た。

「お、お前は見たことある……んだったな。」

そこにはかなり驚いた様子のグレイドが居た。

「どうしたグレイド。」

そう言うとしばらくしてからはつとしたようにして奴は俺の方を向いて会話を続けた。

「…悪い、あんまり見たことが無くてな。こんな風になるのか？」

グレイドは指でモニターを指しながら言う。指の先にはフェルノートの周辺があった。

もしかしてダーカー因子の濃度が濃くなるのを見たことが無いのか？そう聞くと奴は2度続けて頷く。

「俺も、似たような事には遭遇したことがあるがここまでの規模のものには遭遇したことが無いか。拡大してみるぞ。」

そうして俺はサブカメラの拡大率をさらに引き上げてフェルノート周域を詳しく見ることにした。

「…：… 今のところは特に何も無しか。グレイドも良く見ておいてくれ。」

「…：… ああ。」

けれど、事態はそこまで動いていないようなのか因子の濃度が濃くなっているということだけが確認できた。

それではばらく観察していると最後の船？がフェルノートから発つところが見えた。

「今のところは何もないみたいだな……」

隣で同じ映像を見ていたグレイドはそう言う。

「後は何時動き出すかどうか……」

冷静に状況を確認して俺がそう言うのと少し心配な様子でグレイドは声を掛けてきた。

「シークマーカーに辿り着くまでに何も無いと良いんだが、バーンズはどう見るよ？」

奴は生き荒げに軽く舌打ちをしながらそう言う。

そう言われてもな……正直なところはそう言った心境だった。俺はこういうことが起こると言うのを軽く知っているだけで予言まがいなことではできないからな……けれど、少し落ち着かせるためにでまかせでもと思っ言葉を出した。

「大丈夫だ、そこまで心配することは無い筈だぞ。」

「本当か……？」

グレイドは疑惑の目を俺の方へ向ける。

「そうだろうよ、まあ心配するなって。」

俺がそう言っている時にはモニターには応援のアクションキヤの小型船が複数映り込んでいた。

「い、いつ来るんだろう……」

隣の同じくらしい年の奴が話しかけてくる。

「……俺にも分らないよ。」

そう返すとあまり落ち着かない様子だった。

「だって、大人の人達は命令を伝えるだけ伝えて先に退避しちやっただもん。いつ来るかまでは聞いて無いから……」

命令。俺達は大人の、正規のアーキスの人達にここで待機をして何かあれば戦うように伝えられていた。

「僕らまだ訓練の最中なのに、大丈夫なのかな。」

「……大丈夫だよ。」

正直なところ、自分自身も不安だったけれど不安感を出さないためにもそう答えるしかなかった。

「ねえ、あれなんだろう。」

さっきまで話していた奴とは別のがそう言う。気になった自分はその指し示す方を良く見てみた。

「……?」

「何だあれ。」

その得体のしれない何かを見つけると僕ら訓練生はざわめき始めた。

そうしてしばらくの間全員が固まっていると、ある一人の奴が何かに気が付いた。

「おい、近づいてきてないか？あれ。」

言われた俺はもう一度見てみる。

すると、そこにはそれなりのスピードで近づく何かの姿があった。

「どけ！攻撃するんだ！」

後ろからそう聞こえると手でどつかれて、俺は取りあえず正面からはけた。

続けてそれなりに戦うことに自信のある奴が前に出た。

「このー！」

それで準備が出来たのか体と同じくらいあるだろう銃を構えた奴が一発目を撃った。

小さい破裂音が響く。

「わ、私も。」

それに続いてテクニクも使われ始めた。発動時の音が破裂音に紛れて聞こえる。

「は…早い！」

銃を撃った奴がそう言い始める。どうやら標的が早すぎて当たらないみたいだ。

続けて破裂音が何度も響くけれど、明らかに手ごたえは無かった。

「おい！来るぞー！」

状況に付いていけずにぼうっとしているとそう言われた。はっとした俺は手に構えていた訓練用の大剣を強く握る。

「や、やってやる！」

そうして俺はその近づいてきたそれに向かって飛び掛かった。

「うあああああああああー！」

標的に向かって、それに向かって全力で重い剣を振り下ろす。

「!？」

けれど、それは空を切って床に突き刺さることになった。相手の動きが早いんだ！

「しゃがめー！」

銃を構えていた奴にそう言われる。俺は咄嗟に床に伏せた。

「このっ、このっ！」

狙いを絞って撃っているけれど、やはり相手が早いせいかな弾は当たらないようだ。う。

「だ、駄目っ！下がって！」

何かを感じたのかさつきまでテクニックを使っていた女の子がそいつに向かって言う。

「な、何が……」

その瞬間だった。それがそいつに飛び掛かったのは。

「やめろ！この……くそ！」

それまでは遠くから見たり、動きが早すぎるせいで上手くその姿を見ることが出来ていなかったけれどその時にその正体を見ることが出来た。

「ば、化け物……」

それは全身が黒くて、足が何本もある奴だった。人の形はしていなくて恐ろしいような……

「あああああああつ！」

そうして、しばらくもみ合っているのをただ立ち尽くして見ることしか出来ないでいるとそいつの断末魔が聞こえた。

「あつ…… お、俺は何やってるんだ！」

状況に気が付いた俺は銃を持っていた奴を助けるために急いで駆け寄る。もう一度剣を強く握った。

「このおおおおお！喰らえつ！」

間合いを近づけて当たるところにまで近づけたことを確認して、俺はもう一度剣を振った。

「くそ、またか!？」

けれどそれは素早く剣を避けて見せた。どれだけ素早いんだ…？

「ああ、ああああ…。」

「きゃああああああ!!」

女の子の悲鳴が聞こえて驚いた僕は何事かと思った。

「君!、彼が…。」

最初に話していた奴が震える手で何処かを指している、まさか。

「えっ?」

そこにはシャワーのように首から血を噴き出して倒れているあいつが居た。あたり一面が赤黒く染まっっていく。

「しま…!」

突然のことが起こり過ぎていて処理しきれずにいると、今度は俺が倒される形で横から激突される。

「痛っ…。」

制服のお陰で痛みは少なかった、けれどその一撃でかなりやられてしまっているようだった。一部が剥がれている。

「早く立ち上がって! 奴らはまだ来て…。」

どうやら女の子の方は限界を迎えてしまつて、終始笑い続けていた。

「何処に行くんだ！」

そうして様子がおかしくなつた女の子は俺の手を振りほどいて訳の分からない方へ走つて行つた。

「待て！戻れ！」

けれど、そう呼びかけた時には女の子は首を吹き飛ばされていた。首だけが宙に舞つたと思えば残つた体が首から血を流しながら変な動きをして倒れる。

「……何なんだよ、どういうことなんだよ。」

俺は頭が痛くなつて、そのうち走るのを止めた。もうどうにでもなつてしまへつて思つた。

気が付くと目の前にはさつきとは違う何か黒いものが来て、それで……

E—31 「訓練生」

『……繰り返します。緊急退避令発令中、緊急退避命令発令中。フェルノート全艦の一般員、及びアークスは直ちに艦から離脱し安全宙域にまで退避してください。……繰り返します。』

「……おい、こいつはどういうことだ？」

足元から臭う強烈な臭いが嫌でも鼻にやって来る。

「見りや分かんذار、死んでんのさ。」

返事を返して来た奴、急ぎで編成された応援部隊の奴だが…… そいつと共にこの辺鄙な場所の市街地を行動していた。

名前も知らないそいつは少し息をのむと目の前に転がっているガキの死体を足でひっくり返す。

「うへえ…… ひつでえの。」

持っている大剣を地面に突き立てながらかがんでそれを見る。ここからでもそれなりに容態が見えるが酷いものだった。

ちなみにそいつが見ていたのはハンタークラスの訓練生のようで訓練用の安っぽい

作りの大剣が血塗れの状態で転がっていた。

「それにしてもさっきからガキの死体ばかりだな。もつとまともなのが戦闘をして
いる最中だと思ってたんだが……」

確かに、ここに来るまでの間に見たのは歳の低い訓練生の死体だけで正規のアークス
の姿は何処にも見えなかった。お陰でここに到着をしたときにも艦内放送が鳴り響い
ているだけで現地での俺達への指示は何一つとして伝えられずにいる。

「逃げだしたんだろどうせ、怖くなつてよ。こんなところに配属になつてるアークス
なんて肝が知れてるからな。」

俺は考え事につけているそいつに向かつてそう言った。

「……まあ、そう考えるのが妥当か。今回の事も上の方は重く捉えてはいないみたい
だしな。」

そう、艦の役割上そこまで重要でないと判断をしたのかそこまで的人员は今回の任務
で多くは回されていなかった。自分の所属の艦から出発をする時にもそこまで多くは
見えなかったからな。

そうしてあらかた確認し終わったのかそいつは地面に突き立てていた大剣を元の通
りに握り直した後、軽く膝を手で払うと俺を呼んでから再び歩き始める。

「おっと、そうだった。さっきの奴が持ってたスペアだ。」

少し歩くと奴は思い出したように銃の弾倉を取り出すとそれを俺に見せた。

ハンタークラスの奴が何で弾を？ そうやって変な顔をしながら奴に言うのと鼻で笑いながら言葉を返された。

「馬鹿、俺じゃねえよ…… お前が銃使うだろ？ ほら。」

そう言うのと雑に弾倉を投げ渡して来た。渋々手に取って確認をすると弾の口径だけは合っているようだった。

「…… それにしてもやけに静かだな。」

「…… ああ。」

弾を渡し終えるとそいつは何かの違和感を訴えてきた。やけに静か、その言葉は俺の頭にも既に浮かんでいた。

「何かしら騒いでる音が聞こえないってことは…… 他の部隊も同じく戦闘になつてないってか。死体はこれだけあるのにな。」

さつきとは違う訓練生の身体に目をやりながら奴は話を続けた。傷の程度は若干違うが同じような大ききで鋭いものに割かれたようになってる。

「全く、呼ぶなら呼ぶでそれなりに仕事は用意し……」

そうして、両腕を伸ばしてそいつがあくびをした時だった。

「…… おい、見つけたかもしれねえな。」

奴は何かを見つけたようで話を途中で切って俺の肩を叩く。一体何だって言うんだ？

そう言うのと手に持つてるので見れるだろうが、と呆れながら言われ俺は即座にライフに取り付けたスコープを覗き込んだ。

「あれは……昔何処かで見たことあるな。」

恐る恐るスコープを覗き込むとそこには小さい多脚型の……つまるところダーカーが居た。どうやら今は単独で行動しているようで周りには仲間はいないようだった。

俺は引き続けてその様子を確認し続ける。

「俺も詳しくは覚えていないが……砂漠型の地形の星だったかで目撃例のある奴だったか？」

そいつもスコープと同じような単眼鏡でそれを見ているようだった。時々報告をしてくる特徴が俺のしているものと同じだ。

「悪い、俺も詳しいことは……？」

そうして奴の方を向いて今見えたダーカーについては知らない……そう答えようとした時、そいつの後ろに黒い影を見た。

「ばっ、避けるー！」

「うおっ!？」

声を掛けたとしても間に合わない。そう思った時には既に俺の体は動いていた。

手にしていたライフルを慌てて近場に投げつけた後、迷わずに立ったままの状態の奴の体に向かって飛び込む。すると奴は単眼鏡を手に握り締めたまま押した方向に倒れ込んだ。

「…… てめえ、何しやがる!」

「そんなこと言える状況か! 周りを見る周りを!」

そう俺が言った時には艦内に満遍無く広がっていくダークカーの姿が見えた。くそつ、今まで何処に隠れてたんだ? 気配なんてただの1つも感じなかったのに。

「何だこれ……」

唾然とした顔を浮かべたそいつは俺と同じく口を開けてその光景を眺めていた。こんな量のダークカーには遭遇したことが無かったからだ。

「…… 少し不味いかもしれないな。」

最初にモニターでフェルノートの周域を確認してから数十分後、俺は引き続き状況を

確認し続けていた。

：…だが、その数十分で特に何も動きが見られないことから俺は少しずつ不安を募らせ始めて来ていた。

「バーンズは何か感じるのか？」

不意に呟いてしまった言葉にグレイドが言葉を返して来る。その声は少しだけ震えていた。

「俺はそう言うの分からないけどよ、お前なら何となく分かるんじゃないかと思っただよ。」

俺なら分かるか、正直なところ俺にはそんな力はないんだがな。…今までの経験から大体推測できるに近いか。

「…詳細までは分からんが好ましくない状況なのは確かだな。」

そう言うってから俺は自分の持つ端末で時刻を確認した。

「なあグレイド。」

「何だ？」

「少し前にアークスのキャンプシップがフェルノートに向かったよな、あれからどれ位時間が経った？」

聞くとグレイドは俺と同じく端末を取り出してから少し考えた後、再び話し始める。

「…… かなり経ってるが、これがどうかしたのか？」

そうして疑問を顔に浮かべるグレイドに対して俺は説明をし始める。どうしてキャンプシップがフェルノートに向かつてから時間が大幅に経過すると、それがどういこうことを指すのかを。

「…… これは基本的にの話だがこういつた事態になった時、事態の收拾度によっては一部のアークスは自らの艦に帰還するようになっていっているんだ。」

事態の收拾度。今回であれば指定宙域内のダーカー因子の低下度のことを表している。それが事態の収束具合によっては割かれる人材も変わって、更には少なくなるわけだ。

「それが遅れている、と言うよりー機も折り返して来ていないということは…… つまらぬことだか大体分かるな？」

そう聞くとグレイドは顔を少ししかめてから悩み始める。それから数分後には奴もようやく理解することが出来たのか分かった声が聞こえてきた。

「バーンズが話す通りなら今さつき見たキャンプシップの奴らは未だに苦戦しているってことか。」

一旦出したままだった端末をしまいながら奴は俺にそう言った。まあ、結果として同じ考えに行き着いたみたいだな。

「そう言うことになる。だから、そう考えるとなるとこつちの方にも多少なりとも何か起こるんじゃないかと思ってか。」

あのキャンプシップに乗っているだろう奴らがどれだけの強さなのか、それが推し量れないことから良くは分からない。が、基準で考えても良いのなら長すぎると言ったところか。

そこで俺も出して手に持ったままだった端末をジャケットにしまい込んだ。

「……ちなみに、シークマーカーにまでは後いくつぐらいだ？ 大体で良いんだが。」

「少し待ってくれ、値を出してみる。」

俺がそう聞くとさしあたりの無いように返事をした後、グレイドはコンソールに向き直ると少し手順の省いた計算で大体の時間を量り始め出した。

目的シークマーカー地に辿り着くまでに掛かる時間、これが早いか遅いかで今後の状況は変わって来る。

「……よし、出たぞ。予測経路も含めて見てくれ。」

「分かった、今行く。」

そうして少しの間待っていると演算が終了したのかグレイドは俺の方を向いて自分のコンソールへと呼んできた。それに応じて椅子から立ち上がる。

「もう一度走り直させるから良く見てくれ。雑にやったが良い程度に自動修正されて

る。」

奴はそう言うのとコンソールが自動的に作成した再現プログラムをモニター上で走らせた。

まず、黒い画面上にこの船の識別番号が明るい青色で表示される。

「悪い、少し分かりにくいかもしれないが我慢してくれ。取り敢えずこの位置がこの船の現在地だと思ってくれよ。」

そう言いながらグレイドはモニターのその位置を人差し指の関節で軽く叩いた。

「大丈夫さ、一応この船の識別番号はさつきあつちのコンソールで確認したからな。続けてくれ。」

「そうか、じゃあ続けるぞ。」

俺が大丈夫だと伝えるとグレイドはプログラムを再開させて行く。

そうすると次に明るい赤で別の識別番号が表示される。頭文字の後ろには182という数字が出ている、恐らくシークマークーか。

「まあ、この番号だがシークマークーのな。かなり大雑把だがここからここまでだな。」

奴はモニターにやっていた手をもう一度動かしてこの船の識別番号からシークマークーの識別番号へと指を引いた。

「それで大体の到着時間がざっとこんなもんだ、見てくれ。」

そう言つて次にプログラムを進行させると青の識別番号戦調用艦が赤で表記されているシークマーカーへ向かつて進み始める。下に表記されたタイマーも小さい電子音を短く断続的に鳴らしながら同期して動き始めた。

「……少し遅くないか？」

プログラムが走り終わった画面を眺めながら俺はそうグレイドに告げる。確かに積んでいるエンジンの性能で見れば普通の出力もしていないようだった。何かあるんだろうか。

「あー……悪い、説明してなかったな。今画面を変える。」

そう説明すると奴は画面を今走らせていたプログラムの画面からこの船の各部状況を映した図を出した。

「これがどうかしたのか？俺もさっきまで見ていたが。」

「まあ、待てつて。」

疑問を浮かべる俺に対してグレイドは落ち着いてエンジン部分の数値を指で指す。最大出力値？

「あんまりお前にはピンとこない来ないかもしれないが……この出力値のエンジンをこの短い区間で少しでも強く吹かせばシークマーカーに一直線、突っ込んでしまうのさ。」

そういうと次にエンジンの前方部位の方を指で指した。ブレーキに使う逆噴射用のノズルか。

「だがブレーキを掛けてどうにかできるんじゃないか、なんて俺も思っていたがこの部分だけやけに出力が低いんだ。」

そう言われて見てみると確かにエンジンの出力とは不釣り合いな程度のレベルの数値しかそこには無かった。

「なんだ、故障してたのか？」

俺がそういうと奴は首を横に振った、違うのか。

「違う、俺の調整ミスだ。メインエンジンの方ばかり見ていたせいだな、悪い。」

「……いや、別に良いんだ。過ぎた事を考えても仕方が無いからな、続けてくれ。」

この船の1番の問題であったのは左側部の方の欠損部分であったから基本的な部分が少し抜けていたんだろうな。まあ、気にしたところで仕方がない事は思わないようにするか。

「……取り敢えず総括して言えることはこの船では速度は出せないって事だ。だから出せるとしてもこのプログラムでの最大速度が限界だ。」

グレイドはそういうと画面を元に戻してから画面に出ていた予測時間の数値の下にある最大速度の部分了指した。

「：： 少し不安だが、出来ない訳じゃない。想像はあんまりしたくないが有事には俺と連れがどうにかするさ。」

「悪い、その時は：： 頼む。」

そうして俺はそう言うのとグレイドの肩を軽く叩いてから元のコンソール台に戻った。

E—32 「実地」

「……只今戻りました。」

機械類の駆動音が静かに鳴る部屋に低めの男の声が響く。

「ああ、君か。良く戻って来てくれた。」

振り返って声の聞こえた方向へ視線を向けて、それを確認してから僕は軽く礼を述べた。

彼には新しく開発をしたあるものの実地テストをしてもらう為に現場へ向かって貰い、騒ぎに紛れて帰還して貰ったところだった。

「どうだったかい、僕の作った玩具試作品は。予想通り……だったかな？」

「はい、計算上と同程度の効力を出せているとはですか。退避後に行った数分間の観測ではその様に見えました。」

そう言うのと彼は着ていたジャケットから端末を取り出して僕に差し出した。

「分かった、後でゆっくり確認させてもらおうよ。」

僕はそれを受け取ると先程まで体を向けていたコンソール台に向き直って適当な場所に端末を置いた。

ちなみに、これは記録映像の回収の目的で出発前に彼に渡したものだ。現地はまだ赴かなければ具体的な結果は得られないからね……

「……その、少し良いでしょうか？」

そうして僕が端末からのデータを取り出すために準備を始めていると先程の彼が少し困惑したような顔をして話しかけてきた。何だろうか。

「ん、何だい？」

コンソールに集中しながら言葉だけを彼に向かつて返す。

「い、いえ……今更ですがあれ程の規模の事をして上層部の方へは大丈夫なのかと……」

彼は困ったような顔をしてその様なことを言った。僕は特に驚く素振りも見せずには作業を続けながら話をする。

「何だ、そんなことを気にしていたのかい？」

特に変わったところも無く、面白みも無い質問に対して鼻で笑いながら話を続ける。こういったことは想定済みだからね。

「多少なりとも既に手は回してあるし、今回テストをした場所は言うまでも無く重要度の低い僻地だ。そんな場所が1つ消えようと上層部（彼）にとってはどうでも良いことだろう？」

「は、はあ……」

彼は僕の言葉を聞くとさつきまでとは打って変わって苦笑いのような…… まあ、中途半端な表情をしていたよ。

「ま、そういうことさ。部屋に戻って休んでくると良いよ。」

「……分かりました。」

そうして言葉を掛けると彼は特に何も言うこと無く部屋から出て行った……。ん、彼は少しマークしておいた方が良いか。

「さて、どんな光景が広がっているのかな？」

端末からのデータ取得の準備が整ったことを確認すると僕はコンソール台に放った例の端末をもう一度手に取って、こちら側との接続を開始させる。数分後には接続が完全に完了したことを告げる短い機械音が鳴った。

しばらくすると画面上にも映像データのファイル名が表示される。

「……」

この部屋のコンソールでも閲覧が出来るようにデータの変換を始めだす。全く、これだから企画は合わせろと言っているんだが……

「よし、これで開けるな。どれ……」

そうして無事に変換が完了すると僕はすぐさまそのファイルを開いた。画面には再

生のタブが表示される。

一瞬だけ黒い映像が挟んだ後に先程の彼の声で記録前の説明が流れる。どうやら試作品を設置し終えた所からの記録みたいだ。

「無事に起動は出来ているみたいだな……少し映像を巻くか。」

そのことの確認が出来た僕は映像の再生を早めた。その最中は避難準備をしているようだった。

しばらくするともう一度画面が一瞬暗くなつて暗転すると少し時間が経った後の映像が流れ出す。

「……因子濃度の上昇率には問題は無いな。おおよそ演算通りか。」

画面上に映る計測器の数値を見ながらダーカー因子の上昇率を彼の端末に入っているレポートを参照しながら細かく確認していく。何処かで漏れがあると困るからね。

「アナウンスが鳴ったか……そろそろだね。」

それではしばらく映像を流し見ていると次に艦内放送が聞こえ始めた。反応が遅れると思っていたが、この部分のシステムはまだ生きているみたいだね。

映像は走る映像に切り替わる。ドッグに向かっているのかな？

「それにしても回避命令一つでこの慌てよう、相当な平和ボケだなあ……全く、落ちたものだ。」

それから撮影者である彼が適当な船に乗って避難をし始めるとそこからは彼が艦内に仕掛けた定点カメラの映像に切り替わる。回線の都合でかなり荒いが観測には十分に堪えるものだった。

「うん……なるほど、もう少し増強の余地はあるな。これでも当時と同程度の強さにはなつてはいるが……」

その中で僕が観測を行っていたのはダーカーだった。というよりもこれが本題と言つても良い。

今回僕が作成をしたもの、それはダーカー因子の誘発……及び濃度の強化を行うものだ。

「対人性能も問題ないか、もつとも小さい子供が観測対象ではあまり良い結果とは言えないが結果があるだけ良いでしょう。」

それからしばらく観測を続けているとそこで回線の接続が切れたのか映像は途切れ、再び真っ黒な画面に切り替わった。

僕はそのタブを閉じると接続していた端末を外して適当な場所にそれをまた放った。また新しい物を回収しなくてはな。

「ふう……まあ、今回はこんなものか。次はどうするか……」

僕は画面に映る次の試作品の図面を見ながら次の展開を考える。

「……それにしてもこの前の彼女、どうも気に食わないなあ。」

ふと思考の最中の頭の中に一人の女が浮かんできた。この前あの僻地に偵察を兼ねて言った時のことだ。

「いくらデータを漁り返しても何処にもあれのデータが存在しない、どうということだ？」

出会った時には適当にあしらったが、帰還後には直ぐにでもアクセスの出来る範囲でデータを探した……が、彼女を特定できるようなものは一つも存在しなかった。

「あれはいつか別の脅威になりうる……警戒は必要だな。」

隠していた撮影器具で撮影をした彼女の写真を眺めながら再び僕はコンソールに向き直った。

『警告、後方準索敵範囲内に敵影を確認。各部担当員は直ちに配置に着くことを推奨。警告、後方準索敵範囲内に……』

今後どうなるのか、そう身構えてしばらくの間コンソール台で待機をしているとそれは突然鳴り響いた。

最初は突然のことで固まっていたが2回目のアナウンスで事に気が付いた俺はグレイドに向かって叫ぶようにして声を掛けた。

「グレイド！レーダー図を出せ！」

そう言うのとグレイドは何も言わずに素早くコンソールに手を伸ばした。俺の方も別の準備を始める。

しばらくすると中央にある一番大きなモニターにそれが写された。

「……それなりに不味いな。」

画面を見ると船の識別番号を中心にレーダーが展開されていてその少し離れた準索敵範囲に識別不能表示が出ていた。

基本的にこの船のシステムではレーダーで対象が発見されるとその対象へ電波が送られ、対象からの折り返しで送られてくる電波を受信することでそれを識別できるようになっている。……が、それが行われないうこととはだ。

「まさかとは思ったが本当に来るとはな……結構な数のダーカーだぞ。」
それがつまり敵、ダーカーだということだ。

「……」

『警告、後方準索敵範囲内に敵影を確認。各部担当員は直ちに配置に着くことを推奨。警告、後方準索敵範囲内に……』

「……バーンズ、俺はここで引き続き船の舵を取る。戦闘の方はお前に一任する。」

グレイドは1つ乗り越えたような顔をして俺に向かってそう言う。警告のアナウンスが鳴り響く中でその会話だけはやけに冷静だった。

「……分かった、気を付けてくれよ。」

ここで変に返してはいけないと思った俺は軽く返事をするだけでその場を後にした。早急に配置につかなければ。

「いきなり来るって……そんなことある訳？」

「仕方が無いですよ、予兆は何となくあったんですから。」

警告のアナウンスを聞いた僕らは驚きもあつたけれど何時かは起こるだろうと思つていたお陰で特に慌てることも無かつた。

「予兆？そんなものあつたかしら。」

「あれですよ、フィリンさんがスリープモードにしている間にホログラムで確認出来たんです。」

置いていた荷物を拾いながら話を続ける。そうは言っても銃と端末ぐらいしかない

けど…

「まあ良いわ、とにかく迎撃をどうするか考えないと。全く応援に行つたアークスは何やってるのよ…。」

フィリンさんは呆れながらそう答えた。確かに、応援に行っているアークスの人達は一体どうしているんだ？

『…接続状態の確認終了。No. 01、No. 02、No. 03を接続。スリープを解除します。』

「…ミイーンさんの方も準備が出来そうですね。」

聞き覚えのあるアナウンスが鳴る方を見るとミイーンさんが自分同士を接続している最中だった。ゆつくりと残りの2人が起き上がる。

「こちらの方は、大丈夫です。」

メイーンの方のミイーンさんからそう声を掛けられる。精神状態にも問題は無さそうだな。

「じゃあ、取りあえず艦橋の方まで行きましょう。バーンズさんが居ますから何かしらの指示は受けられるはず…！」

そうして僕は扉を開いて通路に出ようとした…が、なぜかそこには既にバーンズさんが居た。

「やつぱりここに居たか。」

「バーンズさんじゃないですか。上の方は大丈夫なんですか？」

そう聞くと少し考えるような素振りをした後に首を縦に振った。

「ああ、知り合いに任せてある。俺も迎撃に当たるつもりだ。」

どうやらバーンズさんも下で戦うみたいだ。

「準備はあまり順調とは言えないが……やるしかない。取りあえず着いて来てくれ。ノア君はヘルメットを着けるのを忘れるなよ。」

「は、はい！」

僕は存在を忘れかけていたヘルメットをもう一度付け直した。

「それとフィリンとミーインは左舷側の格納庫に向かって欲しい、説明は後からする。とにかく急いでくれ。」

「……分かったわ、気を付けてね。」

そこでフィリンさんとミーインさん、僕とバーンズさんとで一旦分かれることになった。恐らく役割が違うんだろう。

若干引きずられつつも手を振ると僕はバーンズさんについて行った。

E—33 「配置」

あれから道なりにバーンズさんに付いて行くと先程までいた場所とは違って狭い廊下が続く。

「バーンズさん、僕らの方はどうするんですか？」

そうしてしばらく進んでいるうちに聞きそびれたことを聞いた。まだ具体的なことを聞いていなかったからね。

「フィリンさんやミーリンさんはキャストですから宙域でも無茶は出来るとは思いますが……こっちは生身ですよ？」

僕はバーンズさんの目前でヘルメットのバイザー部を軽く叩いて見せながら言う。するとバーンズさんは特に顔を変えずに言葉を返して来た。

「大丈夫だ、俺達^{ヒューマン}でも出来ることはしっかりとあるからな。こっちだ。」

そう言う手と手で指示した方の角に曲がっていく。

「うおっ!？」

それを見て真似するように僕も角を曲がろうと、そうした時だった。床への力のかけ具合を間違えた所為なのか大きく僕の身体は通路に投げ出されてしまった。

しまった、ここだと重力が軽いのか！

「おい、大丈夫か？」

「あ、ああ、すみません…」

けれど、そのまま飛んでいき壁にぶつかることは無くバーンズさんに足を捕まえられて事なきを得た。危なかった…

「慣れないかもしれんが気をつけろよ、ここじゃ地に足が付かないからな。」

バーンズさんは通路で軽く足踏みをするとそう言ってからまた進んで行った。

今の今まで、艦フェルノットから発つてからあの部屋から出ていなかった所為で忘れていたけど、ここにはほぼ重力が無いからな。気を付けないと。

「… バーンズさんは慣れてるんですね、こういう所。」

僕は慣れた動きで進んでいくその姿を見てそう呟いた。何も経験が無い僕と比べるのは少し違うのかもしれないけど遥かに上達したようなそれだったから。

「まあ、宙域での作業が無かった訳じゃないからな。アークスって言っても案外色々な場所で動くんだぞ？」

「は、はあ…」

「そのうちにでもノア君も満足にここで動けるようになるはずだ… っ、一旦止まってくれ。ここだ。」

そうして話しているうちにバーンズさんは通路に少し深く足を付けて止まった。どうやら目的の場所にまで来たみたいだ。

「……よし。」

続けて僕も不慣れな動きで立ち止まって、それから周りを少し確認した。

そこは少し不思議な構造で目の前にある壁に備え付けられた扉、その反対側にも対照的になるようにして扉が配置されたいた。そういった作りからなのか通路はH型に、そして細く作られていた。

「えっと、ここですか？」

「ああ、ここだ。」

そう言うのとバーンズさんは扉の横に付けられているパネルを指しながら言う。そこにはRS-01の表記があった。

「ここが今の状況下で唯一使える迎撃設備だ。ちよつと見てみる。」

続けて開閉のスイッチを押したのか駆動音以外の音を立てずに扉が開いた。僕は言われたように中を覗いてみる。

「……？」

けれど、僕にはその部屋？が何の役割を持つのが分からなかった。少し考えてみても頭に浮かぶのはひたすらに疑問符だ。これは何だ？

「船の構造図を確認して位置だけは把握しておいたが、あるかどうかは正直賭けだったからな。あつて良かった。」

するとバーンズさんは床を蹴ると狭い室内へ入り込んでその中に配置されていた椅子のような物に滑り込むようにして座った。器用だな……

「特に問題は無さそうだが……」

そう言うのと次にはその椅子のような物に取り付けられていたレバーを握って、それに付いていたいくつかのスイッチを入れるとバーンズさんは思い切りそのレバーを右に倒した。

何に使うんだろう……。そう思っていると次の瞬間その椅子のような物と一緒に回転をする動きが目に入ってきた。

「ん、特に問題ないな。動作良好。」

バーンズさんがそう言う時にはそれがこちら側、僕の方に向いていた。

「バーンズさん、これって……」

少し混乱しながらもそれが何であるかどうか、それを聞こうとして僕がそう言うときバーンズさんは僕がそう答えるよりも先にグリップの違うスイッチを押していた。

……。その瞬間、銃声？のような音がその光景の後に自分の中に入って来る。けれど、それは普段から聞き慣れたような聞いたことのあるような種類のものではなくて余

計に僕は混乱してしまっていた。

「…これって銃なんです？」

何とかして頭に浮かんできた言葉を上げてバーンズさんに言うのと半分合っていて半分間違っている、と言うように言われた。どういうことなんだろうか。

「惜しいな、確かにこいつは銃の一種だが… 普段M・Sで使うような火器とは使いはまるで違う。別物だよ。」

「銃の一種…？」

そう聞くとバーンズさんは引き続き機器の確認を進めながらも一言だけこう答えた。

「そうだ、こいつは銃は銃でも対空用機銃だ。」

対空用機銃。その言葉に聞き覚えのなかった僕は中々それを理解することが出来なかったけど、名前の通りの使い方だと言われてから少ししてそれがどういった用途なのかを段々と理解することが出来ていた。

「まあ、急ぎで説明したがこんなところだ。本来ならA I Sを格納、運用するのがこの船の旨味なんだが… 生憎この船にそういった物は積んでいないからな。これで場を凌ぐしか無い。」

そう言うとはバーンズさんは椅子からまた立ち上がった通路の方に戻ってきた。

「えっと、大体のことは分かりましたけど……僕でも扱えるんですか？」

戻ってきたバーンズさんに向かって僕はそう言った。だって、一切も訓練も講習も受けていないような武器を扱うんだからね。少しぐらいは心配するよ。

「大丈夫だ、一度でも銃火器を扱ったことがあるのなら問題ない。ただ発砲音はスピーカーから鳴る補助音源だからそこだけは気をつけてくれよ。」

そう言うとは僕の方を軽く叩いて問題ないというような旨を伝えてくれた。そうであるなら良いんだけど……ここは信じるしかないか。

「そうですか……」

「ノア君にはそれなりに射撃の能力があると知ってのことさ。だから、あまり心配はしなくても大丈夫だ。」

次にそう言うとはバーンズさんはさつきここに立ち止まった時に見えた通路を挟んで反対側にある扉の方に飛んでいった。やっぱり、見慣れていないと凄いな……

「ともかく、まだ何かわからないことがあった時には通信で言ってくれ。いつでも話が出るように回線は繋いでおく、非常時用にな。」

するとバーンズさんは自分の被っているヘルメットの無線を調節してからもう一度話し始める。さつきよりも明瞭に聞こえる気がした。

「それほど長くはならないはずだ。しばらくの間、耐えてくれ。」
そう言うとバーンズさんは反対側の部屋に入ると扉を閉めて、これからすぐの準備をし始めているようだった。

「：： 何とかやってみるしかないか。」

そうして僕も同じくしてさつきまでバーンズさんの居た部屋R S i o iに入ると扉を閉めて、それから聞いた通りに準備をし始める。

「図の通りならこっちの方ね：：：」

私は端末で船の図を確認しながら指示通りに左舷側の格納庫を目指していた。勿論、ミイーンさん達も一緒にね。

「このエアロックを通って、それでもう一つの方を抜ければ目的地か。」

後続のことを考えてあまり急ぎすぎず、それでいて遅すぎないようにしながら進むようにしていた。ミイーンも私と同じで宙域での行動はあまり慣れていないしね。

「ミイーン、大丈夫？」

不意に後ろを向いて彼女達の様子を確認する。：：： 特に何も無さそうね。

「大丈夫です。まだ、精神力には、余裕がありますから。」

「そう……あまり無理はしないでね。」

私はそう声を掛けてからエアロックを潜り抜けた。

「無理でもないです……私が少し弱い、だけですよ。」

彼女達の方も続けてエアロックを潜り抜ける。今は一番目のオリジナルに近い彼女に同期されて動いているようで後の2人は表面には出てきては居なかった。

「まあ、力の出し加減は自分が一番分かっていることだと思うから貴方に合った方法で行くと良いわ。私が首を刺せることじゃ無いしね。」

「いえ、お気持ちは、ですか……」

先頭のミーンは少し首を俯かせるとそう言った。

「……そう、気を遣ってくれるのね。」

やっぱり、この人も優しい人なんだな。

……ともかく、話しながらも私達は通路を進んでいく。

「えつと、そろそろね。この辺りの扉だと思っただけ……」

そうしてたわいもないことを話しながら進むと持っている構造図で言う左舷側格納庫へ繋がる最後のエアロック、その部分に着くことが出来た。こここの扉には通常の扉よりも注意書きが増えているように見える。分かりやすく丁度良いわ。

「恐らくですが、この扉のうちのいくつか、それが攻撃で破損……その様な状況に備える、だから扉が複数枚、ですか。」

「なら、どの扉からでも良いの?」

そう聞くとミイーンは首を縦に振って答えた。

「じゃあここでも構わない訳ね、開けるわ。」

そう言つて私が扉の開閉スイッチを押すと音を立てずに扉がスライドして開く。

「……二重ロック?」

けれど、そこには格納庫は無くあるのは中継として設置されたエア抜き室だった。

「随分と丁寧な作りなのね、動くとき良いけど。」

そんなことを思っているとき有無を言わずに空気抜きの作業が始まった。室内に充滿していた空気が勢いよく排出される音が響く。けれど、それも真空状態に近づくと聞こえなくなつていった。

空気の排出が終了したことを振動の有無で確認した後、私はミイーンの肩を触る。こうすると自動的に通信回線が接続されるからだ。

『あー、ミイーン?聞こえる?通信回線の周波数を合わせられるかしら。』

『……あ、……大……夫です。』

かなりノイズが混じつていたけれど通信は聞こえているみたいだった。それにして

もローカル回線でノイズ……？

『もしかして何処か調子が悪いの？ノイズが多いけれど。』

そう聞くとミイーンは首を横に振る。

『いえ、ローカル回線を、切っていましたから……もう大丈夫です。』

『回線の受け付けを切る……まあ、これからはなるべく動く時には点けるようにお願い出来る？宙域だと困るのよ。』

『……分かりました。』

『じゃ、行きましょう。それなりに事態は急を要するわ。』

そうして回線の接続を確認した後、エア抜き室の出口のロックを外した。扉が入り口と同様に開く。そこで格納庫の内部を見た。

『……想定はしていたつもりだけど、酷いわね。』

けれど、そこは格納庫というにはあまりにも物が、設備が無かったの。

E—34 「射出」

『参ったわ…これじゃ厳しいも何も無いわね。』

あまり床を強く蹴り過ぎないようにしながらも足を進める。

『使えるものが何処にあるのかは分からないけれど、そんなこと言ってる場合じゃ…』

そう言いながらも私はその辺りに散乱していたコンテナを手当たり次第に覗いてみる…けど、やっぱりどれも空き容器だった。開けても見えるのは何かの梱包材かフィルムばかり。

『全くゴミの整理位しなさいよ…ってどうしたの？』

そうして焦りを感じながらも辺りも見探しているとミイーンから声を掛けられた。呼び出し用のブザーの後に言葉が続く。

『このコンソール、呼び出しが、掛かっているみたいですよ。』

ミイーンはそのままコンソールにアクセスを始める。それにしても呼び出して他に連絡を必要とするのが居たかしら？

『…分かった、私の方にも音声回してもらえます？』

『はい、やりますね。』

ともかく確認をするために私もコンソールの方に向かって少しだけ飛ぶ。… やっぱ慣れないわねこの感覚。

『えっと、場所は… 艦橋の方から？』

コンソールの画面の方を見ると相手側が艦橋から回線を繋ごうとしているのが分かった。もしかして少し前に見たあの管理者かしら。

『そのようです。少し前からずっと、呼び出しが掛かったまま、ですか。来る時間が少し、遅かったみたいです…』

… 確かに少し遠回りしたかもしれないわ。

『… 繋がりました。あちらの画面、出します。』

『ん、やって頂戴。』

そう言ってミイーンに画面を出してもらうと映像は出ずに音声のみの状態で艦橋側と接続された。それから少し驚いたような様子でバーンズと同じくらいの声色の男の声が聞こえる。やっぱりさっきの管理者ね。

『あー… 繋がってる？』

確認の為に向こうに声を掛ける。

『ああ、問題ない。そっちのコンソールは生きてたか？最近の確認していなかったん

だ。』

『大丈夫、埃のベールが掛かってるけど無事に生きてるわ。遅れてごめんさいね。』
指でコンソールのモニター周りを指でなぞってみるとくつきりと跡が走った。

『いや、慣れていないのなら仕方が無いさ。……で、話の本題に入るが良いか？』

『良いわ、待ってたぐらいよ。続けて。』

『分かった。じゃ、君たちにしてもらうことを説明する。良く聞いておいてくれよ。』
彼がそう言うと一緒に呼吸置いてからこちら側にデータを送信してきた。これは……
レーダー図かしら。

『今そっちに送ったが見えてるか？レーダーの状況なんだが……』

『ええ、見えてるわ。これがどうしたの？』

すると一旦咳払いをして、それから彼は詳しいことを話し始めた。

『まずだが、現状を君たちに伝える。この部分を見てくれ。』

『えつと、この準索敵範囲のところかしら。』

『そうだ。それで、その場所にはかなりの数の識別不能表示が出てるだろ？それがデータだ。』

画面に映る指定の部分に深く目を通す。かなりの数、アークスシップフェクスノットは無事じゃ済まなかったでしょうね……

『…で、私達は何をすれば良いの？状況は飲み込めたわ。』

『ん…簡単な話だが、通常の索敵範囲内の宙域で準索敵範囲から漏れてきたやつを手が間に合う次第にやって欲しい。アークスシップシュークスマーカイに辿り着くまでだ。』

『良いけれど、私達だけじゃお世辞にも手に負えない数よ？』

私がため息交じりに不満げな声で答えると少し間を置いてから思い出したように彼は言い始める。

『ああ、その点は大丈夫だ。バーンズと…えっと、あいつの部下の子が直に応援として簡易的な弾幕を張ってくれるはずだ。安心してくれ。』

あの時に二手に分かれたのはそう言うことだったのね…ノア、何も無いと良いけれど。

『…そう、分かったわ。所で聞きたいことがあるんだけど、良いかしら。』

『ん、何だ？』

そこで武器が無いことを彼に伝える。さっきから困っていたことだしね、手段が無ければ計画を立てても無駄なもの。

『悪い、言い忘れてたな。その格納庫はA I S用の格納庫なんだが緊急時用に行くつか小銃を配備するようになってる。少し奥の方にロッカーがあるだろ？へこみだらけのやつ。』

『ロツカー?』

言われた私はふっとモニターから視線を外して格納庫の方をしてみる。さつきまで見てた場所にそんなものあつたかしら……

『フィリンさん。あれじゃない、でしょうか……』

ミイーンが言つて指を指した方を見てみるとそこには見つけにくいような色の傷んだロツカーがあつた。あれしかないわね。

『まあ、それでだ。武器はあることにはあるんだが……詰まるところ質が悪いのしかなくてな。緊急時用の武装は元からあまり強くないがそれはそれと同等かそれ以下か……悪い、もつと頑張るべきだったな。』

『……大丈夫よ、どうにかしてみるわ。良くあることだもの。』

『……すまない、説明は以上だ。』

まあ、まともな武装が回らないのは普段通りの事だから……気にしないで上手くやることね。

『準備が出来たら、カタパルトの方に乗ってくれ。台図で射出する。』

『分かった、早急に準備する。』

『……頼む。』

そこでコンソールでの艦橋との回線が切れた。

『……じゃあ、開けてみましょうか。』

『……はい。』

艦橋との連絡を終えた後、ミイーン達と私は直ぐにロッカーへ向かった。

扉に手を付けて一つ一つそれを開けていく。

『ん、言うほど悪くない……。のかしらね。』

手に取ってみて試しに一つを吟味してみる。確かに現行の物では無いけれどそれなりに使えるんじゃないかしら、このサブマシンガン。

『ミイーン、そっちの方は？』

少し視線を横に向けてミイーン達の方にも様子を聞いてみる。見てみるとあっちの方はどうやら違う種類のように手に持っていた物のシルエットが自分の持っているとは全く違った。

『一応、私達の分は何とか、ですか。』

試しにとオリジナルに近い方の彼女がそのコッキングレバーを引いて見せてくれる……。あっちも問題は無さそうね。

『オイル切れは最悪起こしてないみたいだし、良いんじゃないかしら？』

肩をすくめてから私の方も引いて見せるとミイーンの方も少しだけ表情を綻ばせた。

『弾はそれなりに携行しておいて。途中で渡すことも出来ないし……連発弾だからそこまで心配は要らないと思うけど、一応ね。』

そう言いながら私は一緒に中へ置かれていた小振りの弾薬箱から連発弾を幾つか手に取って見せた。対人相手にはフォトン弾は弱いけど、ダーカーにはそれなりに効くはずだから大丈夫ね。

『……その、フィリンさん。』

『?』

それで、用意を済ませた私はカタパルトの方へ進もうとするとミーンが後ろから声を掛けてきた。

『どうかした?もしかして何か不備が……』

『い、いえ、違います……。この後の行動で、後の2人を独立させて動かすので、混乱が起きないように……。それで一応ですか。』

オリジナルでない方のミーン。話したことは無いから少し不安だけれど……今は信じるしかないわね。

『分かったわ、教えてくれてありがとう。私の方も気を付けるわ。』

手に保持していた銃をより強く握りしめてから再び元の方に向き直る。そろそろ行かないとね。

そうして私はカタパルトの方へ向かった。

『これで良いのかしら……』

私は脚部のカタパルトへの固定部分を見ながら試行錯誤をしてみる。特に規格は決まっていないみたいだから私フウリンカタパルトのでも問題なく装着することが出来た。

『えっと、これで艦橋に合図すれば良いのよね。』

いつかの時のように定位置で物を構えながら艦橋へブザーで合図をする。多分これで間違っていないと思うのだけれど……

『……』

ちよつとした緊張から一秒がとても長く感じる。一応だけれどカタパルトなんて経験したことが無いもの。

『……… 来た！行けるのね。』

そうして少しの間応答を待つて待機すると数分後にブザーで返答が返つて来た。準備が済んだのね。

『左舷カタパルトの射出準備開始、格納庫内の担当員は安全区域への退避要。対象軽量のレベルでの計測開始。』

回線を通してアナウンスが聞こえる。それと同時にカタパルト用の滑走路への道に

繋がる隔壁がゆっくりと開く。

『フィリンさん。』

『?』

『後から直ぐに、向かいます。』

『ん、待ってるわ。』

『計測終了、カウント設定2で射出。カタパルト搭乗員は耐衝撃要。』

それが聞こえた私は少しだけ足を力ませる。2秒ね。

『……』

『カウント開始……2、1、0。』

短いカウントが終了すると最初、強い衝撃が来た後に勢い良く滑るようにして滑走路を進む。意外ときついわね……！

『くうっ……』

そうして格納庫から外部に出ると最初よりも速度を上げて船首の方へ突っ込んでいく。もうすぐで滑走路が切れる！

『このっ！』

最後、カタパルトから切り離される瞬間に私は足のスラストを更に吹かす。これで少しは遠くまで出れるはず……

『…… はあつ、安定してきた。』

それで数秒くらい経つと速度も安定して衝撃もさして感じない程度にまで落ち着いた。距離で言えばこの辺りだし、計測がそれなりに上手くいったのね。

それから目的の場所の付近にまで到達すると私はブレーキを逆噴射で掛けて宙域に止まつて周囲を確認する。すると黒い物体が見えた。

『あれが目標ね、意外と遅いじゃない。』

早速私はそれを補足すると既に構えていた銃で点射射撃をした。持っていたサブマシンガンの銃口から青白い閃光が走る。けれどそれは目標から大きく外れた。

『…… 照準が合わないわね。もう少し上！』

今確認したばかりの弾道を参考に少しだけ照準を上に向けて目標にもう一度弾を放つ。

『威力は問題ないみたいね…… 次！』

フォトン弾が命中した対象が霧状になって消えていくのを確認した私は次の目標を探し始める。

『フィリンさん、合流出来ました。』

そうしているとミイーンの声が聞こえた。早いわね。

『分かった、他の区域をお願いするわ。ここは私がやっておくから。』

攻撃をしながらも手短かにミイーンに連絡をする。

『分かりました。何かあれば呼んでください。』

『ええ、後の2人にも言っておいて頂戴。』

私がそう告げるとすぐさまミイーンはスラストターを吹かして別の方向に向かった。私よりも出力が大きいのね…

『取りあえず、これならシークマークカーに辿り着くまで耐えられそうね…！』
それからひたすらに漏れこんでくるダーカーに攻撃を続けた。

E—35 「捕捉」

「残段数……よし、レーダーの方も問題ないのかな。」

銃座前に設置されたカウンターと小さい円形のレーダー図をもう一度見てみて確認する。カウンターには104の表記が出ている。

「104発……これって実弾なのかな。」

そう思った僕は回線を繋げて聞いてみることにした。これでやり方も変わって来しね。

『バーンズさん、少し良いですか?』

『ん、なんだ?』

『この機銃、使っている弾は実弾でした?』

すると少し間が空いてから答えが返って来た。

『あー、言い忘れてたな。そいつは実弾じゃなくて連発弾だ、20発のな。元々ダーカーに対して使うために置かれたものだからそれくらいはあるさ。』

『……ならかなりの時間使えますね。これなら持ちそうです。』

『ああ。』

1発が20発、それで換算するのならちよつとは余裕が出てくるのかもしれないな。気持ち的にも、攻撃でも。

そうして僕は機銃のグリップを握った。サイズが少し大きめで握りづらいけど。

「そう言えばフィリンさん達の方はどうなんだろ。もう動いてはいると思うけど……」

試しに少し体を乗り出してみて宙域の様子を見てみる。

「……いや、見える訳ないか。僕の眼にはスコープというか拡大できる機能なんて当然ないもんな。」

けれど必然……と言うよりかは当然なんだけど肉眼だと何も見えなかった。少しでも様子が見られればと思ったけど……

「つて、こんなんじやまともには撃てないじゃないか！肉眼じゃ遠くまで見えないのに……ど、どうすれば良いんだ？」

確かにそうだった。ただでさえ目視で外のものを捉えるのが難しいっていうのにダーカーに攻撃が出来る訳ないじゃないか。

「もしかしてキャスト専用……なわけないよね。だとしたら何か補助するものが何かある筈なんだけど。」

そう考えた僕は急いで何か無いものか銃座の辺りを見回してみる。そういったもの

ならずぐ近くにあるって単純だけと思ったからさ。

「何処だ、何処にあるんだ……？」

それで、まず正面を見てみる……当然だけど計器類しかない。次に僕は死角になっていた銃座の座席部分を手で探ってみることにした。時間も無いから手早くね。

「ん、何だこれ。」

少しの間そうしていると座席の左側には無い箱状の何かを見つけた。気になった僕はそれを右手で掴んでみて取れるかどうか試してみた。

掴んでみるとそれは中々動かなくて……引つ張つてはいけないものだったかな？なんて思い始めた時にそれはぱつと動いた。

「うおっ!?!…びっくりした。」

勢いよく出てきたものだからとても驚いた、けれどそれは良く見るとただのアームだった。どうやら長い間動かしていなかったからなのか可動部分が上手く動かなくなっていたみたいだ。それ以来動かしてみてもアームはそれなりにすんなり動く。

「にしても、双眼鏡みたいだけど……これがそうなのか？」

最初に触った部分、つまりアームの先に付いている箱状の物。その部分を良く見てみるとそれは双眼鏡のようになっていて覗き込むことが出来る作りだった。

思った通りかどうか……それを確かめるために僕はそれを覗き込んでみた。

「これは、照準器？」

覗き込んでみるとそこには拡大率、角度の諸々の数値と共に宙域の方を映したカメラの映像が見えた。これで狙うのか。

「拡大率の調整は横の絞りか…… それにしても対象が何もないとやりづらいな。」
絞りを回しているとそんな疑問が浮かんた。確かに何も無い宙域に向かって倍率を上げてても何が何だか…… そう思った時だ。

「ん……？ 何かが早く動いた？」

覗いていたカメラの画角の範囲で少し大きめの何かが素早く移動するのが見えた。それを確認した僕は偶然だけれど丁度良いと思つてそれに対して拡大を試みて、それで大体の距離感を掴もうとした。そうすれば等倍の状態から直ぐにでも適した倍率で捉えることが出来るからね。

「ただ、試しに捉えようとしたそれは意外な物だったことに絞りを絞つてから気が付いた。」

「あれつてもしかして…… ミイーンさんか？」

特徴的な黒に近い灰色に赤いライン、ミイーンさんのパーツの色に間違ひなかつた。あのフウリンカタイプ…… フィリンさんが使っている物とは少し色味が違うから直ぐに分かるんだ。

気になった僕は更に倍率を上げてみることにした。

「あんまり早く動いていないみたいだから良かった、これで早過ぎたらカメラで確認できないしな。」

感度の高い絞りを微妙に調節しながらその全貌を見る……。良かった、まだ被弾していないみたいだ。

「ゴーグルを着けてるからオリジナルじゃない方のミーンさんか。番号までは見えないからどつちなのか分からないけど……。あつ！」

倍率の間隔を大体掴みきれて、もう練習は大丈夫だろと思つてミーンさんから照準を外そうとした時だった。どうやらダーカーと接敵したみたいなのか……。多分そうなのか銃を構え始めていた。

不味い、こういう場合なら僕が援護を……。出来るのか？

「間違えて当てないようにしないと、角度はこれか。」

早速レバーを握ると照準をミーンさんに被さらないように追従して動かす。持っているのは……。サブマシンガンか。なら、至近距離で戦うことは無いな。

「そろそろなのかまだなのか分からないな……。でも照準は外せないしな、待つしかないか。」

銃座がゆっくり回転するのが振動を介して伝わってくる。照準器の所為で上手く見

えないけど、機銃の可動範囲外に出たらそれも不味いな。

そこで僕は少しだけ照準器から視線を外して一瞬だけ銃座を確認する。良かった、まだ余裕はあるみたいだ。

「ブザー音……レーダーか！」

そうして警戒を続けていると不意に電子音が鳴る。事前の説明で聞いたけれど、これは通常の索敵範囲……それに識別の出来ない何かが入ってきたことを教えてくれている。

試しに照準器の小さいモニターに表記されている小さいレーダー図を確認すると赤い点のようなものが浮き上がっていた。恐らくこれがダーカーだな。

「そろそろだな。あのミーンさんが撃ち始めたら、こつちも撃ち始めだ。」

気を引き締めない。そう思うととても緊張してきて、ヘルメットのバイザーの所為もあつてか息が激しくなるのが分かる。変だな、寒いはずなのに汗が……

「……あつ！光が、つてことはもう撃つたのか？」

その時、いくつかの光が因子に赤黒く染められた宙域に走った。その後にも続けて5、6発の閃光が走る。

それを確認した僕は急いで照準を合わせようとしてミーンさんの周囲を探す。さつき光が走った方向を特に重視してね。するとそれほど難しくも無く対象を^{ダーカー}発見す

ることが出来た。

「落ち着いてやるんだ、ミイーンさんに当てたりしたら…… 駄目だ、考えないようにしよう。」

発見すると僕は直ぐにそれに照準を合わせる。そこで、僕は初めてダーカーを見た。

「違うな、今はそんなことを考えてる時じゃない。集中だ。」

それで少し動揺したけれど、今はどうにかして忘れることに専念した。その為にかレバーのグリップを握る力が強くなる。

「……ここか！」

苦戦しながらもどうにかして正確に敵を補足する。ミイーンさんにも当たらない距離だ。行ける！

僕はそう確信するとグリップのスイッチを迷わずに引く。スピーカーから補助音源の銃声が聞こえた……。現実味が無いけれど、これで撃ってるんだな。

「す、少し逸れたのか？よし……！」

今のでちよつとしたズレを理解してもう一度照準を合わせる。そうしてもう一度発砲した。続けざまに4、5発。

「2発は当たったのか……？」

照準器で補足していたダーカーを確認するとその大部分が今の攻撃で失われていた。

感覚としては2発くらいが当たったと思う。その後直ぐにその動きの鈍くなったターカーにミイーンさんがとどめを刺した。

「ミイーンさんが移動した……とにかく今の繰り返しだな。」

そうして僕は続けて銃座の可動範囲内で警戒を続けた。

「……遅いな。」

時刻を確認しながらそう呟く。確かに予定していた応援部隊の帰投時刻はとつくとうに過ぎていた。

「何かしら現場で予測できない事態が発生したのかもしれませんが。連絡を回してみます。」

そう言っていると部下の一人がそう言ってくれた……。だが、この状況で繋がるかどうか。

そうして連絡を回すように言おうとした時、勢いよく扉を叩く音が聞こえてきた。

「何事だ！」

部下がその音を聞きつけると扉の方まで向かって行った。一体何だ？

「あ、その……フェルノートへ応援に向かっていた部隊から緊急の連絡が入ったので報告に……」

「それは確かか？」

「は、はい！」

「……すまない、報告をしてくれ。」

「こちらが連絡するまでも無く来たか。よほどのことがあったとみていいな。」

「……報告します。連絡によればこの艦より派遣した応援部隊の内4割が壊滅状態に

あり残存勢力は帰投が不可能な状況にある、以上が報告です。」

「それは確かにフェルノートから回されたものか？」

「はい、数分前に受信しました。」

「……分かった、お前は持ち場に戻れ。いつでも動けるようにな。」

「了解しました。」

「そう言うと彼は元来た道に戻って行った。」

「……それにしても予測していたよりも相当な被害だ。一体フェルノート側で何が起こっているというんだ？」

「……副艦長、どうされますか？」

部下も困惑した表情だった。他の艦からの連絡での規模の想定で行って、それでこれ

なんだからな。そうもなる。

「ともかく、今はフェルノートから宙域を介してこちら側に向かってきているカーに対して防御策を取らなければならぬだろう。あちら側からの退避者の一時的な収容もしなければならぬんだからな。……緊急発令を出せ、今すぐにだ。」

「分かりました。対空兵器も用意を進めさせます。」

今回の事は謎が多い。この事態が収束してからになるがそれなりの調査が必要だろう。これ程の異常な速度での因子濃度の上昇、それによる強化されたダーカーの出現……不可解だな。

「今の事態では難しいが適任者を配置させてくれ。この対空防御で今後が決まる。」
「了解しました。」

そう言うとその部下は扉を抜けて足早に連絡に回っていった。

E-36 「連絡」

「くそ、数が増えて来てるんじゃないのか……？このっ！」

照準器越しに見える宙域の状態を確認しながらそんな言葉が出る。確かに最初の時よりもその個体数は跳ね上がっているように見えた。

……考えたくはないがフェルノート内部で殺^アすべき相手^スを粗方始末し終えて、それで新しい目標を探すために艦内から出て来たのか？だとしたら辻褄は合うが。

「残弾は後……厳しいな。」

照準器の中に出ている残段数を一瞬確認して見る。どうやら既に折り返し地点はとうに越えていたようだ。不味いぞ。

「ノア君の方はどうなった……ノア君！」

攻撃に付きつ切りで少し忘れかけていたがふと俺の頭をノア君の顔がよぎった。しまった、何も無ければ良いんだが……

俺は既に握っていた機銃のレバーのグリップをより強く握り締め、それからヘルメットの回線を点けた。スイッチを入れると短くノイズが走る。

『ノア君、右舷側の状況は、どうだ？』

ダーカーの方にも神経を使いながらも俺は声を口から出して聞く。

：： 最初の内はそのまま沈黙が続いたが数秒置いて彼の声が、若干慌て気味にも回線越しに聞こえてきた。

『す、すみません、手が離せなくて：：： こちらの右舷側の状況はつ、少し厳しくなってきたところです。ダーカーの索敵範囲内への侵入数も大分、ですか。』

少し厳しくなり始めた、どうやら左舷側とは少し状況が違うようだ。もう少し詳しく聞きたいが：：： 今はとにかく情報の量だ、質じゃない。

そうして俺は次の話に内容を移した。

『そうか、弾の方はどうだ?』

『弾：：： 残弾数ですね。丁度半分辺りになったところです。』

弾は少しだけノア君の方が余裕がある状態か：：： そうは言っても大した差異は無いが。

俺はその調子で話を続ける。

『ん、少し厳しいかもしれない：：： が、シークマークには着実に、近づいているぞ。最初に居た地点の座標からかなり進んでいるからな。』

試しにもう一度照準器のレーダー図下部、座標の数値だが：：：： それは確かに最初の時よりも目的シークマーク地に近づいていた。まあ、数値だとあまり実感が湧き辛いが。

『後どれ位とか、時間とか何とか…… そう言つたのも分かりますか？』

『悪い、そこまではか。』

『…… そうですか。』

もう少しでも詳しく話したいところだが、攻撃の手を緩めてやるというのも中々できない。落ち着けるのならちよつとした計算で割り出せるんだがな……。今は、目前の敵が最優先だ。

『そういえば、ですか。』

『ん、どうした？』

回線の接続を切ろうとしてヘルメットのスイッチを切ろうとした時だった。どうやらノア君の方からも何かあるらしい。

『そちらの方からはフィリンさんかミイーンさん見えますか？』

『ああ、あっちの方が。』

『右舷側からはミイーンさんの内1人が見えるんですけどね……。』

そう言われた俺は照準器の倍率を下げてフィリン達の方を探しながら援護を続けた。しばらくしてそれを続けていると黒いボディが一瞬目に入った。あれは……

『こつちの方からは…… フィリンが見えるぞ。あまり派手に動き回っていないな。』

『そうですか……。まだ被弾もしていないみたいですか？』

被害の状況。それを聞いた俺は再び照準器の倍率を高めて短い間で目視にはなるが確認を行なう。破損状況は、無しだな。

『ああ、特に目立ったのもな……大丈夫だと思うぞ。』

今の状況は正面、後方、右舷側がミーン達。左舷側がフィリンで展開しているみいだな。もつとも、グレイドがどんな指示を出しているのかは分からんが。

……取りあえず、現段階で分かることと言えばまだ戦えるってところか。

『悪い、戦闘中に俺の方から連絡なんてな。気にしないでそっちの方に戻ってくれ。』

『は、はあ……分かりました。回線の方、引き続き待機中になります。』

『ん、分かった。』

そこで俺は再びヘルメットの同じ位置を触ってスイッチを切った。

艦橋の方にも連絡を入れたいところだが……こちら側もあちら側も今じゃ無理だろうな。

「グレイドの方と少しでも連絡が取れば、まだ状況は分かるんだがな。くそ、さつきよりも増えてるんじゃないのか？」

照準器を見ていれば嫌でもダーカーが目に入って来る……。おかしい話だ。初動から普通じゃないとは分かってはいたがこんなにでもダーカーが活発になるなんて今まで起こらなかつたことだぞ？それがどうしてこんな辺鄙な時に。

まるであれだ、話に聞いた昔の話。500年前の時とほぼ同じ状態なんじゃないのか、この状況は。

「…そこだな！」

照準器で目標を捉えてレバーのスイッチを引く。ヘルメットの中には補助音源が響き宙域にはいくつかの閃光が走る。

それは目標に達すると溶かすようにしてダーカーに害を与える。大部分を失うとダーカーは霧状になって宙域に消えていく。

「個体によって強さが違う、のか？ 感覚ではそう感じるが…。」

確かに、不安定と言うかまばらと言うか…。まるで不良品の割合が多いような敵の性能、強さが攻撃をする度にどこことなく感じ始めて来ていた。ダーカーってのはそれなりに強さは同じだと体感的に感じてはいたがこれは少し違うようだ。

「これはシックマーカーに辿り着いてからでも動く余地は、ある問題になりはしそっだな。」

突発的な事象、変異的なダーカーの違い…。色々あるか。

…とにかく、今は辿り着くことが最優先だ。頭の片隅に追いやつて守ることに専念しないとな。

「頼むからまだ耐えてくれよ…。後少しなんだ。」

そうして続けて敵に攻撃をし続ける内に再び意識は機銃の方に吸い込まれていった。

1人しか居なくなつた艦橋に静かにコンソールの駆動音が響く。

「……状況は悪くも良くも無いか。」

正面のレーダ図、手元のコンソール……何処の情報を見てもそれ以下でもそれ以上でもないと言えない状況だった。

……まあ、ある意味では平凡で一番良い状況なのかもしれないが。

「それにしてもキャストの人方が心配だな。さつきからモニターの方で確認は取ってるが……」

キャストの人達が気になる。そう思った時には既に手がコンソールの操作をしていて。まだカメラが使えれば良いが。

「……駄目だ、カメラの追尾をもう少し見ておくべきだったな。」

映像の方は確かに出力されていた。けれど、追尾機能が死んでいるせいなのかその画面にはあまり良くその姿は映っていないかった。

「何も無ければいいんだが……」

そうして俺はコンソールの映像タブを閉じた。

「…俺も少しは戦えれば良かったなあ。」

深く椅子に座り直しながら俺はそう思った。そう、俺にはある意味才能と言っても良いのかもしれないが武器の扱いは全くだった。

「船の操縦ならそこそこだが戦うことも出来ない」と駄目か。」

一応、アークスの試験は受けたには受けたが結果は散々だったしな。お陰で今はこの管理職か。

「…駄目だ、今は戦闘中なんだ。こんなこと言ってられないか。」

それらの気持ち振り払うようにして頭を横に振って気を紛らわせる…。少しはましになったか。

「そう言えば距離はどうなってるんだ？もう少しでシークマーカーが見えても良い頃合いなんだが…。」

そう言っただけ身乗り出してみても宙域の方をしてみる。けれどまだその姿は確認できなかった。

「…駄目だ、赤い霧？の所為で拡大しても映らないな。」

確かに普通であるなら倍率を高めでもすれば見ることは出来る距離だが、それもこの霧のようなもので上手く見えなくなっていた。

ダーカー因子。講習とか話では聞いたことがあったが実際に見たのは今回が初めてだった。……まあ、俺は基本的に後方の人間だからな。

「バーンズの方とも確認を取りたいが今は無理だろうしな、かといって俺の方も手を抜けないし……難しいな。」

一応船の方はあれからオートに変えて俺は舵以外のシステム諸々を見ている訳だが、緊張感には常にある。今の状況だといつ何が起こるか分からないのもあるな。

「……取りあえずシークマーカーの方と連絡が取れるかやってみるか。」

そう思った俺はコンソールの方に手をやって、シークマーカーの使用周波数で回線を繋げようとした。一応、各アークスシップごとに既定の周波数が決まっているからな。

早速機能を立ち上げた後、すぐさまシークマーカーの周波数を設定する。繋がれば良いが……

『こちらフェルノート配属巡洋艦ブリュンヒルデ、応答願います。こちらフェルノート配属巡洋艦ブリュンヒルデ、応答願います。』

呼び出し時の文を読み上げながらブザー音を同時に飛ばす。声の方が聞こえなくともブザー音が付いてもらえる可能性が高くなるからだ。

それから十数回ほど呼び出しを続けた。

『……こちらフェルノート配属巡洋艦ブリュンヒルデ、応答願います……駄目か。』

だが、こちら側の呼び出しに対して何も応答、反応は無くこちら側のセンサー類も何も捉えてはいないようだった。要するに距離がいけないんだろう。……まあ、今の状況で考えるのならこの因子の霧の所為で繋がりにくくなっているって考え方もありだな。

「今、俺に出来ることは攻撃に当たっている彼らを信じるしかないみたいだな。ここから使える武器なんて主砲程度しか無いしな。……おまけにエネルギー不足、管理しているのが俺だから強くは言えないがこんなものを使わなきゃいけない状況なのかねアークスは。」

正面の方に見える宙域を見ながら俺は息を漏らした。

E—37 「返答」

「…少し、追いつかなくなって来たわね。」

今しがた仕留めたダーカーが霧になって消えていくのを見て、それから少し顔を上げてフェルノート側の宙域を見た私はそう呟いた。

少し前の初動の段階だとそこまで激しくは無くてまばらと言った感じだったけれど、今はその2倍…いや、3倍くらいなのかしら。

「単体の強さが低くても、こうも数が多いと相手にしてられないわ…早いところ目的地に着かないと。」

そう思った私はスラスターを自分の身体が横回転するようにスラスターを吹いた。踏ん張りが効かないのも困るわね…

「フェルノートからシークマーカまでは目視で確認できない程遠くは無い筈なのに、霧の所為かしら。」

調整を効かせながら後ろに回転した私は遠くに何も確認できない有様の宙域を見てそう思った。

目の前に広がる血のように赤い霧…もとい、因子を確認して見て何か関係がある

のかもしれないと少し考えた。さつきからこれで随分と見晴らしが悪いように感じるしね、気の所為じゃないかもしれないわ。

「ともかくこんなところで死ぬわけには……！」

状況の確認を終えて、それから元の通りの配置に戻ろうとした時だった。今さつきに最後に仕留めたダーカーの居た周辺に新たなダーカーが接近してくるのが目に入ったのは。

それを確認した私は即座に銃を構え直す。

「やっぱり来るのが早いわね、っ！」

最初に撃つた時のこれの癖を念頭において照準を合わせる。……よし、この位置ならそう念じて引き金を引いた。

「これでも当た……え？」

……けれど、引き金を引いても一撃しか銃口から光が漏れない。

「もしかして弾切れ？……？でしよもう？」

もう一度、もう二度と引き金を引いてみても何にもならない。……やっぱり弾切れね。ここで少し後悔した。振り返って確認した時にでも弾倉の残りくらい確認しておけば良かったなんて、もう遅いわよね。

基本的に連発弾だと一回弾を給弾すると弾は中々切れることは無いから気が抜ける

と駄目か……

「…… ああもう！こつちの方じゃ間に合わないわ！」

慌てて弾倉を交換しようとして余裕があるかどうか目の前の敵の位置を確認して見る…… 間に合わないわね。

そうして、私はそこまでの考えを変えことにした。ともかく手に握っていたマシンガンを素早く腰のスリットに滑り込ませる。

「効くかどうかわからないけど、これしか無い！」

次に空いた右手で普段使いのライフルのグリップを握って勢いよく反対側のスリットから引き抜く。

…… 正直な所、対人用で鎮圧に使うものでどうにかなる気がしないけれど。

「構えるまでも…… 行け！」

少しでも威力を高めるために一番距離の近い敵ダーカーに向かって数発撃ち込む。今度は問題なく閃光が飛ぶ。

…… まあ、当然と言えば当然なんだけどさつきとは打って変わって安心感はあるわね。

「…… やった？」

今までダーカーとは戦ったことが無い所為で性質とか強さとかパターンとか…… そ

う言ったのが全く分からないからこの銃でどうにかできるかは今の一発で分かるかどうかだ。

確認をするために私は目のカメラの倍率を闇雲に上げて様子を確認する。

ダーカーには…… それなりに貫通したみたい。試しに目のカメラで捉えた場所は吹き飛ばされるように消し飛んでいた。

「…… なら、こつちも行けるはずね。」

そこで、ライフルの火力の効果に対する確証を得れた私は次の標的に目標を変えた。次に一番近い目標に。

「宙域になればあつちだって、上手く動けないものなのかしら！」

そうしてもう一度引き金を引く…… ところだった。

「!？」

その瞬間、突然大きな光が私の前を走って行った。驚いて私は後出しでスラスターを吹かしてしまふ。

「な、何よ今の…… 船の方から？」

光が撃ちだされた方向を逆算してその方向に首を向けてみる。そこには今のさつきまで乗っていた船の左舷側があった。

「敵の攻撃…… はあの色だと無さそうね。だとしたらノアかバーンズ？」

今の攻撃が通って行つた場所を見るとそこには破片のような物しか残っていません。かたつた。

「……これは普通の銃じゃないわね。」

少し視線を下げて自分の手に持っているライフルを見て少し考える。

確かに連発弾、フォトン弾なのは多分同じだと思ふけれど……この威力はこんなじゃ出せないわ。

「……取りあえず今なら給弾しても大丈夫、か。」

まだまだ色々と考えたいことはあつたけれど、そんなことは後からでも良い。そう思つて自分の気持ちを落ち着かせてからフェルノートの方を見てみる。……少しだけ余裕があるわね。

もしかしてそういうこと？なんて思いながら私は持つていたライフルを改めて腰のスリットに滑り込ませる。そして、入れ替わりにその手でさつきまで使つていたマシンガンの弾倉を掴んで引き抜いた。

「全く、予備の弾倉が無いのも困るわね……贅沢言つてられないけど。」

早急に銃から空になつた弾倉を引き抜きながら私はそう呟く。確かにこのマシンガンには交換用の、予備の弾の入つた弾倉が一緒になつて置いていなかった。……弾薬箱は気休めに置いてあつたけど。

多分、緊急時用の武器なのが要因なのかしらね。そうであるなら予備も火力も低くしてあるのは当然だわ。

「……でも、確かこれは管理者が用意したものだからそう言うのは関係ないのかしら。」

だとしたらどうして予備を用意していないのか…… 疑問だけど、恐らくは規則？が絡んでるんでしょね。

…… ともかく、そんなことを思いながら私は弾薬箱から取り出してきていた予備の弾を幾つか取り出して手に持っている空の弾倉に弾を入れていく。余裕が無いから早急にね。

「ん、これでまたしばらくは持つわね。早いところこの弾倉が空になる前に辿り着いて欲しいものだけど……」

そうして弾の込め終わった弾倉を元の通りにマシンガンに差し込む。

音が聞こえないせいであまり良く確認はできなかつたけど、振動からしっかりと取り付けられたことが伺えた。

「これが飛んで行ったら一大事なものね。しっかりと付けておかないと……」

弾倉を取り付けたのを確認してからコッキングレバーを軽く引いて初弾の連発弾を装填する。

それから弾が問題なく入ったのを確認して、いざ次の敵に照準を合わせようとした時だった。

「?」

何やら黒に近いようなそんな色がシークマーカー側から見えて……いや、出てくるように見え始めてきた。

「はあ、今度は何よ……もう!」

とにかく先に近づいてきていたダーカーを仕留める。それが霧状になって消えて行ってしまう一度シークマーカーのある方を拡大して見ることにした。

それは何処かで見たことがあるような……普段から見てる? ような色使いが確認できた。

「もしかしてシークマーカー……なのかしら。」

ほぼ同型であるフェルノートの全体図と照らし合わせながら同じ色があったかを思い出してみる。確かに、これはシークマーカー……というよりはアークスシツプなのは確かかもしれない。

「……あ、連絡よね。」

そこで私は何かを思い出したように回線を接続する。一応確認しないと……

『あー……ミイーン? 聞こえてる?』

シークマーカー側に向かっていたミーオンに回線を繋げてみる。多分、同じものが見えているはずだろうから。

『……い……い……ん』

『?』

少しすると少し前に聞いたノイズが耳に走る。やっぱり調子が悪いのかしら……

『……ミーオンさん、どうかされましたか?』

それからまたして回線が安定する。どうやら待てば回復するみたいね。

『えっと、シークマーカーの方向を確認して欲しいの。』

『シークマーカーの方を、ですか?』

『そう、船の進行方向側ね。少し確認してみたいのよ。』

そう言って確認を取って貰うことにする。まさかだけど私にだけ見えるなんてないだろうから。

『分かりました。少し、待って下さい。』

『うん、お願いするわ。』

そうして一旦ミーオンが会話から離れるとしばらくの間無音が続く。

少し長くなるかも……と思っているとすぐにでもミーオンから言葉が飛んで来る。

それまでにはそこまで時間は掛かっていなかった。

『フィリンさん。こちらでも、確認しました。黒いのですね?』

『ええ、そうよ。あっちの方に見える黒いのよ。』

さつき見たあの色を頭の中で思い起こしてみる。確かにあはれは……

『何処となくだけど、アークスシップに見えないかしら?』

『アークスシップに?ですか。』

『そう、あの配色から見るとね。』

『少し、待って下さい……』

それからまた沈黙が続く。ミイーンの方でもそれなりに詳しく確認しているのかし

らね。

『……そうですね。』

しばらくしてミイーンの声が聞こえてくる。

『どう?アークスシップに見えなくてもないでしょ、あれ。』

『はい。あの色は間違いなく、ですか。因子の所為で少し、色の判定が、おかしいです

けど。数値的には……』

どうやら色を良く確認?していたみたいね。それで同じ型のアークスシップの同じ部分だと思ふ所と色の数値が同じかどうか……なのかしら。

『アークスシップ……いえ、シークマーカーに間違いは無さそう、なのかしら。』

『… そうですね。』

少し考えてからミイーンの返事が返ってくる。やっぱり、その見方で問題ないようだ。

『なら、後少しの所ね。シックマーカまで。』

私はもう一度船の進行方向の方を拡大して見てみる。… 長いようで短かったわね。

『… 霧が薄くなって見えているのならこの因子の霧の影響を受けないかもしれないわね。少しあれをやってみるわ。』

『あれ… ですか？』

『そうね、試しにだけどシックマーカの周波数でかけてみるわ。少し待ってて。』

『分かりました。』

ミイーンがミュート状態になったのを確認すると私は向こうのアークスシップ、シックマーカ側に既定の周波数で呼び出しを試してみることにした。

周波数はアークスだった頃に教えられていたから何処となく覚えているけど、どうかしら…

『えっと、呼び出すときにはあの文章よね。』

そうして呼び出しの周波数を合わせると何となくで覚えていた文章を少し変えて呼びかけてみる。

『こちらフェルノート配属のM・Sです、シークマークー応答願います。こちらフェルノート配属のM・Sです、シークマークー応答願います。』

それから5回ほど、それくらい呼び出しを続けていると私の方のセンサー系に反応が出た。

その周波数の数値を確認して見る。…すると、それはアークスシップ、シークマークー側からの呼び出しを告げるものだというのが分かった。

E—38 「接続」

「そ、それって本当なのか!？」

今しがた聞いたことに驚いて大きな声を出してしまう。その所為か一瞬自分の周りが静かになる。

少ししてそれが自分の原因で起こっていることに気が付いて恥ずかしくなった。やっっちゃった…

「あ、う… そ、その。」

「ぼつ、お前でかい声出すなって。」

見知った顔の相方に軽く頭を叩かれる。だっていきなり凄いいこと言うんだもん
な…

「ほら、先行くぞ。急ぎで呼び出しかかっているんだからな。」

「あ！待って！」

今知ったことと軽く打たれたショックで放心状態だったところを急いで足を動かす。
… それにしても、それにしてもそんなことって。

「はあ… それで、あの話噂じゃないのか？ダーカーが何十年振りに活発化したって

話。」

そう、今聞いて驚いたのは他でもないダーカーのことだ。

覚えてる限りでは数回アークスの任務で小規模の残党狩りをしたことくらいであり詳しいことは知らないんだけどね、ダーカー。

その中でもただ一つ知ってることと言えば今のダーカーは弱いつてことか。一応指定教育で軽く触れたからさ。

「ああ、聞いたところによればだが……今フェルノートの方で起きてることでアークスから応援部隊が出たつてのは知ってるだろう？」

「うん、数時間前に一部のアークスに呼びかけが出てたやつだろう？知ってるさ。」

「それがよ、それなりに数が出てたのが4割壊滅したらしいぜ。それなりに強い奴らで編成されてたはずなんだが……」

また大きな声が出そうになった口を今度は両手で咄嗟に塞ぐ……。危なかつた。

……
4割？

「それでその連絡を受け付けてたやつは近くにいたのが相当な慌て振りだったのを見て聞いて、それが今噂になって駆け巡ってる訳……。何してんだ？」

「……いやなんでも。」

そこで口を抑えていた手を凝視されているのに気が付いて手を引つ込めた。

「……まあ、だからダーカーが何かしら活発になつてやりたい放題してつてのが予想されてるつてとこだな。そうでなきや大半が壊滅する理由が無いぜ。」

「なるほど……」

確かに少し考えてみればそうだ。艦の上の人間が急ぎでも選んだ人材がやられるんだもんな…… 何かが起こつてつてのは間違いないやなさそうだ。

「……でもさ、ダーカーはかなり昔に勢いが劇的に弱まつて今の今までそういう変異的？なことは起こらなかつたんだろ。だとしたらなんで今になつて活発になるのさ。」

「そんなこと今の俺が知るかよ……でもまあ、これから分かるんじゃないのか？」
そうして乗り込んだ昇降機のスイッチに手をやりながら返して来る。現状だと無理も無いか……

「そうだと良いんだけど……ん、押して良いよ。」

「分かつた。」

「そう言つて昇降機が動き出す。」

「……そう言えばさ。」

狭い昇降機の中で声を掛ける。話していて忘れちゃつたけど……

「僕ら何で呼ばれたんだっけ？」

その瞬間破裂音のような音が鳴つた。彼が嘔き出すように口から音を立てたからだ。

それから少し間をおいて彼が話を続けた。

「あのなあ…… はあ、俺らはそれなりに射撃の命中精度に心得があるだろ？ それを知つてか対空要員に回されてここに来た、ここまで良いか？」

「うん…… 驚くことが多かったから少し抜けちゃつてさ。」

「全くやめてくれよ……。」

色々と短時間で起きた所為で所々記憶が…… まあ思い出せたから良いか。

「…… ほら着いたぞ。」

そう言うのと出口に近い方の彼から昇降機から降りていく。僕もそれに続いて行つた。

「……この…… じゃないな。 やつぱり向こうの方か？」

自分が割り当てられた番号とその場所の番号を比較しながら狭い通路を進んでいく。この辺りのはずなんだけどな……

「弱つたな、早く探さないと。」

そうして自分の端末に目を落として番号をもう一度確認してみる…… と、呼ばれる声が聞こえて来た。彼だ。

何かを手を持ちながらこつちの方に向かつてくる。何だろうあれ。

「おい、ようやく見つけられたぞ。 あつちの方だ。」

そうやって僕の進んでいた方の少し先の方の通路を指で指した。なんだ、後少しだったのか。

「分かった。じゃあ、先に行……」

「まあ待てよ、ほら。これ。」

「？」

差された銃座に向かうために通路を進もうとすると肩に手を置かれて足を止められる。

「これ被っておかないといけないだろ？ 通路の方から持ってきておいた。」

そう言うのとヘルメットを投げて来た。あの手に持つてる何かはヘルメットだったのか。

「ありがとう。これも何処にあるのか分からなかったんだ。ん……」

今しがた貰った特殊なヘルメットを早速頭から被る。少しすると着ている服の襟の部分とヘルメットの縁の部分が接続された。

これで宙域に投げ出されても……いや、想像したくは無いな。

「……？」

被り終わった後、話しかけようとする声はヘルメットの中に響く……。そうだ、バイザーが閉まったままだった。

それに気が付いた自分はバイザーの開閉スイッチを入れた。すると素早くバイザー部分が滑るように開いた。これで大丈夫だな。

「… あ、そうだ。」

「どうした？」

「回線、まだ繋いでなかったね。一応緊急時用に必要だろ？」

ヘルメットの無線の接続状態を端末を使って設定し直す。種類によるけどこれはそういう接続の形式みたいだ。彼の方も僕の言葉で気が付いたのか思い出したような素振りで端末を出して設定をする。

しばらくすると接続の完了を表す表記が出て、接続は無事に終わった。

「よし、じゃあ行こうか。」

「おう。足元手元、気をつけろよ。」

そうして僕たちは他に通路を歩く人を避けながら奥の方へと進んでいく。…機能の面でしか考えてない構造なのは仕方が無いけど、それにしたってちよつと狭い気がするな。この通路。

時折軽い重力の所為で体が投げ出されそうになるのを壁を使ったりして対処しながら進んで行く。

「ん、これかあ。」

それから少しの間進み続けるとさつき彼が指で指した場所に着くことが出来た。やっぱりそんなに遠くなかったな。

「確かにこれなら俺達でも扱えるな。かなり前に講習で教えられたことあるやつだ……んしょ。」

「そうだね、これ。」

特に座るな……というよりか待機しろってことだったから僕らは直ぐに銃座の座席に腰を下ろした。席のベルトも忘れないように着ける。

「……それにしたって事前のミーティングもまともにはちよつと余裕が無い様子みたいだな。」

「でも、一応電子メールで端末の方に詳細の連絡は来てたからそうでもないんじゃないか？」

「そうだと良いんだが……基本は何をするにしても事前の話し合いをするくらいはあるんだが。少し心配だな。」

確かにそうかもしれないな。ちよつと違和感かもしれない。けど……

「大丈夫だよ……ほら、僕たちの任務がそこまで難しくもないものだから逆にそう言うのが要らなかつたって考え方もあるだろ？」

「確かにそうだけだよ……普段と違うってのはちよつと来るな。」

「それは、分からなくてもないけど……少しは明るく考えた方が良いと思つてさ。そうじゃない？」

「……ま、分からなくてもないな。」

そう言うと彼は銃座の補助システムの電源を入れ始めた。僕も合わせて調整の為に電源を入れる。

電源を入れると目の前のコンソールが起動して画面が表示されて、その他諸々の機銃の情報が出てくる。勿論レーダーの情報もあるけど。

「そっちの方も問題ないか？」

彼が聞いてきた。やっぱり自分よりも少し手慣れてるみたいだ。

「うん、特に何も無いよ。」

「そうか。」

取りあえずコンソールの確認を終えて、次に自分は照準器の確認をすることにした。ヘルメットのバイザーの少し上の部分にあるレーンル部分に繋がっている箱状の物をその為に目の部分にまで滑らせる。すると箱状の物、照準器の中にあるモニターが見えた。

「ん……こっちの方もちゃんと起動してるな。後はこつちとか。」

少しだけ外が見えるようにして銃座のコンソールを操作する。これでこのヘルメツ

トの物と接続できるはず。

「…… そうして接続を開始させて数分程待つっていると照準器の小さいモニターの黒い画面が切り替わって別の画面になる。恐らく上手くいってるならこれで外側のカメラと繋がったはずだけど。」

「…… なんだこれ。」

一応、倍率の確認の為に外の方の物でテストしておこう、なんて気持ちで照準器から外を見てみた。

するとそこには今まで見たことのない光景があった。

「赤い霧……？ダーカーを倒したときに出てくる霧状のやつに似ている気がするけど……」

赤い霧、それは以前自分も倒したこともあるダーカーが消滅する時に出す霧。それと同じ色をしていた。もしかしてこれが因子？なのかな。

「この辺りの宙域でこんなもの見たことない…… やっぱり何かあったのかな。」

今まで見たことが無いことが起きている…… 異常を察知するにはそれは十分すぎるくらいだった。

「…… ん？」

そうしてしばらくの間赤い霧の立ち込める宙域を観察し続けていた。最初のうちは

特に霧の向こう側に何も見えなかったんだけど……

「何だろう、青いな。」

突然霧の中から現れるようにして出て来た青色の何かに僕の視線は向かった。敵……、じゃなくて何か物、船？のようにも感じるけど。

「……ね、ねえ、君もあれ見えるかい？」

同じくして照準器を見ていた彼に向かって声を掛けてみる。

「ん？なんだ？」

どうやら外は見えているけどあれは見えていないみたいだ。

「ちよつと待って……こっちの方角かな。」

そうして彼にその方向を教える。見えてるのが自分だけなんてことは無いと思うけど……

「……あー、確かに何か見えるな。もしかしてだけどあつち側フェルノートからの退避者の船じゃないのか？」

彼は話を続けながらそれを観察しているようだった。自分も方向を伝え終わったのを確認して照準器を改めて覗き込む。

そうしていると段々とこちら側に向かつてきているのかその全貌が見えてきた。

「……何だか随分古い船みたいだ。」

「ああ、相当使い込んでる？みたいだな。あの様子だと。」

それはかなり古いタイプの船、アークスの船だったんだけど実物は見た記憶が無いものだった。教材か何かの写真で見たことがあった気もするけど……とにかくそれくらい物だったんだ。

「何だか随分やられたみたいなき様子だね。結構改造？してあるみたいだし。」

確かにその船を良く見てみると左側の本来あった部分が完全に無くなっていて別パーツ、エンジン？のようなもので補填されていた。それ以外にも何処かで被弾したのか塗装の剥げも酷い。

「アークスに予算が無いって噂もあれにアークスが乗ってるんならこの状況だと信じなくなっちゃうな……っと、連絡が来たな。」

「こつちも、ちよつと確認しようか。」

そうしてその古い船を観察していると新しい連絡が送られて来た。内容を見てみる。

「……なるほど、あれは敵じゃないから撃つなつてか。それぐらい分かっているんだがな。」

まあ、短くまとめるとそんなような内容だった。

「一応じゃない？動揺して間違えて撃つちゃう人も居るかもしれないからさ。」

「ば、そんな奴に援護なんて勤まるかよ。」

「僕らも間違えて当てないようにしないと……何だか一撃でも当たったら大変そうだし。」

そんなこんなで予定の時間が近づいてきたことを確認した自分は銃座のグリップを握り締めた。

……あれに当たらないと良いけど。

E-39 「休息」

『……よし、シークマーカー側から返答が来た。』

管理者の彼の声が回線越しに聞こえてくる。

『この後シークマーカー側の指定距離に突入すると俺達の援護の意味も含めて対空防御を張るらしい。この船よりも威力のある対空砲火でな、配備数が多いし。』

『……それで、続きは?』

『ああ、だからダーカーの勢いが弱まったタイミングで宙域に出ている4人には戻ってきて欲しいんだ。そのままだとダーカーと同じようにば……いや何でもない。』

『……』

『……とにかく、指定された範囲にまでは後少しで着きそうな位置だから格納庫の方に戻って来てくれ。それからはまた指示する。』

『分かった、きりが良くなったら戻るわ。』

『頼んだ。』

そうして艦橋の方との連絡は切れた。結構ここまで長かったわね。

『……ミイーン?今の聞こえてた?』

ともかく、艦橋の方と連絡をしていた間に声が聞こえなかったミイーンにも確認を取る。

『はい、聞こえていました。』

『ん：：じゃあ、敵の勢いが弱まったら話の通り格納庫まで戻って。私はそろそろ行くわ。』

今の自分の居る宙域を軽く見回して見て判断する。：：このくらいなら私が離脱しても問題無さそうね。

『分かりました。私も、直に行きますね。』

『待ってるわ。後の2人の貴方にも宜しくね。』

そこでミイーンとの連絡は切れた。

「：：戻ろう。」

反射的に口から言葉が漏れる。少し疲れたのかもしれないわね。

「：：」

キャストは、基本的に肉体的な疲れは来ないけれど精神負荷がそれなりに強くなる所為でそこまで楽じゃないわ。

確かにテクニックは基本的にキャストは使わないからそこまで過度に負荷になる訳ではないのだけれど、特に動いたりするときにフォトンを若干使ってスラスターの出力

に回したりしているから疲れはするのよね。

「格納庫の方向は、こっちなね。」

上と下の無い宙域で迷子にならないように注意深く格納庫の方向を見定める。これをやらないと着地点が上手く定まらないから意外と重要な気がするわ。……初めてやるからあまり自信は無いけれど。

「全力で飛ばすとブレーキ噴射が追いつかなそうだから……少し軽めね。」

スラスターの出力の具合を上手い値で見切りをつける。あまり強く出し過ぎると顔から甲板に落ちることになるから細かくね。

「……よし、このくらいね。」

大体の見当をつけることが出来た私はゆっくりとスラスターに出力を集中させる。勿論、さつきまで考えておいた出力の大きさよ。

それから武器はあくまでも形だけ構える状態で格納庫に向かって進んでいく。流石に遭遇することは無いだろうからスリットに入れても良かったのだけれど着地の邪魔になると面倒だからやめておいたわ。

「この距離になればもう吹かきなくても良いかしら……」

しばらくの間前進を続けていると段々と船に近づいてくる。それから吹かしていたスラスターの出力を切ってブレーキが出来る状態にして飛び続けた。

「……」

段々と最初に飛び立ったカタパルトが足元に近づいてくるのが見える。そろそろね。

「変に動かないようにして……っ。」

慣れていないことで少し緊張しながらも、何とか無事にカタパルトに降りることが出来た。

少し跳ね返るかと思ったけど、船自体が持っている弱い引力のお陰でどうにか引張ってくれたみたい。

「…… やっぱりここは落ち着く場所じゃないわね、少なくとも。」

格納庫側に歩きながらそう呟いてみる…… 確かに落ち着かないのは本音ね。

何と言うかこの、浮く感覚と言うか地に足が付かない感覚と言うか…… あんまり好きじゃないわ。

今までアークスだった時に宙域での仕事が無くてある意味良かったのかもしれないわね……

「…… さて、後はミイーン達が来るのを待つだけね。」

そうして格納庫に着くことが出来た私はミイーンの到着を待った。

「ど、どうだ？出来たのか？」

弾を飛ばした方向を照準器で急いで確認する…… どうやら上手くやれたみたいだ。

「…… 駄目だ、落ち着く時じゃない。」

少し安堵、しようと思つたけれど気が緩むと思つてやめる。

敵は、ダーカーはこつちのことを考えてきている訳じゃないからね。油断はできない。

「次のは一体何処に……？」

そうして次の標的を探そうとしていた時だった。ヘルメットの中でノイズが走る。

「もしかしてバーンズさんか？なら繋がないと……」

連絡が来たと思つた僕はヘルメットの回線スイッチを入れた。

『…… ノア君、聞こえてるか？』

スイッチを入れると聞き慣れた声が入って来る。バーンズさんだ。

『どうしました？こつちの方は何も問題は無いですけど。』

特に今のところ僕の方から何も聞いたりしていなかったから何かと思つて用件を聞いてみることにした。

『いや、今グレイドの方から連絡があつてな。それで回線を繋げたんだが…… どうや

らシークマーカー側と連絡を取ることが出来たらしい。』

『そうなんですか？』

『ああ、距離も大分近い位置にまで来てるみたいだ。一旦照準器を外して外を見てみてくれ。』

『分かりました、見てみますね。』

どうやらシークマーカーにもうすぐ着きそうなみたいだ。ともかくそれを聞いた僕は言われた通りに照準器を一瞬外して外の宙域を眺めてみる。

すると、今まで攻撃をしていた方向とは少し離れた方向に大きい塊……要はアークスシップの端が見えた。

『……あんまりフェルノートと変わらないんですね。』

『まあ、ほとんど同型艦だからな……それで話の方なんだが、照準器は取りあえず戻して良いぞ。』

『分かりました。』

視線から外していた照準器をまた元に戻した。

確かにシークマーカーは外観だけ見ればそこまでフェルノートとは違いが無さそう
だ。

『どうやらこの後、この船が相手の方の指定した距離に入ったのを確認次第フェル

ノート側から俺達の援護もダーカーの排除もひつくるめて対空防衛を張るらしい。』

『対空防衛？何ですそれ？』

『まあ、俺達がやっつてることと変わりは無いな、規模の大きさと言うか言葉の綾というか…… まあそんなところだ。』

『は、はあ……』

とにかく、方法はこうとして話の通りなら援護は受けられるみたいだ。

『だからまあ俺達は取りあえず休んでも良いってことだ。指定の距離って言うのももう近いしな。フィリン達も格納庫に帰投できたら嬉しいぞ。』

『そうですか…… まあ、全員無事で良かったです。』

『そうだな、俺達も付近のを片付けてから降りるとしよう。』

『分かりました。』

そうして僕は引き続き索敵範囲内のダーカーに攻撃を続けた。

「…… はあ、ひとまず区切りがついたのかな。」

後ろにある対空用機銃の配備室の扉をスイッチで閉めながら僕は疲れた息を吐いた。

「お、そっちの方も出てきたところか。」

通路を挟んで向こう側の扉からバーンズズさんが出てくる。どうやら同じタイミング

で終わらせてきたみたいだ。

「最後まで特に問題は無かったか？」

「はい、特に何も無かったですよ。」

「そうか……まあ、とにかく俺達の仕事の山場は過ぎたところだな。フィリン達も部屋に戻っているだろうからノア君も行くといい。」

「バーンズさんは艦橋の方に？」

「ん、グレイドと少し話すことがあるからな。到着までゆっくり休んでくれ。」

「どうやらバーンズさんはまだすることがあるみたいだ。何だろう、さっきの攻撃の時に何かあったのか？」

「分かりました。じゃあ、また後で。」

「そう言っつて僕とバーンズさんは違う通路を進んで行った。」

「フィリンさん達の方も何も無かったのかな……」

「今は取りあえずバーンズさんは特に何も無かったのは分かったけど、フィリンさん達の方はどうなのかが分からないままだった。」

「……まあ、フィリンさんもミイーンさん達も恐らく僕よりも強いだろうから大丈夫か。」

「えっと、ここの角をこつちか。」

バーンズさんに案内してもらった道を思い出しながら通路を進んでいく。今度は飛ばないようにしないと。

「…… あった、これで上に行けば部屋だな。」

そうして進んでいるうちに通路の突き当りの小さい昇降機に着いた。僕は扉を開けて中に入ると電源のスイッチを入れる。

「それにしても、フェルノートがあれじゃフィリンさんの言う通り原状復帰なんて難しいだろうしな。平常通りM・Sの仕事をするなんて不可能に近いし…… これからどうするんだ？」

フィリンさんがフェルノートのドッグで話してくれた原状復帰の話。あれが本当だとしたらまずは復旧作業よりも先にダーカーをどうにかしないとイケないし、たとえばそれが出来たとしても普段通りの仕事をするのには無理がある。

…… 取りあえず到着次第にシークマーカー^Mの方の支部^Sの方に連絡するしかないか。バーンズさんもフィリンさんも恐らくするだろうし。

「…… 駄目だ、少し休もう。考えがまとまらない。」

だけど、これからのことを考えると結局は疲れの所為でどうでも良くなってくる。さつきまで気を張り巡らせ過ぎていたのが祟つてなのか先が見えないのが原因なのかは分からないけど。

「：： あ、着いてたのか。」

それからふと顔を上げてみると既に昇降機が到着したのか扉が空いた状態で止まっていた。

「今は、フィリンさん達と休むしかないか。これからのことはそれからだな。」
そうして僕は部屋の中に入って行った。

E-40 「句点」

「……何だ、バーンズ。もう戻ってたのか。」

「ああ、丁度さ。」

艦橋へ入ると少しして足音に気が付いたのかグレイドが声を掛けてくる。コンソールで突っ伏していたから寝ていると思ったが違ったみたいだ。

「特に何も無かったか？機銃もそうだがお前の身体の方も。」

試しに自分の身体を見下ろしてみる……。特に問題ないみすばらしいジャケットだ。

「大丈夫だ、俺の方は慣れてる。機銃の方も別に問題なかったぞ。」

「そうか、なら良いんだが……」

少し悩むようにして奴は言う。まあ、機銃の部分の整備にもあまり自信が無かったんだらうな。

「どうかしたのか？」

「……いや、お前に言うほどのことじゃないよ。それよりもあつち側から来た連絡の方が気になるだろ？」

悩んでいたのをやめてグレイドは横にあるコンソールのモニターに向き直って話を

続ける。

「そうだな、さつきまでに聞いたことよりも詳しくな。頼む。」

「分かった。少し時間が掛かるからさつきまで座つてた椅子にでも座つて休んでくれ。」

そう言われた俺は首で返事を返してコンソールに備え付けてある椅子に座つた。そうすると艦橋の窓から外の宙域の様子が見える。

……それにしてもシークマーカー側からの防御攻撃の勢いが凄いな。音が聞こえない所為でただの映像にも見えるが……何だかこつちが敵みたいに感じるぞ。

「かなり激しいな……」

グレイドに聞こえるようにしてそう呟く。

「シークマーカー側からの対空防御か？」

「ああ、あつち側にも事の重要度が分かつてゐるみたいだ。出した応援部隊が帰つて来ないことで気が付いたか。」

ダーカーへの攻撃を始める前にフェルノートに向かつて飛んで行つた数機のキャンブシップが脳裏を過つた。あれからしばらく辺りのことは索敵してはいたが一つもキャンブシップの機影は見えなかつたからな、艦の方にもまだ戻れていないだろう。

「多分な、俺の方からも一応伝えたが既に準備段階だった。連絡で飛んできた文章も

少し端折ってあつて焦つてるみたいだったしな、ほら。」

そう言うくとグレイドはコンソールの処理が丁度終わったのか手でモニターを指して自分の所のコンソールのモニターを見るように伝えてきた。俺は窓から視線を下ろしてそれを見てみる。

「……確かにそうだな。定型文すら省くなんて相当だぞ。」

文章は急ぎで作られたおかげで2、3行程度の短い文章で直ぐに読み終わることが出来た。

「さつきまで宙域の方で迎撃に当たつて貰つてたキャストの人方の1人がどうやら連絡してくれたみたいだな。俺の方は最初に数回呼び出しをしてから諦めてただけだな……」

キャストの内1人……その中で呼び出しを出来る奴と言つたら恐らくはフィリンがやったんだろうな。元々アークスだった時の経験がすっかり根付いてる証拠だ。

「……まあ、その呼び出しを受け取つたシークマーカー側がこっちの船の方に直接連絡を送り返して来たつてところだ。ありがたいことだな。」

「そうだな、後で奴には伝えておくよ。」

「ああ、お前は名前知ってるんだつたな。宜しく言つておいてくれ。」

「分かつたよ。」

それからは船の状態の確認をもう一度し直したり、この後の行動をどうするべきかを考えながら船がシークマーカーに到着するまでの間体を休めた。

…… それにしてもまた、戻って来ちまったな。ここに。
その時の俺の眼には大きな船体が映っていた。

『C—12番ドッグ。エアロック作動中。作業員は退避線まで下がり安全を確認してください。現在エアロック作動中。……』

「艦内に完全に入ったみたいですね。ここからだとかよく分からないですけど……」

浅い眠りについてた僕は船内に響いていた入港のアナウンスで今さっき起こされて、それで今はホログラムの窓からドッグの様子を見ていた。

…… まあ、画角が狭い所為で良くは見えないんだけど。

「ようやく安心して休めるわね。」

そう言っているとフィリンさんが立ち上がって窓の方に来た。

「宙域って言うのはどうにも落ち着かなくて…… やっぱりに足が付く方が良いわ。」

「そうなんですか？」

「……そうね、私はこっちの方が好きよ。精神が擦り減って仕方が無いもの。」
「は、はあ……」

どうやらフィリンさんはあんまり宙域が好きじゃないみたいだ。ただまあ、バーンズさんから聞いた限りでは苦手ではないみたいだけど。

ヒューマンの僕には縁の無いことだしな……空を飛び回れるってどんな気分なんだろう。

「到着、したんですか？」

そうしてフィリンさんと話していると部屋のベッドの方、ミーンさんから声を掛けられた。さつきまで休んでいたから僕と同じでアナウンスで気が付いたのかな。

「今丁度入港し終わったところです。エアロックの作動中？みたいですから後少しだと思えますよ。」

「……そうですか。」

今はもう既に接続を切っているのかベッドに横になっているミーンさん達はスリープ状態になっていた……それにしても同じ顔が並んでいると凄いな。

「体調……いや、精神状態はそれなりに休められました？さつきまでは戦闘でしたから負担が多いと思って。」

少し苦しそうな様子のミーンさんを見て僕はそう聞いてみた。

ミイーンさん、特にオリジナルに近いフィリンさんは彼女の中でも一番精神力があまり強くないからね。

「二応それなりに、ですか。続けて戦闘があるなら、難しいですが…。」

「なら、大丈夫ですよ。続けて戦闘は今の状態だとしないですから。」

そう伝えると少しだけミイーンさんのこわばった表情が柔らかくなった気がした。少しでも安心させられたのなら良いんだけど…。

「…そう、ですよ。なら私、大丈夫です。」

ミイーンさんはそう言うとそのままの安心した表情でもう一度目を閉じた。

「…あ、そうだ。」

「？」

「フィリンさん、少し聞いても良いですか？」

「ん、良いわよ。何かしら。」

ふとあることを思い出した僕は突然ではあるけれどフィリンさんに話を振った。今、ゆつくりして気持ちに余裕が出来たからこそそのことなただけ…。

「この後ことなんですけど、船を降りてから…降りれるかは分からないですけどこれからどうしますか？」

そう、この後のことだ。

今はこうして退避の名目でこの船に乗っていられて更には別のアークスシップに居ることが許されているけど、これはあくまでも特殊な状況だからだ。つまりそれが無くなれば以前言われたように原状復帰でフェルノートに戻らないといけない…… けど、それが今すぐに来ることだとは思えないよね。

「……ごめんなさい、それは私も聞きたいことよ。」

「フィリンさんですか。」

やっぱりフィリンさんにもこの先のことは見通しが無いみたいだった…… まあ、僕と同じでフィリンさんにも特殊な権限がある訳じゃないからね。

「さっきまではダーカーを倒すことだけを考えていれば良かったから気が変に紛れて忘れていたけれど、私達にはこの後があるのよね。」

そう言うフィリンさんは椅子に倒れるようにして座った後、埃の積もった机の上で人差し指を回し始めた。

「原状復帰…… 貴方も想像は付いていると思うけどこの状況じゃ無理よ。冗談でもね。」

「…… そうですね、あんな状況じゃ。」

その辺りについては僕もフィリンさんも同じような考えだった。原状復帰は無謀だということ。

「今のところ、詳しい情報を知ることが出来なくてフェルノート側の具体的な被害状況が測れないから予測しにくいのもあるけれど……そこまで考えなくてもどんな状況か想像が付くところよ。」

確かに、詳しい状況が把握できていない今の状況でもあのダーカーがフェルノート側にはもつと複数現れていたことくらい分かる。そんなのが市街地なんかに降りたとしたら、それなりの規模の甚大な被害だろう。

そうだとするなら時折あったC・R・S・Fの鎮圧の過程で起こる被害なんかとは比べ物にならないだろうな。あれなら区画の狭い範囲で済んでいたけど、今回は自然発生？だからね。

「……まあ、正直なことを言えば私達にはこのままここに居ればその内何かしら連絡が来るわ。それがM・Sからなのかアークスからになるのかは分からないけれど。」

「連絡……こつちの方からしなくても良いんですか？」

連絡が来るということを書いてきつきまで連絡をしようと思っていたことを思い出す。そう言うのもマニュアルに書いてたのか？

「それはそうよ。こつちの方は退避の名目で何も事前の手続きをしないでここのドッグに入ってきているんだから、事情を聴くために何かしら来るはず。」

フィリンさんは椅子の向きを変えて窓の方をまた眺めながらそう言う。

「…… ともかく、休んでいればその内にもそれが来ると思うわ。端末を良く確認することね。」

「…… そうですね。」

言われた僕は取りあえずジャケットのポケットから端末を取り出した。一応何かしら通知が来ていないかどうか確認してみる。

画面の方に連絡は…… 今のところないみたいだ。

「まあ、もう少し休んでいると良いわよ。今すぐ動くわけではないだろうし貴方は私とは違って肉体疲労が出るんだから。」

フィリンさんは僕の方を見ながら言う。…… 確かに少し腕が痛いかもしれないな。

「…… 取りあえず、私の方も休ませてもらうわ。何かあったら教えて頂戴。」

「分かりました、何かあった時には教え…… もう聞いてないか。」

そう言い残すと椅子に座っている状態で彼女はスリープ状態に入っていた。

「…… 確かに休めるのなら休んでいた方が良いか。」

僕は窓側に立っていたのを少しずれて床に座り込んだ。何だか今は体が何かに支えられるだけで楽だな。

「時々連絡を確認して…… あ。」

そうして数分おきに連絡の通知が来たかどうかを確認しているときにあることを思

い出した。

「レピカちゃんから何かメールが来てるんじゃないのか？」

そう考えた僕は端末を操作してメールの表示画面に切り替えて確認することにした。

E-4 1 「第二」

端末の文章の入力をする手を止めて、もう一度打ち込んだ文章を上から確認して見る……うん、特に問題なさそうだな。

送る側の相手、レピカちゃんでもしつかりと読めるようになっていたのを確認してから僕はメールの送信をした。

「レピカちゃんも無事に退避できたみたいだし、確認できて良かったな。」

さっき確認した文章には落ち着いた調子で船に乗れた旨が書かれていてそれを知ることが出来た。

どうやら講義のクラスに居た時に退避令が出たみたいで同じ特別指定教育レベルの友達とそれなりに早く出れたみたいだ。まあ、あんなに小さい子供でもあの指定教育レベルの子は半分アークスみたいなものだからその辺りは大丈夫か。

「……それにしても急にすることが無くなると退屈だな。」

端末をポケットにしまい込んだ後、僕はホログラムの窓からドッグの内壁を眺めていた。特に面白味の無い壁があるだけだ。

「そっか、銃はちゃんと持ってるよな。」

ぼうつとしていた状態で突然はつとした僕はそんなことが気になった。持つては来ていたけどここに来るまでの間で一度も使わなかったからね。

「良かった、ちゃんと付いてる。」

腰の銃のバックを確認して見るとロックが外れずにそれはしつかりとそこにあつた。かなり激しく動いたけど意外と丈夫なんだな。

することも無かつた僕はバックから銃を取り出した。軽く整備しておいた方が良さそうだからね。

「えっと、シリンダーはここで外れるんだつたよな。」

記憶の通りにシリンダーの下部にあるロックを指で滑らせてから押しして開放する。すると普段の定位置から大きくずれる形でそれは外れた。

外れたそれを銃を握っていない方の手の平の上に乗せて良く見てみる。

「特に傷も汚れも……弾もしつかりと入ってるな。」

シリンダーの薬室には弾が昨日の仕事を終わらせた時と同じ数残つたままだ。連発弾が2発と実弾が2発で半々入れてある。

少し前までは弾の入れ方はばらつきがあつたんだけど、最近のこの頃は半々で入れるのが基本になつてるかな。

「道具が無いし……後は照準のずれくらいか。」

あらかたシリンダーを確認した僕はシリンダーを元の通りに軸に嵌め込んで、それからロックを掛けた。

小さい駆動音が鳴ってロックがより硬く締められる。一応使っているときに不注意でシリンダーを落とさないようにする為に2重ロックになっっているんだ。

「ん……最後に調整した時より少しずれてるな。船が揺れた時になったのか？」

シリンダーのロックを確認出来た後に照準を除いてみると少しだけ普段の調整位置からずれていた。多分だけこの船が最初に動き出したときに喰らった振動でなつたみたいだ。

「普段の位置だから、こうか。」

銃の上部に付いた小さい照準を指先で上手い具合に揃える。これをしないと正確に狙えないからね。

それからしばらく調整をして、ようやく普段の位置に合わせられた。2度、3度覗いてみても特に何も無かつた。

「うん、これで何かあつても大丈夫そうだな。後はもう少し休んで……？」

銃の簡単な整備を終わらせた僕はそれを元の通りに腰のバックに滑らせて、そのまままた休もうとした時だつた。

『よし、繋がつたな……おい、起きてるか？』

さつきまで外を移していたホログラムの窓の画が切り替わって人物を映し出していた。バーンズさんだ。

「…… あ、はい。僕は起きてますよ。」

座っていた床から立ち上がってホログラムの写っている壁に近づきながら話す。少し画質が悪いけどしっかりと向こう側と回線が繋がっているみたいだ。

『ノア君か、少し話す知らせがあるから全員…… ミイーンはオリジナルだけ起こして艦橋まで来てくれ。』

話すこと…… これからのことについて知れるのかな。

「分かりました。出来次第すぐに行きますね。」

『ああ、急がなくても大丈夫だからな。』

そこで連絡が切れたのかホログラムの画は変わって元の通りの外を映し出していた。

…… さて、フィリンさんとミイーンさんを起こさないと。

「傷の程度は、どうですか？」

点滴のパックを付け直しながらベッドで横になる彼女に声を掛ける。

「…： ありがとう、今は大分安定したわ。」

彼女、エリシアさんは顔だけ私の方に向けて微笑で言葉を返してきてくれた。

表情にも問題が無いから症状が良くなっているみたい。…： あんまり信憑性は無いかもだけど。

「それにしてもここの艦のメイカルセンター、病床に空きがあつて良かったですよ。」

パツクの付け替えが終わった私はベッドの傍に寄つた。ここだと部屋の窓の光も遮らなくて良いですから。

「最初は経験…： こんなことを経験したことが無くて一時期は病床が圧迫するような事態になっていいると思つていましたけど、それなりに傷の程度の悪い怪我人は少なかったみたいです。」

そう、最初に退避をし始めた時には何が何だか分からなくて…： それで相当な被害になつてゐるって誤解してたんだっけ。

「今回は敵、ダーカーの出現は完全に艦内の人間が全員退避が出来た後に起き始めたことだからこそ被害が少なかったんでしようね。」

エリシアさんは窓のある方を少し目を細めながら見てそう話す。

「もつと早くから出現していたら…： 酷かったでしょう。」

そう続けると視線を窓から戻した。

「……取りあえず、ここにはしばらく居られることになりましたから早いとこ治しちゃいましょう！」

私がそうして両脇をしめてポーズを取りながら言うのとエリシアさんは軽く笑ってくれた。それにしても綺麗な人だなあ……

「そうですね、私も早く治せるように頑張ってみます。ね？リエさん。」

「は、はい……… って、あー！」

「？」

名前を呼ばれて少し浮いているのもつかの間、あることを思い出した。癖で声が出てしまう。

「食事の方、お渡しするの忘れてました……」

そう、それを渡す食事のとパックの取り換えをする為に来たことを完全に忘れてしまっていた。

「ちよつとだけほんの少しだけ待っててください！」

慌てて私は通路の方に置いたままにしていたエリシアさんの食事を取りに部屋を出た。折角ちゃんとかなせると思ってたのに……

「リエさん、そんなに急がれなくとも大丈夫ですよ。」

部屋の方からエリシアさんの声が聞こえてくる。

「い、いえ、私が居ないと、手が使えないエリシアさんが、食事出来ないじゃないですか。」

直ぐに食べられるように準備を軽くしてから食事の乗ったトレーを部屋の中に運ぶ。固形じゃないから零れやすいな。

「これが私の仕事ですから。しつかりやらないと……」

一旦持つてきたトレーをベッド横の小さい机に乗せて、それからそのトレーの上から1つ小さいお椀を手にとった。

「……はい！準備が出来ましたから食べられるタイミングで言ってください。」

「……ありがとう、リエさん。」

エリシアさんはそう言う目をお椀から私の顔の方に、目の方に向けてそう言ってくれた。

あの人の時もそうだったけど、お礼を言われるのも悪くないなあ……

「じゃあ、それから頂こうかしら。」

「え、あ……はい！じゃあ、お口の方を開けてくださいね！」

声を掛けられてはっとした私は既に手に持っていたお椀を中身が零れないようにベッドに近づけていく。

そうして私はお椀から薄い白濁色のスープをひと掬い取った。

「……何だか凄いいことになりましたね。」

一緒にコンベアに乗っているフィリンさんに声を掛けてみる。

「私も整理がついてないわ……」

どうやらフィリンさんも僕と同じ状態みたいだ。

……まあ、今こうして普段乗っているコンベアに乗っている訳なんだけどそれにはある理由があるんだ。

「僕もそうですね……現状復帰が難しい状況であるから待機をしろ、って言うのならまだ分かるんですけど。その間にもこの艦で継続してM・Sとして仕事をするなんてですか。」

そう、船の中のあの部屋で休んでいた時にバーンズさんに呼び出されて艦橋で聞いた話がこの通りだった。

どうやらバーンズさん自身もこんな経験は無いみたいで少し困惑していたのを覚えてる。

「それで、その間の活動場所は何処にするのか……なんて聞いたけれど即答だったわね。」

「……船を拠点にして活動をするように、ですか。」

退避用に乗って来た船、この船を主な拠点……つまり僕達の臨時の駐在所として使うように指示が出たんだ。

ともかく今はその準備の為にシークマーカーにあるM・Sの支部にコンベアで向かっている。

「まあ、私達は今のところ指示を淡々と聞くしかないわね……はあ。」

そう言うファイリンさんは話すのをやめて元の位置に座り直した……まだあんまり休めてないみたいだからこの後時間が取れればいいけど。

ちなみにミイーンさんは僕らと違ってM・Sじゃないからこのコンベアには居ない。同じく居ないバーンズさんが船の方で彼女の手続きをしているみたいで僕とミイーンさんとは別行動だ。

それからしばらくの間コンベアに揺られ続けていると特に何も無く目的地で停止した。

『特別区画、M・S支部Aブロックに到着しました。お気をつけて。』

フェルノートの時と同じアナウンスがトンネルの中で鳴る。構造もほぼ同じみたい

だ：

「ほら、早いところ用を済ませて船に戻りましょ。」

そう言うとき、フィリンさんは僕よりも先にコンベアから降りていた。

「同じ場所なのに違う場所って言うのも気持ちが悪いしね、こういうのは早く済ませた方が良いわ。トラブルを避けるのにも効果的よ？」

「……確かにそうかも、しませんね。」

僕も続けてコンベアから降りてフィリンさんに続く形で支部の入り口ゲートに向かう。

「あれ、何だか人が多くないですか？」

ゲートに着いた時、気が付いたことがそれだった。

「確かにそうだけど……多分、私達と同じで退避したM・Sが集まってるんじゃないかしら。ジャケットを良く見てみて。」

「ジャケット？」

「そこを見ればM・Sかどうか分かるでしょ？ 貴方と同じで私服のも居るだろうけど。」

フィリンさんに言われた僕はゲート周辺の人達の服を良く見てみた。……確かにM・Sのジャケットを着ている人の割合が多い気がする。

「と言うことはフェルノートのM・Sは基本的にシークマーカー側で一時的にでも仮所属？になるんですかね。」

服のポケットから識別カードを取り出しながら言う。

「恐らくは、ね。私達だけ特別扱いなんてある筈が無いもの。」

フィリンさんは鼻で笑いながらそう言った。確かに何の功績も無いような僕達には特別扱いなんて無くて当たり前だしな。

「……取りあえず早めに済ませましょうか。」

そうしてフィリンさんと僕は施設の自動ドアを抜けて施設の中へ入って行った。

E—42 「甲板」

「…… 変わり映えしないもんだな。」

特に目的も無く辺りを見る。…… 面白味も無い壁だな。

「もう少し気の落ち着くような物でもあれば気分も…… ここはそう言う場所じゃなかったか。」

一瞬そんな贅沢な考えが頭を過つたが、それもここがそんな場所ではないという事実が思い浮かんだ時にはとうに掻き消えていた。

ま、こんなところを落ち着く空間にしたところで何にもならんだろうしな。ある条件下の場合を除いて、だが。

「…… こんなところに長期間も居ないといけない状態じゃ精神的にやられるな、これは。」

そう、本来であれば原状復帰の為に所属の艦に戻るはずだったんだが…… 今回はそんなちやちやな規則のレベルの話じゃなくなつたつてことだ。

フェルノートからシークマーカーへ退避する間に間接的にはあるがダーカーと戦いを交えて、何となくだがその時の手ごたえからして何かが違うんだ、あれは。

あの時に使った対空用機銃。まあ、この旧型に積んであるちよつとしたお古な訳だが……火力の観点で見ると今のアークスで使っているのと大して変わらない代物だ。機能面では劣っていてもフォトン弾のシステムは変わらないしな。

それを以てして俺とノア君は戦っていたんだが、機銃の照準器越しに見た所では……どうもあれは俺の知っているダーカーとは違うようだ。

「……ふう。」

……だが正直な所俺にはその違和感を根拠立てて完全完璧に説明できる自信なんて無い。ただの思い過ごしだった、気の所為だった、見間違いだった、ぼけてた……その可能性もある訳だしな。

大体、こんなこと分かったところでアークスじゃないM・Sの俺が何処に報告すんだか……

「……変な気分だな、疲れてるのか？多分そうだ。」

ともかく、あまり良い気持ちではなくなってきた俺は甲板に来る時に一服しようと思つてきた携行食をストローから吸った。

なんでも規定摂取カロリー数を満たしていない退避者を対象に急ぎで支給されて来た代物らしい。グレイドから手渡されたもので詳しくは知らんが……

「……不味いな。」

とてつもなくそれは不味かった。普段の物を数十倍にして煮詰めたような……そんな物だった。

「やっぱりここだったか、ちよつと探したぜ。」

そうしていると後ろの方、格納庫の方から声が飛んで来る。

「何だ、再調整で忙しかったんじゃないのか？」

頭だけを横に回してグレイドの方を向く。そこには少しだけ服を煤で汚した奴が居た。

問題のあつたエンジン回りでもやったか、まあそんなところだろうな。

「だってもう時間が……」

そう言うとグレイドは辺りを見渡すが言葉が切らす。

「時間が？」

「…… そうだ！ 端末で時間見てみる。」

「？」

端末を見るように催促された俺はジャケットに手を入れて、少し探った後にそれを取り出して電源を点けた。

「あー、もう昼なのか。」

「そう言うことだよ。ここだと、天板が見えなくて時間が分かりづらいからな。隣良

いか?」

「別に良いぞ。」

グレイドはそれから少し歩いて俺の横へ来るとそのまま座った。

それから、しばらくの間特にお互い喋ることも無くドッグの中を吹き抜ける少し温い風に当たっていた。

「…… そう言えば、また連絡があつたんだ。」

少し呆けていると沈黙を破ってグレイドが話し始める。珍しいこともあるもんだ。

「シークマーカーの、上の方からか?」

座る体制を少し変えてからもう一度奴の方に向き直る。

連絡、1回目の時には現在進行形でしている駐在を通過されたわけだが…… 今度は何だ?

「そうさ、少し読んでみたんだがこういうことみたいだな……」

グレイドは自らが持つている端末を見えやすいように俺の方に向けてくる。

「どれ、少し読むぞ。」

そうして俺は普段仕事でするように上から流すようにして記載のされた文章に目を通していく。こういう慣れは意外と役に立つこともあるんだな。

「…… 補充員?」

補充員、文の内容を要約するとそういった旨が伝えられている。気になった俺は詳しく聞いてみることにした。

「この船に補充員か？」

「ん、そうだってよ。書いてあるだろ？」

「それはそうだが……」

もう一度視線を下げて端末の画面を見してみる。……確かにアークスの戦闘管轄から送られてくるみたいだな。

「来るのは普通のアークスじゃなくて俺と同じ整備系統の奴らしくてな。詳しい情報はまだ来てないが非常の際にこの船を使うかもしれない。だから整備を効率良く行えるように見合った人員を……ということらしい。」

「はあ、なるほどな。」

俺がそう言うのとグレイドは端末を戻した。

「…… シークマーカーには戦闘可能な船があまり無いからかもしれないな。わざわざごごいつを使いたいって言うんだから。」

そう言うとなんはこの船の艦橋の辺りを指で指す。

…… まあ、この辺りの宙域じゃ元々戦闘が少ないからな。元々配備されている数も少ないからだろう。

使えるものは使う。コストを減らすには便利なことだな。

「……正直な話耐久力に関しては何とも言えないが、火力に関しては問題は無いと思うぞ?」

そう言ってみるとやはり奴は疑問の残る声色で返して来た。

「そうか?」

「基本的な構造は変わらんだろうし、実際に使えているのをお前も自分の目で見た
だろ?あの時。」

俺が聞くとグレイドはゆっくり頷いた。

「……だけど、確かに構造的には違いが無いかもしれないけど実際に使ってみて、比較
してみたの違いがあった時は駄目じゃないか。特にバーンズなら武器の弱さは自分で
多少補えるだろう?だからだよ。」

そう言うグレイドはそのまま立ち上がった。そろそろ作業に戻るんだろう。

「じゃあ、今度もう一人の利用者にも聞いてみれば良いんじゃないか?」

「二応視野には入れておくよ。」

グレイドはそこで言葉を切るとこの場から離れる前に持っていた携行食……俺と同じ物を思い切り息を吸い込むようにそれを飲んだ。

「……今更だがそれ、かなり濃いぞ。」

「…… そういうのは早く言えよ。」

そう奴は軽くえずきながら言葉を捨て吐くと格納庫の方に向かって行った。

「…… 以上の物が消耗品の支給になります。次回以降は通常通りとなるので消耗品の補給が必要な場合には支部に連絡を繋げてください。」

「分かりました。」

僕はハイキャストさんに返事をするの確認をした物品を見慣れた箱の中に入れていく。隣ではフィリンさんも箱詰めしているところだ。

「結構、色々と入ってますね。」

作業を続けながらフィリンさんに話を振ってみる。

「まあ、これぐらいないと補給の頻度が増えて仕方が無いもの。当然と言ったら当然の量よ。」

そうして話を時々交えながらも箱詰めをしていく。弾薬、予備電源、ライト、応急処置パック…… しばらくすると諸々の物はいれ終わっていた。

「では、もう1度最後に確認を行いますますが宜しいでしょうか？」

箱詰めが終わると同時にハイキャストさんが声を掛けてくる。恐らく箱詰めが終わったのが分かったんだらう。

僕は返事をして頷いた。

「再度確認を行います。第184番艦フェルノートM。SのB第2部隊はあくまでも補助として第182番艦シークマーカーM。Sに仮所属となります。その為、応援の必要があれば連絡のあった現場へ向かってください。」

そう言うのと今まで前に出していたホログラムタイプの端末を消して元の体勢に戻った。

「それでは、また……」

「あ、少し待ってくれる?」

「何でしょう?」

こうして、用事が済んだと思つて踵を返して支部から出ようとする。フィリンさんが口を開いた。何だろう?」

「彼、実のところ制服を置いたまままで退避して来ちゃったのよ。それで代わりに欲しいのだけれど予備の制服はある?」

フィリンさんはそう言う。僕の方を見ながらハイキャストさんに話していた。

……確かに着の身着のまままで急に退避することになった所為で僕が着ているのはま

だ一般員用の服だった。

ここだと少しは僕と同じで一般員の服を着ている人が居るから良いけど、それでも制服を着ている人の方が多いから……何か恥ずかしいな。

「制服の支給ですね。消耗品ですから確認をさせて頂ければ直ぐに用意が出来ます。少しお待ちください。」

「分かったわ。」

するとハイキャストさんはそう言い残すと制服を取りに行く為に奥の通路の方に歩いて行く。

最初のうちは後ろ姿がまだ見えていたけど、人が多いのもあってすぐに見失ってしまふほどだった。

「凄いな……この人混みを少し掻き分けるだけで進めるのか。」

そうしてそれから少しの間待っていると最初に進んで行った道に戻って来るような形で戻って来た。勿論、手には折り畳まれた制服を持って。

「お待たせしました。確認が出来ましたのでデータ上にあるノアさんの適用サイズをお持ちしました。」

そう言う手を持っていた制服を僕の方に向けて差し出して来る。

「ただ、データとの若干の違いを考慮して実際に1度着られることを推奨します。ど

うしますか？」

サイズの確認か……。まあ、データ通りなら多分大丈夫だろうな。

取りあえず僕は差し出されたそれを受け取った。

「いや、その、このサイズで大丈夫です。多分あつてるでしょうから。」

「そうですか？……分かりました。」

手に取ったそれを軽く見てみる。確かに少し綺麗なだけでいつも着ているのと変わらない物だった。

「では、駐在所の方へ戻り準備の方を進めてください。連絡はこれで以上です。お疲れ様でした。」

「分かりました。」

そう言うのと今度こそは別の要件の為になのか別の場所へ歩いて行って。そのうちに見えなくなった。

「じゃ、戻りましよ。要件が無いなら無理して居る場所じゃないわ。」

「……そうですね、バーンズさんも待っているでしょうし。早く行きませうか。」

そうして僕とフィンリンさんはもう一度通って来た入り口を抜けて施設から出た。

E—43 「清掃」

「……お、2人とも戻ったか。」

昇降機の扉が開くとそこにはバーンズさんの姿があつた。

それにしてもバーンズさんがこの場所元休憩室に居るなんてどうしたんだろ。

「今丁度ですね、戻ってきました。」

ひとまず、目的の場所に着いた僕は手に持っている物を本能的に近くにあつた机の上に置いた。……机？

「あれ、この机どうしたんです？」

僕は手で机に触りながらバーンズさんの方に顔を向けて聞いてみる。ここの休憩室の跡には埃と仕切り以外何も無かつたはずなんだけど……

「そいつは今さつき俺が持つてきたやつだ。船の中に残つていたので使えそうな物を選んできてな。」

バーンズさんは作業を続けながらも話を続ける。

使えそうな物を持つて来るって、ここを元の通りに休憩室にするのかな。

「この場所を元の休憩室に戻すんです？何だか元々はそうだったみたいですけど。」

そこで顔を上げてもう一度改めて辺りを見渡してみる。

やっぱり、構造で見るなら休憩室にしか見えないな。仕切りの配置が良く見る形の物だしね。

「いや、目的としては近いかもしれないが休憩室では無いな。」

けれど、バーンズさんは少し笑いを口に含めながら違うと言った。だとしたらここをどうするんだろう。

「……もしかしてだけど、ここを待機室にするつもり？」

するとバーンズさんが答える前にフィリンさんがそう答えた。

待機室……確かにこの船を駐在所にするなら休憩室のあった場所を使うのは選択肢の一つかもしれないな。船の中で広い空間と言ったらこういう場所しかないみたいだしね。

「良く分かったな……まあ、ノア君。そう言うことだ。」

どうやらフィリンさんの言った通り休憩室にするみたいだ。

「…… そうだ、帰って来て直ぐに悪いが手伝ってもらえるか？まだほとんどやり終わってなくてな。」

そう言うのと靴先で汚れの残っている床を軽く叩いた。

「大丈夫ですよ、さつきまで休んでいてそこまで疲れていないですから。道具はあり

ます?。」

「ん、道具はこれを使ってくれ。」

すると壁際に立てかけて置かれていた掃除道具を1つ渡してくれた。勿論フィリンさんにも。

「3人も居ればそこまで時間も……。」

バーンズさんはそこまで言うとはっとした様子で言葉を切った。

「そう言えばまだ昼、何も食べてないだろ。ほら。」

近くに置いてあった物を取って僕の方へそれを差し出して見せる。いつも飲んでいるのとは少し見た目が違うけど、携行食みたいだ。

「ミイーンも味満たしに要るか?。」

「……じゃあ、貰っておくわ。」

ミイーンさんも味満たしに同じタイプの物を貰ったみたいだ。

一応、キャストの人でも味覚機能が付いている人は精神的に来る空腹感を満たすために身体的な意味は無いけど食べ物を食べることが多いからね。

「色々あつて何も飲めませんでしたしね、頂きます。」

そうして僕は携行食のパックにストローを刺して中身を吸い込んだ。

すると、バーンズさんが少し遅れて言葉を付け足した。何だろう?

「あ、中身はかなり濃いから気をつけた方が良いでしょう。」

そう言われた時には既に遅くて、直後に僕は激しくむせた。

「大丈夫…… じゃなさそうね。」

気分が少し悪くなっていた自分を横目にフィリンさんが声を掛けてくる。それにしてもあの表現しにくい味は何だったんだろ。

「フィリンさんは良く飲みましたね、あれ。」

「それは…… 貴方があそこまでになるんだから味覚の感度の調整ぐらいするわよ。」

「はあ、便利ですね全く。」

どうやらフィリンさんは味覚の感度の調節でやり過ぎたみたいだ。

「…… このくらいで大丈夫かな。」

そうこうしてフィリンさんと話をしている内に大体辺りを綺麗にすることが出来た。

一応の確認の為にバーンズさんと呼んでみる。

「バーンズさん！ここはこれぐらいで大丈夫ですか？」

自分に割り当てられた部分を大体掃除することが出来た僕は確認の為にバーンズさんに声を掛けた。

最初にここを見た時よりは大分良い方になったかな。

「ノア君が良いと思つたらそれで大丈夫だ。区切りが付いたら一旦こつちに来てくれ。」

「分かりました、すぐ行きます。」

それを聞いた僕は掃除道具の柄の部分を持つて道具を元の通りに壁に立てかけて、それからバーンズさんの方へ向かった。

「…… 良し、終わったみたいだな。」

「ちよつと雑かもしれないですけど、終わらせてきました。」

そう僕が言うとバーンズさんは作業をする手を止めて話を続けた。

「まあ、話と言つても場所の説明みたいなものだ。あそこの部屋なんだがな……」

手で通路を少し進んだところにある部屋のドアを指して言う。

「管理者のグレイドと話し合つてあの部屋を倉庫、ロッカールームとして使うことにしたんだ。ロッカーが元から置かれていた部屋だったしな。」

「そうなんですか?」

「ああ、昔からずつと置いてあるらしい。」

話だとあの部屋をロッカールームに使うみたいだ。

さっきの部屋を待機室としてここにロッカールーム。距離が近いし物も既にあるなら丁度いい場所だしね。

「丁度補給品も持ってきて貰ったところだからな。良い程度に分けて置いておいてくれ。」

「分かりました。じゃあ、ちよつと行ってきますね。」

「ん、頼んだ。」

頼まれた僕は支給品の箱を取りに戻ってからロッカールームに向かった。

「全く、どうしてここまで汚れるのか、知りたいわね。」

要所要所に積もった埃を片付けていきながら口から文句が零れる…… まあ、前までいた部屋も大概だったけれど。

「体が肉体的に疲れないのが唯一の救いね、こんなの生身だったら明日は大変よ。」

そんなことを言いながらも私は掃除を続けていた。

…… そういえばノアの方は支給品の箱を持って行ってから戻っていないけど、手間取ってるのかしら。

「丁度終わりも見えてきたところだし、手伝いに行っても良いか。」

そう考えた私は道具を片付けて、それからロッカールームの部屋の方に向かおうとし

た。

「？」

けれど、その時に背後から聞こえて来た昇降機の駆動音で私の意識はそっちの方に寄せられた。

この船が上がって来るのなら……ミイーン？それとも管理者の彼かしら。

「……まあ、ミイーンなら携行食を渡せるし彼なら挨拶が出来るもの。」

ともかくどちらが来ても挨拶ぐらいはしておこうと思つて私は昇降機が上がるまで待つことにした。

それからしばらくして昇降機が今居る区画に到着してその扉が開いた……。けれど、そこにあつた姿は何にも見覚えのない人物だったの。

「貴方……何の用？」

そう私が声を掛けると動揺した様子で言葉を返して来た。

「そ、その……ほ、補充員です！」

「補充員？聞いていないけど……」

「あれ……おかしいな……」

補充で誰かが来る予定があるのなら何かしら連絡がある筈だから……来ていないとなると分からないわね。

そうしてお互いに混乱していると後ろの方からバーンズの声が聞こえて来た。

「フィリン、待つてくれ。俺が代わる。」

「知ってるの？」

「ああ、伝え忘れてたが近いうちに来るとだけ伝えられていたからな。この時間に来るとまでは知らなかったが。」

そういうとバーンズが私の立っていた位置と変わる形で場所を入れ替わった。

「君が連絡のあった補充員で間違いないんだな？」

「はい、この船のあるドッグに向かうように言われたので……すみません、巡洋艦のブリュンヒルデで間違いないですか？」

「ああ、間違いない。ここがその船だ。」

「そうですか……よ、よかった。」

服を見る限りではM・Sではなくてアークスの人間みたいね。ただ、普通の制服じゃない所が少し気になるけれど……この制服は何の担当だったかしら。

「まあ、詳しいことは左側面の格納庫に居る管理者の奴と話すようにしてくれ。この後の動きも伝えられるはずだからな。」

「分かりました！じゃあ、行きますね。」

そう言うのと彼はもう一度昇降機のスイッチを押そうとした。

「…… ああそうだ。名前を聞いてなかったな。何て言うんだ？」

丁度上がる寸前でバーンズが彼に向かって質問をした。すると彼ははつとした様子で口を開いた。

「えつと…… じ、自分はルイスと言います！整備員です！」

「ルイスか。俺の方はバーンズ、こつちがファイリンだ。宜しく頼む。」

ルイス、着ている制服で中々思い出せなかったけれど最後の言葉でようやく思い出せた。あれはアークスの整備担当員用の作業服だったわね。忘れてたわ。

…… ともかく、これで何かあったとしても緊急の時にはどうにかなりそうね。

E-44 「変動」

「おい、戻ったぜ。」

中に居る人間に帰って来たのを伝えるために扉を数回ノックする。

しばらくすると隠してあるスピーカー越しに聞き慣れた声が聞こえて来た。

『…… ナウラは?』

「ケーキ。」

その言葉を放つと扉から作動音がしてロックが解除される。それからスイッチを押して中に入ろうとすると……

「今帰…… うわっ!」

扉の向こうから飛び掛かって来る何かに思い切り倒された。一体何だって言うんだ?
?

「うう…… あ。」

ちよつとした痛みに耐えながら腰を上げようとする俺はそれと目が合った……
驚いたようなその顔は良く知った顔だった。

「ご、ごめん。今帰って来たって聞いたから。」

「何だお前か、驚かすなよ。」

取りあえずそのの正体が分かった俺は立ち上がって建物の中に入って行く。全くとんでもない出迎えがあつたもんだ。

「ほら、早く来いよ。締め出しちまうぜ？」

「やめてよそういうのっ、もう……」

奴が入つたのを確認してから扉を元の通りに閉じる。するともう一度作動音が響いてロックが掛かった。

「……特に何も無かつたの？」

「当たり前だろ、間接的な戦闘だったんだからな。怪我できるもんなら天才だな。」

短い通路を進みながらさっきまでしていた戦いについて話す。まあ、戦いと言つてもただ向かつてくる的に向かつて射撃するだけの練習みたいなもんだつたけどな。

「なら良いけど……疲れてるだろうからゆっくり休んでね？」

そう言うのと引き留めるようにして俺の腕を軽く掴んでから休憩室の方を指で指して来た。俺もそうしたいところなんだがな……

「生憎だが伝えなきゃいけないことがあるんでな。お前は先に行つとけよ。」

俺は掴まれた腕を軽く振りほどいて、それから軽く手を頭に添えてやっつてから奴に先に行くように伝えた。

「ん……分かった。早く済ませてよね？一応聞きたいことあるんだから。」

「はいはい、分かっているよ。」

そう言うのと休憩室の方へ大人しく進んで行った。……まあ、普段無いことだから聞きたいことが山ほどあるんだろうよ。

「……ふう、取りあえずあのことを報告しないな。」

ともかく、一息落ち着けてから俺は通路の突き当りにある部屋にまで進んで行って扉を叩いた。

「おい、入っても良いか？」

ノックを数回しながら確認を取る。居るのは分かっているがこれぐらいはな。

そうして少し待っていると扉の方から返事が返って来る。

「何か伝えたいことがあるんだろ？入ってくれ。」

「じゃあ入るぞ。」

返事を聞いた俺は特にノックの掛かかっていない扉のスイッチを押して部屋の中に入って行った。

「……ん、たまにはこういうのでも悪くないもんだな。」

「なんだ飯の時間か？」

部屋の中に入ると椅子に座って携行食のパックを飲む男の姿が目飛び込んできた。

気になった俺は手を前に出して空中に端末のホログラムを出して画面を確認して見た。……確かにもうこんな時間か。

「なんだ、お前もまだ何も食ってないのか？ほら。」

そう言うとな奴は同じパックを手に取って投げ渡して来た。俺は落とさないように慌ててそれを受け取る。

「あんまりこれ好きじゃねえんだけどな……」

「お前はいつつもそうだな、たまにはこういう薄味の方が良いつてもんよ。」

「だってこれ、一般員用の安物だろ？普通に良いモノ天然素材を食える俺らがわざわざ飲む必要も無いだろうに。」

こういうのは基本的に非常糧食として飲むやつだからな。俺以外にもアークスでこれが嫌いな奴は多い、不味いからな。

「……まあ、そんなことは良いんだ。ほら。」

奴は手で椅子を指して、ついでに手に持っていたパックを飲みきったのか近場の籠に投げ入れた。

「いや、数時間座りっぱなしだったんだ。椅子ならもう良いって。」

「そうか？別に良いけどよ……それで、話は？」

そこで、奴が話を聞ける状態になったのを確認した俺はここに来る途中で聞いた話を

話す状態に入る。

聞いた話から俺達に有用な部分をその短い間で簡単にまとめて……それから俺は事の説明をし始めた。

「……本当なのか？」

あらかた話をするとな奴は疑惑の目を向けて来た。

「そうじゃなかったらしないぜ？こんな話。」

大して俺も語彙を強めて返す……まあ、俺もあの男から話を聞いた時には同じような反応だったからな。無理もないが。

「じゃあ、本当に格納庫の警備システムが緩くなるつて言うのか？」

「まあな。さつき教えた時間の間だけなんだが……こんなことは滅多にない話だぞ。」

そう、俺がその男から聞いた話。それは俺に、俺達にとつてはとてつもないほどに有益な情報だったんだ。

それは格納庫の警備が手薄になるということで人員が足りないことと資材不足が原因らしいが……理由は何であれこれは好条件だ。

「確かにお前が言うなら信憑性があるけどよ、その男つてのはどういう奴だったんだ

「？」

「なんでもアークスの上層部に関わりのある人間らしくてな。ただ服装の所為で種族が分からなかったが……まあ見せてくれた識別カードでは普通のヒューマンだったよ。」

男のことについて聞かれて奴に話しかけられた時のことが頭を過る。

あの時は頭が布で覆われている奴に突然声を掛けられて……それで何かと思つたが本当に有益な情報を言ってくれるだけだったしな。上層部の関係者だつて言うのも顔写真付きの識別カードで証拠を出してくれたし。

「……んまあ、同じ種族の人間ならまだ良いところか。ちよつと待つてろ。」

そう言うとな奴は一旦席を立て、それから何処かへ連絡をし始めたようだった。恐らく他の拠点の連中に話を繋げてるんだろな。

……それにしても格納庫の警備システムが緩くなる、か。そうだとするならばあの人のなり損ないどもをもつと手早く始末する為の道具が手に入る。これで今までよりも円滑に事が進みそうだ。

そうしてしばらくの間椅子に座つて考えながら呆けていると連絡が終わつたのかも一度さつきまで座っていた椅子に奴は座り直した。意外と話が短く済むもんだな。

「それでどうなつたんだ？」

「いや、具体的な部分までは決まってるけど……日程で1日目にあたる日に現場の確認作業、良くて日程2日目に実行ってところか。忙しくなりそうだな。」

1日目の状況でどう動くかどうか……出来れば大物が入手できれば良いんだが。

「そうだな……じゃあ、俺は備えて少し休むぜ。」

「あ、おい！もう少し話したって良いじゃないか！」

「俺は疲れてんだまたな。」

そう言っただけで俺は後ろから聞こえる声を無視しながら通路に飛び出るように外に出た。ああなるとあいつは話が長引くからな……

「……さて、害獣駆除に備えて寝るか。」

そうして俺は休憩室にようやく行くことが出来た。扉のスイッチを押して中に入る。

「なんだ、俺より早く寝てるじゃねえか。」

部屋の中に入ると既にあいつは寝ていた。あれだけ話を聞きたがってたのに。

……だけどもあ、取りあえず俺も疲れを取らないとな、今のところは。

E—45 「経過」

「……ふう、こんなところかな？」

今しがた話しかけた男がしっかりと角を曲がっていくのを確認してから被っていたフードを外す。

「全く暑苦しくて酷いデザインの服だ、二度と着たくないものだね。」

元居た場所から少し路地に入ったところで今まで着ていた一般員用の服を全て脱ぎ捨てて、それから普段の制服に戻す。この辺りなら服が一着落ちていようが問題ないからね……

そうして当初の目的を果たすことが出来た僕は来た道に戻ってコンベアに向かった。

「……それにしても簡単だったな。」

することを終えて、まず最初に口から出た言葉はそれだった。……簡単だった。

今の計画の段階だとまず初めに行った184番艦でのテスト結果、それに更に肉付けをするための次のテストに向けて仕込みを僕はしているわけだ。こうして自分自身も行動を起こしながらね。

まあ、実のところ試作品は既に出来が整っているから後は彼らに動いてもらうだけな

んだけど。

「組織としてある程度まで整備されていることは事前の情報で分かっているから：：：そうだ、彼の言葉を当てにしてみるか。」

僕はそう思い立つと歩きながら端末を空に表示させて入力を進めていく。

一応あれの時刻を伝えはしたけど、大雑把な範囲でスケジュールを伝えただけで具体的な行動がこちらには分からないからね。こつちが動くときの妨げにならないように把握はしておきたい。

「あの聞き方なら恐らくこう動くだろうか：：：」

情報を伝えた時に良く聞かれた日付、時刻を参考に予測できる行動を記し隣の方でこちら側の動きを決めていく。

まだ組織としてはキャストのC・R・S・Fの連中と比べればお遊びみたいなものだが集団であることには変わりはない。だとするのなら数人規模で話の整合性が取ればそれなりの信憑性が出るだろうしね。

「：：：今のところはこんなものかな。後は現地調整か。」

そうして大体のデータを作り上げると僕はそれを機械室の方の人間に送る。数学的に比較的高い確率の高い候補を選んだつもりだけど：：：それなら後2日程度で事が動くね。

「ん、乗り込むか。」

そうこうしていると既にコンベアが着いていることに気が付く。思考を巡らせると周りが見えないものだね。

乗り込んだ僕は普段と同じようにシートに座りベルトを締める。

「……この船は果たしてどこまで持つかな？」

動き始めたコンベアから艦の市街地を横目で見ながらそう呟く。

一応、最初にテストを行った184番艦とほぼ同じ状況下でそれを行いたかったから第182番艦この艦を選んだのだけ……結果はシミュレーターの演算だと完全には予測できないことだからね。良い結果になれば良いけど。

今回の結果として得られるのを期待したいのは安定力と言ったところで前回のテストで分かった問題点だった安定力の改善か。

確かに、目標としていた拡散力があの試作品にはあったわけだけど安定力が無い影響で発生するダーカーにばらつきが出てしまった。これは誤差として最初は処理をしていたけれど、こうも結果が出ると無視も出来ないしね……この部分は早急に解消が必要だ。

「これで上手く出ればほとんど完成品。駄目なら鉄屑。賭けに近い感覚だねこれは。」
状況を見てそんなことを呟いてみる。まあ、賭けになったとしても勝率は8割だと思

うけどね。

「……ともかく、早く進めないかね。」

その時に今進めている計画と同時に進行させている計画のタブを端末に開いて確認する。

ちなみにもう一方の計画にはこう題を設けた……『疑似的なデータクファールの再現、応用について。』

「あ、おはようございます。」

朝のいつもの時間になって起きた後、着替えてから部屋を出ると角を少し曲がったところでバーンズさんに会った。

僕は少し枯れた声でバーンズさんに挨拶を返す。

「奇遇だなノア君。おはよう。」

どうやら僕と同じ時間に起きたみたいでバーンズさんも少し声が枯れていた。どうしても寝起きは空調で喉がやられるんだよね……

「そう言えば新しい服の支給、貰えたんだな。」

「この間の時にですな。元々持っていたのは置き去りにしてきましたから交渉してみただですよ。」

支給品を受け取りに行つた時のことが頭を過る。あの時に貰えてよかつたな。

「流石に仕事をする時に一般員の服装じや信用して貰えないからな、良かつたよ。」

そう言うのと体を伸ばしながら待機室の方に進んで行つた。僕も追いかけるようにしてバーンズさんに付いて行く。

……それにしても部屋の設備が悪いとかではないけど、埃っぽいのはどうにもならなかつたな。かなりやつたつもりだったけど眠りにつけるまでの間に何度もむせたし。

昨日は仮の駐在所の設置と割り当てられた部屋の掃除で疲れ切っていたけど、その所為で寝れなかつたしね。

「あ、おはようです!」

「ん?どうしたんだルイス。」

そうして寝起きで疲れている体を動かして待機室の椅子に何とか座るとそこにはルイスが来ていた。

おかしいな、今日は朝まで管理者の人の手伝いに回るって聞いてたんだけど。

「グレイドさんにこれを持って行けって、それで持って来たんです。」

「?」

そう説明すると空いていた机から箱を手にとって、そこから一つパックを渡して来た。

「なんだ、朝食用の携行食を持って来てくれたのか。ありがとう。」

僕はそうお礼を述べるとルイスからそのパックを貰った。……良かった、昨日の酷いのは違うみたいだ。

「仕事ですから気にしないでくださいよ。後のはここに置いておきますから。」

「ん、じゃあまた数時間後に。」

そう僕が言うのと軽く挨拶をしてルイスは昇降機に乗って行った。

「お、朝の分か。」

ルイスが行ったのを見届けているとバーンズさんが携行食に気が付いたのか声を掛けて来た。僕はすかさず箱からパックを一つ取ってそれを渡す。

「今さつきですけどルイスが持って来てくれたんです。ここの空き机に置いておきますね。」

「分かった。フィリンが来たら渡してやってくれよ。」

「勿論ですよ。」

そうして僕はパックにストローを刺して中身を飲んだ。やっぱり普通のが一番良いね。

… さて、これから普段通り待機だな。

「なんだ、先に起きてたのね。」

「… あ、フィリンさんおはようございます。」

と、思っていると次にはフィリンさんが起きて来ていた。フィリンさんの方は特に眠い様子は無く、平時と変わらない様子で疲れを見た目から感じなかった。

「… 何だか酷そうね。眠れなかったの？」

「埃と空調が酷くてですね。ずっとむせてましたよ。」

そう僕が言うとなフィリンさんは気まずい様な微妙な表情を浮かべる。そんな顔をされたって手は尽くしたんだからどうしようもないじゃないか。

「もう少し手入れが必要みたいね、でないとな今日も寝れなくなるわよ?」

「分かってはいますけどね… 中々綺麗にならなくて。」

「… じゃあ、昼辺りに手が空いたら付き合っただげるから。それなら良いでしょ?」

腰に片手を当てながら手をひらひらとさせてフィリンさんは話を続ける。追加で掃除か…

「良いんですか? フィリンさんの割り当てじゃないのに。」

「急を要する事態、なんだから当然でしょ? 寝不足でミスを起こされる身になって欲しいわね。」

「は、はあ……」

「ともかく昼辺りになったら声を掛けるから、じゃあね。」

フィリンさんはそう言うと言分の机の方に体を向けて進み始めた。……けれど僕はそこで呼び止めた。

「……あ、そうだ。フィリンさん！」

「何？」

「これ、渡し忘れてましたよ。どうぞ。」

そう、フィリンさんに携行食を渡し忘れていたことに気が付いたんだ。

それで僕は一つパックを取ると何時ものようにそれを手渡す。

「少し前にルイスが運んできてくれたんですよ、味の方も昨日よりは大丈夫ですし。」

「……そう、受け取っておくわ。」

そう言うときフィリンさんは差し出していたパックを受け取って、それから自分に割り当てられた机の椅子に向かうとそれに座った。

……まあ、今のところ特にする作業も無いから今までと同じで待機するだけなんだけどね。

取りあえずそれから数時間ほど僕は待機を続けた。

E—46 「鉄帽」

「うーん……この通りで合ってるんだよな。」

メンテナンス用のハッチの中を目で睨みながら思考を巡らせる。一応勉強した通りならこれで合ってるんだけど……

ともかく、中途半端ではいけないと考えた僕は端末でマニュアルを表示させて目の先にある配線と再び睨みあいを始めた。

「ルイス！どんな感じだ！」

集中をされていて突然声が聞こえて来た僕は慌てて声のした方を見る。

「あ、グレイドさん！」

そこには丁度作業を終わらせたグレイドさんが居た。気が付いた僕は直ぐに挨拶を返す。

それにしても手が上手い人だな……僕ならもつと時間が掛かるぞ。

「俺の方は方が付いたがお前の方はどんな感じだ？」

「僕の方ですか？……まだ5割くらいですかね。」

僕がそう言うのとグレイドさんが道具を2つほど手に納まるようにして持ってこっち

の方に来た。

「分かった、少し手を回す。ちよつと良いか？」

「いい、良いんですか？」

「良いんだよ。恐らくお前の知識の範囲だとこのタイプは教育を受けても知らないだろうしな、ほら。」

「は、はあ…。」

グレイドさんは手で少し退くように合図を送って来ながらそう言う。僕は端末を作業服のポケットにしまい込んでからその通りにメンテナンスハッチから離れた。

「良いか、ここの部分を見てみる…。」

そう言われた僕は早速指で指された部分を良く見てみる。この部分は確かエネルギーケーブルか。

「これはお前の使おうとした測定器じゃ測れないんだ。少し込み入ったのが必要で、これだな。」

すると見たことが無いようで覚えのある形をした物をグレイドさんは僕に向けて見せてくれる。確かにこれは知らない道具だな…。

…
取りあえず、その物の正体を知るために僕の方からそれについて聞くことにした。

「それは何なんですか？まだ見たことが無くて。」

「なに、焦らなくても今見せるさ。」

グレイドさんは話しながらその道具を慣れたような手付きで、それもそれなりに太いエネルギーケーブルに挟み込むようにして取り付けをした。エネルギーが流れてくる上方と下方に1つずつだ。

「これは特に言わなくても分かるだろうが、この部分でまずは電源を入れて作動させる。」

手で触れていた部分に付いている小さいスライドスイッチを滑らせて言う。ちなみにその部分に書いてあったような印字は擦れて読めなくなっていた。相当使い込んでるんだろうな……

「次に、マニュアルに書いてある通りに常時平均循環エネルギー量値を入れておく。この配線の番号は……」

「そのエネルギーケーブルはMEのS5、65番だったはずですよ。」

「ああ、そうだそうだ。この位置ならそれだな。ありがとう。」

そうして何かを思い出すような仕草で今度は機器の小さいモニターに出ている数字の値を上げていく。

これは……これは見たことがある物だぞ。

「これ、かなり形が違いますけど状態確認用の測定器ですか？一応僕も持ってますけど……」

僕は試しに持っている支給品の道具で同じ役割だと思った物を一つ手に取って、それをグレイドさんに見せながら言う。

「確かに用途は同じなんですが、このケーブルはこいつでない駄目な箇所が多いんだ。それだと規格が合わなくてな？多分お前の方に満足に情報が回ってなかったんだらうよ。」

「な、なるほどです。」

「手が空いた時にでも追加で物品を申請しておけ、この船の手入れにはかなり使うからな。」

それを言われた僕は急いでまた端末を取り出してメモ書きだけを入力して残した。

……にしてもここに配属になる前にすっかり確認したはずんだけどな。それとも聞き忘れ、なんて無いよな。あんまり考えられない事だけど忘れてたのか？

そうして考え事ではっきりしているのとグレイドさんに名前を呼ばれて、それで驚くようにして頭の中がすつとした。

「大丈夫か？寝不足なら良く休んでおけよ。」

「いや、その、考え事ですよ！はは。」

「?」

当然ながらに良くの分らないというような顔をしながらもグレイドさんは近くに立ってかけてあったメンテナンスハッチを手に取って、それを元の通りに嵌めこむ。

「まあ良く休んでおけよ。時間も丁度良いから昼でも食うんだな。ほら。」

そう言うのとグレイドさんは自らの腰に着けていたケースから携行食のパックを投げ渡してくれた。

「わかりました。……じゃあ、行つてきますね!」

「ん、転ぶなよ。」

返事を返してから僕は直ぐにエア抜き室の方に向かって行つた。

「……つと、そうだった。ルイス!」

「どうしました?」

……けれど、どうやらまだ伝えたいことがあったのかグレイドさんに後ろから呼び止められた。何だろう?」

「何かしら軽めの武器を作るのが得意だつて聞いて面白いのを持って来たぞ。これだ。」

近くにあったロッカーに近づいて行つて、一番右の方にあるロッカーをグレイドさんが開けるとそこには少し大きめの何かがあった。

ここからだとは良く見えないけど……何だろ？

「少し前にお前の詳細情報が補充の話が来て回ってきた時にバーンズに相談したんだよ。その時にだな。」

「バーンズさんにですか？」

「そうだ、基本的にこの船は俺とバーンズの2人が最高責任者に近い役割だからな。」
グレイドさんはそう話しながら物を持って僕の方へ来る。そうして近くに来たことでその物の全容が見えて来た。

「ん、持ってみろ。」

言われた僕は特に何も思うことなくそれを持ってみた……。ちよつと重い？

「これ、何です？左と右で形が違いますけど。」

それはUの字型で前の方に箱が付いているような見た目の物だった。それでいて金属なのかそれなりに重さがある。

「これはキャストのヘッドパーツ用武装の1つなんだがな。着脱式短機関銃とか言うんだがな……。取りあえず応急処置で付けた電源があるだろ？入れてみな。」

そう聞いて手に持っている物に何か付いていないかを回したりして探す……。これか！

取って付けたような電源装置。それを見つけた僕は直ぐにそれを点けた。

断続的に切れるような電子音が鳴ると突然アナウンスが鳴る。驚いて落としそうになつたよ……

『接続状態の再確認を開始しま、異常発生。接接続先がありません。機能を機能を機有効化するにはパーツ本本体への取り付けを行つて異常さい。繰り返ええします……』

「あれ、おかしいな。単独でも動くようにやつたつもりなんだが……」

「何が起こつてるんです!？」

そう言つてグレイドさんが僕の言葉を聞いて、それで答えを返そうとして口を開こうとした時だった。

何かと思うと突然それから鳴っていたアナウンスが切れて、またしばらく断続して電子音を出すと小さめな爆発音がしたんだ。

爆発音が響くと今度は壁を跳ね返る音が鳴る。

「…… た、弾が入つたままじゃないですか!」

「あれ、おかしいな。しつかりと弾倉から弾は抜いておいたはずなんだが。」

グレイドさんは首を傾げるとその銃のようなもの?を僕の手の内から取つて詳しく観察し始めた。

それで少し唸つて考えた後、そういうことかと言つて暴発の原因を説明し始めた。

「なるほど、薬室に1発入ったままだったんだな。これは気が付かなかったな……」
「危ないから気を付けてくださいよ……」

「仕方が無いだろ？武器の取り扱いは無知なんだからな。」

「は、はあ……」

それから、少し落ち着いてグレイドさんは言葉をまとめた。

「……まあ、あれだ。要はこれをキャスト用としてじゃなくてヒューマンでも装備出来るように手を加えて欲しいんだ。」

「これを頭に着けるんです？でもパーツに取り付けるのなら無理が……」

そう僕が言うといつの間にか被っていたヘルメットを脱いで、それを僕に見せて来た。まさかこれに？

「ほら、ここに丁度良いのがあるだろ。バーンズからこれも一緒に渡して貰ったんだ。」

「……本当にヘルメットに付けるつもりなんです？」

「ん、本来ヘッドパーツに取り付ける物だしな。これが良いだろ。」

ヘルメットを手の内で回しながら冗談のように言う。……一応、今感じれた反動の限りだと無理ではないと思うけど。

「正直、使えるかは微妙なところだがお前の技能を試すには丁度良いだろ？頑張つて

みてくれよ。」

「やるにはやりますけど……分かりました。」

「じゃあ、俺からの話は済んだからゆっくり休んでくれよ。」

そうしてグレイドさんは言葉と一緒にヘルメット、例の短機関銃を残して通路の方に行ってしまった。

……まあ、面白そうだからやってみるかな。

E-47 「軽警」

「……やつぱり何も無いな。」

椅子に深く座りながら待機室で言葉を漏らす。

「何言ってるのよ。何も無い方がお互いに楽で平和でしょ。」

すると机を挟んで向こう側に居るフィンリンさんから言葉が返る。

まあ、確かにそうなんだけどやつぱり役目が無いと気力と言うかやる気と言うか……
そう言うのがなあ。

「大体、ここだと私達はあくまでも予備みたいなものなんだから事態が起きても
ね……そもそもよつぽどのが無いと呼ばれないのよ。」

「じゃあ何でわざわざこんな仮設の駐在所なんて、意味が無いじゃないですか。」

「意味はあるわよ。私達がここに居ても良い口実が作れるもの。」

「そ、そんなのつてありません？」

「……ちよつとした冗談よ。仮説も含むけど。」

「は、はあ……」

……そうして話で繋げて暇を潰していると気が付いた時には既に正午近くになって

いた。暇をしてると時間も早く感じるんだな。

「それで…… どうします？ 昼食を済ませてから僕の方は直ぐに動けますけど。」
手に2つ携行食のパックを取りながら話を続ける。

この調子だと今日は丸1日何も無さそうだからね。掃除をするのには丁度良い配分だ。

「掃除ね、良いわよ。私は昼食に時間が掛からないから。1つ貰える？」

言われた僕は持っていた内の1つをフィリンさんに手渡した。僕はそれに合わせて言葉を返す。

「じゃあ、飲み終わったら部屋の方で準備して来ます。それが終わったら僕の方から呼びますから。」

「ん…… 分かったわ。適当に待機してるから。」

そう言うのとフィリンさんは自分の席の方に戻って行った。

よし、早いところ飲み干して部屋の方に行かないと…… そう思つて携行食のパックからストローを外しかけた時だった。

『…… 区画、Fの4番で応援要請。一般区画、Fの4番で応援要請。軽度の警備レベルを要す為、付近のM・S予備部隊は直ちに急行を。繰り返します。』

そのアナウンスが船内に響くとそれに続けて別の回線が繋がったようだった。一瞬

ノイズが走る。

『あー…… 今のはM・Sの支部から来たやつだ。』

この声…… 確か管理者の人か。

その人はそのまま話を続ける。

『それで慌てて船内の方に繋げたんだが…… ここは例の現場に近いドッグだからな。準備した方が良くないじゃないか？』

そこまで言葉を述べるとその人は回線を切ったのかももう一度ノイズが部屋を走った。

…… それにしても軽度の警備レベルってどうしたんだ？

「ノア君、ファイリン。今のは一応聞いてたな？」

一連の流れをそうして整理しようとしていると後ろから声を掛けられる。バーンズさんだ。

「一応と言うか軽く把握までは出来ましたけど…… 何があったんです？」

「そうよ、お呼ばれなのは分かったけれど肝心の理由が無いじゃないの。」

僕が事について尋ねようとするとファイリンさんも合わせてバーンズさんに問いを投げた。

確かにファイリンさんの言う通りどうしてなのかの理由が無いな。一体何なんだろう……

「いや、今回ののは普段のと比べれば大したことじゃないさ。これを見てみる。」

そう言うとはーンズさんは特に焦るような顔一つも浮かべずに何かを表示させた端末を僕とフィリンさんの前に差し出して来た。僕はそれを良く見てみる。

「格納庫からの器具及び機材関係の運搬に応じて軽度の警備レベルを要す為、予備部隊の現場への急行……運搬？」

その中でも理由になりそうなものを見つけて更に聞いてみる。もつとも、この時に僕がバーンズさんに聞いた言葉は運搬についてだったけど。

僕がそう言葉を漏らすとはーンズさんはまた急ぐ素振りも無く話を続けた。

「ん、そうだ。この間の戦闘で艦内の対空兵器の使用率が驚異的に跳ね上がったのが主な原因……だと俺は推測するがそれに対しての大規模な補給、基本的には弾薬であつたり部品であつたりを艦内の各持ち場に補給しようとしているらしい。」

対空兵器……この船で僕も使つた対空用機銃と同じ部類のやつか。僕は頭の中にある機銃の姿形を思い起こした。

確かに、あれをベースに考えてみると実際に使つてみた感覚として弾の速度には特に問題は感じなかつたけれど弾薬数はそれなりに早く消費するのが印象的だったかな。

……まあ本来なら機銃のある部屋のすぐ近くにも備蓄用の部屋があるだろうから問題にはなりにくいことだと思ふけど。

「それで簡易的にでも大掛かりなことをする兼ね合いで警備が必要になったわけだ。一応、弾薬類を多く運び出す訳だからな。」

「…なるほど、そう言うことね。」

僕が返事を返そうとするとフィリンさんの方が先に口を開いた。

とにかく、理由としては補給品の運搬の警護？みたいなものをするみたいだ。バーンズさんの様子を見る限りそれ程大変じゃない仕事のように感じる。

普段する仕事と言えばかなりの頻度で鎮圧作業があるからね…：：：そう言うのと比べれば断然なんだろうな。

「まあ、急ぐことには変わりはないんだがな。2人とも準備が出来たら甲板の方まで降りて来てくれ。俺は先に行っておく。」

「分かりました。準備ができ次第に直ぐに降ります。」

「よし、それなりに急ぐんだぞ。」

そう言い残すとバーンズさんは昇降機に乗り込んで行った。

「結局、掃除できなかつたわね。」

隣に立つフィリンさんが口を開く。確かにこれが無ければ今頃は掃除も終わって…：：：なんて思ったりする。

でも、話を聞く限りだといつかはしなないといけないことだったみたいだし仕方が無い
か。それに仕事だしね、これが。

「今日はしっかりと眠れるかと思つたんですけどね……今日のところは別の策を講
じてみますよ。」

「そうした方が良いわね。だって今日の朝の貴方、酷い顔だったもの。」

「は、はあ。」

埃が酷いのなら口と鼻を何かで保護したりとかか……。辺りを見て警備を続けなが
らもそんなことを考えてみせる。

そういえばこここのところ大きめのコンテナが1つ来たくらいで大きい物品は通つて
いない印象だな。かなり小さい物、弾薬なのかは定かではないけどそういう大きさの物
を荷台に詰め込んだのが数台通つていくだけだ。

こんな調子だと運搬中に襲われるなんてことは無さそうな気もするけど……。万が一
のことだからやるしかか。

「明日も仕事があるんだから今日みたいだと大変よ？今回は軽い仕事だったから良
かつたけど……。」

そうして話をしていると突然フイリンさんの言葉が止まる。

何だと思つた僕は直ぐに辺りを見回してみるとそこには作業着の男の人が居た。

「通行？」

そうフィリンさんが言うとその人は聞き取れない声の大きき返事をしながら会釈をした。どうやらここの作業員の人みたいだ。

「じゃあ、識別カード貰えるかしら。確認が必要なのよ。」

続けて聞くともう一度頷いて、それからポケットを探ると識別カードを手に取って差し出した。フィリンさんはそれを受け取って確認をし始める……まあ、確認と言っても小型のカードリーダーでの確認と番号の照合だけなんだけど。

それから少しして確認が終わったのかカードリーダーから電子音が鳴る。確認が終わったみたいだ。

「……問題無し。通って良いわ、ほら。」

カードを男の人へ向けて返却をしながら通用ゲートのバーを片手で上げる。そうすると男の人はゲートを潜ってさっさと歩いて行ってしまった。

「M・Sの僕らよりも中の方が忙しそうですね……」

男の人の急ぐ様を見て僕はそう呟いた。

以前、と言ってもかなり前のことだけれどM・Sに配属が決まった時にM・S以外の役職の方が良い……なんて言っただけで他の役職にもそれぞれ忙しいものがあるから大して変わらないのかもしれないな。

「多分だけど中身の仕分けて手間取ってるんでしょうね。この艦以外にも言えることだけれど格納庫なんて滅多なことが無いと使わない場所だもの、検品に手間取ってるんですよ。」

そう言うとフィリンさんは体の体勢を元に戻した。

滅多に使わない場所、恐らくは500年前の頃にはかなり活発に動いていたんだろうな。交戦が多いってことは補給にも余念がないだろうし。

「……まあ、その時代の人間じゃない僕が言ったところで何にもならないんだけど。」

「……はあ、後数時間頑張らないとな。」

近くにある時計を見てそう呟いた。

E—48 「観察」

「……」

気になって通つて来た道を振り返る。…… どうやらばれてはいないみたいだな。

ともかく、一瞬の山場を越えることが出来た俺はやけにうるさい自分の心音を落着かせせる為に物陰に移った。

「…… ね、練習も無しに本番は冗談がきついで。」

誰も居ないことを確認してから胸に深く息を吸い込むと安心感から言葉が漏れる。

本来なら別の奴が向かう予定だったんだが本来の^{アーキエスの任務}仕事が不規則に入った所為でなし崩しの俺がか。まだ満足に休めてないってのに……

「…… 取りあえず早々に目的を済ませて帰った方が良さそうだ。あの入り口に居た M・S のキャスト、関わつたら怖そうだからな。」

そうして気持ちに余裕が出来始めて来た俺はズボンに付いている大きめのポケットに手を入れてある物を握る。そう、事前に用意しておいた撮影器具だ。

別に持っている端末の機能で撮影は出来るがこれにデータを入れると自動的に共有化されることがあるからな。行動を察知されるくらいならこの手間も大したものじゃ

ない。教育を施されるなんてもつてのほかだ。

「()を… こうだよな。」

ポケットから取り出した細かいパーツを手短に組み上げていく。特に難しい構成でもないからな、練習も要らない。

それで少しして器具を組み立てることが出来た俺はそれを右の耳にかけるようにして取り付けた。

「照準を目の焦点位置に合わせるようにして、見えないけどこの位置か。よし。」

ようやく撮影器具の取り付けを終わらせられた俺は最初に入った物陰からようやくと出た。勿論、両方向からの人の流れも同時に確認済みだ。

「それにしても噂は聞いてたが… ぼろぼつかりだな。良くもまあこんなところから宝探ししようと思つたもんだ。」

通路を進みながら横脇に無造作に置かれてシートを上から被せられた物を物色して行く。取りあえず今の所は中型の固定兵器用の交換パーツか弾薬ぐらいいしか見えてないが…

「ん？おい！何処の所属の奴か知らんが確認作業を手伝って貰えないか？」

自分の方に声が聞こえてきて一瞬にして心臓が跳ね上がる。ばれて… はいないのか？

……
だとしたら平静をか。ここで早速駄目にしたもんなら無駄どころじゃないからな。

そうして言葉を頭の中で並べることが出来た俺は返事を少し遅れて返した。

「あ、はい。今行きますから。」

少し小さい声でそれに声を返した俺は迷いが無いように声のした方へ向かう。

その途中でいくらかの整備員の奴の傍を通ったが……特に見られはしないな。どうせ気になりもしないんだろ。

そうして道なりに歩いて行くと数人に囲まれている大きなシートに覆われた物のある場所に辿り着いた。

「……見たことない顔だな。新人か？」

特に疑うような感じじやなく興味本位で聞いてきたような声色で男が聞いてくる。俺は無難に答えを返した。

「はい、数週間前に教育を終えて。」

「にしては……まあ良いか、取りあえず掛かるぞ。シートの手端を持ってくれ。」

言われた俺は周りに合わせるようにして近くにあったシートの手端を掴む……手触りが随分と埃っぽいな。

「二気に行くぞ……せいの、ん！」

気になる手触りを気にしている内に声を掛けて来た男が掛け声をかけた。俺はさすがに出遅れながらも掴んでいたシートを持ち上げる。

「よし、反対側はそのままこっちの方に持って来てくれ。」

そう声が掛かると自分の前の方に居た4・5人程の男がシートを掴んだまま移動してくる。

そろそろ中にある物が見えるんじゃないのか？ そう思った俺は段々と見え始めてくるシートの内側に視線を向けた。

「よし……これで全部だな。それぞれ自分の近くにあるハッチを開けて確認しろよ、余った奴は別の方の手伝ってやれ！」

そうしてシートが剥かれると俺の視線が物のある場所に真つすぐ通る。その時には男の言っていることなんてどうでも良かった。

「いっつ……」

少し驚いて口から反射的に言葉が出る。すると俺が口に出すまでも無く隣に居る男がその名前を出した。

「……いつ？ このA.I.S.がどうかしたか？」

「……いや、珍しいと思って、何でも。」

「？ 変な奴だな。」

俺は、ともかく状況を整理して……それから腕の方に取り付けていたスイッチを入れて撮影のシャッターを切った。

「……なるほどな。ぼろばかりだと思っていたが、思い過ぎだったか。」

既に確認の終わっている大きなシートに覆われていた物、A I Sに手を置いて口を叩く。

良くて軽機関銃、悪くて弾薬と言ったように当初の内には考えていたがこんな掘り出し物があるなんてな。かなりの間この艦に居たが……聞いたことも無いぞ。

「第4世代の……初期型……道理で。」

手を最初に置いた位置から指先を走らせて行つてシリアルコードを見つける。

第4世代……の初期型は数十年前の代物だが性能で言えば現行でアークスが使っているのほとんど変わらないものだ。唯一違うと言えば装甲の厚みが少し薄いか……、こじつけか。

「ともかくもう少し観察が必要だな。他の連中もこれぐらいは既に見つけているだろうし。」

そう考えた俺はA I Sがメインで格納されているエリアから離れることにした。長居をしても危険度が高まるだけだしな。

そこで俺は元来た道で見えていない場所に重きを置いて見る為に通路へ向かった。

「：：少し奥に入るだけで静かなんだな。やっぱりA I Sか。」

聞かれてない程度の大きさを独り言を言いながら道なりに進んでいく。確かに、あつちの方に集中している所為でこの辺りのがカモフラージュの為に置かれていると言われてもおかしくないくらいだ。…… そうだと困るんだけどさ。

しかし古いぼろぼろばかりだな。取って置くだけ無駄だが分かりきっているが、それだけコスト面で厳しいのは周知の所か。弾が錆びていないと良いけど。

「ちよつと確認してみるか。」

そう言つて俺は小さい箱にかけられていたシートを一瞬だけめくつて次々に確認して行く。さっきので大体分かったが整備員の連中には適当にはぐらかせば通じるみだいな、それなりに大きく動いても問題無いだろうよ。

「：： やっぱりまともなのが無いか。軽機関銃くらいは使えるか？」

試しに1つめくつてみると軽機関銃のLの頭文字が見え隠れする。隣には特殊弾のウィークバレットのケースが置いてあった。

まあ、使えることには使えるけどな……… 撮影だけしておこう。

「もうじき終わりですかね？物の通りも少なくなってきましたし。」

「そうかもしれないわね。今日だけでなくて明日も続くんだもの、分担なら丁度良い時間だわ。」

そう言うとき、フィリンさんは首で時計のある方を指した。見てみるとかなり時間が経っているのが分かる。

「中の人もほとんど出たみたいですし、僕らもうじきですか。」

僕が聞いてみるとフィリンさんは端末を取り出して何かを確認してから言葉が続けた。多分、これが始まる前に貰っていたデータを確認したんだろうな。

「……ん、後10分くらいよ。そろそろ戻る準備もした方が良いかもね。」

するとフィリンさんは通用ゲートの辺りを片付け始めた。僕も追う形で作業を始める。

「ゲートのバーはこれで良いんですかね？」

「広げた時と同じで良いのよ、ほら。」

「は、はあ……」

手で僕の持っていたバーを掴むと一段だけやって見せてくれた。……それにしてもこういう作業はフィリンさんは得意なんだよな。そういう所は少しだけ羨ましいな。

…ともかく、それから片付けを進めていると予定されていた定時時刻になつていた。さつきまで明るかつた天板が暗くなり始めている。

「定時ね。ゲート、閉じるわよ。」

合図を聞いた僕は元居た通用ゲートの傍から離れた。ここだと扉に巻き込まれるしな。

そうしてフィリンさんが僕が離れて安全が確認できたところで扉の電源を入れた。同時に大きく駆動音が響く。

1、2、3…全部閉まつたみたいだな。

「…良いわね。戻りましょうか。」

「そうですね、バーンズさんも戻つてるでしょうし。」

「何も無かつたのが幸いね。明日もこうだと良いのだけれど。」

そんなことを話しながらコンベアの方に歩いて行く。ここからはそこまで距離は無いけどずっと立つたままだつたからね、ちよつと使わせてもらうよ…

「…それにしても、また交戦するんでしょうかね。」

道なりに歩きながらフィリンさんに聞いてみる。こういうこともフィリンさんの方が経験があるからね。

「まだフェルノートの詳しい状況が分からない所為で詳しいことは分からない

わ…… だけど、何かしら余波がある筈だわ。」

「余波ですか……」

「途中ですれ違った応援部隊も戻ってきていないって所で状況もね。1人くらい戻れば詳しい検証が出来るような物だけれど、無理かしらね？」

フィリンさんは冗談交じりに肩をすくめながらそう言う。確かに発生源の中心に近かった人物なら詳しいことが分かりそうだけれど…… 駄目なんだよな。

僕達がこの艦シークマーカに来てからそれなりに経ったけれど同時期にすれ違いになった応援部隊、まだ戻ってきてはいないみたいだしね。時々端末でそういう情報を見たりしたけど……

「……とにかく、今は出来ることを最優先にするべきね。後に起こることなんて分からないもの。」

「そうですね……」

コンベアに乗り込みながら返事を返すとそこからは会話は無かった。疲れているのもあったけれど…… 先が分からないのをどうしようもなく考えたりね。

E—49 「終業」

「えっと、ここの人数はこうだろ。こっちの方は4人足して……」

1つ1つ口に出して確認をしながらコンソールにデータを打ち込んでいく。

仕事終わり目の最後の仕事、面倒だけどしつかりやらないとな。少しでも誤字があると直ぐにああだからうちの上は……

そうして考え事をしながら作業を続けていると部屋の扉が開く音が突然聞こえて来た。

「……お、今日の仕事はもう終わったのか。」

気になって横目で扉の方を見てみると、そこには見慣れた顔があった。

それに気が付いて反射的に挨拶を掛ける……見てくれたと相当疲れているのか？

「俺が帰ってきたんだからそうに決まってるだろ、分かってくれよ。」

顔に疲れがあるような状態で返事を返して来る。

そこまで違いの無い近くの持ち場だったから忙しさは同じだと思ったんだが、どうやら様子を見る限りでは違うみたいだ。

「悪い悪い……かなり大変だったのか？」

「それはもう、言葉にできないもんだな……よっと。」

話しながら奴は部屋を進むとある程度進んだところにある椅子の前で止まって、それからゆっくりとその椅子に深く腰を沈めた。それと同時に大きな溜息が聞こえた。相当やられてたみたいだな。

「……まあ、お前の方はただ単純に突っ立ってるだけで終わりだったろ？」

「端的に言えばそうなるけどよ。なんだ、その様子だとそっちで何かあったのか。」

「それはもう酷かったぜ。何だか格納庫の方で人手が足りないとかでよ、M・Sの無関係な俺まで手伝わされたんだぞ？」

「関係のない仕事……荷物運びでも何かか？」

今日担当を回された仕事の内容だとそう言ったのは無かったはずなんだが、突発的な物か。

追加で細々としたことをやらされるのは大して珍しいことでもないからな。

「確かに程度で言えば似たような物だけどよ……荷物運びなら少しは良かったかもな。」

「？」

そうして言われたことについて、荷物運びよりも面倒なことについて考えようとしているとそれをするまでも無く奴は端末を差し出して来た。落ち着いてその画面を覗き込む。

「これは……」

「な？荷物運びではないだろうよ。全く。」

息を捻りだすように口からそう言葉を漏らすと端末を近くのテーブルの上に雑に放った。

なるほど、原因はあれだった訳だな。画面を一度見ただけでそう飲み込めた。

「A I Sなんてあそこの格納庫にあったんだな。普段の仕事の時には全く分からなかったって言うのに、しかも第4世代だろ？」

「良く分かったな……まあ、確かに第4世代のA I Sだよこいつは。」
A I S、それが画面には映り込んでいた。

まあ、ここの格納庫で見るのはほとんど無いくらいだから驚きもするんだけどさ。

「それで、これを運び出すなんて事じゃないだろ？何をやったんだ？」

そう言うのと少し考えた後で言葉が返ってくる。

「まあ、簡単に言えばこれの整備と各部分の確認だな。整備員の奴ら、マニュアルのデータをひとつ投げただけでかなり無理に俺のことを使いやがって。」

「なるほどな……それにしても良く出来たな。」

どうやら奴は整備員に混じってこのタイプのA I Sの整備をやらされていたみたいだ。道理で疲れる訳だな。

おまけにその整備対象は数十年前に製造された少し古い型のやつで更に厄介だろうし、こっちはM・Sで整備がメインじゃないからな。

「一応、分からないところはすぐに聞けたからな。完全に不親切とまではか。」

「そうか……」

「まあ、だからと言って二度とやりたくはないがな。こういうことは専門の奴がやることで知識も無い人間にやらせるくらいなら時間を掛けてでもやるべきだと思うぞ。」

奴はそこまで話を続けると携行食のパックを手に取って、それから吸い始めると少ししてからこつちと同じ作業をし始めました。仕事の後の報告の文章の作成だな。

それからはお互いに特に話すこともなく静かに、順調に作業が進んでいく……と数分前まで思っていたがそうは上手くいかなかった。

それは自分がある場所のデータを参照していた時のことだった。

「…… ん？ここだけ数がおかしいな。」

さつきまでから続けて同じデータを作成していた部分の周辺でデータがおかしいことに気が付く。

このデータは格納庫内への通行人数と事前申請の数を隣り合わせている物なんだが…… どうにも数が合わない。

「なあ、これってどう思う？」

気になった俺は同じく作業中の奴に声を掛けてみて聞いてみることにした。こういう時には意見交換した方が早いからな。

「どうしたんだ？」

「取りあえず見てみてくれよ。ここのデータなんだが……」

コンソールを操作して例のデータの位置にカーソルを持っていく……。確かにここがおかしいな。

「通行人数と事前申請者数の数のデータか。確かにかなりの人数がずれてるな。」

「そうだろ？今までこういうことが無い所為で良く分からないが……。連絡した方が良いのか？」

そう言いながら自分の制服のポケットから端末を取り出そうとして手を入れる。すると奴は静止するようにして片手を出して来た。

「いや、今の事態を考えると事前申請無しで人数が追加されたって言う見方も出来なくは無いです。今みたいにM・Sとかの関係のないやつまで手伝わされるんだからな。」

「確かにそうかもしれないけど……。それにしても多くないか？」

奴の意見ももつともだけど、実際にその数を見直して見ると1.5倍ぐらいの人数のずれがあるように見える。だけどまあ、非常時だと考えればか……。難しいな。

「上に連絡を掛けるとなると事態が更に難しくなるし戻る時間もな。ここはそう言うことだと思つた方が良さそうだな。」

「そうか？」

「ああ、実際にでも何かしらの被害が出てる訳でもないからな。事態の発生報告は格納庫周辺、内部でも一回も無かつただろ？」

「うーん……」

それから数分程度話し合いを続けて、それで決まつたことをそのまま実行に移すことにした。

その内容は勿論緊急で人員が急いで追加されたという判断だ。

そうするとまあ、それなりに綺麗に収まるからな、結局は奴の意見通りにすることにした。今日の所は早く自室に戻りたいしな。

「……よし、これで作成は終わりだな。そっちの方も出来たか？」

コンソール越しに声を掛ける。

「ああ、少し前に終わったよ。」

「じゃあもう終わりにしても良い頃合いだな。そろそろ出るとするか。」

そうして席から立ち上がると人差し指でコンソールの電源を落として、それから荷物を肩で抱えるとそのまま部屋を出た。

今日のところは早々に帰って休もう。明日も同じく格納庫は忙しくなるからな……

「あ、バーンズさん。丁度そつちの方も終わったところなんですネ。」
前に見えた見覚えのある人影を見つけて声を掛ける。

「なんだノア君か。それにフィリンも。」

「片付けが済んだのでコンベアで丁度戻ってきたところなんですよ。」

ドッグの入り口を通りながら話を続ける。どうやらバーンズさんとタイミングが良く合ったみたいだ。

「ノア君の方も今日は特に何も無かったか？」

そう聞かれて今日あったことを少し思い返してみる…… 特に何も無かったか。

「特に何も…… 普通でしたかね？」

「そうか、なら良いんだが。」

「何かあつたんです？」

「いや、今日のようなのは初めてだと思つてな。何か困つたことがあつたかと聞いてみただけさ。」

「今回はそんなに：： 通行の少ない出入り口でしたからそうでもありませんでしたよ。」

確かあの通用ゲートだと大きな積み荷が4、5台と人がまばらに6人くらいだったしな。

「まあ、それなら良いんだ。取り敢えず今日はこれで仕事の方は終わりだな。」

バーンズさんは船に繋がる昇降機のスイッチを点けながら話を続ける。

「ちなみに、明日も今日と同じ同時刻で良いのかしら？」

後ろからフアリンさんの通りの良い声が聞こえてくる。

話の限りだと数日間ですることとで連続する仕事とは聞いてはいるけど。

「そうだな：：： 今日より3時間早くに現地に向かうように指示は出てる。なるべく早めに起きた方が良いな。」

昇降機に乗り込んでから端末を取り出して確認をするとバーンズさんがそう言う。

「二応、頭に入れておきます。」

疲れで少しはつきりしない頭で返事を返す。だとしたら明日の朝は少し早めの方が良さそうだな。

そうして話を続けているうちに昇降機は船内に入り込んでいた。

E—50 「函面」

「ノア君。報告書の方はどうだ？」

「後少しの所ですかね。最後にもう一度確認して大丈夫ならもう直ぐですよ。」

仕切り越しにノア君に声を掛けると少し疲れたような声色で言葉が来る。

まあ、こういう仕事は慣れても疲れが来るものだからな。その後に報告書を作るという形式作業も残っているんだから辛抱堪らないことだ。

「フィリンの方も、それが終わったら後は自由にしてくれて構わないからな。」

「大丈夫よ、自由時間が出来てもすることなんて無いんだから。その分綿密に書き込んでやるわ。」

そう言うときフィリンはコンソールの方に再び意識を戻したようだった。

それくらいしてやって上の方も少しは内部の細かいシステムを改善してくれれば……いや、ある訳ないか。

「……ふう。」

そうして自分自身の方の作業を進めているといつの間にか報告書の方は片付いていた。無為意識にと言うか慣れと言うか出来るようになるもんだな。

…ともかく、一応の確認の為にもう一度文面に目を通す。

上の段から、ここは普段通りだな。次の段からは今回の仕事の扱いでイレギュラーの文章が続く。普段やっている仕事は基本的に鎮圧や仲裁が主で既に起こっていることに対しての対処だからな。報告の内容もそれに合わせて変更が加わる。

その中でも特に上げられるべきなのは事前に報告されている通過予定の積み荷と今日通過した積み荷の数の照らし合わせか。この部分が合わないと発覚した後にお叱りが来るのは一番下だからな。気が抜けやしない。

「…」

それにしても、やっぱりあの大きさの積み荷の正体はこれだった訳か。

文面を読むために滑らせている目がある文章の項目の場所で止まる。例の積み荷の確認部分だ。…AIS、やっぱり使うつもりなんだな。

確かに、その部分を読み返して見るとやはりAIS／GR4－FTの表記がある。データとしてキーボードで打ち込んでいた時には無意識で半ば飛ばしていたがやっぱりそうか。

FTを含む型番、初期型のことなんだがシークマーカーこの艦の格納庫にはその型の物がかなりの数配備されているのが数字から分かる。一応、仕事の日数分の予定通過物の数のデータがあるからな、比べて見るのにはさほど掛からない。

「… やつぱり、あの第3世代を曲がりかなりにも使える部分だけを微量に流用してテストベッドにしたっていいのか？」

その言葉が思考に入り込んだ瞬間、フラッシュバック的に関係のあることが次々と思いつきだされていく。そう、あれはここにあったんだからな。

A I Sの第3世代、実用レベルには到底無いようならくでもない代物だが… 標準装備の機動性能とエネルギー消費量軽減機能の点で考えられるのなら話は別だ。50年前に作られた初期の第1世代、その後で作られた第2世代の双方の長所をそのままに精度を底上げしてある訳だからな。考えてみれば考える程技術屋からすればこれほどまでに適材は無いただろうさ。

「バーンズさん、僕の方の報告書転送しておきますね。後でフィリンさんのと合わせておいて下さい。」

「ん、分かった。後は自由にしてくれ。」

「じゃあ、先に戻りますね。」

「しつかり休んでおくんだぞ。今日と同じのがしばらくは続くんだからな。」

「分かっていますよ、それじゃ。」

「……………」

「……………」だが、そんなことは今どうでも良い。本当に大事なことはあのA I Sがまだあ

るかどうかだ。それがここだろうと違う場所だろうとあいつとの、イレノアとの最大で唯一と言えるかもしれない接点なんだからな。

「う……掃除しないと、やっぱり駄目だな。」

軽く咳込みながらもベッドから起き上がると何とも言えない不快感が襲ってくる。結局、昨日はあの後疲れている所為で掃除もせずに寝ちやつたからな。今日こそはやっておかないとこれから酷いぞ……

「……そろそろ起きないとな。」

軋むように痛い体の首を動かして時計のある方へ向けると時間に余裕が無いことが分かる。まあ、現場の格納庫の方に行く時間はまだ先なんだけどそれまでの間の昼までの時間は普段の仕事……つまり待機をしないとイケないからね。こうして寝ているわけにはいかない。

ともかく、そう言うことだと頭に認識させると最初の内は体が動かかなかつたけれど段々と動き始める。仕事だと分かれば無理矢理にでも気だるい体を動かせるからね。

「あんまり埃を立てないようにしてベッドから出るように……よ、よし。」

そうこうしているとベッドから出ることが出来た。時間もそれなりにか。

支度をしても少しだけ時間があるし……その間に携行食でも啜っておこう。

そう考えた時には既に体は動き始めていた。気が付くと既に手は扉のスイッチに行っている。

「取りあえず支度をしないと……」

顔を洗って歯をゆすいで服を直して、これからすることを頭の中に並べながらも僕は扉のスイッチを入れた。低めの音を立てながらゆっくりと扉が滑る。

「……あつー！」

「？」

それから開いた扉をくぐって通路に出……ようとした時だった。死角の方から歩いてきていた誰かとぶつかってしまう。

「み、ミイーンさんじゃないですか。大丈夫ですか？」

「そちらこそ、大丈夫ですか？」

当たってしまったのはミイーンさんだった。最近は自分の方が忙しいのとミイーンさんの方側もあまり動けない状態だったから話をするのが少なかつたけれど……良かった、調子は悪くなさそうだな。

「いや、僕の方は……ちよつと寝起きで体を痛めただけですよ。大丈夫です。」

「そう、ですか……」

冗談交じりに大丈夫だと言葉を返す。ミイーンさんはかなり心配する節があるからね、なるべくそうならないようにしないと……まあ、僕の方は生身だから壁にぶつかった感覚で少し痛かったけど言うほどでもないしね。

「じゃあ、ミイーンさんも味満たしが居るようだったら呼んでくださいね。携行食は人数分ありますから。」

「分かりました……頑張って、下さいね。」

「ミイーンさんも体調に気を付けて、それじゃ。」

そうして挨拶をしてから僕は洗面台の方に向かった。

「おい、準備の方はどうなんだ？」

休憩室から足早に飛び出た俺は奴に声を掛ける。

「かなりのペースで事が進んでるが……まあ、何処もああいう情報を手に入れて来れば躍起になる訳だが。」

「あれだろ？そら躍起にもなるさ。見せて貰えるか？」

そうやって俺は準備が進んでいる作戦予定を見る為に奴の方にあるモニターに目を向けた。

「良いぞ。後数時間で動くところだからどの道見て貰う所だったぜ、ほら。」

「どれ……」

モニターの方まで近づくと次は地図の方を詳細に見てみる。ちなみにこれは俺が持ち帰った……だけでなく他の同時に動いていたうちとは違う人間が集めて来たデータをもとにマップピングしたデータだ。この艦のローカルネットワークから持って来た格納庫の図面に物の位置が細かく出ている。

ちなみに俺が発見したA I Sの保管場所だが、他にもまだ2つほどあったらしい。あの場所だけでも相当な機体数が確保してあったがこんな辺境のアークスシップにどうしてここまでの数が、それも初期型の第4世代なんて……今は考えても仕方が無いか。

ともかく俺達の目的はそんなどうでも良い謎の解明なんかじゃなく格納庫から物を出来る限り奪取することだ。それもなるべく穏便にだ。ここではまだ事を大きくしたくないって言うのが総意だからな。

「なるほどな。完成はしてるのか？」

「後少しのところだな。別の場所の奴らとの話し合いが終われば良いかね。」

「じゃあ、完成したら俺の方に送っておいてくれ。少し考えるからさ。」

「分かったよ、なるべく早めに話が終わるようにやってみる。また後でな。」

「ああ。」

そうやって俺は部屋を後にした。まだ朝の飯も食べてないからな、吐き出さない程度に食べてくるか。

「ん？なんだもう起きてたのか。」

そうして部屋を出て待機室の前の通路に差し掛かった時にタイミング良く奴が出て来た。

「貴方が起きるのが早いだけよ……ん。」

「今日は忙しくなるからな。早めに意識戻しとけよ。俺は上の食堂の方に行ってくるからな。」

「食堂？」

「激しく動いても吐かない程度にだけどな、じゃあな。」

「待ってよ！……直ぐ準備するから私も行くよ。」

「……分かったよ。」

振り切つて一人で食堂の方に、と思つたが変なところで足を止められてしまった。こうなると無視した時が酷いからな……仕方が無い。

それから俺は少しの間扉の前で待つ羽目になった。

E—5 1 「F—4」

「ノア? どうしたの?」

「あ、いやその、ごみが服から取れなくて……」

「はあ…… 何処に?」

「すみません、ここなんですけど……」

僕はそう言いながら背中をフィリンさんに向けて手を後ろに回してから指でその場所を指す。後少しで取れそうなのに肩が硬いからな……

「これ? 今取ったわよ。」

フィリンさんがそう言うとは何かさつきまでの不快感が嘘のように消えた。大したものじゃないはずなんだけど…… どうしてこんなに? 不思議に思った僕は直ぐに元の通りの位置に向き直る。

「ああ、これだったんですね。ありがとうございます。」

「別に良いのよ。それよりもほら、早く行くわよ。」

そう手をコンベアの方に指しながら言うときフィリンさんはゆっくりとそれに向かって歩いて行く。僕もそれに遅れないように取って貰ったごみ、もとい埃の塊を近くのご

み箱に放つてから後を追った。

「あ、今日はもう停まつてるのか。珍しいこともあるんだな。」

最寄りの中継地点に辿り着くと既にコンベアが着いていたようでフィリンさんは既
に乗り込んでいた。いつもは待つばかりで直ぐに乗れるなんて無かったからね。

「ほら、もう動くから座りなさい。」

ともかく、呼ばれた僕は近くの方のシートに腰を掛けて急いで乗り込んだ。まもなく
すると何事も無くコンベアが動き始める。

・・・ 何だかフェルノートよりも設備の維持管理が行き届いているようにも感じるな。
シークマーカーのコンベアは異音もせず速度にもばらつきが無い。同型に近い艦同
士でもここまで変わるもんなんだな。

「・・・ ふう。とにかく、確認しておこう。」

そうして目的地、Fの4番格納庫方面に到着するまでの間時間の出来た僕は今日の仕
事が必要になるデータを確認する為に端末をポケットから取り出した。

本当なら朝の支度が終わった段階で確認しようと思っていたんだけど思っていたよ
りも時間が掛かって・・・ まあ、服に付いた埃が何よりも証拠なんだけど軽く掃除を
しようとしたらこの有様だよ。唯一の利点として今日はゆっくりとしつかりと寝られ
るのが救いなのかな。

… 取り敢えず過ぎてしまったことは別に良いんだ。今は仕事が最優先だし、こっちの方に集中しないとね。

「……」

とにかく気持ちを切り替えることがそれなりに出来た僕は朝方にバーンズさんから送られて来たデータファイルを端末の画面上で展開する。5秒程そのまま待っているとそれが終わったのか別のウィンドウが画面上に表示された。

「今日も昨日とあんまり変わらない……いや、少し違うな。」

上から順にそのウィンドウに表示されたデータを流すように見ていくと最初の内は無意識で見っていた所為で気が付かなかったけれど微妙にデータの数値が変わっていることに気が付いた。

多分だけど何回かに分けて運び出す兼ね合いなのか昨日の時点で運び出す積み荷の量が少なかった格納庫の方が僕らの担当の場所よりも多くなっているしね、そういうことなんだと思う。

「フィリンさん。」

「ん……どうかした？」

「今日のはあんまり忙しくないみたいですね、データ見ましたけど。」

「確かに、今日はそうかもしれないわね……ただ、それで気を抜かないようにし

てよ。」

「大丈夫ですよ、少しは見通しが付いている方が良いと思って。それだけですよ。」

「なら良いけど…… もうすぐ着くわよ。」

そう聞いた僕はコンベアから目的地の方を軽く見てみると確かに少し行つた先に目的地があるのが確認できた。それを知つた僕は端末を急いで制服のポケットの方にしまい込む。

…… それにしても、後少しデータ見られると思つていただけで意外とドッグから格納庫までは遠くないみたいだな。下りた後にでも続きを見ておかないと、まだ6割読めたかどうかなんだから。

「…… よし、着いたぞ。」

変な様に見られてはいないかどうか目だけを軽く動かして辺りを観察する。…… 問題なさそうだな。

そうして安全を確認できた俺は首にある通信機の電源を素早く入れた。

『おい、こっちの方は初期予定地点に着いたぞ。近くので他の奴は状況、どうだ。』

そう回線に通して言い放つと6〜7秒程度しばらくの沈黙があった後にノイズが鳴るとそれに添うように言葉が帰って来る。

『F側4番付近、こちらにも到着だ。今から合流の方をするから指示通りに待機。』

回線越しにその言葉を聞いた俺はその場から動き始める。ここに来る前に設定した合流地点に向かう為だ。

ゆつくりと確実に格納庫の方に近づいて行く。今回は前回と違って正面からは行かないからな。脇の方に少し逸れた道の外れ、目立たない位置に向かって進む。

既に明るい時間にはなっているが場所が場所だけに人通りはかなり少ない。この辺りには居住区じゃないのも要因なのか格納庫に用のある人間しか居ないように見える。M・Sもか。

「この姿の偽装なら前回と変わらず問題はか……ん。」

合流地点の方に到着してから1分程そこで待っていると自分と同じくらいの男が近づいてくる気配がした。恐らく他の場所の奴だ。

しばらくして気配だけでなく近づいてくると合図の右腕の手首を叩く動作が自分の手に伝わって来る。それが分かった俺はそれに対して同じように返事を返した。

「……」

そのまま振り向いてもう一人の方の男と合流した俺は合流地点の場所にある格納庫

の非常用ハッチの方に近づいて行く。するとそこには普段は要る筈の警備の人間が居なかった。

…… 確かに、あいつが言っていたように普段は警備が付いているはずのこの場所に警備が居なく扉があるだけだった。

「おい、俺はこっちの方を。そっちの方を頼む。」

そう言つて俺はハッチを開けるために扉の右側に取り付く。同時にもう一人の方の男も俺と同じような動き方で扉の左側に取り付いた。

「行くぞ……」

手でハッチを少し開きながらそう呟く。そうして視線が届くぎりぎりにまで開いたのを確認してから格納庫の中の方を目視で確認する。

「……」

通路の突き当りの所為なのかここにも人は居ないよう形で視線の先には何も入らなかった。あるのは薄暗い通路だけで使うことも出来ないような代物が転がっている程度だ。

「よし、入るぞ。」

もう1人の方の男にそう声を掛けると俺に続くような形でハッチを通つていく。最後の最後まで周囲を確認して、それを終えてからハッチを元の通りに閉めた。

…さて、始めるか。

「…ん、問題ないわ。通って。」

そう言うとフィリンさんは識別カードをカードリーダーから取り出して作業員の人に返却をする。僕の方はそれに合わせてゲートのバーを手で引き上げた。

ほどなくして作業員の人は忙しそうにして中の方に入って行った。

「フィリンさん、今日はもうあの人で最後みたいですわね。」

ゲートバーを元の位置に戻しながらフィリンさんに声を掛けてみる。確か、端末で最後に確認した時には時間帯も合わせてそうだったような…

「ええ、そうね。多分あの人で最後よ。後は出る時にもう一度手続きすれば良いだけよ。」

そう言うとフィリンさんは近くにある簡易椅子に腰を下ろした。

「今日は荷物もほとんどないですから特別何かなければ大丈夫そうですね。」

「そういうこともあるのよ。要は有人の監視が必要だけだから。」

するとフィリンさんは手を上に向けて体を伸ばしているようだった。それなりに疲

れているんだろうな。

「よし、僕も椅子に……？」

そうして自分もフィリンさんと同じようにして椅子に座ろうとした時だった。格納庫の方の通路から何か物音が聞こえる。

「あれ……作業員の人かな。それにしてもあんな暗いところで何をしてるんだ？」

気になった僕は口よりも先に体の方が動いていた。ポールの下を潜り抜けてから音の聞こえる通路の方に進んでいく。

確かに通路にも色々置いてあるみたいだけど……どれも今回ので使いそうな気がしないな。バーンズさんが言っていたように対空兵器の関連の補給をする為にしているみたいだし。

「あの、何かありましたか？」

気になった僕は思い切つて作業員？の人に声を掛けてみることにした。聞いてみるのが一番早いしね。

そうして少し間を置くとその作業員の人と話し始めた。

「……いや、特に何もありませんよ。ここでの作業があつただけですから。」

「は、はあ……でも、ここでの作業は特に決まっていなみたいですよ？」

そう僕が言うとその人は一歩前に出て話を続けた。少し話すのが遠かったのかな？

「いや、それがです。急にここの仕事が増えちゃって……追記しておいてもらえます？」

「追記？なら、一応メモしておきますけど……」

そうして僕は端末をポケットから取り出そうとして視線を下の方に向けた。その時だった。

突然腹部の方に痛みを感じて視界が更に暗転する。

「……………？」

「……………」

目の前が何も見えない状況でも何かを話す声が聞こえる。でも、僕が話していたのは1人だけだったような……

そんなことを考えている内に僕は意識が保てなくなってきた、そのまま本当にその場で気絶してしまった。

E—52 「発見」

「……？」

椅子に腰を掛けて、それから少しして気配を感じないと思つて横を向いてみると既にそこには誰も居なくなつていた。

「ノア？」

まだ近くに居るだろうと思つて名前を呼んでみる……居ないみたいね。

「何も言わないで何処かに行くなんて職務放棄……じゃないと信じたいわ。」

座つていた椅子から立ち上がつてもう一度辺りを見回して見てもノアどころか人の気配すらしない。仕事を放棄して何処かに、なんて最初は考えに浮かんだけれどそうは見えなかつたもの。悩みも特に無さそうだったし。

「そうだ、連絡すれば直ぐに分かるじゃない。疲れてて頭が回らないわね……」

そう考えた私は腰のスリットのバックから端末を取り出して電源を入れた。

「ノアのコード……繋がると思つたけど。」

そうして回線の接続画面でノアのコードを選択すると断続的に電子音が鳴りながら通信が始まる。

そのままの状態です、6秒程度待つていると無事に向こうの端末と接続できたよう
電子音は鳴りやんだ。

「ねえノア、今何処に居るの?」

……返答が無い。

「聞こえてる?……聞こえてるわよね?」

気になった私は端末の画面に目を通してみる。そこにはしっかりと接続状態が安定
していることが表されていた。

「……まさかとは思うけど。」

普通に回線を繋げることが出来た……けれど、肝心な相手が出ないということは端
末の近くに持ち主が居ないということ。もしくは何かしら出れない状況にあるか。

とにかく何かの異常が起こっているかと仮定した私は通信の相手側からの発信源を特
定する為に自分のヘッドパーツの周波数を相手側、ノアの端末から出ている物に合わせ
た。

「ん……久しぶりにだけど問題ないみたいね。」

ノイズがヘッドパーツを介してなり始めると断続的に線を弾いたような音が断続的
にそのノイズに交じって響く。こうすると周波数の強度が強くなった時、要は近づいた
時に音の間隔が短く鳴るから探しやすいのよ。

「…… それにしてもこの間隔からするとそれほど離れてないみたいね。」

「方向的には、格納庫側？」

電子音を頼りに方向を突き止めた私は入り口の簡易警報装置をセットしてから通用ゲートのバーを手で上げて中の方に入って行った。

入り口には昨日にも立っていたけれど、中に入るのは今回が初めてね。フェルノートに居た時でさえも格納庫なんて一度も……

「…… それにしても薄暗いわね。」

しばらく通路を進んでいるとそんなことが口から漏れる。確かに入り口の方から時々奥の方は目に入ることがあったけれど、まさかここまで暗いなんて……

「はあ…… ライトの方が好きなのだけれど、この際仕方ないか。」

そうして私は眼球にある暗視装置の電源を入れた。視界がフィルターが掛かるようにして薄緑色に包まれる。

激しい光に滅法弱くなるからあまり使いたくないんだけど…… この際ね。

「ノア？居るの？」

音の反応を確かめながらも声を出して呼びかけを続ける。多分、ここまで反応が強くなるのならかなり近くに居るはずなのだけれど。

「……？」

そうしてしばらく歩いてみると通路の先に黒い塊が見えた。まだ暗視が慣れていない所為ではつきりとは見えないけど……

ともかく、確認をするために私は黒い塊に向かって近づいた。

「……なんだ、ただの箱じゃない。」

手でカバーをめくって確認してみると格納庫内の物品なのが分かった。と言うことはここが突き当りね。

「でも反応が、おかしいわね。」

けれど場所が場所だというのにも関わらずに周波数の反応は相も変わらずに突き当りの荷物の方を示している。この先には部屋が無い筈だから向こう側って言うのも…… どういうことなのかしら。

「まさか…… いやでも。」

あり得ないとは思うけれど、私は一応の確認の為に目の前の大きな箱のカバーを払いのけた。

…… 一度雑にこじ開けた後がある。

そこで何かがあると思った私はそこにあった箱を思い切り開けた。そこには。

「……………」

…… そこにはノアが押し込められていた。

「おい、あれで良かったのか？」

隣に居る男が声を掛けてくる。…あの途中に会った奴か。

「良いんだよ。直ぐにはお仲間のあのキャストの女も見つけられやしないだろ。」

「…なら良いが。」

こいつ、いきなり心配そうな声出しやがって。

「…はあ、ここからはお互い別々に動くんだからしつかりしてくれよ？俺とあんたで役割が違うんだから。」

「分かってるよ。」

こんなのが他の場所でも起きてると思うとやっぱりまだ組織としては…今気にすることでもないか。

そうしてしばらく通路を進んでいるといよいよ道が分かれることになったのか同行していた男とは別れることになった。

「お互い違う場所のだけど…頑張れよ。」

「ああ、出来るだけ上手くやるさ。」

…ここからは一人だな。

「……」

位置の確認の為に一度物陰に入ってから手を空に出して端末を表示させる。地図上で確認すると簡単に見えるが実際に現地に行くとき意外と分からなくなるもんだな。

指で地図を動かしながらマーキングされている位置を確認する。…道中で銃を拾ってから行ったほうが良さそうだ。

「軽機関銃の位置は、この間の所ので良いか。」

目的地を定めた俺は物陰から出て通路に戻る。機能の時点で見つけておいた少し古い軽機関銃と特殊ウィークバレットの場所はA I Sの保管場所に向かう道中にもあるからな。

それから俺は道なりにライトで所々照らしながら進んで行った。通路の程度によっては所々照明が完全に切れてて分かりづらいからな。気を抜くと足元の配線か細いパイプで躓いてひっくり返りそうだ。

「使う頻度の少ない場所は低コストで管理か。場所が場所だけに予防のよの字も見当たらねえな。…ん？」

そうして進んでいると光の先に見たことのある文字が見えた。軽機関銃の箱だ。

俺は簡単に辺りを確認して、それから箱の方に近づいた。どうやら昨日のままの状態

みたいだな。

「中の方は……問題なさそうだな。」

箱の蓋をロックを外してから取り除くと中には緩衝材に埋め込まれた銃があった。容器を縮める為に簡易的に分解してあるな。

それを手に取って本体に銃身を嵌めこむ形で銃を完全体にする。引き金もコッキングレバーにも問題は無い雰囲気か……ハンマーはしっかりと動いてるから大丈夫だよな？

「……まあ、使わない方が良くことだし仮で持ち歩いておけばいいか。」

取り敢えずで弾を最大の装弾数まで込めてそれを肩に背負うと残りの弾の方は腰のバックにしまい込んでその場から立ち上がった。少し重いくらいか。

「ん、後はA I Sの方にある車両にか……時間は余る方が良くからな。」

そのままの足で俺はA I Sのあった方に向かった。

「……あれ？」

「気が付いた？」

床に安静させて傷口を軽く拭いていると気が付いたのかノアは目を開けていた。

「軽い擦り傷程度で良かったわね。出血が多かったらあの箱が貴方の棺桶だったところよ。」

そう言つて私がノアの押し込められていた箱を指で指すと少し驚いた様子だった。

「まあ、そんなことは良いの。格納庫の方に入つてから一体何があったの？」

「えつと、物音がしてそれを確認する為に……それでそこに居た人に声を掛けたら、これですか。」

「……じゃあ、貴方が邪魔になるような人間が来たつてことね。動ける？」

少し立ち上がつてから手を差し出すと特に問題なくノアはしっかりとつかみ返して来た。怪我也そこまでじゃないみたい。

「大丈夫ですよ、ちよつと気絶したくらいですから。それよりも追わないと。」

「そのつもりよ。警報装置を入れて来たから私も行くわ。」

そうしてノアと合流出来た私は目星を付けて一緒に行動することにした。手分けして探したいところだけれど相手が相手ね。難しいわ。

「そう言えばライトはある？ 私持つてないの。」

「ああ、ありますよ。一応普段から持ち歩いてるんです。これで助かったこともありますから。」

そう言うのと彼はジャケットから小型のライトを取り出して通路を照らした。

「…… ノア、言い忘れてただけど少し消してもらえる？」

「どうしました？」

「暗視装置を入れたままなのよ…… 前が、前が見えないわ。」

「あ、その、すみません！」

慌てたようにノアが言うのとライトを切ってくれたのか視界が元の通りに安定した。全く、説明不足は致命的なことを引き起こすわね……

それから私は遅れて眼球の暗視機能を切った。視界から靄が取れたように明瞭になる。やっぱりこっちの方が良いわ。

「大丈夫。こっちが説明してなかったのがいけないもの。気にしないで。」

「は、はあ……」

「…… しばらく使いたくないわね。」

「？」

「何でもないわ……」

…… とにかく、ノアもライトも確保できた私は格納庫の中でも一番重要度の高い物が保管されている場所を目指して慎重に進んだ。

E—53 「座席」

「……お、ここにあつたか。」

暗がりの中で手探り状態になりながらもライトで照らしながら辺りを見回していると事前に目星を付けておいた車両を見つけることが出来た。ここの荷物を搬出する為に使っているやつらしい。

早速俺はその運転席の扉を覗き込む為に近づいてみる。

「特別何処かわつたようなところはないみたいだな……」

中を確認して見てみると目新しい物は特に無いようで他の車両にも多く見られるような普通の作りだった。

左ハンドルのオートマチックトランスミッションか……運転、下手だから少し助かるな。

「よし、後は鍵を弄つてやって……ん？」

そうしていいいよドアを開けるために窓下の方に手を伸ばして、それから開閉フラツプに指を試しに掛けた時だった。

「おいおい……鍵を開けたままなのか？」

特に指先に引つ掛かりを感じなかつた俺はそのままフラップを思い切り引いてみた。…… やつぱり開いてるな。

「酷いもんだな、ここまで悲惨だところちまで心配になって来るぞ。」

まあ、こつち側としたら都合が良いんだが…… 何ともな。

そのまま俺は車内に入ると運転席の方に腰を下ろして諸々の確認をし始める。やつぱりエンジンの方の鍵も解除したままか。

一応、まさかとは思いつつもメーターパネルの方を確認してみたがエンジンを掛けたままでは無いようだった。燃料の残量も6割程度か。流石にそこまでは雑にやっていないよな。

「これならすぐにもやれそうだな…… よし。」

そこで俺は状態の確認が終わったところで仲間の方に連絡を送る。一応サインは出しておいた方が動きが円滑になるからな。

連絡を送り終えると俺は助手席に置いた銃をもう一度取り直してから車内から出た。いよいよ肝心の積み荷の積み込みだ。

最初から大型の物を積み込むと荷台から落ちる可能性を考慮しなければいけないことを頭に置いておきながら行動を始める。道中で見つけた機銃は道なりに積んで行けばいいだろう。

「…まずは、この一番を持っていくとするか。よし。」
そうして俺はA I Sのある方に小走りで向かって行った。

「操作系統はアークスの教習でやった通りで行けるよな。」

A I Sに掛かったシートを剥がしながら過去の経験を思い出してみる。操作系統が変わってなければそのままで行けるとは思うんだが…

「転送機能はここだと使えないからな。物理ハッチの開閉は何処だったか…」

一応、A I Sには基本的に登録と接続が済んでいる転送装置から機内に直接乗り込む方式があつて非常時の緊急脱出を容易にする役割があるんだが…それはそうとしてここには転送装置が無い。そう言った時にはどうするかと言うと物理的に取り付けられているハッチから乗り込む方法だ。

正面の機体臀部の辺りに強制展開のスイッチが用意されていて、それを作動させることで胸部の装甲板が開いて乗り込むことが出来る。まあ、これは何かしらの理由で転送装置が使えなくなった時の為の物なだけだな。初期型でも変わらないみたいだ。

そうして手を滑らせながらスイッチを探しているとそれらしいものを見つけて、それをそのまま押すことにした。

「違うスイッチだったか…？でも、見える場所にあるスイッチであれ以外の

は……うおっ!？」

押してから数秒程間が合った事でスイッチを間違えたか?なんて考えてハッチの前で考えを巡らせていると回転といくつかの作動音がなった瞬間勢い良く胸部のハッチが展開された。俺は驚いてA I Sの上から滑り落ちそうになった。この高さは痛いぞ……

「お、驚かせやがって。放置の影響で動作が鈍ってるのか?困るぞ。」

文句をこぼしながらも俺は機体の座席の方に進んで行つた。座席に座る……と言うよりかは横になるの方が近い。機体が横に置かれている影響が来てるな。

「……まあ良いか。肝心なのは動くかどうかだからな。マニュアルで電源を入れるのはここだったか?」

座席に横になって固定用ベルトを体に取り付けると俺はまず機体の電源を次に探した。幸いにも外の展開用のスイッチと同じように教習を受けた時の知識が使えたお陰で大体の目星は付いていた。

その場所の付近をライトで照らしながらしばらく手で探っているとそれらしいものに辿り着く。他のスイッチは……今は関係が無いものだな。取りあえず待っていることも無いことで俺は迷わずにそのスイッチを点けた。

「ん……電源が入ったか。」

機体の各部に電源が接続されていく音が機体内部で響きながら備え付けのコンソールが明るくなつていく。良かった、特に死んでる部分は無いみたいだな。

「ただどここっちの方の起動に時間がか、待つしか無いな。」

コンソールの計器類をふと見てみると操縦補助用のOSの起動に時間が掛かっているようだった。もしかして無理矢理新しいバージョンのを捻じ込んだのか？

「…取りあえず他の部分でも見ておくか。足りない部分は無いとは思うが。」

試しに視線を下の方に下げると操作用グリップが右と左に1つずつ見える。少しだけ形が現行のと違うが…まあ動作には差し支えないか。

「それなりに久しぶりに乗ったしな。少し心配だが…慣れさせながらやるしかないだろ。」

俺はコンソールでOSの起動が済んだことを確認してから左右のグリップを深く握りこんだ。後は動かすだけだな。

まずは体にも機体にも動きを慣れさせる為に横になっている台から左足を下ろすようにした。自分の足元にあるペダルを踏み動かすとそれに追従して動き始める。

「…こんなもんか。」

そうして次には右足を台から下ろして両足が台から降りて立ち上がれるような状態になる。後は上半身を起き上がらせるだけだな。

時折操縦席から少しだけ顔を出して位置の確認をしながら上手くバランスを調整して行く。今はハッチを開けた状態だからな。コンソールでモニターを見れる状態ならもつと楽に出来るんだが……今は別に良いことか。

それから俺は確認を終えて、機体が安定したのを見計らってから右のグリップを思い切り前に倒した。

「！」

けれど安心感からかかなり大幅に操作を誤ったのか機体の上半身は想像しているよりもかなり大きく、そして素早く動いてしまった。かなり激しく動いた影響で座席から弾き飛ばされるような反動が来る。

幸いにも座席の体の固定用ベルトを強めに締めていたお陰で機体から勢い良く飛び出るまでにはならなかった。……代わりにかなり旨と腹の辺りが強く締め付けられるような形になって痛みは来たんだがA I Sの乗り心地はこんなもんだしな。期待したところだ。

「……少しだけ感度を軽く設定した方が俺には合ってるな。とにかく立ち上がるか。」

少しだけコンソールの方で操作系統の反応感度の数値を調整しながら最後に立ち上がる準備をし始める。今は既に段差に腰を下ろしたような状態になっているから後は

手で機体を押し出ししながら勢いで立つだけなんだけどな。

機体からもう一度顔を出しながらグリッブを深く握り直すとそれに付いているスイッチを押し込んで先程のように機体の腕と手を理想の位置にする。

「次はなるべく穏便に済ませないとな……よし。」

今度は少し可動域に余裕を持たせながらゆっくりと機体を押し出していく。徐々に視線が天井に向かっていた物から壁側を映すようになっていった。しっかりと立ち上がれている証拠だな。

それに合わせて出力の方を安定させていくとしつかりとした直立の状態に持つていくことが出来た。やっぱりこういうのは継続してやらないと鈍るな。

「後は荷台の方にまた寝かせるだけだな。さっきまでの応用で行けるだろ。」
そうして俺は機体を車両の方にまで向けて進ませた。

E—54 「仕掛」

『試験用の装置の準備は最終段階に入りました。使用できるまで後数時間程度かと。』

「そうか。ちなみに自身の安定度は運搬前と変わらないかい？」

『今確認させます。おい……』

回線越しにそう言い残すと相手側は通信機から口を話したのかぼそぼそと遠い場所から話声のようなものが聞こえる。

…… 今回のテストで重要なのは装置の効果の安定性、前回よりもこの部分に関してもしっかりと数値から確認しておきたいところだ。実地試験もそう何度も出来るものじゃないからね。今回でほぼ完成品に近づけるのが理想か。

『…… すみません遅れました。今確認させましたが装置内容物は運搬前と変わらずに正常値です。誤差も許容範囲内でしょう。』

「ん、分かった。そのまま作業を続けてくれ。この数時間が勝負だ。」

『分かりました。では作業に戻ります。』

「そうしてくれ。」

そこで僕は通信機の電源を切ってコンソールの前に置いた。

： 取りあえず、現時点では目立った異常も無さそうだ。前回は設置の時点でかなりのばらつきがあったからね、起動時の多少のずれは同じだろうがここまで持つていければ問題はないだろうな。

「後は彼らがどう動き始めるかどうか… あくまでもこちら側が出来るのは只の予想でしかないしね。」

そう言葉を漏らしながら僕はコンソール上に映るこれからの動きのおおよそのタイムチャートに目を向けていた。

彼ら、つまるところ情報を流した彼らのことだが一応は格納庫内に入り込むところにはまだは行けたようだ。現地に数人程度こちら側の人間を置いて定時報告させていたが、それらしい人影が動き始めている報告を受け取っていたからね。まあ、存分に暴れてくれれば良いさ。

「脱出用の船の用意はここか… ちよつと君、荷物の方を頼みたいんだが。」

「荷物ですか？ 搬送先決まったんです？」

「ああ、この場所に頼むよ。物は分かっているだろうから言いはしないけど嚴重にね。」

「はあ、分かりました。人数を確保して早急に。」

「頼んだよ。」

すると彼は直ぐに部屋から出て行った。仕事が早いのは良いことだね。

「……さて、僕の方も準備をしないと。」

そうして僕はコンソールの方に向き直った。

「……ふう、こんなもんだよな？」

座席から顔を出して外を確認して見る……。うん、それなりに上手く出来てるな。

俺はそのことを確認すると電源を準備状態に、それからベルトを外すと肩に銃を担ぎ直して機体から抜け出した。

「後は布を被せて、その方が不自然じゃないものな。」

車両の荷台から降りるとA I Sのあった場所に放置していたシートを取りに向かった。あれ、かなり重いんだよな……

「よし、端の方を掴んで上手く……」

そうして少し小さくしてからそれを運ぼうとした時だった。

「端を掴んで、それでどうするつもり？」

背後から女の声があった。そのことが突然のことで理解できずに少しの間固まってい

た。

そうして少しの間、数秒程度だったが思考を張り巡らせてある結論に行きつく。あの女キャストか！

「今日はこの場所で作業は無い筈よ。どうして貴方のようなのがここに居るのかしらね？」

「……あ、いや。急用でここで荷物を取ってこいなんて言われてですね。その。あり合わせで作ったような嘘をついて誤魔化そうとしてみる。」

「そんな大層な銃を担いでじやなきや出来ない仕事なの？その仕事って言うのは。そう言うとなは俺の肩を指して来た。」

…… やらかしたな。これじゃ偽装の意味も無い。

「…… 分かったよ。俺が悪かった、反省してるよ。」

俺は両手を頭の後ろへやりながらありきたりな言葉を吐く。ここであまり刺激しない方が楽だからな。

「そう、素直で良いことね。銃を床に捨てたらそのままうつ伏せになりなさい。」

キャストの女は少し古い旧型のライフルを俺に向けながら言う。手慣れてるようだな、隙が無い。

…… だが、俺は残念ながら大人しく従う奴じゃないんだな。悪いけど。

「なあ、2人がかりでそんなに銃を向けなくてくれよ。別に俺は何もしたりしないんだから…… 良いだろ？」

女キャストの後に追ってくるように来た奴、さつき通路で一発入れた男の方にも視線を送って訴えかける。やっぱり、あの時は適当に誤魔化してすれ違うだけの方が良かったかもしれないな。今何を言っても意味はないが。

「無駄口言わないでさつきとした方が良いんじゃない？ 私気が短いのよ。」

そう言うのと銃口をさらに近づけてくる……。掛かったな。

俺はその瞬間、頭の後ろにやっていた右手を外して勢い良く前に突き出して女の持っていたライフルを引っ掴む。

「！」

反応が遅れたのか今更になって女は引き金を引いたように銃口からその瞬間閃光が飛ぶ。俺はその時を見計らって勢い良く女を蹴り飛ばした。

「フィリンさん！この！」

次に俺はもう一人の方の奴の攻撃を避けるために銃を構えたタイミングを見計らって横に、車両のある方に大きく飛び込んだ。まだ経験が浅いのならこの程度で良いだろ。

「は、速い……」

「違う、お前の経験不足だ。しつかり鍛えておくんだな。」

俺のさつきまで居た場所に数発弾が飛んで来る。…… 上手くやれたな。

そうして俺はそれを良いことに次の弾が来るよりも先にA I Sのハッチに急いだ。

「待て！止まれ！」

銃を狙い構えながら言葉を聞いて向かって飛ばす。…… けれど、返答は返っては来なかった。

相手は僕の声には耳もくれずに車両の方に走っていく。

「…… よし、まだ数発残ってるよな。」

手に持っている銃のシリンダーを横から覗き込んで、それで実弾の位置を確認するとグリップのスイッチを入れて使う弾を変える。

「車両で逃げられるくらいならせめて使えないように……」

そういう言葉を漏らしながら僕は銃の照準を車の前輪の部分に向けて狙いを定める。動いてないのなら、僕でもやれるはずだ。

両手で発射の反動を抑えるようにしつかりと構えながら引き金に指を掛けて、それか

ら僕は迷わずにそれを引き切った。

：： 次の瞬間、銃から火が飛んだかと思うとかなり大きい爆発音が格納庫に響いた。

「あ、当たったのか？」

大きい音で少し気が飛んでいた僕は急いで弾の飛んで行った方に視線を向ける。

狙いを付けた車両の前輪は空気で張っていた張りが無くなってしぼみ切っていた。

その影響なのか車両全体が前のめりになるような形になっている。後もう一か所やれば……

「……？」

そう考えながら車両の方を見ているとあることに気が付いて視線が男の人の方向にく。

：： 車に乗る訳じゃないのか？

走って行ったその人を良く見てみると向かっているのは確かに車だったのだけれど運転席には向かっていなかった。本当に狙っていたのは……荷台？

「…… 見る場合じゃないな。取りあえず近づけさせないようにしないと。」

僕はとにかくそれが何なのかを考えるよりも先に近づけさせないように射撃を加えた。銃口からは数発フォトン弾の光が飛んでいく。

けれど、そんなことにはお構いなく男の人は荷台にある大型の機械に乗り込んでし

まった。やっぱりこの距離じゃ精度が駄目か……

「それにしてもあの大きさの機械つて何処かで見たことがあるような……無いような？」

既に乗り込み口？が閉じてしまった機械を遠くから眺めながら思考を張り巡らせていると何処かで見えたことがあるような気がした。確かにあるにはあるんだけど名前が……

「！」

そうして考え事をしてしていると機械が動き始めたのか大きな駆動音がし始めた。立ち上がろうとしているのか上半身？の部分の動きが上がって続けざまに腕がそれを支えている。

「…… そうだ、フィリンさんは？」

特にできることが無くなった僕は男の人に押し飛ばされたフィリンさんのことが頭を過つた。今まで焦つてて忘れていたけど大丈夫だろうか。

僕は気になって一旦車の方から視線を外してフィリンさんの居る方に向かった。

「フィリンさん！立ってますか？」

「…… 倒れ方が、悪いわね。手伝って貰える？」

「掴まって下さい。」

フィリンさんに向けて手を差し出すとそれを頼りにどうにか立ち上がれたようだった。かなり重いけど、今はそんなことは言ってもらえないな。

「……ありがとう。あいつの方は？」

「今機械の方に向かって行って動かしているみたいなんですけど、弾が効かなくて。」

落とした銃を拾っているフィリンさんにそう話しながらも車の方に向かって指を指した。するとフィリンさんは言葉を飲み込み込むと焦ったようにして僕の手を掴んだ。

一体何なんだと思いつながら手も手を引かれながら走っているとフィリンさんは事の重性を話してくれた。

「ど、どうしたんです？」

「AISよ！見れば分かるでしょ？今の私達には無理よ！」

そう言って指された方向、機械AISの方を見てみるとその大きな立ち姿が目に入った。

E—55 「機動」

「∴： 良し、通つて良いぞ。」

カードリーダーに映つた小さい画面表示を見て判断をすると俺はカードを目前の男にそのまま返却した。

男の方もそれを受け取ると去り際に少し会釈する程度で特に会話することも無くゲートを過ぎていった。∴： まあ、俺の知り合いで艦の格納庫の担当になっている奴で顔の知っているのなんて居ないからな。仕方が無いと言えば当然だが。

「なあ、今の奴で最後だったんじゃないか？」

そうして一時的にすることが無くなつて椅子に腰を掛けようとする時とすると臨時で来た相手の男が声を掛けて来た。俺は少し遅れて顔だけを向けるような形で反応を返す。

ノア君と比べると少し歳を重ねたような奴だが∴： グレイドと考えればまだ青臭いな。それにしてもグレイドの奴はあのルイスとは上手くやれてるんだろうか。何だかこの前は船の格納庫から発砲音があったような気がしたんだが、気のせいだよな？

「そうだな。今まで通つた人数と今日分の予定通行人数が良いように合うはずだからな∴： 軽く休んでも良いぞ？ 休憩時間は取れるだけとっておいた方が良くないからな。」

「何が起こるか分かったもんじやない。」

「怖いこと言うな…… まあ、休ませてもらうよ。」

そう言う俺の座っている物と同じ簡易椅子に深く腰を掛けて、それからおもむろにジャケットから端末を取り出すとそれを弄り始めた。

…… 恐らくだがあつちの方もこちらと同じに人数が余ったが故の編成だからな。休んでいる間くらいは仲間と連絡の取り合いか。機能も同じようにしていたしな。

「…… 俺も少し連絡でも入れて状況の確認でもしておこうか。」

そう思った俺は彼と同じくジャケットのポケットに手を入れると中にある端末に指を……

「……？」

端末から不意に呼び出し音が掛かる…… 突然のことで最初のうちは動きが固まっていたが、とにかく出ないといけないという普段の習慣の動きで俺は端末を取り出した。

相手は…… フィリンか。

「…… あー、悪い。少し話して来るからここ、任せられるか？」

「ん、別に良いけどよ。何かあったのか？」

「いや、うちの仲間の方から急に回線がな…… 悪いな、直ぐに戻る。」

「？」

そうして軽く事情を説明してから俺は端末を手に持ちながらゲートから少し離れた場所に歩いて行く。

今の所何が何なのか見当もつかないが、あのフィリンのことだ。きっと何かしらあったことには変わりなさそうなんだがな。とにかく事情を聞かないとことが始まらない……俺は端末を操作して回線を接続した。

『あー……フィリンか？』

回線を接続したての時に発生するノイズが鳴り終わって安定し始めたところで相手の名前を呼ぶ。

そうして相手の返答を端末越しに待っていると軽いノイズに交じって荒めの息遣いが聞こえ始めた……おかしいな。フィリンはキャストで息が上がるなんてことは無い筈なんだが。

『……』

『……まあ、なんだ。急に回線を回してきてどうしたんだ？』

そのように質問をして、それから少し間を開けて言葉を待っているとどうやら落ち着けたのかまともな返事が返って来た……まあ、俺もこの後直ぐにでも言葉を失うことになるんだが。

『…：… バーンズ？聞こえてる？』

『ああ、さつきから聞いてるさ。それでどうした？』

『かなり不味いことになったの。さつきノアの方が軽く格納庫の侵入者にやられたのだけれど…：… まあこの事は詳しく後で話すわ…：… とにかく、今起きてること、伝えたいことを端的に言うわね。』

『…：… それは何だ？』

『その件の侵入者に格納庫内の A I S を奪われたわ。今確認したのは 1 機だけだけれど、他が分からないわ。とにかく応援を急…：… 』

そこで急に大きなノイズが走る。最後の部分が上手く聞き取れなかった俺はもう一度ファイリンに聞き返してみたが…：…

『ファイリン？最後の部分が上手く聞こえなかったんだが…：… ファイリン？』

『…：… 』

その時にはまだラグの所為で遅延しているのかと思つて待つていた。が、返答が戻つて来ることは無く端末の画面にも回線を切断したことを表すシステムメッセージが表示される。

…：… これは、不味いな。

まだ全体は掴みきれてはいないが事態の大きさを微弱にも感じ取った俺は急いで

ゲートにまで戻った。走り込むようにしてゲート前に辿り着いた俺を見ると驚いたようにして男が口を開く。

「ど、どうしたんだ？何かあったのか？」

「大変なことになった。格納庫内部でA I Sが……とにかく君は急いで支部の方に連絡を。俺は仲間の方を見てくる。」

それに対して俺は焦った口調で一言だけ伝えるとノアとフィリンの担当になっている付近に向かう為にゲートから格納庫内へ入った。

「……………」

ふと気が付いて辺りを見回して見ると一面に粉塵が舞っていて上手く状況を把握できな
きない。

「う…………… さっきまで、何を……………」

色々と短時間で出来事が起き過ぎた所為で混乱している頭を一度整理し直してみる。確か、ノアを発見してから一緒に行動をして、それでA I Sの格納庫で侵入者に遭遇して、それから……………

「… ノア！ノアは何処に行ったの!？」

ようやく現状を理解したところで今の状況のおかしいところに気が付く。そう、ここまで一緒に居たノアが居ない。

「駄目… 何も見えないわ。」

視界が不明瞭なお陰で今自分の居る位置すらも分からない。とにかくそれを把握する為に一番近くの壁を指して覚束ない足取りで粉塵によつて出来た霧の中を進んでいく。

… どうやら足の関節のパーツをやつたみたいね。何で吹き飛んだのかが分からないから破損個所の特定は難しいだろうけど。こういう時に痛いところで怪我の個所が分かる生体は何だか羨ましいわね。

「ん… ここ壁ね。位置情報と合わせれば。」

そうして歩いてみると壁に突き当たる。そこで私は一の称号の為に端末を取り出して通路の外壁の位置番号を頼りに現在地を探し当てる。ここは… 格納庫から近くではあるけれどそれなりに飛ばされてるわね。

最初にノアが指で機体を指した時には確か武器は何も持っていなかったはずだけど、だとしたら一体何を使って…

「!」

思考を張り巡らせていた私はそこで足を止める。ある音が聞こえたからだ。

私は聞き間違えでないかを確認する為に少しだけ耳のマイクの收音率と音量を高めて、それから続けて聞いて。

「……」

シリンダーが収縮する音、床と金属がわずかに擦れて響くノイズとも取れるような音が聞こえる。これに値するような大型の機械……考えられるのならAISしかない。

「こっちは駄目ね。武器も無いんだから。」

それなりに現状を把握出来た私はそこでマイクを元に戻すと例の音の発生源からは遠ざかるような形で出口を目指しながらノアを探すことにした。

端末で回線を接続して探す……というのははしたかったところだけれど今は音を出すのが不都合だから無理だしね。こうなったら十分に対抗策を用意した上でやらないとこっちまでやられるわ。銃も何処かに飛ばされたものね。

「……？」

それからしばらくの間壁伝いに進み続けていると耳の方で通知音が小さく鳴った。

ノアかもしれないと思ってとっさに端末を取り出して相手を確認する……バーンズからだった。

「……まあ、こっちの方が今は良いのかしらね。」

ともかくひとつ前の通信が強制終了したのもあって混乱をさせないようにする為にも私は直ぐに回線を接続させた。瞬時に短くノイズが走る。

『……ファイリンか?』

『大丈夫、聞こえてるわ。声が小さいだろうけど気にしないで。』

『分かった。ちなみにノアの方はどうなんだ?』

『……ごめんなさい。さっきの攻撃ではぐれたわ。探そうとはしたけれど近くにAI Sが。』

『いや良いんだ。無駄に被害を増やすよりかはその方が良い。とにかく、応援の方は直に来る。合流できるか?』

『足のパーツが……いえ、行けるわ。場所をお願い。』

そう言うのと直ぐに私の端末の方にバーンスの位置が送られてくる……。少し距離があるわね、この状態だと。

『俺の方からも早く進めるよう努力はする。言うまでもないと思うが見つからないように動くように。じゃあ後でな。』

『そっちの方も気を付けて。特に音にはね。』

『分かった。』

そうしてその言葉が聞こえてから数秒後。回線はしっかりと切断された。

…
さて、私も上手く動かないと。壁に加える力を強めながらそう念じた。

E—56 「報告」

「……ん。前回の作戦行動分の補給作業の方は滞り無いようだな。」

提出された文書に目を通しながら現在の配備状況を確認する。どうやら今の段階では予定していたよりも早いペースで動いているようだ。

今回の攻撃は今までも無かったようなイレギュラーが故に対応にかなり遅れと問題が生じたからな…… 弾薬や消耗品類の消費が激しくなったことを鑑みれば同じような状況下に陥ったとしても最善が尽くせるよう原状復帰に加えて配備の強化は必然だろう。

「そのようです。予定よりも効率良く作業が進んでいますから備えとしては十二分に耐えられる筈ですよ。」

「なら良いんだがな…… フェルノートのこともある。気は緩められないぞ。」

コンソールの画面上のレーダー図に映るフェルノートの停泊位置にある印を指で押さえながらそう言った。一応、フェルノート側と各農地ている物品、設備に関しては若干の違いがあるが艦の性能に加えて武器兵器の火力は同程度の物だ。

…… だからこそ。同じような事象が起こり得た場合にこの艦が耐えられるかどうか

の点で怪しいものがある。それだけが心残りだ。

「フェルノートですか。上層部の判断では今どうなっているんです？」

「… 上の方からは未だ具体的な解決策が出されていないような状況だ。序盤での連絡系統が遅れたこと、想定外の出来る範疇を大きく超えたことによる現場の一時的混乱が招いたな。」

フェルノートの座標で発生した事象により周辺宙域に広範囲に影響を及ぼした被害から数日程度経過した現在だが未だ解決に至るような物は出ていない。こちら側からも早急な原因究明の為に応援部隊を送り出したが具体的な原因を知り得るまでにはか。今の所では無造作に被害を生み出してしまっただけだ。

こんなところで申し開きをしたところで意味はないが… こんなことには何処でも短時間に早急に最善の行動をするということはかなりの難度だ。私も少し軽率だったのかもしれない、上の者達と同じように。

「とは言え、私もかなりの被害を出してしまったからな… あれを出して艦のコントロールを安定させる必要があるのかもしれない。これ以上は戦力と言う名目でなくモラルの観点で死人を増やす真似はな。」

「主艦長システムの、ハイキャストですか？」

その時一瞬だけ彼の顔が引き攣る。何だろうか？

「そうだ。私よりも以前からの副艦長が続けて凍結させて来たようだが今こそは使うべきなのかもしれない。あれは500年前の実験データも保有しているものだからな。定期点検の方は怠らずにしているだろう?」

「……」

「?」

「そ、それが…… 普段は点検時には凍結用のカプセルに対して外部からの接続を行ってシステム面での確認を行っていますがこの所ある問題がですか。」

「それはどういふことだ。」

それから彼は白状するようにして主艦長^{ハイキャスト}システムの現状について話し始めた。

「早急に使用を迫られる事態にはならないだろうという方針で許容をしていることでしたが今はですか…… ともかく手短に話します。整備の人間からの説明ですが、どうやら外部からのアクセスが出来ないとのことですよ。」

「それは物理的障害によるものか?」

「いえ、内部プログラムのシステム障害です。ハイキャストのプログラムの方がこちら側の命令コードを拒否してくるといふのか弾かれると言うか…… そのような状況だと。」

「…… それで、復帰にはどの程度かかる見通しなんだ。」

「良くて数日、悪くて数週間になります。… 報告が遅れて申し訳ありません。」
なるほどな。… 人材を集めて早急に対応をさせた方が早く収まるか。この後でも直ぐに掛け合ってみよう。

「いや、報告が無いままよりかは遙かに良かった。確かに君にはそれなりに責任が課される訳だが… それは平時の場合に限る。今はただでさえ人材が不足しているんだ、そのまま役職の方は続けて務めて貰おう。処遇に関しては一連の事が收拾してからだ。」

このようなことがあればその場で直ぐにでも取るべき対応をすることで… 出来る人材を今とりわけ程度の低い事柄で買えるような真似は今の所出来そうにない。

こういった状況では経験のある人物を曲がりかなりにも頼らなければならぬこともある。無造作に変えていては組織の自壊だな。

「報告が以上ならそのまま持ち場に戻ってくれ。私も作業に戻る。」

「分かりました。」

そう自分が告げると彼は部屋の出入り口の方に向かって行った。

「… あ、すみません。通りますね。」

「今出るところですから先に良いですよ。」

そうして自分の仕事に戻ろうとするとどうやら入れ替わりで別の担当の人間が来て

いたのか扉が開くと向こう側にも人物がいた。彼は道を譲るとその人物が入ってきた後に退室した。

「すれ違いになつてすみません。報告に来ました。」

「そうか、それで報告の方は何があつた？」

「それが……落ち着いて聞いて頂きたいのですが現在緊急作業中の格納庫の警備に当たっていたM・Sの1人から入った緊急連絡がM・Sの支部を仲介してこちら側に伝達されてですね。内容としては格納庫内にて身元不明の侵入者を、人数は不明なのですがまずはそれが。」

「侵入者？それなりの人数を通用口に当たらせるように通達した筈だが、どういふことだ。」

「その、格納庫の非常用ハッチから侵入した模様で通用ゲートからはですか。」

「……それで対処の方は？」

「……その後に入った連絡によると侵入者は格納庫内部に管理されていたA I Sを奪取、追跡をして対処を行おうとした付近のM・S 2名が被害を受けた模様です。」

「A I Sを？……ともかく、様子を見るとしてM・Sから更に増援を送るよう回答を。必要であればこちら側も応援部隊を編成する。」

「分かりました、支部側に連絡します。失礼しました。」

… 行動から見るにそれなりに組織性のあるような動きだな。今問題になつてい
ようなC・R・S・Fでは無ければ良いのだが、ともかく早急に抑え込まなければなら
ないな。

彼が部屋から出て行つたタイミングで私の方も目線をコンソールの方に移した。

「…………… あれ？」

痛みが走る頭を抑えながら辺りを見回してみると何も見えない。どうやらここはか
なり暗いみたいだ。

「ライトは…… 良かった、ポケットに入つたままだ。」

そうして僕は暗い中服のポケットを探つてそれを取り出した。特に壊れても無い
みたいだな。

ともかく、今居る場所が何処なのかを調べる為にライトを壁と思わしき場所に当てて
みる。

「何だろ、かなり古い古い通路？なのかな。」

光が当たつて見やすくなつた壁を見ると電源の入っていない照明器具と案内の

文字が目飛び込んできた。空気が冷たく感じるし、だとすると下に落ちたのか？

「いて、そういえばフィリンさんは何処だろう。」

足が痛いけれど堪えながら床から立ち上がると自分が倒れていた場所の付近に手当たり次第に光を当ててフィリンさんを探す。

……けれど、違う場所に居るのかそう言った気配も感じることが無かった。だとすると落ちたのは僕だけ？

「参ったな……戻ろうにも落ちて来た穴は塞がってるし。この通路から上層に繋がる道に出るしかないか……繋がっていけばだけど。」

ライトを穴の方から通路の方に向け直すと通路の全貌が良く見えた。見る限りだと元からここは使う機械の多い場所じゃ無い雰囲気だな、何人も通れるような大ききじゃないし開けている場所じゃ無いしね。

「ん、ここから進めそうだな。場所は……文字が擦れて読めないな。」

通路の中でも電源が入っていないくても通れる場所を見つけて、そこから内部の方に入り込んで行った。

E—57 「払拭」

「変だな、普通なら艦内の何処でも電源系統は生きてるはずなんだけど……」

入り込んだ先にあつた通路で見つけた照明用のスイッチを指で弾いてみても一向に電気が入る様子が無い。もしかしてこの部分だけ主電源の供給が切られてるのか？ そうだとするなら配電盤を見つけて切り替えてできればいいんだけど……そんなに上手くないかねえよ。

電気を点けることを諦めた僕は気持ちを切り替えてライトを通路の先に向け直した。複雑に曲がっている道が光で照らされる。

「げほっ……酷いな。」

狭い空間で床に蓄積されていた埃が舞つてむせてしまう。ライトの光のお陰で分かるけど凄量の埃だな、僕の使つてる船の部屋よりも凄いで。

そうしてジャケットの素手で口と鼻を抑えながら通路を進んでいくと少しだけ開けた場所に出ることが出来た。

「……には……駄目か、自動ドアは電源が入ってないしな。」

その場所にあつた扉の内の1つに近づいてみても最初に居た場所にあつた扉と同じ

くに何も反応が無い。普通なら、つまり電気が通っていれば鍵が掛かっていても色の付いたランプが点灯したり何かしらの警告が出たりする筈だけどこの扉からはその様なものが無い。

カードの読み取り口が大半付いているような扉の横側を見てもランプがあるような場所は点いていなくて埃で今にも埋め尽くされそうな勢いだ。やっぱり、必要が無くなった比較的新しい方の部屋かもつと昔にアークスの施設として使っていたところで再利用できなかったところなのかな。そう言う場所も少なくないってバーンズさんも言ってたし。

「……駄目だな、押しても開くような感じじゃないか。完璧に機械で圧力が入ってる。」

駄目だと分かっているながらも立て付けの悪い扉をこじ開ける要領で引手のくぼみに指を掛けてから精一杯引つ張ってみても音の1つも立たずに終わる。ここまでになっていると閉まっているというよりかは癒着してると言い方の方が合ってるってそうだな。やっぱり電気を通さないと駄目か。

それから繰り返し横の扉、横の扉と繰り返しながら通路を進み続けた。

「まさかとは思うけど完全に封鎖してる場所に落ちて来たんじゃ、壁なんかも塗り固められたりして……？」

何時までも進む道が見つからない状況で行き詰ったような感覚からそんなような嫌な考えばかり浮かび始めた頃、1つだけ様子の違う扉が見えた。

暗くて遠目からだとは良く見えなかったので僕は小走りでその扉に向かって行く。もしかして……

「やっぱりだ！ここだけ半開きになってる！」

その扉に向かってライトを当てるとわずかに通れるくらいの隙間から扉の向こう側に光が通っていく。ここからだとは少ししか見えないけど向こう側にも開けた場所があるみたいだ。

試しに少しだけ覗き込みながら中を照らしてみると奥まった位置に曲がり角があつてそこから開けた場所に出れるみたいだ。心なしか音を立てると広範囲に広がるような感覚で音が響く。この調子だと今居る通路よりも広いのか？

「それにしても半開きなんて……元々立て付けが悪かったのか？電気を完全に切る直前で誰も気が付かないままだったとか、ありそうだな。」

ともかく、まずは通り抜ける為に扉の隙間に足を延ばしてみても向こう側の空間に足を降ろす……大丈夫そうだな。

続けて胴を通そうとするとジャケットのピストルベルトが扉に引っ掛かった。バックルの少しだけのみ出ている金具部分が当たる音が響く。流石にそこまで都合良くは

開いてないか。

そこで一旦ジャケットのベルトを外すと扉の向こう側に投げ入れて、それから引っかけ方が無いようにして半開きの扉を潜り抜けた。

「ここまで物を持つてると動き辛いな、やっぱりバーンズさんの言つてた通りもう少し携帯品を少なくした方が動きやすいか。」

外したベルトをもう一度締め直しながら少し前にバーンズさんに言われたことを思い出す。確かに普段からバーンズさんは現場に行くときは銃と端末ぐらいしか持つて行つてないもんな。そう言うことつてやっぱり経験から分かつていくことなのかもしれない。

「バーンズさんか…… もう一度見ては見るけど、やっぱり繋がらないよな。」

考えの流れでバーンズさんが頭に浮かんだ僕は無駄だと思いつつも端末をジャケットから取り出して連絡が出来ないかどうか画面を見てみるものものやっぱり回線圏外の表示が出るだけだった。

普通なら艦内であれば閉鎖空間になつてゐる場所でも何処かしらに補助アンテナが付いてる筈だから回線圏外になるなんて無いんだけどな…… この場所が特殊な場所？だとするなら少し事情は変わるのかもしれないけど、回線が繋がらないつてことはここからは一切の電気通信が出来ないつてことだからな。今は使つていないとはいへ何だ

か怖いな。

「仕方ない、原因が分かっても意味が無いし。今まで通りに抜け道を探すしか無い
か。」

そうして僕は今居る部屋から少し奥にある通路に進んで行った。

「なんだろう、良く見るような形だけど……」

あれからまた少し奥の方へ進んでいくと今までとは違った様相の部屋に辿り着いた。
ここにはかなりの数の備え付けの機械が残っていてさっきまでの場所とは雰囲気も全
く違った……。埃が被ってるのは変わらないけど。

取り敢えず、僕は目の前にあったコンソール？のような物に近づいてみて少しだけ手
で埃を払ってみた。

「んー……。駐在所に置いてあった型よりも少し古いみたいだな。一応、物理モニター
が付いてないからミーンさんを見つけた場所にあったのと同じホログラムタイプな
のかもしれないけど。」

まさかとは思いながらも電源のスイッチやいくつかのボタンを押してみる……。ま
あ、動くわけないよね。

「それにしてもこれだけの機械があるってことは何かの制御室なのかな。でも、電源

が供給されていないなら艦内には影響の無いものなのか……？」

もう一度軽く部屋全体を見回してみるとそれなりの人数分の椅子がコンソール台に備え付けられるような形で置かれている。少し疲れていたから座ろうか、なんて思ったけどこれじゃあね…… やめとこう。また咳が酷くなるや。

「…… やつぱり何かおかしいよな。」

そうして部屋の中を一周見ることが出来て探すとこも無くなった頃、僕は気になり始めていた壁をしつかりと凝視してみた。

この部分だけを見ればこういうデザインのものにも見えるには見えるんだけどこの部屋の構成から考えるとここだけこの素材って言うのもな。ここが制御室、っていうのはあくまでも僕の憶測に過ぎないから確かではないんだけど…… そう言う部屋だったとしたら変な部分にこだわる必要あるのかな？

一応、確認しておこうと思って僕は壁に向かって指を伸ばして触ってみることにした。右手の人差し指をゆつくりと突き出していく。

「…… あれ、滑るな。」

出した指が壁のようなものに当たると壁の素材に指が当たって止まる…… わけでもなく、指は滑らかな表面を滑るようにして反って行った。

どういふことなんだと思つて突き出した指を戻して、それを目の前で見てみると煤の

ような状態の埃がへばりつくように指の表面に取り付いているのが分かる。

もしかして、そう思った僕はジャケットの袖を拭き布代わりに壁に押し付けるとそこに付いている埃を拭き取るように思い切り滑らせた。

「何だろう、奥に何かあるみたいだけど。」

拭き取った部分を袖に付いた埃を払いながら覗いてみると壁だと思っていたのはガラスだったようでそこからは薄暗い空間が見え隠れしている。まだ奥があったんだな。

……とにかく、ここから何が見えるのか気になった僕は引き続き外への道を探す目的でライトをそこから向こう側に通るように当ててみることにした。

「ん、見えにくいけど……ここが床で直ぐ横のこれが壁だよな。正面には扉があるのかな？」

手探りの状態で光を当てながら向こう側の部屋を観察して、空間の大体の大きさが掴めた僕は思ったように正面の方にライトを向けてみた。

…… だけど、そこにあるものは僕の想像していた物とは全く違うものだったんだ。

「…… 何だろう、これ。」

それは大きな機械のようで、僕がここに吹き飛ばされる直前に見たあの機械Aにそっくりだった。

E—58 「合流」

「この辺りにまで来れば発信源の近くのはずなんだが……」

通路を走る足を一旦止めてジャケットから端末を取り出す。これだけ走っても数分掛かるとは、参ったな。

少しだけ荒れる息を整えながらも冷静に操作をして画面に現在地を出してみる……良かった、道は幸い間違っていない。

「そうだとするともうすぐ近くにか、受信強度を。」

そこで俺はフィリン側の端末からの周波数の受信度を引き上げた。画面上の反応がより細かい物になる。これぐらいの距離ならそれほど誤差も無いだろう。

「道は、こつちの方か。」

位置を確認しながら通路をなるべく音を立てないようにして進んでいく。フィリンに近づくとすることは例のAISにも近づいていることになるからな。戦闘が不利な状況で対象と遭遇するのは避けたい。

そうしてしばらく歩いた後にある角を曲がろうとした時、左側から聞き慣れた声で名前を呼ばれた。

「バーンズ……？」

突然のことで驚いた俺は神経反射の勢いで声のした方に首を向ける。

そこには脚部を軽くやられたような状態で壁に寄りかかっているフィリンが居た。

「大丈夫なのか？ 回線越しで上手く分からなかったが。」

俺はフィリンの傍にすかさず駆け寄ると自分の方に腕を預けられるような形で抱えた。いつまでも壁に寄りかかったままだとパーツへの負担が大きいだろうからな。

ともかく、開けた場所に居続けるのは不味いと思つてフィリンを支えながらも狭い通路側に避けるように進む。

「大きくやられてる訳じゃないから道具さえあれば少しは融通が利くところかしらね。この部分、関節だから壊れやすいのよ。」

「それは良く分かつてるが……」

…… そうやつて次の言葉を出そうとした時だった。聞き慣れた金属音が離れた位置から聞こえてきたのは。

「ちよつと待て。」

普段よりも少し小さい声でフィリンに向かって歩いて歩くのをやめるように伝えると今度は影に入り込める形で通路の壁に張り付く。

「何？ どうしたの。」

「良いからこつちだ。」

どういふことなのか聞こうとするフィリンを手で静止しながら動かないようにする。この音は…… あいつに違いない。嫌になるほど聞いたんだからな。

そのままの状態をとにかく維持し続けて、数分程度待ち続けている最中にもその音は大きさを強めていく。やっぱり近くに居たのか。

「……なるほどね。気が紛れて聞こえて無かったわ。」

「後少し遅かったら、酷かっただろうな。」

「そうね。」

それから適当に話を切り上げていると直ぐ横にまで来たのか金属音がより鮮明になつて聞こえてくる。試しに首だけ横に向けて通つて来た道の先、最初に居た通路の方を見てみるとタイミングが重なつたのかそいつが通つて行くところを見ることが出来た。

「……」

あの形……代は変わつても基礎的な部分が変わっていないか。足回りはそれなりに改修してあるみたいだが、やっぱり陸上用の足を作るのはいつになつても苦手みたいだな。

もう少し詳しく見たかったが、今の一瞬じゃこれが精一杯か。

「……行つたみたいだな。」

音が遠ざかって行つたのを確認すると口から言葉が漏れる。フィリンの方にももう問題が無いことを伝えようとして声を掛けると少しだけ様子がおかしいことに気が付いた。何だ？

「どうしたんだ？ 様子がおかしいが。」

「……さっきの機体、^{AIS}違つたの。」

「違つたつて何が。」

「機体のナンバーが違つたのよ……私が遭遇して攻撃を受けた物とね。確認した番号より若かつたはずよ。」

機体のナンバーが違う？ あの時^{AIS}に報告をした機体とは違うのか？ だとするなら……

「……複数人でやっているのか？」

「そう考えた方が良いわ。最初の時には単独だと思つていたのに……とにかく支部の方にもう一度連絡を回してみて。このままじゃ事態が大きくなる。」

「分かつた、少しそこに腰を下ろしておいてくれ。回線を回してみる。」

そこで俺は自分から支部の方へ再度連絡をする為に一度しまった端末を取り出し直した。

「凄いな…窓越しにでも近くで見ると迫力が違うや。」

僕は窓越しにライトをその機会に当てて少しの間観察していた…。確かにこんなのに攻撃なんてされたら鉄板でも吹き飛びそうだな。

でも、よく見てみると吹き飛ばされる前を見たのと何処か違うような気がするな。何だかまだ作りかけみたいで完成しているようにも見えないし…。一体何なんだろ。

「同じ物だとしてもさっきの場所じゃ無くて閉鎖されてるようなところにわざわざ置いてあるってことは何かが違うんだろうけど、ここからじゃいまいちな。」

どうにかして向こう側の部屋に入れなかつたかと思つて首を回すと部屋全体を一周見直してみる。

けれど、あるのはコンソール系統の機械と椅子ばかりでどうにも向こう側には通じていないようだった。もしかしたらこの部屋に入つて来る前に居た通路のドアのどれから入れるのかもしれないけど、電源が入ってないんじゃないや仕方が無いよね…。

「仕方が無い、引き返そうか…。」

そうして僕はその部屋から元居た通路に戻ろうとして…。踵を返した時だった。

「…?!」

さつきまでは静かで何事も無かった部屋全体が大きく縦に揺れ始める。突然のことで反応が遅れた僕はそのまま部屋に胴体から倒れ込んでしまった。一体何だって言うんだ？

どうにかして最初の振動が過ぎたと思えば断続的に細かい振動が来る。室内の天井からは埃も含めて小さいごみがまばらに落ちてくる状態で今にも天井の板が外れそうな勢いだった。

「困ったな、こういうことになるのならヘルメットの1つでも着けて来たのに、これじゃあ頭に大きな物でも落ちてきたら……？」

そうやって今更考えても仕方無いことを床に伏せながら考えていると部屋の中でそれなりに重いものが落ちる音が聞こえた。

この音だと、天井とかが崩れた音じゃなくて……どちらかと言えば棚から物が落ちたみたいなの？ 気になった僕は音のした方を探し当てて遠くの方から何が落ちたのかを見てみた。

「何だろ、丸い見た目だけど。」

ここまで来たら手に取って確認しようと考えて振動のタイミングを見計らうと腰を低くした状態でその物のある場所に小走りで進んで行った。そうして丁度進み終わったと思ったところで次の振動が来る。こういうのは思い切りが大事だな。

とにかく、無事に移動が出来た僕はその床に落ちた物にライトを向けながら手に取って確認してみることにした。

「んー……ヘルメット？なのかな。」

片手で上手いように回しながら手に取った物を観察して見ると少し特殊な形をしたヘルメットのような物だというのが分かった。……丁度良いから間に合わせで被っておくかな。

そこまで程度が酷くないことを確認してから付いた埃を袖で拭うとそのままそのヘルメットを頭から被った。

「それにしても変なヘルメットだな……別に良いけど。」

振動が続く中でヘルメットの緒を調整しながら言葉が漏れる。それから今の振動が止まったらこの部屋から出ようと、そう動こうとした時その振動が段々と強まっているような気がした。

今度は何だ？そう考えている間に足元から突き上げるような強い振動が部屋を襲った。

E—59 「作戦」

「事を大きくしたくなかったが……こうなつたら最後までやり切るしか無いよな。」
さつきまでの一瞬の出来事を思い起こしてみると今しがた起こっている失敗をしないで済むような行動がいくつか浮かんでは来る。が、そんなことはその時が過ぎた後で考えたところで無駄にしかない。

今の俺に出来ることは過ぎた反省よりも今出来る最善の行動をすることだ。……早いところ合流をして立て直さないと。状況が変わり過ぎてる。

そうして考えがとにかく1つに絞れた俺はA I Sを突き当りの見通しの悪い場所で一時停止させて、それから無線機を付けると回線をそのまま仲間の方に繋げた。

「……行けるな。」

数秒程して安定接続に切り替わつたのを確認して、それから音声を繋ぐ。すると突然つんざくような音が無線機越しに飛んできた。

『……おい、聞こえてるからとにかく静かにしてくれ。俺の鼓膜が持たないんだが。』
そう注意してみるとはっとしたような声の調子で普段通りのあいつの声が聞こえてくる。最初からそうして欲しいんだが……言っても無駄だな。

『ご、ごめんなさい。その……報告を聞いて、心配だったから。』

『別に死んだとは言つてないんだからそこまで気にすることでもないだろうに。そんなにか?』

『それでも心配なのは変わらないでしょ?命に問題は無くても怪我とか、その、あるかもしれないし……とにかくそういうことなの!』

『分かった分かったよ、その話は十二分に良く分かった。取りあえず詳しい話はまた後でだ、後ろに多分居るんだろ?そっちの方と話があるから今は変わってくれ。』

『……分かった。今代わるね。』

そう言う一旦向こう側から無線機を耳元から離れたような音が聞こえて、少しすると奴が手に取ったのか耳元に寄せる音が再度聞こえて来た。

『悪い、俺が取る前に彼女に取られてな。』

『いや良いんだその事は。あいつに関しては後で話をつけておくから大丈夫だ……それで、話の続きの方を頼めるか?あんまり時間に悠長になれるような状況じゃないんでね。』

そう俺が説明すると奴の方は少し悩むような唸りを漏らすと上手く飲み込めたのか普段通りの調子に戻る。こういう場面と普段の所でしっかりと切り替えが出来る辺り、頼れるんだがな。

『ん…分かった。じゃあ、短くまとめて言うから良く聞いてくれよ。』

『頼んだ。』

話を続けながらも周囲に反応が出ないかを確認する…あのM・S、連絡が遅れていれば助かるんだが。あそこまでやっておけば十分に時間は稼げただろう。

あの時、今からほんの少し前のことだがこいつのA¹S部分で通路ごと吹き飛ばしておいたことを思い起こしてみるとなおのこと信憑性が湧いて出て来た。

『…それじゃ伝える。今、確認できている現場からの連絡。勿論お前の連絡を含めての統計データから察するにはほぼ全員がお前と同じようにA¹Sを稼働させたと思えないな。』

『他の連中もなのか？』

そこで少し俺は驚いた。なにせあんな事態に遭遇したのは自分だけだと思っただけから。道中でも同じような挙動のA¹S…というよも動いているA¹S自体を一つも見なかったし。

『ああ、一部はまだ何かしら手こずっているようだがほとんどお前と状況は変わらな
いだらうな。』

『なるほど…頭にに入れておく。』

…とにかく、何か困った時にはどうにかして貰えそうか。頼りにはしない方が勿論

良いんだろうが数は多い方が良いからな。

そんなことを考えながら話を更に続けて聞いて行く。

『…それでその事なんだが、ここからが重要な部分だぞ。』

『何だ？』

『ん。一応、俺だけじゃなく他の連中にも同じような物が出ているんだが簡単なことだよ。説明すれば道中で味方を発見できた場合には救助を行う。それが出来ない場合でも脱出を最優先にする。……な？理解するまでもないだろ。』

『確かにな。だが、武器がこいつには無いんだ。それこそ標準で付いているような物すらな。さつきは少し急ぎで何とか戦えたが…。それも回収しても良いか？』

A I S の内部にあるいくつかの画面表示から装備中の装備関連の表記を見てみると当然のごとくほとんどが信号無しの状態になっている。あの時に一緒に回収できれば少しは違ったんだろうが…。今からにでもどうにかすれば良いか。

俺は向こう側から伝えられたことに対してそれを補えるようにする為に言葉を足して伝えた。

『…分かった。というよりも何も無い状態でお前がその機体を持ち帰ってきたところで使い道が少なくてはどうしようもないからな。出来れば良いからその部分に關しては宜しく頼む。』

『分かった。少し時間が掛かりそうだが、この状態なら死にはしないだろうよ。安心してくれ。』

『だと良いんだがな。取りあえず引き続き作戦を継続してくれ……。頑張ってくれよ。』

『分かってるさ……。あいつにも心配させないように頼むぞ。』

『ああ、俺達も動けるようになれば直ぐに援護できるようにする。それまで頼んだ。』
そうするとその言葉を最後に向こう側との回線の接続は切れた。無線機越しにあら側から切斷をされた時の短いノイズが耳に走る。

……。とにかく、こいつを人並に使えるようにするか。俺は無線機の電源を落とすともう一度グリップを握り直した。

E—60 「不測」

「……ここにはまだ来ていないみたいだな。」

操作系統の画面を確認しながら今の自分の周囲の状況と照らし合わせていく。そうして特に気に掛けるほどの反応が確認できなかった時には前進する……。そんなような状態で進み続けていた。

勿論、こうなつては全面的に攻撃を仕掛けて正面から抜けていきたいところだが今の所俺にはこの器用^Aに動く重機^Sしかない。確かに装甲を考えれば少人数相手にならさつきと同じで無理矢理抜けるかと考えた時もあったが格納庫から出た後のことを視野に入れるとその方法はどうにも上手いやり方ではないということに落ち着いた。

「見つかりやすい筈なんだが、こうも探し辛いとな。」

そういつたことからここを突破する為に活用できるような物としてA I S用の武装を探している俺は再び画面に向かつて睨みを利かせていた……。まあ、だからと言って見つかる訳じゃないんだが。

事前に貰っていた格納庫のデータに詳細な位置は記されているが迂回路を除くとかなりの距離になる物ばかりで中々目的地が見えてこない。正直な所、機体から降りて俺

が直接持ってきたところだが A I S サイズの火器を 1 人で持ち運ぶのには無理があるしな…… 諦めて搭乗した状態で動いている訳だ。とにかく有事の時には機体の装甲板があるからその点だけは困らないんだが。

「……」

そうこうして通路を気を尖らせながら注意深く進んでいると不意に画面上にそれなりに大きな反応が出て、俺は意識を引き戻された。

一度慌てかけた俺は瞬間的に高まった動機を無理矢理抑え込めると落ち着いて確認の為に機体を一度停止させ、それからより詳細なデータを得られるように機体の反応解析のレベルを静かに引き上げる。これで今反応が出たあれの正体が分かる筈だ。

…… 味方機か！

画面の方を見直すとさっきまで不鮮明だった反応がよりはっきりと映りこんで味方の反応を示す。そのことを確認した俺はその反応以外に周囲に反応が無いことも確認すると機体のハッチを展開した状態で周囲を見渡して仲間の乗っている機体を探した。

「あれか……」

通路に若干立ち込めている霧の中を分けるようにして機体を進めると自分の乗っている物とほとんど、というよりは同型の A I S のような物を見つけた。すかさず確認の為に応答用の信号を鳴らしてみる…… 良かった、中に誰か乗ってるみたいだな。

俺は安全だと確信して機体を前進させるとそのA I Sの傍に更に近づいて状態を確認することにした。

「操作ミス、なのか？」

そうして霧の影響を受けない距離にまで近づくとその全貌が見える。どうやら相手は何処かで操作を誤ったのか自力で復帰できない状態で通路に機体を倒していた。この霧で見えなくなったか、何かに躓いたのか？

とにかく、話が出るかどうかは分からないが俺は交信をする為にA I Sのアームで相手側の機体を掴むような形で触れさせてローカル回線を接続させる。

『おい！起こせないのか？』

『あんた、何だ？』

回線越しに呼び掛けると格納庫に入り込んだ時とは別の男の声が聞こえて来た。別行動の仲間の奴か。続けて俺は状況の説明をする。

『同じ組織の人間としかなく、とにかく補助してやるから待つてろ。』

そうして俺は特に気にすることも無くペダルを踏みこむとグリップを上手く捻ってそいつの機体を両側から抱え上げるような体勢をA I Sに取らせた。

この程度なら教習レベルの範疇だ……そう思いながら出力を上げて行っていると回線越しにあの男の声で悲鳴のようにも聞こえる声が飛んできた。けれど、俺は作業中

の駆動音に合わせて機体同士が触れる金属音でそんなこと聞けちゃいなかった。

『ま、待て！今動かしたら…』

そんな風な声が聞こえたかと思つて、俺は傾げるような形で視線を下げると作業していた動きを止めて相手に確認を取ろうとする…。が、こちら側が何かしら声を出すよりも先に何かの音によつてそれは妨害された。

「何の音だ？」

悠長にそんなことを言つた瞬間、大きくひび割れるような音が断続的に通路内に響く。それに異常を感じた俺はここに居るといけないと思つて機体を急速後退させた。だが、結果的にこの俺のとつきの判断の行動は事態を悪化させる要因の1つになったのは言うまでもない。

「1」

回避できたかと思つているのも束の間に後方へ着地した瞬間、音の原因にその行動が酷く干渉したのかその音のままに味方の乗っているAISの床部分が大きく沈み込んだ。その影響なのか一瞬格納庫内が大きく揺れる。

「1」の…！

続けて俺は後追いで倒れないようにレッグをペダルで調整させて機体のバランス機能を全開にさせて倒れまいとした…。だが、俺もそこまでの熟練度がある訳じゃな

い。

確かに、状況的にすべきことはしてはいたがその時の俺には焦りと言う不必要な物が胸の内にあった。それがミスを誘発させたのか、そこまでのことははつきりとは言えないが俺の操作が失敗したことは明らかなことだった。

「…うう、酷いな。」

強い衝撃でバランスを崩してしまった僕は軽い脳震盪のような状態に陥っていた。ふらふらとして視界が上手く定まらないし耳からはノイズみたいな音がする。

とにかく座り続けるのも出来ないと思つて近くにあつた壁を使つて立ち上がることにした。

「窓なんて全部割れちゃつてるし、破片が飛んでこなかつたのが幸いか…」

少しずつ明瞭になつていく視界を頼りに今時分の居る部屋を再度確認すると辺り一面にガラスの破片が飛び散つていた。きつとさっきの衝撃で割れたんだろうな。

…でもまあ、良い意味で捉えるならこれで窓越しの部屋に行けるようにはなつた訳か。あの後行き場も無かつた訳だしここの関係者だった人には悪いけど嬉しい事

故つてところかな。

「危ないけど窓枠の縁に当たらないように……」

床に広がる破片をあまり踏まないようにして窓の方にまで歩いて行くと安全に通れそうな場所を探してみる。残念ながら今の僕はグローブとか手を保護できるものが無いからね、通り抜ける時に破片を触ってしまったくない場所の方が安全だ。

それから特に危険度の少ないような場所を見つけられた僕は窓枠に手を触れないように注意しながら足だけを使って体を移動させる。既に向こう側は窓越しにでも見て理解してはいたから足の置き場には困らなかつた。

「……よし！上手く行けたぞ！」

そうして時間は少し掛つたけれど僕は窓越しにあつた別の部屋に侵入、もとい入り込むことが出来た。多分、窓枠が割れた時もそうだけど警報装置があるにしても電源が入ってないから作動しなかつたんだらうな。今もこうして警報装置があつてもおかしくない場所に居ても一向になつたりしないし……まあ、急いでここから出れる場所を見つけて早いところここから出よう。

辺りを見回すためにしまったライトを取り出すと周囲が良く見えるように照らした。するとやはりでかでかど目に入って来るのはあの大きな機械だった。しかも、今は窓越しじゃなくて目の前にあるせいだか迫力が違った。

「確か、これがA I S? ってやつだとするとあの船に本来積んであるような物なのかな……でも、やつぱりぼろぼろだな。」

ライトを当ててさつきまでよりも近くから観察して見るとその状態が分かるようだった。

見てみて最初に気が付くのはその装甲板の少なさだった。……というよりも無いっていう方が正確なのかな。基本的に中の機械も配線も諸々出たままだし、本当にこれって動く状態の物なのかな?

「……やつぱりさつき見たA I Sとは違うな。ヘッドの部分なんて形がそもそも違う系統だし。」

上の方にライトを向けるとその例のヘッド顔が明るく照らされる。確かにカメラの構造? が違うのか独特な形状だな。アンテナも中に埋め込み式じゃなくて外に取り付けられてるし、なんだかA I Sなんだろうけど違うものだっていう感覚が強いな。

……というか、別に乗る訳じゃないからこんなこと考えなくても良いのか。今は出口を探してるんだし。

「はあ、早く出口を見つけないとな……?」

そう眩きながらライトをA I Sのようなものから外して別の場所に向けた時、不意にライトの光を反射するものがあつた。跳ね返って来た光が目に入って眩しい。

さっきまでの段階で見つけていなかったもの、つまり出口に繋がるものかもしれない
と思った僕はライトを下に下げるとその反射してきた方へ進んで行った。